

910.26

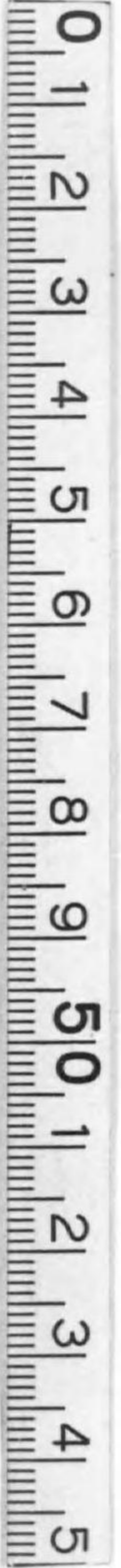
93_u

910.26-193a₇



1200500754446

〇
複写



始



33.6 28

910.26
1-93a

文學博士 井上哲次郎
文學博士 坪井九馬三
文學博士 芳賀矢一
監修
文學士 岩城準太郎 著

增補
明治文學史

東京 育英舎



明治文學史序

明治維新以來僅々三十九年を經過すと雖も、此間に於ける我邦の大變化は、實に世界の人目を眩するに足る。政治に法律に外交に教育に將た又兵制に非常の改革を成し、殆ど國家の組織を根柢より一變せんとするものゝ如し。是に於てか文學美術宗教風俗等も亦一般の趨勢に伴つて全く面目を刷新し來るの狀あり。此の如き偉大の社會的變化は、我邦に於て未だ曾て有らざる所なり。大化の改革の如きは固より大變化には相違なきも、維新以來の大變化には比較すべくもあらざるなり。殊に維新以來の大變化は、啻に大變化と云ふのみならず、又同時に大進歩なり、大發展なり。此の如き大進歩大發展を齎したる大變化は、世界の歴史に於てすら尙ほ且つ其類例を發見すること能はず。

二
歐米の學者或は以て一種の奇跡となすもの、亦以なきにあらざるなり。此點より之を觀れば、維新以來三十九年の歴史は研究すべきもの、多々之あるは、言ふ迄もなきことなり。試に之を徳川時代と對照して之を考ふるに、徳川時代は成數を擧げて三百年と云ふと雖も、其實二百六十五年なるが故に、三十九年は已に其七分の一以上に居る。果して然らば慶長八年より寛永の末に至る迄の歴史に相當す。此の如くなれば、三十九年の歴史も、我邦の歴史の一部分として十分に研究を値するものあるを知る。況や維新以來の三十九年は徳川氏初期の三十九年より迥に大變化に富めるに於てをや。是を以て余嘗て坪井芳賀の兩博士と相謀り、明治歴史全集の編纂を企畫し、各専門家を以て之を分擔せしむ。乃ち明治教育史は文學士野田義夫氏に、明治

宗教史は文學士加藤玄智氏に、明治美術史は文學士富尾木知佳氏に、明治文明史は文學士小林郁氏に、明治文學史は文學士岩城準太郎氏に、明治外交史は文學士大塚武松氏に、明治政治史は文學士大塚久、文學士上原益藏、文學士齋藤隆三三氏に、明治殖産史は文學士水谷猶象、文學士芝葛盛二氏に、明治交通史は文學士水谷猶象氏に、明治軍制史は文學士松井等氏に、明治財政史は文學士阿部秀助氏に、明治戰史は文學士陸軍士官栗林己巳藏氏に編纂を委託する事となれり。然るに偶々、日露戰爭の起るに際し、事業の進行はかゝるにからざりしと雖も、今や已に其緒に就き、明治教育史、明治文學史等相繼いで脱稿するに至れり。書肆育英舎先づ明治文學史を印刷に付し、將に之を世に公にせんとし、再三使者を遣はして序を余に屬す。余乃ち筆を執りて直に此文

を草し、明治歴史全集の來由を述べ、以て明治文學史の序となす。

明治三十九年十二月十三日

文學博士 井上哲次郎識

序

徳川の學者は知徳を重んじて情を輕んじ、文藝の暗黒面を認め、その價値の至大なるを忘れたるが如し。新井白石は猿樂の流行を見て、政綱紊亂の兆として苦言を將軍に進め、山本北山は淨瑠璃の文を愛讀しながら、尙之を廁中にのみ繙讀せりといふ。曲亭馬琴の如き、生涯を小説の述作に委ねたる人すら、言ふところには有用の書を購はんが爲に無用の書を著すといふに在り。何ぞその文藝に對するの冷淡にしてこれを輕侮したるの甚きや。日露戰爭の捷利は古來武士道の教訓に原因すとは道學者の言にして、維新の鴻業は水戸學に胚胎し、學者の論議よく天下の大勢を左右したりとは史家常套の説なれども、その武士道を宣傳し、忠君愛國の思想を國民一般に浸染せしめたるものは

實はかの士君子の見るを陋とし、耻としたる小説淨瑠璃演劇等
いはゆる平民文學の功勞によらずんばあらず。狂言の吉例と
せられたる曾我兩孝子の名は草刈童にも知れ渡り、忠臣藏の幾
幕かは津々浦々の村芝居にも演せられざる無かりしを思へば
無用の書は却つて有用の功を齎らし、戯作の影響は甚た眞面目
なるものありしにあらずや。

純文學の士君子間に尊重せられざりし結果は、精神界第一流の
人物をして筆を斯方面に執らしむるをなく、小説戯曲の如き眞
箇に生命あり、活氣ある文學を擧げて、嗜好低き中流以下の社會
に委ぬるに至り、爲に文學も亦鄙陋淫猥の域を脱する能はざり
しは、我徳川文學史上の一大遺憾といふべし。文藝を尊重する
風の盛なること歐洲諸國の如くなりしならんには、白石の如き

は蓋し世界に雄視する一代の大文豪たりしならん。

然れどもかくの如き時代にありて、いはゆる平民文學の發展の
さばかりに顯著なりしをおもへば、亦自ら人意を強うするもの
あり。凡そ國家の隆昌なる、必ず文學の見るべきものあり。國
民の意氣銷沈するや、文學も亦委靡して振はず。支那朝鮮等近
世文學の甚だ寂寥なるをおもへば、我國が東洋の覇者たるべき
形勢は已に徳川文學を以て豫言し得べかりしなり。

吾人はこゝに舊來の文學を繼承して、新に西洋の文化を受け、今
よりは東西を融合渾化せる新國文學の發生を希望する地位に
立てり。純文學に關する見解は一大變遷をなして、今や徳川時
代に士君子の繙讀するを憚りし無用の書は多數の學者により
て研究せられ、徳川時代に士君子の列に伍する能はざりし戯作

四
者は詩人、文學者を以て社會の上流に遇せらるゝに至れり。文學に對する尊重の此の如きをおもひ、國家の隆運前古其比なく、國民の發展亦益際涯なからんとする今日の狀勢を念ふに、文學の前途に向つて赫灼たる光明の閃影を認め得たる感なき能はず。

今日は正にこれ過渡の時代なり。音樂に於て、繪畫に於て、尙蔚然たる大家の輩出せざる限り、國文學に於ける偉人の發現も亦未たじかるべし。たゞこの過渡の時代が如何に經過し、如何に變遷し來れるかを見んば、將來の希望と理想とを満足せしむる上に於て幾多の興味を感すべきのみならず、將來に起るべき新國文學の先驅たるべき現代文學を現今の人の手に叙述し評論せる本書は後人の目より見は亦如何に多大の興味を惹起すべ

きならんと信じ、本書の刊行を喜悅するの情に禁へず。

明治三十九年十二月

芳賀矢一 しろす

緒言

一 明治維新は本邦文明史に於ける空前の事件なり。東西の文明相交りて茲に一新文明を現出し、社會百般の事象悉く新彩を帶ふるに至れり。然れども、明治の文明は、年を閱する事四十に滿たず。譬へば、青春の人、經驗未だ足らず、思慮未だ熟せず、勇往の氣徒に盛にして未だ調和の妙境に達せざるか如く、新舊の二素到る所に乖戾す。我文明が壯年の域に上り、成熟の期に入るか如きは尙遠き未來に屬す。所謂過渡時代は斯かる時期に命ずべき最陳腐にして又最適切なる名稱なるべし。而して此の現象の特に著しきは、文藝界に在り。由來文藝界の推移變遷は常に物質界の其れに後る。物質界革新の事業を完成してより、文華爛熟の盛運に達するまでは、更

に幾十の歳月を経さるへからず。大化革新ありてより三十年を経、天武、持統の世に至りて物質界の革新殆ど完成したりき。而も文藝界の革新を遂げたる天平の盛事は八十年の後に在りき。桓武帝京を拓きてより三十年を経、平城嵯峨の世に至りて紀綱張り國運盛なりき。而も延喜の文運勃興は百年の後に來りき。元和、僊武以來三十年、家綱軍職に就く頃は恰も徳川氏覇業の完成せし時なりき。而して文藝界の新氣運は八十年を経て元祿享保の交に興りき。維新の一元勳は豫言すらく、明治維新の大業は三十年にして成らんと。思ふに二十七八年戦役の前後は、維新の宏謨を完成したりし一大時期に非ざりしか。物質界の方面は此時に方りて略は成人の域に達せしか如し。唯文藝界の天平時代、延喜時代、元祿時

代は未だ到らざるなり。

一 然り。明治文學は尙混沌たる過渡期に在り。然れども、古來文學史上の過渡期にして斯くの如く興味饒きは未だ有らざるなり。平安文學の過渡期は、印度支那の文藝を取りて之を本邦固有の文藝に融和したる時代なりき。江戸文學の過渡期は、舊文藝復興の氣運に乗じ、一千年間浸潤し來りし支那印度思想が、純然たる我文學思想となりて現はれ、東洋文明の精華悉く萃りて我文學に入りし時代なりき。明治文學の過渡期は、則ち之に止らず、前代萃め得たる東洋文藝の精華を擡けて、新に泰西の文藝と觸接し、其の英を摘み、其の芳を採り、以て世界的發展の途に就かんとする時代なり。明治文學史は、此意義深き過渡期文學の一般を髣髴せんとするものなり。

一 遮莫明治文學は年齒尙若く、思潮の變遷文運の推移、未だ容易に究むべからず。されば之を論ずるに方り、期を分ち章を定め、劃然たる彙類をなして、各種文學を同一理法の下に攝取論述する事甚難し。此書に試みしか如きは、一の試験に過ぎず。

一 此書主として代表的作家、及び代表的著作を取りて文學發展の迹を辿る。多數の作家作品を悉く採録する餘裕なきを憾む。

一 此書收めたる文學は、純文學に限る。又純文學に在りても、所謂美文紀行文乃至漢詩漢文等は省畧に従ふ。

一 文學評論と新聞雜誌との文運發展に及ぼす影響や甚大なり。此書特に節を設けて之を詳述せんとせしむ、紙數に限あ

り。唯略叙に止む。

一 最近文學の概観は、三十六七年の交、文運一轉せんとするに至つて筆を擱く。象徴文學の勃興、社會主義小説の出現、藤村漱石獨歩等新文星の活動、及び文藝協會の事業等の新現象は、尙將來の發展を待つべき者なれば、暫く之に論及せず。

一 非才寡聞敢て事に當る。誤謬と脱漏と、冗漫と粗笨と、定めて卷に普からん。偏に江湖の叱正を俟つ。

明治三十九年十一月

著者識す

増補例言

六

一 本書は初版の全部に訂正を加へ、特に末章を改作し、新に二章を増補し、添ふるに明治文學年表を以てしたる者なり。

一 初版は其の緒言に述べしが如く、三十六七年の交に筆を擱けり、當時文壇の風雲頗る險惡にして、大勢の何れに傾くべきか若しくは如何なる新現象の起るべきかは、聰明なる批評家と雖、觀測するに難んずる所なりき。衝天の意氣を以て崛起し來れるロマンチック運動の歸趨は如何に、デカダン詩派を模倣せる象徴詩を如何に發展すべきか、將來小説界の覇權は天外の科學的寫實小説に歸すべきか、蘆花春葉の家庭小説に歸すべきか、はた全然新作風を捲き起すべきかに關しては、何人も權威ある論斷をなし得ざりき。況んや自然主義の文學俳諧派の小説の突如萬丈の光焰を擧ぐべきを豫想するに於てをや、評壇の識者と稱せらるゝ人も、或は樗牛等の運動を以て一時の熱狂に過ぎずとなすあり、或は新體詩界に敘事詩の流行せるを見て斯壇の大勢茲に在りと説くあり、或は蘆花を以て將來最

發展すべき作風を具ふとなすあり、或は天外の科學的小説を以て斯界の本流となすあり、多くは客觀思潮の横溢を豫想して將來文壇の客觀的傾向を帶ぶべきを唱へたりき。之を今日より見れば笑ふべきが如しと雖、當時混沌の渦中に在りては誰かよく之を達觀し得べき、吾人は初版結末に於て、評壇の大勢に反し、主觀抒情の思潮一世に漲らんとするを觀測して未來文壇の新傾向を揣摩し得たるに満足せんぞす。

一 爾來我が文壇は急轉直下ロマンチック運動の統を繼ぎて舊文藝破壊の運動を逞うし、敘事詩史詩夢の如く去り、家庭小説は第二流讀者の間に墮ち、代りて立てる新興文學の旗幟獨り鮮明に、文壇の各隅に樹つに至れり、今にして過去文學界を顧みれば歴史の進程略分明に、文運發展の徑路亦瞭乎として双眸に入る。文學上の維新革命ありて約二十五年、第二の維新は今正に斯界に行はれつゝあるなり。茲に初版の末章を改めて文學一轉の兆を示し、混沌期の文學を總敘し、新に二章を加へて新興文學の由來を明にし、進んで昨四十一年に至る最近文壇の狀勢に説き及べり。庶幾くは初版の面目を一新して多少の光彩を添ふるを得んか。

七

一 本書附する所の明治文學年表は、危然たる草稿の中、専ら文運の大勢に關係深き事象を取り、要を抜き略に従ひ、僅に十の一を掲ぐ。編者多年苦心の餘に出づと雖、固と學暇零碎の時間を用ゐて之を蒐集したる者、涉獵遍からず訪索博からず、時に或は誤脱なきを保せず、特に必ず採録せざるべからずして而も年月不明なるが爲已むを得ず省略せる者あるは、最編者の遺憾とする所なり。江湖博覽の士幸に是正を吝む勿れ。

一 本書初版を公にするや、恩師藤岡博士、長友志田學士、其の他新聞雜誌記者諸士或は有益なる批評を加へられ、或は懇篤なる教示を賜はる。著者はによりて蒙を啓く事鮮少に非ず。茲に特記して聊か謝意を表す。

明治四十二年五月

著者

明治文學史

文學士 岩城準太郎 著



第一章 前代繼承の文學

第一節 暗黒の文學界

潮流の相撃つや、勢浪を起し渦を旋らし、寒暖相交る所、忽ち濃霧を結び、千里に瀰漫して屢、海客を惱ます。思潮衝突の事亦頗る是に類する者あり。幕末以來動き初めたる新思潮は、頻々として繼起せる外來の刺戟によりて、日一日其勢を伸べ、遂に滔天の大勢力となりて舊思想の前面に顯れ來り、論争、戦亂、變革、所有破壊的運動

を選うして維新の大革命は成り出でぬ。其間、社會の舊秩序悉く破れて、之に代るべき新秩序未だ確立せず、世を擧げて、一時、混沌の界に陥り、一代の民衆徨々として五里霧中にさ迷ふか如き状態なりき。

而して此維新當初の社會を支配せし所謂新思潮は、疑もなく泰西の思想より來りき。思ふに新思潮の横流は其の由來する所甚だ遠く、洵に幕末一日の故に非ず。室町の季世、南蠻の來航ありてより、江戸幕府の初期紅毛の通商に至るまで、既に泰西思想の一端に觸れ、島原の騷亂に銳鋒一度頓挫せしも、八代將軍の英斷、新文明の輸入を復興し、爾來日進月歩の西洋文明は、絶えず紅毛人の手によりて本邦具眼の士に傳へられしかば、所謂新思想の萌芽は此の間既に養はれたりし事疑ふべくもあらず。此時に方り黒船來航の飛信は露人北邊を侵すの警報と共に全國を愕かし、國國の存亡此の一瞬に極まるか如く見わしかば、攘夷、開國、尊王、佐幕、衆論沸騰し、國內騷擾し、續て外艦砲撃となり、幕府の解體となり、大政奉還となり、時局は走馬燈の如く廻りて、急轉直下、遂に王政維新となり、赫々たる新思想の勝利を以て一段落を結びぬ。南蠻通航以來、國民の間を流れ來りし泰西思潮は、茲に至りて汪々たる

奔流となり、新たに建設せられし明治政府は、悉く此思潮に浴せる當代の俊才によりて組織せられたりしかば、舊物革新の政治は一瀉千里の勢を以て行はれ、二百年の舊慣一朝にして改まり、東照公の威靈全く地に落ち、封建世襲の制廢せられ、四民の階級撤せられ、結髪を切り、帶刀を解き、曆日を改め、年中行事を變へ、社袴の折目正しきは洋服帽子の當世風に移り、驛路傳馬の悠々たるは汽車汽船の快速と代りぬ。斯くて、上は政治の大本より下は衣食住の瑣末に至るまで、一として泰西に法らざるはなく、世を擧げて西洋文明に心酔するに至り、物質界に於ける泰西思想の勝利は明かに認められぬ。

然り、改革は疾風の如く行はれぬ、疾風の過ぐる所、草を飛ばし、木を摧き、家を破り、垣を壊ち、野を荒し、林を掠め、當る所の物破摧し盡さずんは止まず。維新の改革は破壊の歴史なり。總ての舊制度、舊習慣は根蒂より覆されたり。舊に制度習慣のみならず、總ての舊思想、舊學術は舊弊といふ一語の下に斥けられたり。舊に思想學術のみならず、總ての舊道德、舊信仰、乃至舊文學、舊美術は悉く破壊し去られたり。換言すれば、物心兩界に亘りて總ての舊事物は名殘なく破壊し盡されたり。斯く

て世は荒寥たる木枯の野となりて、一代の民衆は、制度確立せず、思想定まらず、はた信仰なく文藝なき混沌界に投せられぬ。

斯かる民衆の第一に要求する所の者は言ふまでもなく物質的満足なり。猛烈なる破壊に驚かされて茫然爲す所を知らざりし民衆は、譬へは餓ゑたる者の食に就くか如く、翕然として物質的新文明の下に集まり、文明若しくは開化と名の附く事物は、善惡美醜の識別なく之を貪り取りぬ。是に於てか、維新の改革家は、其の勇往なる破壊の手を收めて之を建設の方面に廻らさざるへからず。而して其の建設事業の第一着手は實に物質的新事物に向て爲されざるへからざりき。聖天子即此の氣運を察し勅諭を下して國民の向ふ所を指導し給へり。明治元年三月天下に誓約し給ひたる五事の詔勅即是なり。曰く、廣く會議を起し萬機公論に決すべし。曰く、上下心を一にして盛に經綸を行ふへし。曰く、文武一途庶民に至るまで各其の志を遂げ人心をして倦まさらしめん事を要す。曰く、舊來の陋習を破り天地の公道に基くべし。曰く、智識を世界に求め大に皇基を振起すべしと。是實に機宜に適ひたる施設にして、其の徹頭徹尾、物質的建設に關する者なるか如きは、當

時の民心の躍如として之に反映するを見るべし。爾來國民の歸趨は一に之に集まり、孜孜として物質的新事業の經營に勤めぬ。元年三月、太政官「日誌」を發行してより民間新聞紙の起る者相次ぎ、二年府縣に小學校を設け東京に大學校を興し、京濱間に電線を架し、鐵道を起工し、四年、廢藩置縣を斷行し、穢多非人の稱を廢して四民平等となし、五年、太陽曆を採用し、六年、全國に徵兵令を布き、八年、行政釐革の詔を發して行政組織の完美を計り、元老院を設けて立法議院建設の準備をなし、大審院を置きて司法權を確立し、其他人才登庸の道を開き留學生を西洋各國に送り、新聞雜誌を發刊して益々此の思想を鼓吹し、盛に窮理書を著譯して科學的智識の傳播に勉めたる等、明治の初年全國民の奮勵努力は、一として五事誓約の實現ならざるは無かりき。大水堤を決したるか如き物質的新文明の流に當る者、何人か敢て精神界の缺陷に想到し、若しくは進んで精神的新建設を試みんとする程の餘裕を有すべきぞ。社會の大變動に遭遇して舉措其の度を失ひたる國民が、物質的要求の満足に忙殺せられて、又他を顧みるに暇なかりし事誠に宜なりと言ふべし。

げに衣食足りて人始めて禮節を知るべし。物質的要求を満たすに惟れ日も足

らざる餘裕なき國民が、道德や宗教や美術や文學や、所謂精神的方面を閑却し、特に美術文學の如き、實用必須を離れたる高尚なる精神的娛樂、或は遊戯の方面に屬する活動を以て全然社會に用なき者となし、破壊に繼ぐに破壊を以てし、千年の傳統一朝徹履の如く棄て去つて顧みず、世は科學萬能、開化萬能の世、人は麵麩のみにて生活し得る者と思惟せしが如くなりしは正に然るべき所。されば明治の初年に於ける是等精神的方面の慘憺たる運命は今より想像するに餘あり。國初以來國民固有の精神に加ふるに儒教の倫理觀を以てし、年所數多の訓練と陶冶とを経て遂に莊嚴なる社會道德となり、以て上下の人心を支配し來りし所謂武士道の道德は、社會の解體、四民階級の撤去、帶刀の禁令と共に其の權威を失墜して、社會道德の地盤は蕩然壞れ去りぬ。而も之に代るべき新道德未だ確立せざるなり。之を宗教に見れば國民敬神の風に鑒みて之を佛に習合し、以て國民の信仰を繋ぎ來りし所謂日本佛教も、維新改革家の外教撲滅政略、神佛分離の斷行と共に、如來世尊の威徳俄然として薄らぎ、迷信の名の下に此等の信仰は名殘なく地を拂はんとす。而も之に代るべき新信仰未だ起らざるなり。斯くて國民は上下相率ゐて功利の門

に拜跪しぬ。

美術の状態に至りては更に慘憺たる者あり。舊物破壊の精神は、特に斯界に其の勢力を逞うし、神佛分離の一撃、幾多優秀なる宗教的古美術を破却し、社寺料地の奉還、國民信仰の乖離は、社寺を死地に陥れて、傳來の尊像珍什多く蓬散して、外人外商の手に移らしめ、美術の保護者たりし上流人士は、社會の變動と共に生活の困難を來し、延いて美術品の如き裝飾的什器は悉く賣却せられて、日常必須の器具と代りぬ。芝の増上寺、奈良興福寺の五重塔を無用の長物なりとして、焼き拂はんとしたりぬ。たるか如きは、當時の形勢の極端なる發現なりと雖、蒔繪物の棄てられてガラス物のもてはやされ、陶磁の精巧なるはブリキの粗造なるに代り、雪舟探幽、絮よりも軽くして石版の洋畫却て千鈞よりも重かりしが如きは尋常の事、驚くに足らず。されは美術家、工藝家は其の職を失ひて路頭に迷ふ者多く、明治畫界の天才狩野芳崖の英資を以てして、尙當時赤貧洗ふか如く、五十の畫幅、連夜露店にさらして漸く三圓の金に換へ得たりといふ。一代美術の衰運寧ろ悼むへからずや。

翻つて思ふ、當代文學の趨勢は如何。天保弘化以來漸衰の域に向ひたる我文學

は一たび幕末變亂の爲に打撃せられ、二たび維新以來の泰西物質的新文明の爲に打撃せられて沈衰の極に達せり。所謂西洋實學の勢力はあらゆる文學を蹂躪して無用の文學となし、和漢文學に關する在來の典籍は、其の他一般の和漢書と共に新世界の時勢に添はざる者として擯斥せられ、此等を藏する者亦因循固陋として嘲けらるゝ事少なからざりしかば、古今の名著大家の述作、乃至希世の珍本奇籍、惜し氣もなく反古として沾却せられ、片々たる窮理の書代りて諸家の珍藏となり、物理學の初歩を心得たる者非常の大學者の如く思ひ上りぬ。されは新文學固より起るよしなく、新文學者亦出づへくもあらず。唯此の變轉活動の社會と相關する事なき一派の閑人等、積衰の餘に出てたる舊文學の殘肴冷杯を嘗めて、社會の裏面に一脈の文運を維持する有るのみ。其れすら生存問題の苦痛容赦なく彼等を迫害し、戲作を以て身を立つるの困難は愈甚しくして、之にたづさはる者漸く跡を絶たんとす。幸に新聞紙の起る有りて、戲作者の少しく才ある者之に従事し、新作取るに足る者無しと雖、頼りて以て一縷の命脈を保てり。要するに明治初年の文學界は微光一點の明滅する者有るのみにして、大勢の上より見れば暗黒無明といふ

も不可無きに似たり。而も其の微光や、舊文學の繼承に過ぎずして、未だ以て明治新文學の新光明と稱するに足る者あらずき。餘裕なき國民の俗惡なるは今に始まりたる事ならずと雖、當時の國民の如くしかく詩味の缺乏したる者あらず。乾燥淺薄の風、上下を靡かして世は永へに功利一逼の世とならんとせり。

維新の歴史は舊物破壊の歴史なり。明治の初年は物質的要求の満足に全力を注ぎし世なり。心靈界の要求未だ起らざる世なり。古今に比類なき沒趣味の時代なり。文運地に落ちたる時代なり。新舊思潮衝突の序幕は實に斯くの如き慘憺たる光景を以て開かれたり。明治文學史は實に憫むべき文學の悲境を以て始められざるべからざりき。

第二節 外來の思想

維新革命に於ける泰西思想の勝利は、物質界に對して多大の貢獻をなせりと雖、心靈界に對しては上述の如き不吉なる結果を殘せり。されば國民の自省自識未だ起らず、思想界に於ける自主自立の域尙遠くして、朝變暮替、一に外來思想の赴く

所に従ふ。是を以て、且に英國思想を迎へ、夕に佛國思想に就き、昨は功利主義盛にして今は幸福主義起り、民心の蕩搖極まりなく、遂には尊外卑内の弊に陥るまで、只管泰西思想の後影を追ふ。されば一度物質界に於て勝利を得たる泰西思想は、進んで精神界に其の勢力を振ひ、延いては文藝に於ける新思想輸入の階梯ともならんとす。因て茲に後來文藝界新思想の先驅ともいふべき思想界の新潮を探り、其が物質的文明に對する交渉以外如何なる影響を我人心に與へしかを見ん。

蘭學は本邦洋學の祖なり。大凡、外國の思想乃至學術の我邦に入りしは、古代にしては佛學と漢學とあり。近代にしては即蘭學あり。而して佛學と漢學とは、共に我思想界文藝界に入りて其の有力なる元素となり、物質的文明の進歩以外、靈界に残せる痕跡頗る顯著なりき。然れども蘭學は醫學天文等の實用科學を傳へ、我物質的文明に對して多大の貢獻をなし、に係らず、倫理文藝に對して其足跡を印する者甚少かりき。本邦洋學の祖先は、唯物質的文明の指導者としてのみ二百年間の勢力を維持せしが、幕末、歐米各國の言語、思想、學術等、一時に流入するに及び、大渦盤旋、蘭學の勢力を没し去りて、想海一度中心思潮を失ひ了りぬ。斯くて、幕府衰

亡の大變亂を経て王政一新となるに及び、俄然勃興し來りて本邦文明を指導し、以て前代蘭學の地位を奪ひし者は、實に英國思想なりき。

當時世界の海上權力は既に蘭國を離れて英佛米の手に歸し、文明の中心亦之等新興の邦國に移りしかば、十九世紀文明の新潮は彼等の手によりて東洋に運はるゝに至り、特に英國、富強宇内に冠し、海上王として勢力五洲に及へる時なるを以て英國の思想及學術は、驕然として國內に入り來れり。當に之のみならず、英國の分身たる北米合衆國は、提督彼理來航以降、本邦開國に深き關係を有し、我爲政家改革家先づ彼に兄事して開化文明の師と仰ぎ、彼國も亦私かに東瀛蓬萊國を開發する嚮導を以て任じたりしかば、英國的文明の分子は西より東より盛に此國に移植せられたり。當時英語は世界の通語と稱せられ、我朝野先覺の士、歐米諸國を視察し若しくは數年留學の功を積みて歸朝する者、多くは英語を操り、英國學者乃至其の著書によりて文明の智識を得たりし輩なれば、此の方面よりも政治、經濟、風俗、衣食其他万般の事物、概英國を宗とせるなりき。

斯くして英國思想は泰西新思潮の先頭として國內に横流し、續いて他諸國の思

想を導き、到る處革新の波を揚げにき。而して此の思想を抱きて國民の唱首となり、所有荆棘を拓きて此氣運を鞭撻し、以て一世の木鐸となりし我先覺者は實に福澤諭吉なりき。彼は既に明治以前、慶應義塾を江戸三田に開き、天下の學生を招きて革新の曉鐘を撞き初めたり。其の宗とする所は専ら英米功利の學風に在り、政治、道德、風俗、習慣等、一に舊來の弊を打破して新文明の光に浴せしめんとす。其の舊道德、舊習慣、舊教育を罵倒するや峻烈を極め、教壇に公開演説に、新聞に著書に、勇往直前、新主義を鼓吹して止まず、『世界國盡』『窮理圖解』『西洋事情』等、通俗の著書、又は種々の翻譯書を出して公衆を教へ、遂には時人をして一般洋學書を稱して福澤本と呼びしむるに至り、三田の先生若しくは三田翁なる名は、斯くて我新文明を開きたる大光明となりぬ。

げに思想界の嚮導としての福澤は極めて偉大なりき。而も彼の事業は獨り之に止まらず、文學者としても亦新文壇に於ける最初の新文學者たる光榮を荷ふ者なり。勿論彼の文學者たるは、純文學の作家たる所に存するに非ずして、單に文體の上に在り。換言すれば、散文家翻譯家としての文學者たるに過ぎず。然れども

從來の文壇に於ける誇大粗放の漢文と、優長迂遠なる和文との外、別に平易流暢の一體を創めて新思想の發表と俗間の普及とに便したりしは、其の功績實に鮮少に非るなり。明治六年『文字の教』を草し、其の端書に曰く、今より次第に漢字を廢するの用意專一なるべし、其用意とは文章を書くにむつかしき漢字をば成るべく用ひざるやう心掛くる事なり。むづかしき字をさへ用ひされば、漢字の數は二千か三千にて澤山なるべし。此書三冊に漢字を用ひたる言葉の數僅かに千に足らされども、一通りの用便には差支なし。之に由て考ふれば、漢字を交へ用ふるとてさまざま學者の骨折にも非ず、唯古の儒者流儀に倣て、妄に難き字を用ひざるやう心掛くる事緊要なるのみ云々と。彼が文章に對する第一の主張は漢字制限に在り。斯くの如きは豈三十年後の今日、我教育社會が取りつゝある方針の的確なる豫言に非ずや。且其の文體と用語と、全然從來の型式を離れ、口語の語彙と語脈との大膽なる採用を試み、以て上掲の如き文語と口語との渾然たる調和體を創始せり。是豈に吾人が今日此の文を讀んで何等の不思議を感せざるまでに讀み習ひ書き習ひたる普通文の範を垂れたる者ならずや。後年或は假字のみを以て國語を記載

せんとし、或は言文一致の文體を創始せるか如きは皆其の源泉を茲に汲めりといふべし。げに彼の文體は自由なり、平易なり。明治思想を述べんには斯くの如く自由ならざるへからず。之を民間に普及するには斯くの如く平易ならざるへからず。正に是、時勢の要求此の文を起し、もの、明治文壇到る所に其の影響を残し、も亦宜なり。

福澤は又、世界の地理、歴史を童蒙に教へんか爲に、明治二年『世界國盡』を著し、吟詠の中自ら之を暗せしめんとて、平易流暢なる七五調を以て一篇を始終せり。此の書一度出て、より到る所節調を附して吟誦せられ、其の吟調相傳へて後日の軍歌調となれり。而して其の文章も、冒頭「世界は廣し萬國は」より始めて、沒趣味なる地理歴史の叙述に過ぎされども、其の記載の對象により興來り情昂る時は、文字精彩あり、聲調昂揚して一段の詩味を帶ぶ。特に英京を叙する所及北米合衆國の歴史を謳ふあたりは宛然後年『新體詩抄』の詩調を喚起したる先聲なるの觀あり。彼又、英人チャムブルの『モラル、クラス、ブック』を譯して『童蒙教草』と題し例の平易自由なる文體を以て童蒙の訓話を記載せり。是亦、後の童幼の讀み物の所有種類に

採用せられる文體の嚆矢にして、別しては翻譯文の最達したる者の一なり。固く是、教訓書にして文學上の作ならざれば、翻譯文學とは稱するを得ずと雖、唯其の文章の上より同人の他の譯書と共に頗る尊重を價すべき者となす。

要するに彼の文章は平易と自由と暢達とを以て特色となし、之を以て『西洋事情』以來無數の著書論文を一貫せり。斯くして彼は明治の文章に、風體と用語との革新を加へ、一代の散文をして向ふ所を知らしめたり。其成功の著しき、彼か思想界に於ける成功に比べて必しも遜色なし。否、後者の成功は、半ば其文章の功績に歸せざるべからず。彼か明治文學史上に有する位置は正に此點に存す。

私塾を開いて洋學を授けたりし者の中、慶應義塾を除きて最有力なりしを東京小石川なる中村正直の同人社となす。是亦、英國風の社會教育に力め、『西國立志編』『西洋品行論』等、スマイルスの著書を譯述して、品性修養の根據を洋風道徳の上に置きたりき。其他明治初年にありし各地洋學の塾には、箕作秋平塾、鳴門二郎吉塾、福地源一郎塾、尺振八塾等甚多く、何れも明治新文明に直接間接の貢献をなせり。明治四年の調査によれば、當時福澤塾生三百二十三、福地塾生七十八、箕作塾生百六、

鳴門塾生百四十一、尺塾生百十一名ありきと。以て洋學當年の狀勢を見るべし。

教育の方面にて此新氣運興隆に力ありしは、此等民間教育家のみならず、政府當局の施設亦没すべからず。維新以前より洋學輸入の中樞たりし開成所は、慶應三年學制を改めしより、蘭學漸く衰へて英佛獨の學術漸く盛に、該國教師を聘し、専ら其の國語によりて諸生を導かしめ、超て明治二年、府縣に小學校を設けて初等教育の端を開き、次に開成所を大學南校と改稱して語學を専らとし、昌平費を大學東校と改稱して醫學を専らとし、以て高等専門教育の基を立て、三年大、中、小學規則を制定し、南校に各藩の貢進生を集め、其英、佛學上等生を英佛二國に留學せしめ、次て中學校を立て、中等教育の機關を設けたり。爾來大學南校益擴張せられて、四年には雇外國教師、英五、米四、佛三、李三、瑞一の多きに及び、生徒總數千百九十五名の盛況に達し、留學生には五名の女子を見るに至り、同年文部省を置きて教育行政の首腦となし、政治法律より日用技藝に至るまで、百般の學校備はらさるなく、以て十年東京大學の設立に及ぶ。政府の洋學教育が斯く驟々として其歩を進むる間、他方に於ては文明進歩に資すへき著譯頻りに出で、益々此氣運を助けたりき。

此等著譯は主として民間學者の手に成りしと雖、文部省亦大に之を獎勵し、或は自ら翻譯出版に従事し、或は其の保護の下に著譯を完成せしめたり。試みに明治十二三年以前に出でし重なる者を擧ぐれば、福澤中村二家の著書を始め、政治、經濟には『新政大意』『立憲政體略』『萬國公法』『經濟原論』『銀行論』『歴史』には『西洋史記』『萬國新史』『歐羅巴開化歴史』『萬國史略』『泰西通鑑』地理、風俗には『輿地誌略』『五洲記事』『西洋夜活』『西洋新書』地理學『窮理』には『物理全誌』『人身窮理』『博物新編』修身、倫理には『勸善訓蒙』『修身論』『智氏家訓』等、其他文部省がチャムバーの百科全書を譯出せる等枚舉に暇あらず。

更に新文明の發展に與つて大に力ありしは新聞紙と雜誌との發刊なりき。固と新聞紙は新文明渡來に伴うて起りしものなるも、智識の傳播者、開明の通達者として最適當なる新聞其物の性質は、直ちに翻つて新文明宣傳の大機關となりき。特に此等の事業に従ふ者は當然の顯象として新智識を具へたる當代の先覺者、乃至文筆に堪能なる朝野知名の士なりしかば、其の説く所は、尙半暗黒なる當代社會を照す光明なりし事疑ふべからず。抑も新聞紙の始めて本邦に發行せられしは

夙く文久年間に在り。『バタビヤ新聞』『六合叢談』『中外新報』等は、蓋し此の事業の祖なるべし。而も毎月數回の定期刊行をなせるは、元治元年、英人ウエーランドが横濱に發刊し、岸田吟香之が主筆たりし『新聞紙』なるべく、次に慶應四年、柳川春三が發行せる『中外新聞』は蓋し邦人の手に出でし最初の者ならん。然れども其の記事は皆横濱なる歐字新聞の抄譯に過ぎさりき。同年政府『太政官日誌』を出して新政の主旨を知らしめ、現今『官報』の基を作り、福地源一郎、櫻痴『江湖新聞』を出して民間時論新紙の開祖となれり。福地が『新聞紙實歴』に述ふる所を見るに、曰く、慶應二年再び幕使に隨行して英佛二國に駐在せる凡十ヶ月、此の間巴里倫敦の諸名家に會して新聞紙の事を問ひ、其内外の政治に關して輿論を左右する者は即新聞の力なりと聞き、あはれ余にして若し大學文章あらば時機を得て新聞記者となり時事を痛快に論せんものと思ひ初めたりき。中畧竊に條野傳平、廣岡幸助、西田傳助の三人に謀り、乃ち新に『江湖新聞』と名つけたるを發兌刊行したり。活字もなく活版もなかりければ、之を木版に彫刻して馬連摺ばれんにしたり。半紙二切にて毎號凡十枚乃至十二枚を一冊として之を綴りたれば、取りも直さず今日の雜誌の疎末なる

福地源一郎

者なり。其の體裁は雜報あり、寄書あり、時論文ありて、其の草稿は盡く余一人の筆に出で、其淨書の如きも時として余自ら版下を書き、概三日若しくは四日毎に發兌を試みたるに、諸種ありける中にも『江湖新聞』は尤發兌の部數多しと稱せられて、頗世人の矚目を惹きたりと。以て此新聞の起れる因縁と、發兌當時の事情と體裁とを知るべし。爾來民間新聞紙を起す者踵を接し、橋爪貫一の『内外新報』を始め、遠近新聞『新聞事略』、横濱の『もしほ草』、大阪の『内外新聞』等、明治四年に洋紙活字版の嚆矢たる『横濱毎日新聞』、新聞雜誌『日新眞事誌』等相前後して出で、五年『江湖新聞』發行禁止となりしかば、條野等更に『東京日々新聞』、支那製活字、日本紙一枚摺、後洋紙兩面摺を刊し、次て小西義敬等『郵便報知新聞』を出し、其他大和、大阪、山梨、西京、茨城等各地競うて新紙を發行するに至れり。されど當時の新聞には社説を掲げて時事を評論する事なく、唯世上公私の記事を秩序なく臚列せしに過ぎず。故に其の品位未具はらず、世人の見る目未重からさりき。然るに六年に至りては新聞界の氣運漸く動き、福地櫻痴、官を辭し、『日々新聞』に入りて社説を起草せしより、當時の名士文筆にたづさはる者、次第に新聞に筆を執るに至り、岸田吟香『日々』に入り、七年『朝

野新聞』起りて成島柳北之に従事し、八年『新聞雜誌』改題して『曙新聞』と稱し、岡本武雄、末廣鐵腸之に執筆し、其他『報知』には栗本鋤雲、藤田鳴鶴、矢野龍溪あり、『日々』に末松青葙、市喜山景雄あり、『横濱毎日』に沼間守一あり、『朝野』に末廣鐵腸、大久保鐵作あり。所謂五大新聞競うて時事を論じ文藻を研き、殊に櫻痴は議論嶄新文章雄麗、草する所の社説は卓然として一世の瞻仰する所となり、當時文筆の間に名を成さんとする者期せずして櫻痴を標的とする状況なりき。柳北の盛名殆ど之に頡抗し、觀察奇警文辭輕妙、獨得の壇場は雜錄に在りき。斯くて新聞紙は隱然天下に重きをなし、記者の抱懐する進歩思想は其主張の漸進なると急進なるとを問はず、往々一世の輿論を喚起せんとするに至れり。されば十年前後に於ける新聞紙の創刊殊に夥しく、就中、七年鈴木田正雄『讀賣新聞』を出し、八年落合芳幾、高島藍泉、繪入新聞の嚆矢たる『平假名繪入新聞』を出し、假名垣魯文『假名讀新聞』を出し、『讀賣』の摯實、『繪入』の華麗、『假名讀』の洒落、三者鼎立して童蒙に入り易かるべき世態人情に關する記事を載せ、『日々』『朝野』の男性的なるに反して、専ら女性的趣味に富むを特色とせり。

雜誌の發達は新聞紙と其軌を一にして、唯少しく専門的研究的なるを異なりとす。然れども其の初、『太平海新報』『新聞雜誌』『翻譯新聞誌』『海外雜誌』等の出でし頃は、多くは外國新聞雜誌の翻譯などを載せたる週刊物にして、其の性質も新聞と異ならざりしが、明治七年明六社より『明六雜誌』出づるに及び、始めて雜誌の體裁を具へたり。明六社は新政後に於ける文人學者の結社の嚆矢にして、其名は創立の年を表はせるもの、首唱者は森有禮、社員は西周、西村、茂樹、大槻文彦、加藤弘之、田中不二麿、津田真道、津田仙、辻新次、中村正直、九鬼隆一、畠山義成、福澤諭吉、杉亨二、箕作秋坪等にして、正に是當代學者の粹を集めたる學士會院なりき。されば其發刊する『明六雜誌』は實に當代先覺者の思想發表の機關として學術的研究的の所論を包容し、社會百般の事象に涉りて時事を論議する事頗る盛にして、特に社員多數は、其主義に漸急の差別こそあれ、何れも新思想を抱いて改進の氣運を鞭撻せんと勉むる人々なりしかば、當時勃興し來りし『日々』『朝野』等の諸新聞と相呼應して新文明の扶植に盡したり。不幸にして時の政府が此等新聞雜誌の縱論橫議に堪へずして發布せる新聞條例は、此雜誌の發達を阻害して八年末遂に廢刊しぬ。『日刊雜誌』洋

々社談』之に代りて同年發行せられしが、説く所時事論よりも寧ろ史傳語學等の研究に富み、大槻文彦、那珂通世、小中村清矩等之に執筆したりき。當時又樋口戴廣の『共存雜誌』中村正直の『同人社文學雜誌』發刊せられ、續いて『扶桑雜誌』近事評論、『評論新聞』草莽雜誌等の政論誌、『穎才新誌』文明雜誌、『學庭志叢』花月新誌、『新文詩』等の詩文誌、其他、家庭、宗教、教育、農業、醫事等百般の専門雜誌、『團々珍聞』の如き滑稽諷刺の雜誌、都鄙共に盛に發刊せられ、新聞紙と相並んで新文明の宣傳に勉めぬ。明治十年末の現在數を見るに、新聞雜誌總計百五十六種、發賣部數一年間三三、二八七、五二九の多きに達せり。

斯くの如きは明治十年以前に於ける泰西思想傳播の大勢なりき。然れども此の滔天の潮勢を見て直ちに當時之か前途を遮る一の抵抗だも無かりきと考ふるは速斷に過ぎたり。天下の事、見來れば常に相反の二要素を含み、百般の現象一として其の反面を有せざるなし。革新の活動は守舊の反動を伴ひ、青春の進取は老輩の退嬰と相乖く。思潮革新の事、豈抵抗なくして成就すべけんや。所謂新舊思潮は到る處に衝突し、政治の大本より衣食の末に至るまで、所として此顯象を見さ

るはなし。社會革新家が口を極めて舊弊打破を説くは、是れのなきに發する矢に非ず、新聞雜誌の疾呼宣傳するは、曾に新主義を顯さんとするのみならず、合せて舊主義を破らんとするなり。而も此等の革新運動は總ての妨害を排して直前邁往するなりき。

かくて新文明の物質界を照す事、維新以降今に到るまで、こゝに十年、國民の物質欲に對する要求は漸く満足せられしかば、自然の順序として精神界の缺陷に向つて其欲求を感ずるに至りぬ。政治、經濟の施設、住居衣食の改良に惟れ日も足らざりし國民は、茲に漸く小康を得しかば、顧みて靈界の新主義を翹望し初めたり。倫理、宗教より始めて美術文學に至る迄、革新の曙光漸く東天を染めなしぬ。福澤翁か舊來の儒教道德及武士道々徳の固陋を打破してより、泰西の倫理說漸く入り來り、或は自主自疆の精神に富む、『西國立志編』、『西洋品行論』となり、或は君父に對する義務よりも自己に對する義務を先にせる、『勸善訓蒙』、『智氏家訓等』等となりぬ。宗教に在りては、從來の天主教以外、耶蘇教俄然として勃興し、特に此氣運に鞭つて起ちし新島襄は、基督教を以て國民を感化するに非ずんば新文明の眞精神を傳ふる能

はずと信じ、八年同志社を京都に建て、基督教的教育の大道場を開きたり。更に他の一方に於ては英、佛、獨の各國語學新興の結果、從來蘭語及蘭文典とのみ比較せられたりし我國語は、新たに此等各國語文典と比較して其得失を論せらるゝに至り、後年活潑なる國語問題論争の端緒を茲に發しぬ。既に文字に關しては漢字全廢説先づ起りて、六年『日々』に新字製造を説く者、漢字全廢の準備として漢字交り文を普通用とすべきを説く者あり。七年『明六雜誌』出づるや、西周卒先して羅馬字採用説を出し、假字説之に對して起り、以て後來羅馬字會、かなのくわい等の基をなせり。續いて文體に關し、漢文乃至耳遠き從來の文章を廢して言文一致體を取るべしといふ説起り、『日々』の福地は其階段として先づ力めて口語を交へたる平易の文を作るべきを論じぬ。氣運は益々進みて今や藝術に及びぬ。五年文部省が埃國博覽會に高橋由一の洋畫を出品せし頃より洋畫の新芽斯壇に萌し、九年工部大學校内に美術學校を置き、洋人を聘して繪畫、彫刻、裝飾術等を教授せしめ、音樂、演戲に關しては、『明六雜誌』等に國樂振興、演劇改良を説く者あり、『日々』の福地亦脚本院本の改良及芝居見物人の改善を論じ、以て後年音樂振興、演劇改良の運動の先驅をなせり。

若し夫れ新文學の發達に至りては精神界活動の中、最非實用的なるものなれば、功利主義を第一とせる明治新文明に遇せらるゝ事最薄く、十年以前に於ける斯界の曙光甚微弱なりき。然れども其間又一道の潛勢後日の盛運を含む者なきに非ず。其の詳細は次章を俟つて述ふる所あるべし。

精神界に於ける新文明の活動は斯くして漸く其の端緒を開きぬ。此氣運に乗じて起り此光景を前驅として進める我新文學は果して如何なる者なりしか。吾人未だ其の面影に接せずと雖、今や暗黒の裡一點の光を示したる十年以後の翻譯文學は即新文學の大光明に到達すべき前提に非ざるか。吾人は將に暗黒の文學界を去らんとす。而も此暗黒裡何等の傳ふべき文學なきか。吾人をして暫く回顧せしめよ。

既に述べし如く、明治十年以前は文學界の暗黒時代なり。文運地に落ちて新光未起らず、喘々焉として餘息を存する者は唯憐れむべき舊文學の殘骸なりき。換言すれば純然たる江戸文學の繼承にして、其の明治文學に於ける位置は、恰も殘燈夜の暗黒を守りし者漸次曉の新光に沒し去るか如き者なれば、嚴正なる意義

に於て、或は明治文學と稱し難かるべし。然れども文學は固く時勢の反映人情の鏡なれば、當代人文の状態は、寫して此等繼承文學の中に存する事言を俟たず。明治初年の時勢人情、一部たりとも寫し出されたりとすれば、假令其形式手法舊文學の殘骸なりと雖、其技巧拙劣内容貧少なりと雖、はた其光焰甚微茫たりと雖、明治文學を叙するに方り、必しも棄つべきに非ず。況んや文學の發達は一朝一夕の故に非ず、新文學の樹立は常に舊文學の土壤の上にせられざるべからざるをや。

第三節 前代繼承の文學

江戸文學の繁榮は本邦文學史に於ける空前の壯觀なり。其の發達の著大其の種類之富瞻實に百世の瞻仰を値する者ありき。然れども大御所の榮華一度去つて幕府衰運に向ひ、邊境警を傳へて世漸く亂れんとするに方りては、文學の發展復往時の如くならず。和歌は絶代の巨匠景樹逝いてより、其門流八田知紀、熊谷直好等之を繼ぐと雖、技術固より師翁に接踵すべくもあらず。唯從來の情力によりて桂園一派を率ゐるのみ。發句は天明の俳傑去つてより、琴太の俗氣墮落の端を開

き、天保の宗匠梅室、蒼虬、鳳朗に至りて其極に達し、崇拜者模倣者全國に普きに係はらず、詩趣蕩然として地を拂ふ。淨瑠璃は精華、出雲、半二に落ちて文耕堂以後注目すべきなく、脚本には新七、二三治、治助、如樂等在りと雖、五瓶南北の餘唾に過ぎず。小説に至りては天才馬琴逝いてより片々たる戯作者の世となり、春水、一九の末輩、鄙俚なる人情物、淺薄なる滑稽本を作りて偏に先人の殘肴に甘んず。其他俳文、狂歌、狂句等一として散り過ぎの花、あはれなる衰へを示さるなく、百般の文學悉く模倣亂案の弊に陥り、量に於て著しき衰退を見ずと雖、質に於ては日に月に俗惡の度を増し、其形勢相傳へて明治の初頭に及べり。

維新以來十年頃に至る我文壇を支配せる文學者は、實に上述の如き文學の繼承者なりき。嘗に十年頃までのみならず、種類によりては二十年前後、文學思想革新の運動起るに至るまで、依然として舊態を改めざる者あり。然れども之等繼承文學は、何れも明治新文學の基礎をなす者にして、一代の氣運を捲き起したる明治の新文學者は、多くは一度繼承文學を味ひ來りし者なるを以て、新文學に入るに先だち暫く之等繼承の文學界を觀察せん。

當代の和歌壇は景樹の末流、即桂園派の獨占する所なりき。景樹天稟の歌才を以て京師に蟠踞し、香川家に入りて勢力を堂上に伸ふるや、從來歌學の宗たりし冷泉、二條の諸家を壓倒して斯界の主權を握りしかば、桂園の歌風遂に當代瞻仰の中心となりき。曩きに元祿の世、海内の文章布衣に落ちて歌道亦地下の手に歸し、縣居翁起りて主權一度江戸に移りしが、茲に至りて歌壇の中心復び京都に返りぬ。明治の初め都を東京に遷さるゝに方り此形勢宮庭と共に東遷し、八田知純の門に出でし高崎正風御歌所長となるに及びて、桂園の流風復動かすべからざるに至りぬ。御歌所は明治年間唯一の帝室文學の府にして、數名の寄人、當代歌人の中より任命せられ、毎月一回宮中御歌會の行事に従ふ。正月の御會は之を歌御會始と稱し、明治二年以來古例を復活して之を行ひ、五年より百官有司をして詠進せしめ、七年より一般臣民にも詠進せしむ。而して此派の詠歌は概ね景樹の冷杯を汲める者なれば、思想狹隘、聲調纖弱、到底新時代の文學たる能はざる者なり。斯くて二十八九年文運興隆期に方り、所謂新派和歌が、地下より起りて在來の風調を一新し、歌壇の中心地下に移るに至りしまで、歌界は大口鯛二、小出燦等御歌所一輩の製作に

高崎正風

よりて、代表せられ、舊思想舊形式の徒に繰返さるゝを見るのみなりき。

御歌所一派が當時歌界の代表者たると同じ意義に於て、俳界の代表者は老風堂永機と春秋庵幹雄となり。天保以來發句の俗惡、文學的作品たる品格を失ひ、遂には無學の閑人が道樂の一種として、碁、將碁と同一視せられ、點取の方法變じては賭博に近き一種の技術となり、之を教ふる宗匠なる者は、所謂點料を以て衣食する營業となりたりぬ。永機、幹雄等は即當時宗匠商賣を營める者の領袖に外ならず。

老風堂永機

永機は其角の傳統を引ける者なれども、作る所多く瀟洒の趣あらん事を勉め、其宗徒は一般無學の平民より最上流の社會に至るまで所有階級に存し、其勢力地方に於てよりも寧ろ東京に於て大なり。幹雄は白雄の後にして、作る處多くは豪放ならん事を求め、宗徒は全國の平民社會に普く、其勢力は寧ろ地方に於て大なり。以上二人の外、尙其角堂機一（永機門）、江南居松江幹雄門、雪中庵雀志、京都の花の本聽秋等各々多少の勢力あり。然れども俳諧の精神を沒了して徒に殘骸を抱くに至つては、何れ劣る所なく、斯界革新は後來二十五六年度の頃に於ける新派の運動に俟たざるへからざりき。

春秋庵幹雄

漢詩、漢文に就きては多く語るべき者なし。唯舊時代の餘流漢詩人、漢文家の存する者少からず。二十四五年頃までは強弩の末勢、尙宿儒其人に乏しからざりき。詩人には小野湖山、岡本黄石、向山黃村、大沼枕山、森春濤、鱸松塘等あり。漢文家には川田夔江、重野成齋、島田重禮、安井息軒、信夫恕軒等あり。明治五六年の交、新聞雜誌競ひ起るや、彼等の詩文往々採録せられ、春濤の如きは『新文詩』と稱する雜誌を發刊するに至り、次て成島柳北『花月新誌』を出し、服部誠一『東京新誌』を出して盛に戲詩戲文を作り且、服部の『東京繁昌記』を著し、頃、漢文の繁昌記頻りに行はれたり。然れども漢詩、漢文は到底新時代の文學たる資格なき者なれば、此等作家百年の後は畢竟永久文壇を辭し去るべき運命を荷ふ者なり。

和文は春海、千蔭の擬古文ありて以來、典雅流麗の筆に接せざる事茲に久しく、維新當時の國學者其人に乏しからざりしも、遂に一の文章家を見ざりき。明治初年の散文家として擧ぐべき者を求むれば夫新聞文學者か。『日々』の櫻痴、朝野の柳北の二人は當代記者の冠冕にして、前者は清新瑰麗を以て勝り、後者は奇拔輕妙を以て稱せらる。其他岡本武雄、藤田鳴鶴、矢野龍溪等皆十年前後の記者として盛名ありき。

而して彼等の散文は多く漢文の素養に出で、中には純然たる漢文直譯體なる者あり。此點に於ては之等も亦繼承の文學たるを免れず。されど其思想は多少新潮に浴し、後來明治の普通文の胚胎する所となりき。

繼承の文學中最注意すべきは蓋し戲作者流の作ならん。之等は其の種類、其作意、其文體、共に文化、文政以後の作者の餘流を汲める事論を俟たず。先づ全體に通ずる著しき風潮は、いふまでもなく勸善懲惡の主義にして、馬琴一度此大旗を擁してより、勸懲の一語は端なく當時の片々たる戲作を飾る美名となり、文學の本質の何たるを解せざる彼等無學の戲作者輩が、自己の作物を無用有害なりと非難せらるゝを忌み、且つ曩に寛政、天保の兩度、當局の爲政者が壞風亂俗の罪を以て戲作者を罰せし事件に鑒み、又維新後教部省の訓令に考へ、争うて勸懲の美名を偷み、自ら僭して童蒙婦女に對する教訓を寓すと稱し、以て鄙俚猥雜、讀者に媚ふるを以て専らとせる拙作を被ひ飾らんとせり。次に其結構は目先の變化を以て第一條件となし、脚色の統一人物の性格を藐視して、支離滅裂、一卷の趣向の尋ぬべき無き者、滔々皆然り。次に又作中の人物は、概ね善惡二種の類型にして、善人は所有善徳の權

化、悪人は所有悪徳の化身たるか如く、其の英雄或は勇士、往々非凡の智謀力量を有し、多くは人間界を超絶す。而して此等種々の戯作を大體に就きて分類すれば、馬琴に出でたる読み本、春水に出でたる人情本、種彦に出でたる草双紙、一九に出でたる滑稽本、及鶴屋南北等に出でたる脚本の五種なり。其文體は各其宗とする作者の舊套を襲へり。

維新の初、戯作の發兌は舊慣により、毎年正月と盆との二期に於てせり。當時の出版物には維新以前より發行し來れる長編の續き物も少からず、兵馬倥傯の間、微々たるながらも戯作の出版を絶たざりき。先づ讀本、草冊子の類にては、種彦の『白縫物語』、八犬傳、犬廻草子、萬亭應賀の『釋迦八相倭文庫』、二世春水の『北雪美談時代加賀實』、雜談雨夜之質庫、種彦の『室町源氏胡蝶卷』、春水の『新編九尾傳』、應賀の『蟲類大議論』、『諸藝畑水練』、近世阿幾禮幕、岳亭知足軒合作、俊傑神稻水滸傳等あり。其他同時の作者には鶴亭秀賀、柳水亭種清、山々亭有人、條野傳平、笠々亭仙果、梅亭金鷲、假名垣魯文等あり。次に脚本にては三世如臯、三世如樂、没して他の座附作者皆言ふに足らず、二世河竹新七、即吉村默阿彌、獨り芝居作者の壇場を占めたり。然れども之等の

作は畢竟前代の遺物にして所謂様に依りて胡蘆を畫く者のみ、新時代に觸接する何等の交渉を有するに非ず。唯夫れ魯文と默阿彌とは繼承作者の身を以て當代の人氣を集めたりし者なれば、彼等二人を擧て繼承時代戯作者の代表者たらしめ少しく之に就て當時の作風を窺はん。

假名垣魯文

假名垣魯文は江戸の人、少にして花笠魯介(文京)の門に入り、『政談青砥碑』を處女作として數多の戯作あり、萬延元年、滑稽富士詣を出すに及びて文名世に布き、明治に入るに及び、『西洋膝栗毛』、『安愚樂鍋』、『胡瓜圖解』等を續出して盛名を馳せたり。

『西洋膝栗毛』は其名の示す如く、一九の名作に倣ひて西洋旅行の滑稽を描きし者にして、全部十五編、明治三年より五年に亘りて出版せられ、『胡瓜圖解』は福澤翁の『窮理圖解』を翻案して、所謂天地の道理を茶にしたる滑稽物なり、四年春出づ。

『安愚樂鍋』は半開化の俗衆が牛屋に鍋を圍んで喋々論議する趣向にて、所謂當世の穿ちなり、同年暮出づ。此三者は魯文をして明治初年の戯作界に嶄然頭角を抜かしめし滑稽本にして、他の作者等が文章も趣向も材料も共に舊套を脱する能はざるに際し、在來の手法を以て新時代の材料を理し、以て時勢を諷する筆致の輕妙な

るは、暗黒なる文學界に於て聊か珍とするに足る。勿論應賀輩『新文鬼談』『日本女教師』『異作異物各覽會』等材を維新後に取りし短篇をものせりと雖、固より魯文に比すへきに非ず。彼の作には尙『百貨物産西洋器會』『大洋新話』『世界都路』等あり。しかも彼の作中最世に持て嚙されて明治の一九三馬と過稱せらるゝに至りし者は、言ふまでもなく『西洋膝栗毛』なり。

此作の脚色は、東京神田の蕩兒彌次郎兵衛、北八の二人が、英國龍動に渡航せんとする横濱の豪商大腹屋に伴はれて飛脚船に乗り込み、以來海上港泊に於て所有失敗滑稽を盡しつゝ、英國へ渡る趣を綴り、所謂此節の西洋ばやりへつけこんで目先の變つた趣向を凝し、者にして、當時魯文世潮につれて所謂福澤本を読み、西洋旅行の大體を知りし上、岡文紀の翻譯書などを見、尙友人富田砂燕が巴里博覽會見物の實話を聞き、之等を種として編み出せるなり。げに彼が小説家としての技倆は暫く之を措くも、其機智の縦横なる、着筆の奇警なる、時勢粧の作者として巧妙を極めたりといふべし。吾人は之を読んで新舊思潮の至る所に衝突するを見、而も其衝突や皮相に止まり淺薄を極めたる時世の適切に描かれたるを感じぬ。所謂新

西洋膝栗毛

潮流は方今開化一時に進み、余輩僥倖に學ばざる子曰の迂遠を去り、經驗窮理の洋風に傾き、市街の兒童等に至るまで芥子坊主の支那頭を殘截の歐羅巴流に一變し、孔氏の遺書はベケにして英、字、佛の横文エビシ、四百餘州は何のその、萬國世界五大洲、天地の理を知る開端に至るは、めでたき御代に新玉の春を待ち得たる心地になん。而して廢藩舊知事の公達子も無僕獨歩に世間を見知り、歸農の扶持は飛鳥川、水に流して商法開業、父母在せども遠く遊び、艦砲一發三千里、且に道を聴くとも夕に死するを可なりとせず。牛肉を食しビールを飲み、體を壯健にして壽を保ち、利を得て國を富ますを以て今日の報恩とす。膝栗毛十一編序なる皮相文明の潮流なり。此新潮に浴せし半可の西洋通が、丁髷の舊弊頑固を嘲り、因循姑息を罵り、一切の舊慣舊俗を笑倒せし情狀、又は俄かに絢爛たる洋風の事物に逢着せる一般俗衆が、驚愕し誤解し歎服し眩倒せし事態、はた淺薄なる滑稽鄙俚なる諧謔に心を遣りし有様、髣髴として思ひ浮べらる。其他彌次、北八が頻りに生咬りの漢語を使ひ、神道を辨じ、窮理を云々するは、皆是時代の反映にして、特に極力英國の富強を説き、旅先を英京に置き、通事の言語を英語に取りしなど、當時英國心醉の事情を表して餘

あり。此作に於て人物の性格一篇の理想などを探らんは愚の極なれども、諷刺の意は明かに認めらる。蓋し魯文自ら文明開化の當世人を以て任じ、所謂舊弊を嘲笑して開明の福音を童幼に傳へんとせる者の如し。然れども其根本性質を擧げ來れば、依然たる舊型にして、作者の弄する滑稽や無識に出で、痴態に出で、酒色に出で、其趣淺薄にして變化なく、其旨陋卑にして理想なく、而も之を叙するに地口語呂等、所有言語上の遊戯を盡せる對話を以てす。正に是れ一九三馬の殘肴冷杯にして、江戸作者の末輩の得意とする手法に非ずや。げに此作は魯文が戯作の代表たるのみならず、明治初年の繼承文學に於ける好箇の代表なりき。

黙阿彌は五代目鶴屋南北の門人にして、通稱を吉村新七といひ、俳名を其水といふ。芝居作者となりて河竹新七二世となり、後改めて古河黙阿彌と稱す。好んで世話物をもものし、俳優市川小團治と結びて舊幕時代下層社會の世態人情を活現し、夙に才名を江湖に馳せたり。而して當時彼か作りし世話物は、概盜俠を主題とせるを以て世に白浪作者の目ありき。彼が一代の傑作として賞賛の聲噴々たる『村井長庵巧破傘』の如き、即當時の作風を代表する者といふべし。此の狂言は又『勸善

古河黙阿彌

懲惡視機關』と稱し、八幕十一場より成り、文久二年小團治等が守田座に興行せしを始として、年、明治に入りても尙盛に行はれたり。麴町の町醫村井長庵が其妹婿、百姓重兵衛を殺害して其娘を吉原に賣りし身の代金を奪ひ、而も其罪を浪人藤掛に嫁して之を死せしめしを始め、或は人をして妹を暗殺せしめ、或は人を欺きて財を奪ふ等、惡行至らざる所なく、而も巧に世の耳目を晦まし、が天網疎にして漏さず惡事露顯して判庭に伏罪し、遂に惡は亡び善は榮は、目出たく收まるを以て一篇の筋となす。結構布置例によりて巧妙、舞臺面の變化多き、勸懲旨意の明瞭なる等、舊劇の長所概之に具はる。然れども凡近なる勸懲の外、何物をも吾人に教ふるなき事件の發展常に偶然的關係に出づる、人殺其他に於て慘酷無道の所行を舞臺上に敢てする等、舊劇の短所亦概之を備ふ。斯くの如きは獨り此篇に止るに非ず、白波作者時代の彼が世話物皆此型に出づ。而して彼の勸懲主義は維新以來益甚しく、惡漢の主人公たる事漸く減じ、よし盜賊を以て主人公となすとも、必改心の一條を加へ、以て諷刺の意を寓し、且其の各部分に於ける寫實的分子漸く加はり、超自然の事實成るべく避けられ、同時に江戸時代を寫せる世話物以外、新たに明治の世話物

を創作せり。例へば十三年の作なる『霜夜鐘十字辻籠』、木間星箱根鹿笛、十四年の『島衛月白浪』、十五年の『偽甲當世替』、十七年の『滿二十年息子鑑』、十八年の『水天宮利生深川』、十九年の『西洋噺日本寫繪』、『戀暗鞠伺療』等の如き、皆維新以後の人物事件を材料とせる者にして、以て其頃に於ける默阿彌の作風を窺ふに足る。

明治十八年前後までの默阿彌作の狂言は總數數十種に上るべく、二十年間東京梨園に於ける作者の隨一として最勢力あり。得意の世話物の外、時代物にも筆を染め、其熟練なる舞臺上の智識と、豊富なる結構布置の才と、老巧なる人情描寫の筆力を以て永く斯壇の光明たりき。蓋し默阿彌固と、謹嚴篤實の人、人情を重んじ義理を尚び、舊道德が鼓吹する諸の美德を具へたり。故に其作物は構想穩健、描寫自然にして、固より奇抜なる者、深刻なる者、俊爽なる者なき代りに、平人の人情平生の生活粗、發揮せられたり。彼が想髓となれる善惡流行因果應報の理法は、彼自身の閱歷と觀察とより自ら悟入せる者にして、決して傳說的繼承の思想に非ず。故に此理法は彼に取りては理想或は信念たるに非ずして、むしろ現實の事實なり。故理想的分子と見るべきに非ずして寫實的分子と見るべきなり。默阿彌は從來の

脚本の概、荒唐無稽、理想的に非ず、寫實的に非ざる一種奇態の時代世話混合物なりし弊を一洗して、人情世態の真相を描寫せる新しき世話物を創始せし人、はた舊劇を刷新して掉尾の活動をなし、以て將に起らんとする新劇に移る一大段落の上に立てる斯壇の殿將として、長く傳へらるべきなり。

當時の劇場作者は尙、新水即守田勘彌、彦作、大阪の能進等二三知名の者なきに非ざりしも、固より以て默阿彌に比ぶべきに非ず。然れども舊派の殿將は畢竟舊派の殿將に過ぎず。其作は以て舊知識の觀衆を教ふるに足るべきも、以て新時代の新人物の満足を買ふに足らず。舞臺効果に關する智識洵に企及すべからざる所あるも、人情を描いて未だ性情劇の片影を庶幾すべからざるなり。彼の世話物は、二十五年春陽堂の發行にかゝる『狂言百種』に收めらる。不幸興業上の故障により中途續刊を廢し、八卷十一種を出すに止れり。

其他舊文學の中には尙講談の一種あり。其末路を代表する名人は、三遊亭圓朝にして『恠談牡丹燈籠』等最世に持て囃されたり。釘俚補綴、些の創意なしと雖、亦通俗文學として繼承時代の文學たるに足るへし。

繼承時代の小説脚本の粹は魯文、默阿彌の二人に盡く。然れども社會の進運は一日も止らず。文學の暗黒時代はしかく長へなるへからず。戲作の風潮も十年前後に及びては漸く變調を來さんとす。當時魯文の滑稽物に對し、實録物を作りて一方に勢力ありし松村春輔の作の如きは、材を維新革命及其際に於ける勤王佐幕の名士に取りしのみにて、守田座新富座の演劇に間々維新事件を仕組めると同じく、畢竟片々たる際物に過ぎずと雖、其作中の人物は、大に前代實録物乃至一般時代物の人物と其性質を異にし、英雄豪傑といふとも、超凡の智勇辯力を備へたる半神的性格の者ならずして、普通人間らしき偉人勇士として現はれ、漸々寫實的傾向を取るに至れり。八九年頃に出てし『復古夢物語』『近世櫻田紀聞』及『春雨文庫』等は、或は大老暗殺事件或は彰義隊、會津戦争等を材料とし、總て新時代の歴史小説の先驅たるべき者なり。同時に諷刺滑稽の側に於ても魯文に一步を進め、稍々深き意義を有するに至りき。服部誠一の『東京新繁昌記』(七年乃至九年發行)及之に類する幾多の繁昌記、同人の『東京新誌』(九年創刊)成島柳北の『花月新誌』(十年創刊)野村文夫の『團々珍聞』(同等)の如きは即此例にして、之等に現はれたる戲文は勿論小

説に非されども、單なる滑稽諷刺の文學として之を魯文の作に比ぶる時は、魯文は開化と舊弊との不調和を描き、以て舊弊を嗤笑せる趣ありしが、之等に至りては頑固因循を諷刺するか如きは敢て奇ならずなり行き、却て開化を以て自任せる社會の一部に幾多の滑稽痴態を發見し、之を訝き來りて皮相文明に眩惑せる社會を諷したりき。魯文の諷刺に比し幾分の深刻を加へたりといふべし。

此時に方りて、新聞紙の勃興するあり、記者の需要著しく増加せしかば、文筆の士争うて之に赴き、勢極まる所戲作者の吸收となり、爾來諸新聞戲作を載する者多かりき。之を續き物といふ。蓋し草双紙合巻物等に對する稱呼なり。明治六年魯文先づ『横濱毎日』に入り、八年高島藍泉(三世種彦)九年染崎延房(二世春水)相次て『平假名繪入』に赴き、十年梅亭金鷲『團々』に入り、又條野傳平は五年『日々』を起し、魯文は八年『毎日』を去りて『假名讀』を發刊し、各戲筆を紙上に揮ひしが、就中延房の續き物魯文の滑稽物、最婦幼の人氣を集めたり。之より草双紙合巻物の發兌漸く衰滅し十二三年頃に至るまで、各新聞の續き物は繼承戲作の殿として立ち、各種の繪入新聞起りて皆之を載せたり。作者には上述數人の外、古川魁菴、伊東專藏、須藤南翠、渡

邊義方等あり概、人情本の系統を引ける物語風の小説をものしき。

維新草創の際、文藝の暗黒時代に於ける文學は大略上述の如し。一代の民衆が新舊二潮の間に翻弄せられて、洋服に下駄、丁嚮に洋傘、ズボンマントルに帶刀の奇態を演じつゝありし際なれば、其文學趣味の低劣俗悪なる事言を俟たず。作物の出づる事必しも少しとなさゝれども、斯かる趣味によりて養はれたる文學の斯壇に於ける地位や憐むに堪へたり。魯文の滑稽物を謳歌せる讀書界の淺薄輕浮にして鄙俚猥雜、絶えて餘裕なく趣味なき事察するに餘あり。かゝる作物によりて代表せられたる當時の文學の陳腐俗悪なる事亦思ふべし。

時は移りぬ。明治十年西南の亂あり。新政以來明治政府を喜ばず、一新の制度を便させず、反對黨不平派相結びて反亂を起す者所在相次きしが、遂に凝りて西南の大謀反となりき。此は總ての内亂の中最大最終の者にして、政治上の舊思想は是に於てか永久に掃蕩せられたり。西南役の文明史上に於ける意義は、此戦争か政治上の新舊思想最後の衝突にして、之を契點として新思想の全く舊思想を壓倒し去りしに在り。爾來此潮流は延いて思想界及文藝界に入り、舊時代の文學思

想漸く謝して、明治の新文學思想漸く之に代らんとす。而して此文學思想革新に與りて最力ありし者は、即十年以後に於ける泰西文學の翻譯、及び之に伴ふ西洋文學思想の傳來なりき。

第二章 新文學の先驅

第一節 翻譯文學

明治十二年頃に其萌芽を發せし翻譯文學の勃興は、當時の政治思想と離るべからざる關係を有する者にして、之等文學の主たる者は、民權説の流布と共に接踵輩出したる民間政論家が、自由を唱へ代議政を説くに際し、此思想の由て來る泰西政治界の状態、及彼地政論家在野志士の生活を叙せる小説傳記等を讀んで多大の興味を感じ、直ちに其文才を驅りて之を翻譯したる歴史的政治的小説なりき。されば此時代の翻譯文學を説くに方りては、先づ此民權思想の興起を述べ、併せて其結果として生せる革命小説を記さるへからず。

西南の叛亂平らき、政治界の舊思想屏息するや、時勢の進運は駭々として前往し、

民間の政治思想は一躍して從來新思想の中心たりし廟堂有司を超え、極端なる民権自由説となりて現はれ出でしかば、政治界の新舊思想の衝突は茲に一進化をなしたりき。抑も此思想の勃興は、本邦思想界空前の新現象にして、其の由て來る所は泰西政治思想、就中佛國十八世紀の思想家ルソー、ボルテール、モンテスキュー等の政治思想に在り。特にルソーの『民約論』は新思想を抱ける政治家及政論家に取りて天資の福音の如く聞きなされ、遂に其首唱者の一入たる中江兆民居士の手に譯出せられて天下に布き、一世の風潮翕然として之に赴きぬ。是に於てか曩きに英國の功利思想を迎へて社會の實利實益に心身を傾倒したる國民は、茲に又新に佛國の自由思想を迎へて政體革新の根本的大問題に驀進しぬ。彼等の説く所全く民約論の主旨に出で、本邦立國の大本、民性の特質を究めず、國家の歴史當時の狀勢を悉くす事なく、ひたすら彼國に行はれし所を以て之を我邦に施さんとする。其の單純淺薄なる、寧ろ彼國政體の美に眩惑せる好奇の性情の發露といふべき者にして、正に明治初年に於ける物質的文明の盲目的吸收に對比すべき無謀の盲動なりき。然れども在野志士の思想か靡然として之に赴き、在朝の有志冠を桂けて

尙其主張を貫徹せんご勉めたりし所以の者は、徳川幕府が殆ど人權を無視せる極端なる貴族政治の下に三百年の抑壓を忍び來りし反動として、國民の枉屈一時に伸びんとせる者亦與りて大に力ありしなるべし。彼等が政府の失行を議し、言論の自由を説くや、筆に舌に縱橫辯難、危激を極めたりしかば、柳北、鋺腸等を始として律に觸れて禁獄せらるゝ者前後相繼げり。十三年に至り、此風潮全國に亘りて國會開設の請願各地に起り、大勢動かすへからざるに至りて憲法制定國會開設の大詔遂に煥發したりき。

文學は時勢の反映なり。かゝる時勢に際し、自由主義の革命小説の出でしは自然の數なり。十五六年の頃、政界の風雲頗る嶮しきに方り、『繪入自由』『繪入朝野』『自由の燈』等の新聞雜誌を舞臺として現はれたる宮崎夢柳、小室案外堂等の小説は、此氣運を代表すべき者にして、『鬼啾々』『夢戀々』『自由の凱歌』『西洋血潮の荒波』等は、佛國革命又は露國虛無黨の反亂等を材とせる西洋小説の翻譯、抄譯、若くは演義に屬し、其他新作種々あれども、多くは自由民権に關する寓意小説なりき。然り、唯此主義に基ける寓意あるに過ぎず。泰西の文學思潮に觸れて新氣運を開くに至り

ては未だし。故に其文體趣向依然として草双紙の範圍を脱せず、文學としての價値亦従うて高からざるなり。

斯かる間に明治新文學の端緒となるべき翻譯文學は、同じく時勢の反映として他の一方に現はれたり。政論沸騰してより國民多く泰西政治界の状態を想望し、民權自由の理想か普く行はるゝ泰西諸國、就中英佛に於ける政治家の生活を欽羨し、即之を描ける政治小説及歴史小説を耽讀して其渴望を醫しぬ。特に當時の政論家は概ね新聞記者にして、文筆の才あるか上に多少外國語の智識ある者なりしかば、政論奔走の傍、會々文學に慰藉を求めんとするや、本邦在來の文學乃至當時繼承作者の新作の如きは、到底彼等新教育を受けて多少高尚となりし文學的嗜好を満足する能はず。相率ゐてリットン、ヂスレリー等英國近代の歴史的政治的小説に赴き、遂に進んで之か翻譯を試むるに至れり。されば當時の翻譯文學は、文學者が文學として翻譯せし者ならず、宛然政論家の餘業たるの觀あり。然れども、一般國民をして之によりて英國文學の片影を覗ふを得しめ、以て後來文學思潮革新の因縁となり、兼ねて萬邦の文學を吸收すへき端緒を開きしか如き歴史の意義決して

少からずとなす。今之を述ふるに方り、少しく泰西文學輸入の沿革を尋ねん。

泰西思想の傳來は夙く交通開始の古に起りしも、其純文學に觸接して影響の我文學に現はれしは、萬治二年の出版なる『伊曾保物語』を以て嚆矢となす。いふまでもなく『インツプ寓話』の翻譯にして、譯者傳らずと雖、御伽草子の系統を引ける假名草子一流の作なり。然れども、此物語の影響は、淺井了意、山岡元隣等が教訓物に少しく見ゆるのみにして甚著しからず。其後繼者として入り來る西洋文學亦不幸にして存せず。『伊曾保物語』は流星の如く現はれて流星の如く隠れぬ。爾來南蠻紅毛の書、入り來る者概ね實學に關し、文學の方面甚僅少なりしか如く、平賀源内の作に見えたる二三洋語の如きも亦實學より來る。唯彼の遊谷子の『和莊兵衛』之より出でし馬琴の『夢想兵衛』の着想、及此二者の出所として特筆すべき鳩溪の『志道軒傳』巡國の條に至りては、莊子の寓言に擬し、在來の島巡りの趣向に基きし事勿論なりと雖、『ガリバー旅行記』に其の骨を得たる事も亦殆ど否むへからず。維新の當時開成所は洋學の淵藪たりしも、授くる所は未だ文學に及はず。此間強て文學を學ぶ者ありきとすれば、其は語學の材料として之を用ゐしに過ぎず。然れども明治年

代泰西文學の萌芽は、畢竟語學研究の副産物にして、渡邊温の譯にかゝる『通俗伊蘇普物語』(六年—八年)の如きは亦斯かる因縁に成りしなるべし。外國文學の翻譯が常に『インツプ』を以て始まるは、此物語の平明にして童蒙に入り易く、古今東西に通すべき寓話なるに因るべし。雖、又是れ草創の際、粗雑なる讀者の頭腦が未だ風俗習慣の差によりて、興味に厚薄の差あるべき他國の小説詩歌等を味ふに足らざりしに由らずんばあらず。斯かる間に國民の讀書力漸く進み、教養ある人士は少しく文學を樂む餘裕を得、而も讀書眼の漸く高きや、在來の小説戲作に比べて西洋文學の優秀なるを認め、耽讀之餘、之を譯出して西洋心酔の高潮に鞭ちたりき。乃ち知る、語學研究の材料としてのみ文學を讀む事既に止みて、文學其物を樂む健全なる讀者を生せし事を。明治十二年に出でたる『花柳春話』は、實に其陣頭に立ちし翻譯小説なりき。

『花柳春話』は織田純一郎がロード・リットンの『アーネスト・マルトラバース』を翻譯せし者にて、一篇漢文直譯體の文章、即當時新聞の論說に行はれし文體を以て成る。之を今日より見れば、思想の人を動かす者あるに非ず、譯文の巧妙なる者あるに非

〔花柳春話〕

ず、唯、其珍しきか故に當時多大の歡迎を以て社會に受取られ、世評一時噴々たりき。げに此小説はリットンの作物の本邦文壇に紹介せられし濫觴にして、兼て明治文壇に於ける翻譯小説の嚆矢なり。此點より見れば明かに新小説の先驅にして、一歩進めて言へば一般新文學の先驅と稱すべし。要するに『花柳春話』は文學としての價值よりも史上の位地を以て勝れる者とす。

爾來翻譯小説連りに行はれぬ。關直彦の『春鶯囀』、藤田鳴鶴の『繫思談』、牛山鶴堂の『梅香餘薫』、尾崎學堂の『經世偉勳』、服部誠一の『二十世紀』、井上勤の『海底旅行』、『月世界旅行』、狐の裁判、坪内雄藏の『慨世士傳』等は其最著名なる者にして、就中『繫思談』、『慨世士傳』等はリットンの原作『春鶯囀』はデスレリーの原作を取り、皆歴史小説を選べり。又『海底旅行』、『月世界旅行』等は所謂科學小説にして、學術上の事實を小説に寓せる者、小説としての價值は問はずして知るべし。翻譯の文體は概ね『花柳春話』に類するも、十八九年頃の作に至りて漸く和らぎそめぬ。然れども中には往々修辭に於て缺けたる者あり。文學としての形式を失へり。井上の譯書の如きは、所謂直譯に過ぎざりき。

翻譯小説の興隆は疑もなく新思潮の賚賜なりき。然れども、當時の新思潮は尙粗笨生硬にして十分に消化せられず。入る所、皮相に止まりて深く内部性命に及ぶ事能はず。故に其讀む所解する所は、概ね歴史小説、政治小説、科學小説等、多少實際的傾向を有する者の中極めて平易なる者に限られ、同種類の者と雖、思想界の深き消息に觸るゝは、未だ其趣味を感受するに至らざりき。況や人情世態の微妙なる描寫を試み、心的生活の精細なる解剖を試みたる者に於てをや。當時翻譯せられし西洋小説が、悉く比較的單純なる歴史小説等なりしは、即ち主として之に由る。加之、江戸時代傳來の傳奇的小説に慣れたる眼は、先づ其類例を歴史小説等に求め、他に先だちて一度之に就かんとするする傾向あり。會て此種小説の持つて囁さるゝを致せり。

此時代の翻譯小説は主としてリットンの原作を取りしが爾來二十年前後に亘り英譯より重譯せられたるユーゴー、ゾラ、トルストイ等あり、遂に末松青萍の『谷間の姫百合』に至る。此書はベルサクレの『ドラソルン』を譯せる者にて、二十一年の版行にかゝり、政論文學者の筆に成りし翻譯小説の花々しき殿をなせり。翻譯小説も此頃

谷間の姫百合

谷間の百合

に至りては既に寫實的、心理的の者を生じ、此作の如き、現に然りと雖、譯者の性質より見、全體の風趣より論ずれば、年代の次期に入れるに係らず、之を當期の産物とすべきなり。

翻譯文學は、小説の外、尙院本と詩歌とあり。先づ劇には、十六年坪内逍遙遊人(雄藏)の『セークスピア』を譯せる『該撒奇談』あり。詩には十五年外山、山等の『テニソンカムベル、グレイ、ロングフェロー』等を譯せる『新體詩鈔』あり。然れども是等は皆後章、更に説くべき機會あるを以て茲には唯、其名を擧ぐるに止め、顧みて翻譯文學を通觀するに、曩に小説に就て述べたりし諸件、多くは詩歌に附いても言はるべく、概して思想淺薄文章粗笨の誹りを免れず。且當時學習せし外國語は主として英語なりしを以て、翻譯は皆英米の原作若しくは英譯の諸文學なりき。

第二節 政治小説

翻譯小説は淺薄粗笨なりき。然れども在來の戲作に比すれば尙幾分の清新と深遠とあり。文壇之を味ひては、復彼の卑野なる戲作を顧みんとはせず。加ふる

に、哲學、科學漸く開けて思想界の深さと廣さと愈々其度を増し、語學研究益々進みて泰西文學の智識愈々民間に弘布せしかば、曩きに西洋小説を耽讀し翻譯したる政論文學者の輩、進んで筆を創作に着け、嘗て彼等か翻譯せし原作の作家か爲し、所の者を以て、直に之を身に行はんとせり。故に其創作は言ふまでもなく政治小説若しくは歴史的政治小説なり。要するに翻譯小説と政治小説とは、其發達の原因を同うする二様の結果なりといふべし。

明治十七年、『報知』社の政論家藤田鳴鶴作る所の『文明東漸史』は、恐らく此種の創作の嚆矢なるべし。筆を米艦來航に起して泰西文明の極東帝國に傳はりし始末を叙し、貫くに高野長英、渡邊華山の傳記を以てし、交ふるに幾多義人烈士の美談を以てしたる者にして、或は史實と見るべく、或は文明史論とも見るべきも、其性の近きによりて名くべくんは即一個の政治小説たり。文章は例の如く漢文直譯體なり。此書出て、より政治小説の創作甚多かりしが、就中柴東海散士が『佳人の奇遇』、『世路日記』、矢野龍溪が『經國美談』、末廣鏡腸が『雪中梅』、『花間鶯』、須藤南翠の『綠箋談』、『新粧の佳人』等最有名なり。『佳人の奇遇』と『經國美談』とは共に『文明東漸史』と同じく歴

史的政小説にして、而も一層史傳に遠くして小説に近く、全然政治小説の部に屬すべき者『雪中梅』、『新粧の佳人』等に至りては、純空想の政治小説なり。

『佳人の奇遇』は世界を舞臺として近代歴史上の事件を網羅し、亡國の辛酸を嘗めたる國民に滿腔の同情を表して其心事を描出せる者にて、維新の際、亡國の悲運を見たりし會津の遺臣東海散士が、東西に歴遊して到る處亡國の跡を弔ひ、遺民の志士に交り、北米合衆國の獨立と自由と隆盛とを目にして今昔の感に堪へず、乃ち無量の感慨を吐露して他年の報復を計るに至る顛末を叙するを以て大體の脚色となす。主人公は勿論東海の遊子にして配するに愛蘭の一貴女幽蘭女史を以てし、之を中心として明國、西班牙、波蘭、匈牙利、土耳其、埃及等、普く亡國の志士仁人を網羅せり。文章は亦漢文直譯體を取る。次に『經國美談』は詳しくは『齊武名士』の割書を冠し、往古希臘の各邦併び立て覇を争ひし時、齊武の名士エバミノンダスが、同ペロピダスと協力して一時國威の全盛を致せし史上の美談を取り、演義敷延して一編の小説に仕組める者なり。文章は前者に比すれば一脈古文の趣を交へ、馬琴の讀み本等の體に倣ひて流暢和易の氣あり。挿入せる歌詞の如きは七五調の和文にて

ものせよ。此二書は當時の讀書界特に青年の間に多大の讚美を以て迎へられ、中にも後者は明治年間文學上の著作中最廣く讀まれし者の一にして作中の主人公は一部青年政客の理想的人物とせられき。

『雪中梅』と『花間鶯』とは、上述二者の傳奇的なるに比すれば、遙に寫實的分子に富み、多少當時の政界を寫さんと試みたる者なれども、其文壇に於ける勢力は遙に之に劣れり。『新粧の佳人』は當時歐化熱及政治熱の最高潮を表せる者にして、荒唐突飛の弊ありと雖、時勢の一面を反映するに足る。其他政論文學者及新聞小説家の筆を政治小説に染むる者甚多かりきと雖、概ね鉄腸南翠の亞流に過ぎざるを以て、茲に其作例を擧ぐるを省き、翻つて當時の政治小説其物の價値に言及ばん。

一括して言へば、彼等作家は、政治小説其物に對する觀念に於て、根本的の誤謬を懷けり。彼等は政界の真相を窺ひ、社會の表面に現はるゝ、百般の政治活動の依て起る處の政治家の心理、政治界の秘密を捕かんとはせず。新聞の雜報にも見ゆる如き皮相の事實を羅列し、演説公會等の外、何等の寫し出でし事なく、作中の政治家は、皆行動を缺き、唯、其意見を演説して喝采を博するを以て能事となし、而も其演説

たるや、概ね作者自身の政論を發表するに止まりき。換言すれば政治の舞臺を見て其の樂屋を察せず、小説の本領を没して自己政論の發表の方便にせしなり。斯く其の着眼と目的とに於て既に根本的の誤謬あり。加ふるに技術の點に於ても、脚色は千篇一律、意匠の變化殆ど空しく、要するに貧書生が立身出世の夢物語に過ぎず。之を以て高く標置して政治小説と稱するは頗る當を失ふ。且其人物も、性格偉大、欽仰すべき者に非ずして、屑々たる小才子、世渡上手の利巧者にして、當時の批評家の所謂「政治社會の丹治郎」に外ならず。而して之を叙せる文章、修辭の技巧に至りては、其缺陷の最大なる者にして、全然文學としての形式を缺けるあり。

斯くの如きは、獨り『雪中梅』以下の作のみならず、『文明東漸史』以來此期の創作に通有する缺點なり。思ふに政治小説は明治新文學の先驅にして、當時尙草創の際に在り、且其作者概ね専門文學者に非ず、所謂政論家發憤の餘に成りし者なれば、彼等に向つて備れるを求むるは或は酷ならん。むしろ却て最善き時勢の反映を此間に見るべきなり。よし其の反映は單に皮相に止まるを憾とすべきも、尙彼等が唯一の價値と稱すべし。

文壇は斯かる状態を以て明治二十年前後に及べり。此時に方り新文學の萌芽は、漸く葉を開き蕾を孕み、文界革新の機運正に動き、政治小説は其絢爛の華彩に遇ひて忽ち其光を失ひぬ。今や進んで新文學に論じ入らんとするに方り、顧みて新舊二潮流の消長を追跡すれば、翻譯文學の發生以來、文壇に於ける新潮漸く勢力を増し、繼承の文學は日に月に衰へて復十年以前の如くならず。作家は年々物故する者あるのみにて、之を繼ぎ之に代る者絶て無く、追々作家と作物とを減じつゝあり。唯條野探菊(傳平)前田香雪、三木愛花等數人、新聞雜誌に據りて僅に戯作の末勢を維持するを見るのみ。而して前期以來漸く發展したる新聞紙は、西南戦争の刺撃によりて一大進歩をなし、益々此潮勢を助けぬ。所謂五大新聞の外、十五年には福澤諭吉『時事新報』を創刊し、其他各地發刊比年相繼ぎ、記者の輩出亦頻りに『報知』の龍溪、鳴鶴、『朝野』の鉄腸等、往年の櫻痴、柳北の後を襲ぎ、政論と小説との兩方面に向つて錚々の名を馳せ、就中龍溪の文、雅馴流暢、論議精細、最當代に喜はれたり。福澤諭吉亦居然たる記者にして、其文章平易暢達、第一章に詳述せし特色を發揮して益々老練の境に進み、常に輿衆に先だてる豫言的言論は、直ちに『時事』の聲價を江湖に布き

ぬ。福澤は獨り自己の新聞に於て成功せしのみならず、三田の先生として慶應義塾に養成せし幾多の秀才は、夙に新聞事業に従事して文名既に世に高き者少からず。鳴鶴、龍溪、鉄腸、學堂等、此時代の翻譯文學政治小説の作家は概ね之に屬し、二十年前の文壇は恰も福翁門下の掌握する所なるか如き觀あり。世に稱して三田派文士といへり。文壇の新潮は、此等記者及其新聞の鼓吹によりて益々社會に擴かりぬ。

終りに臨みて一言すべきは、當時隆々の勢ありし基督教の我文學に對する關係なり。明治の初切支丹邪宗門の禁、何時となく解け、爾來基督教は西洋心酔の思潮に乗じて天下に瀰漫し、十七八年の交、時の政府の極端なる獎勵の下に、英米の言語風俗を學びし時に至りては、期年ならずして全國到る所會堂説教場を見、青年男女到る所聖書を弄び讚美歌を唱ひ、斯教の勢力將に天下を風靡せんとするに及べり。斯かる精神界の大現象を見ん者は、直ちに其が當時の文學に及ぼせる影響に想ひ到るべし。曩きに英國思想の傳來は延きて英文學の輸入となり、進んで其小説詩歌の翻譯となり、又佛國思想の傳來は直ちに政治思想の發達を促し、延いて政治小

説の物興となりぬ。然らば泰西文明の母と呼ばれし幽遠熱烈なる基督教の思想か、本邦精神的文明の開拓者として、文藝の上に劃然たる印象を残し、ならんと想像するは強ち妄想に非ず。然るに事實はいたく之に反せり。基督教の思想は未だ文藝の内容とならず、繪畫、彫刻は勿論、詩歌小説等一として其色彩を帯ぶる者なかりき。思ふに宗教思想か文藝の内容とならんには、先づ國民思想の内容とならざるへからず。國民思想の内容とならんには、先づ宗教其物が國民的ならざるべからず。國民心理の最奥に於て一點契合默會する所なくんば、所謂信者の數如何に多くとも、國民思想の内容に入らんは思ひもよらず。況や文藝の内容たるに於てをや。之を東西の思想史文藝史に徴するに、古來新宗教に觸接するや、必先づ同化受用の微妙なる能力によりて之を國民的に渾成し、國民思想の内容に半乎たる根底を作り、爰に始めて美術に顯はれ、文學に影響を與ふ。而もかくの如きは決して短日月の間に成就すべきに非ず、國民不斷の努力と、時所幾多の鍛鍊とによりて、始めて成るべき大業なり。されば新來の基督教の如きも、亦此約束に従ひ、傳來日尙淺き斯教は、未だ國民同化の妙用を受けず、未だ國民思想の内容とならず。且當

時斯教の盛況は、國民信仰の深き根底より生せしに非ず、西洋文明に心酔せる國民が、所謂文明の宗教に歸趨せる一時の盲動に過ぎざれば、同化受用の如き眞面目なる問題には未だ到達せざりしなり。其の文藝思想の内容たるか如きは、尙ほ遠き未來に屬す。一時皮相の盛運を見て直ちに其の影響の文學に顯はるべしと想ふは蓋し早計なるべし。

第二期

六〇

第三章 新文學思想

第一節 固有思想の反動

維新以降、日に月に昂上し來れる歐化熱は、十八年に建設せられし新政府の極端なる模倣主義を執るに及んで其の絶頂に達せり。國民は其文明をして歐米諸國と對等ならしめんとの燥急輕忽なる空望の爲に動かされ、固有文明の特質、新來文明の適否を究めず、徒に皮相の文明に眩惑して之を移植せんと努めぬ。二十年の頃は此風潮の最高度に達せる時なりき。物窮まれば則反ることか。反動の氣運は茲に喚起せられ、長く屈辱を忍びたりし固有思想、俄然として頭を擡げぬ。而して此運動の陣頭に立ちし者を政教社の人々が唱道せる國粹保存主義となす。

歐化思想に對する保守思想の反抗は、從來屢種々の形を以て起りき。維新當初、神道一派は一時反動の氣勢を示し、六七年の頃、排洋興神の思想一部の人心を風靡

して歐化熱に反對したりき。弘道會なる者次て起り、儒教主義を提げて當時の實利主義に反抗し、固有道德を稱へて浮薄なる時潮を制遏せんと試みたりき。次に民選議院設立の運動上下を搖かすに方り、獨乙流の國家主義を執る一部學者は、起て佛國流民主説に反對したりき。而も歐化主義の勢力は之を推倒して進みぬ。斯くの如く、保守主義の反抗數回に及ぶと雖、さながら螻蛄の龍車に向ふ如く、悉く破摧せられ畢んぬ。然りと雖、今や歐化熱の昂上極端に進むに及んで、國民漸く自己の盲動を悟り、二十年來の經驗によりて、西洋心酔の弊一にして足らざるを覺りぬ。所謂西洋の文明、乃至文明の宗教と稱する者、其根柢の極めて輕浮にして、其内容の極めて落莫なるを知りぬ、是に於てか國民の思潮は翕然として國粹保存主義の下に集り、政教社の人々が其機關雜誌『日本人』に出したる縱横の論議は天下の視聽を動かしぬ。

政教社は此の國民思潮の疑りなせる一個の團體にして、三宅雪嶺、井上圓了、志賀劍川、棚橋一郎等、之が主唱となり、二十一年、雜誌『日本人』を刊して大に國粹主義を鼓吹し、泰西文明の缺點を指摘して國民警醒の聲を擧げたり。所謂國粹保存主義と

は、從來歐化主義か泰西文明を崇拜するの極、我國粹を蔑視し、我短を去るに合せて我長をも没却せしに反抗し、飽くまでも國粹を保存し、補ふに彼か長を以てすべしといふに在り。論旨多少抽象的に過ぎ、國粹其物の具象的説明に缺くる所少からず。爲に往々頑冥なる保守論者と誤解せられたりと雖、一代の氣運を捲起して國民自覺の道程に多大の貢獻を爲し、功績は、百世没すべからざる者あり。勿論此成功は時勢の然らしむる處にして、固より政教社のみ事業に非ずと雖、輿論の向ふ所を指導して其言はんとする所を道破せる急先鋒の榮譽は、確かに是等の人々に存すべきなり。

此運動の賜は國民の貴重なる自覺なりき。自覺は對比より來る。他ありて始めて自あり、他を知悉して始めて自の特色を知覺す。而も對比の能力は智識經驗の進歩に待つ者多し。今や我國民は二十年の經驗を積み、智識を蓄へ、其結果、從來盲目的に吸収したりし歐米文明の缺陷を看破すると同時に、固有文明の彼れに遜らざる者甚多きを知悉し、自他を比較して今更に昨の非を悟りぬ。即從來世界的智識の缺乏の爲、國民の意識に上らざりし者、該智識普及の結果、對比の能力を生じて茲

に意識に上り、豁然として自覺の域に入らんとするなり。且歐米心酔の餘、初めは皮相的觀察に止まりし邦人も、多少其の真相を覗ふに及び、彼等の爲す所常に其國粹を尊重し、特に文學美術等は勉めて固有の美を保全發揮せんとするを知り、加ふるに本邦在留の外人等口を揃へて本邦の文學美術を賞讃するを聞くに至りしかば、國民は自己の有する財寶の極めて富贍なるに驚き、國粹に對する自覺は油然而して其の衷心より起りぬ。尊いかな此自覺や。是在りて本邦文明は始めて獨立の文明たるを得るなり。二十年來の文明は模倣の文明、隸屬の文明、はた根據なき文明なりしが、茲に至りて始めて確固獨立の基礎を取るに至れり。本邦文物の發展は、此時始めて真正の進程に上りぬ。

斯の自覺は、實に我文明史、思想史、及文藝史の上に於ける極めて重要な契點にして、一度新來の大勢力の爲に奈落の底に推し落されし文物の總てが、奕々たる新光明を以て復活したる時を表はせり。曩きに吾人は維新當初の破壊的風潮を叙して、世は一時荒寥たる暗黒界となりしを説き、次ては此缺陷を補はんか爲、恰も餓えたる者の食を選ふに暇なきか如く、競うて泰西文物を吸収して其の適否を顧み

さりし事を述べたり。今や是等西洋文物が漸く其缺陷を露はせるに乘じ、嘗て打捨てられし舊文物、土を捲いて重て來れり。歴史は常に繰り返す。而も繰返しつゝ進歩すと稱す。復活は常に原形の儘に非ず、重ねて來りし者大に其舊態を改めずんは非ず。二十年間新文物の下に雌伏したりし舊文物の復活は、文明の獨立の上、はた其進歩の上に於て、其意義極めて重き一大現象なり。

文明の獨立は其端緒を開けり。歐風米俗のわざごらしき者去りて固有風俗の醇美なる者之に代り、一時亢龍の勢ありし耶蘇教は俄然として其力を失ひ、從來醜陋の惰眠を貪りし佛教徒も茲に覺醒して破邪顯正の運動を始め、一方に於ては、嘗て反古紙屑と共に扱はれたりし和漢の古書、茲に再び花咲く春に會ひ、斷綴零冊、世にもてはやされ、故紙廢墨、復價を生ずるに至り、又彼の『日本人』二派の極力唱導したりし古美術保護の議は、遂に天下の輿論となり、嘗て無用の長物として破壊せられたる神社佛閣、及海外に賣り飛ばされたる佛像佛畫も、今は古美術保存の名の下に寶物取調委員の鑑識證明によりて永代國家の保護を受くべき國寶となるに至れり。轉じて國民教育の方面に見れば、森文部大臣が大膽なる洋風教育、特に國語を

復古精神の勃興
即ち、
佛敎の復興
古美術の保護
紙屑の活用
一、
一、
一、

廢して英語を採用せんこせし如き極端なる外國語教育は、二十三年十月の勅語、續いては井上文部大臣の國家主義の教育、並に國語教育によりて其風潮を一變し、更に藝術界に見れば、米人フエノロサが口を極めて歎賞したる邦畫の眞價は端なく國民の宿醉を覺醒し、邦畫本來の面目を發揮せんとして奮起せし國粹派の運動は、從來の畫壇を領せし文人畫西洋畫を斥け、工部大學の美術學校も其方針を變じて邦畫の保護獎勵に力め、爾來美術協會の設立となり、東京美術學校の開設となり、狩野芳崖の崛起となりて邦畫の特技は新に宣揚せられたり。

復古的精神は所有文物に普及して、遂に本論の主眼たる文學界に及べり。斯る潮流の文界に入りて先づ與ふべき直接影響は、言ふまでもなく國文學の復興なり。曩に神道派の國學が一時歐化主義に反抗せし事ありしが、國粹思想の崛起するに及び、先の國學は純文學に姿を變へて復活し、從來西洋文學の爲に壓倒せられて其聲息を潜めたりし我古文學再び世に出で、皇典講究所、東京大學の和文學科及古典講習科等は皆古文學攻究の好機關となり、和文學の智識は駭々として國民の間に擴かり進みぬ。勿論是等設備の主眼とする所は、恐らく國史國典の研鑽に在りて

純文學に在らざるべしと雖、古國史古國典の研究は畢竟古文學の研鑽に頼らざるへからず、古文學を外にして國史國典攻究の資料を求むべからざるなり。斯かる間に、大學古典科及和文學科は落合直文、小中村義象等の卒業生を出し、是等少壯國文學者は從來の國學者流と異なり、明治の新空氣に養はれて多少の新智識を藏し、着眼識見おのづから皇學一派の固陋を擺脫し、加ふるに年少の銳氣を以てしたりしかば、歐化主義の横行の下に國文學の憐れむべき沈衰を見て黙止するに堪へず、新聞に雜誌に演説に講義に、國文學を鼓吹して彼の國粹保存論と呼應したりき。斯くて國文教育の必要は天下の輿論となり、皇典講究所に國學院設立せられ、大學に國文學科を置かれ、尙國語傳習所も開かれ、爾來中等以上の學校にして國語國文の科を課せざる者なきに至れり。一方に於ては東洋學會、明治會の如き國粹主義の會合より『東洋學會雜誌』二十一年發刊、『明治會叢誌』二十二年發刊の如き雜誌を出し、『日本人』等と相呼應して國文復興を呼號せり。この時に方り、是等の運動に就き、常に其主動となりし落合、小中村の二人、古文學の翻刻出版を成して古書缺乏の困難を救はんと企て、『日本文學全書』を編纂して二十三年第一編を刊行せり。遠く

皇學研究所
忠誠
東大文庫
皇學研究所
忠誠
東大文庫
皇學研究所
忠誠
東大文庫
皇學研究所
忠誠
東大文庫

は竹取、伊勢の古物語より、近くは太平記、増鏡に至るまで、古文學の重なる者を網羅し、解題頭註を加へて逐次刊行する事二十四編に及べり。此舉や實に天下の渴望に應じたる者にして、從來刊本甚稀少、坊間求めて得る事能はざりし貴重なる古文學が、今や至廉の小冊子となりて、炮豆の寒生にも容易に得らるゝに至りしかば、既に和歌和文の趣味を解し初めたる青年輩争うて之に就き、古文復興の風潮は全國に行き亘りぬ。『文學全書』の成功は更に古歌集の出版を促し、少壯歌人佐々木信綱『日本歌學全書』を編し、萬葉集、八代集及中古の家集を纂め、總て分本十二冊として二十三年末より刊行し始むるを見るに至れり。是に於てか和歌和文の二全書完成し、相俟つて國文學興隆に至大の貢獻をなせり。されば之を企劃せる少壯國文學者の功績は、二全書と共に永く傳ふべきなり。而して彼等の巨頭として常に此運動の前面に立ちし者は實に落合直文なりき。

彼は仙臺の人、十五年大學古典科に入り、三年にして之を出で、爾來一身を國文教育に投じ、歌文復興に關する事業一として與らざるなかりき。彼は時人が自國文學の優秀卓越なるを知らざるを罵りて、之か妙味を發揮するに全力を注ぎ、新聞雜

落合直文

誌の文章が拙悪格に入らず、支離滅裂讀むに堪へざるを指摘して、天曆以前の古文法を唱道し、御歌所一輩の和歌の、孱弱卑俗取るに足らざるを説破して、優雅清新の趣味を鼓吹し、從來の普通文が乾燥なる漢文直譯體に流れ、國學者の文章が無氣力沒趣味なる擬古體に陥るに反抗して、優麗暢達の中、精彩おのづから奕々たる一種清新の體を創め、はた「孝女白菊の歌」を始め數多の長詩を作りて、「新體詩抄」以來の無難なる詞章を矯正する等、國歌國文の所有方面に創始的事業を遂行しぬ。彼が第一高等中學、皇典講究所、國學院、及國語傳習所に於てなし、國文教育、「東洋學會雜誌」「明治會叢誌」「柵草紙」「日本」「歌學」「國文」等に掲げし論議創作は、即此事業を成さんか爲に披瀝せし努力の熱血なりき。是に於て世人漸く國文學の尊むべきを悟り、國文典の重んずべきを知り、當時既に名を文壇に馳せたりし文學者すら、顧みて自家の文章の破格滅裂なるに驚き、彼に就いて文法上の修練をなせし者少からざりきと稱す。況んや、青年好文の徒に至ては、風を望んで起つ者頗る多く、門下多士濟々、後來文壇に名をなし、者少からず。斯くの如くにして國文學興隆の運動は、其功を收め、國文教育創業家としての彼の地位復動かすべからざるに至りぬ。彼

は歌人なり、文章家なり、批評家なり、講演家なり、學者なり。然れども國文教育家たる一點に於ては總てを合したるよりも大なりき。

古文學復興の主動者の少壯國文學者なりしは、上述の如し。然れども此氣運を助長するに與て力ありし他の因縁亦一にして足らず。或は井上文部大臣の國語教育主義の如き、或は新聞「日本」の鼓吹、獎說の如き、或は其の主筆陸羯南の保護の如き、或は司法大臣山田顯義の國學振興に盡せるか如き、説き來れば底止する所を知らずと雖、事煩に亘るを以て、茲に之を省かん。

以上縷述せし所は、即ち國民の自覺及之に伴ふ所有固有文物復活の概況なり。顧みて當代の風潮を概見すれば、反動の意、到る所に現はれ、復古の氣、所有方面に充てり。而も反動は常に退歩に非ず。復古は多く新彩を帶ぶ。正あり、反あり、茲に折衷的發達を遂ぐるは歴史の面目なり。固有文物の復古豈必ずしも文字通りに古に復るの義ならんや。況や此自覺の因て起る所、亦世界的智識の傳播に存するをや。復活の美術には世界的意氣あり、復活の國文學には清新の趣味あり。我等の歴史は着々として進歩しつゝあるなり。

此時に方つて、維新以來の過激なる革新的精神は漸く中正に赴き、盲目なる急進主義と頑冥なる保守主義とは相次て勢力を失ひ、民權自由論と帝王神權論とは憲法によりて根本的に統一せられ、歐化主義の横行は國粹思想の反動に調攝せられて穩正の進路を取り、所謂新舊思想の衝突漸く其勢熾を收めんとす。是に於てか國民聊か餘裕を生じ、意を文藝界に傾くる者前日の比に非ずなりぬ。且一方に於ては學術の進歩に伴うて國民の思想愈々廣濶となり、泰西語學の普及と共に英佛文學を味ふ者益々多く、甲因乙縁相扶けて文學趣味の瀰漫を促したりければ、明治文學革新の思潮茲に動き新文學の勃興爰に萌せり。

第二節 文學思想の革新

文學に對する觀念の變遷は、作品の性質に根本的の變革を與ふ。所謂新舊文學の相異は主として此の觀念の相異に基く。過去の文學界を支配したる文學思想、主義、原理は如何。現今の文學界に於て正に起りつゝある、文學思想、主義、原理は如何。之を稽查せざれば新舊文學の性質の相異を精密に知る事難し。思ふに過去

の文學界に於ては、或は達意の具、自己發表の器となし、或は道德の隸屬として世道人心に益あらん事を主となす等、總て文學を以て實用物と見做し、何等か實用の素を備ふるに非ざれば文學の價値を生せずといふ思想最勢力ありしが、一般思想界に新潮入り來り、平民的思想の傳播益々廣く、個人の發展益々著しく、自由意志の思想暗々裡に根柢を張るに方つては、文學獨立の思想斯界に磅礴し、文學は其自身の價値を有し、其自身の形式を有し、決して實用の隸屬、道德の方便に非ずといふ思想は、漸く社會に勢力を得るに至れり。

斯くの如きは極めて大體の觀察なり。更に少しく之を細說せん、先づ詩歌に對する從來の見解、主義等は、古今集以來、支那詩人か詩に對する主義見解等を繼承し、彼の詩經の序に「詩は志の之く所なり。心に在るを志となし、言に發するを詩となす。情、中に動きて言に形はるゝ時は、之を言ふも足らず。故に之を嗟嘆す。之を嗟嘆するも足らず。故に之を永め歌ふ。」と言へる數句を以て金科玉條となし、所謂大和歌、唐歌の名に形はるゝ如く、和歌を以て我國の詩となし、詩を以て彼國の歌と思ひなせり。故に在來歌人の和歌を見るや、常に自己の主觀を諷詠するを以

て能事畢れりとなし、而も漫然、目に見えぬ鬼神をも泣かしむと稱へ、未だ藝術の眞義に思ひ到る事能はざりき。且一方に於ては江戸時代儒教主義の浸潤甚しく、國民思想の中に牢乎たる根柢を置くに方つては、此主義遂に詩歌にも入り、風教に利し世道に益あるを以て詩の用となし、然らずんば彫蟲の末技無用の贅物と貶稱し、此思想延いて和歌に及ぼし、之を律するに道德の標準、實用の規矩を以てするに至れり。

次に小説戯曲に對する思想を稽ふるに、王朝の古に在りては、世態人情の鏡としての是等藝術の本義能く知られたりしも、鎌倉時代以後、佛教思想の根柢を國民の間に置くに及び、或は佛法弘通の具に供せられ、或は靈驗利生の記録とせられ、所謂「狂言綺語讚佛乘」の語は是等文學の性質を決定する斷案となされ、甚しきは王朝の物語をも是等の目的の爲に書かれたりと稱ふるに至る。降りて江戸時代に及びては、勸善懲惡の主義、小説戯曲の理想を一變し、是等の文學は道德特に儒教道德の主義を宣揚し、兼ねて之を鼓吹する用に供せられ、「事を凡近に取りて意を勸懲に發す」と言ひし李笠翁の語は、恰も和歌に對する詩經の序の如く、千古不磨の確言と信

せられ、所謂訓蒙的性質は是等文學を被ひ盡せり。斯くの如く詩歌、小説、戯曲等、總て文學以外の主義によりて動かされ、文學以外の目的の爲に使はれ、其自身目的たるべき文學の特質を没して一種の方便となり了らしめたり。

轉して文學者の社會に於ける地位、彼等か文學に對する態度、はた彼等か自ら持する所の高卑、及文學者たる人々の種類を見るに、和歌、和文、漢詩、漢文の如きは、其作家たる者比較的、社會の尊敬を受け、又彼等か其關する文學に對して比較的眞面目の態度を取り、從て自ら標置する事比較的に高く、且其教養學識比較的に深かり。特に和歌に在りては其評價最高く、或は天地を動かし、鬼神を感せしむと信じ、或は神秘にして魔力ある者となし、或は一種の解脫法と崇め、甚しきは萬邦詩歌の最上位に在る者にして、神人を感じしむるは獨り我大和歌自然の妙用と稱するに至る。小説戯曲の類にても、中古物語の榮えし頃に在りては、其評價必しも和歌に下らざりけり。然るに佛教主義及儒教主義相繼て入り、小説戯曲を以て實用の具となすに方りてや、之等文學の作家が社會に於ける地位おのづから降りて、學者僧侶に從屬する者となり、彼等か文學に對する態度亦おのづから粗かに、狂言、綺語の名に甘

じ、戯作の稱を拒まず。従て自ら重する事甚少く、戯作者と呼ばれて普通藝人と相距る事遠からず。其人物も亦、二三の特例を除きては、概ね教養足らず、學識具はらずして、唯、文筆の才を以て立つのみなるか如し。『羈旅漫錄』所載の近松巢林子の遺墨といふに曰く、甲冑の家に生れて武林に離れ、三槐九卿に咫尺し仕へて寸爵なく、市井にさまよひて商賣を知らず、隱に似て賢に似て賢ならず、世の迷ひ物、神釋儒道和歌有職弓馬郢曲歌舞滑稽まで、事知り顔に一生を言ひちらす」と。又近松半二の『獨判斷』に曰く、堂上の事を知らば有職者となるべし。弓箭の故實を知らば軍學者となるべし。聖經賢傳を記憶せば直ちに博識の儒者となるべし、菅公の事も楠公の事も丸呑に似つこらしく書いて、聞いた程の語を奥深げにつばらかし、和歌管絃より萬の道、何一つ正しく覺えたる事なく、聞取法聞耳學問、根氣をつめて學ぶ事のならぬ自墮落者が即ち作者となるなり」と。二者固より一場の戲筆にして、巢林、半二必しも此儕に非ずと雖、所謂戯作者の真相は最適切に之に露はる。大才巢林等にして此言をなすを以て見れば、爾餘の作者輩の事思ふべきのみ。文學界の舊思潮は洵に斯くの如き者なりき。過去の文界學を支配せる思想は

常に道德上の者にして文學上の者に非さりき。然るに一朝泰西の思想、特に彼國の文學思想の入來るや、文學思潮革新の運動一時に起り、詩歌を始として少説戯曲に至るまで、次を追うて舊思潮を棄てぬ。而して此運動の最早く文壇に現はれ、明確なる意識を以て改革に着手したりし者は、即明治十五年刊行の『新體詩抄』なりき。

新體詩抄

『新體詩抄』は東京大學の外山、山、矢田部尙今、井上巽軒三人の撰にかゝり、西詩翻譯又は撰者創作の詩篇を收む。新體詩とは其名の示す如く、漢詩にも非ず、和歌にもあらず、西詩の體裁を取りて之を行るに七五調の國語を以てしたる一種新體の詩にして、本邦文壇に始めて紹介せられし明治の創造なり。其名の如きも本書撰者の命する所にして、爾來或は新體歌と稱せんと主張せし一二の作家ありしも、此名は遂に一般文界に襲用せられて復動かすべからざるに至りぬ。而して所謂新體詩の特に創始せられし來由を温ぬるに、撰者、巽軒本書に序せる所に從へば、從來詩界を占有したりし漢詩と和歌とは、共に吾人の情志を發舒するに足らず。漢詩は以て支那の詩たるべし。本邦の文學として發達すべき者に非ず。和歌は本邦

文學として尊むべき者なり。然れどもこは過去の文學たるべくして、新日本の現在及將來に於て詩界を占有すべき者に非ず。是を以て吾人新文明の大潮流に棲息する國民が、依て以て情志を發舒せんには、現時の國語を以て作れる歐風の詩形を取らざるべからず。平々坦々の言語を以て成れる長大の詩形を選ばざるべからずといふに在り。新體詩はかゝる主張の下に起りし者にて、七五一聯、句をなし數句節をなし、數節章を成す事恰も西詩の如く、用語は漢語を嫌はず俗語を棄てず、所有現代普通の語を收容して、勉めて耳遠き古語を除く。打見たる所、讀み易く解し易し。洵に詩界の大變革なりき。

詩界革新の運動は起されたり。世上同感の文學者は相率ゐて新體詩に赴けり。漢詩和歌の専門家、及此新彩に驚倒せる保守者流が、所有非難嘲罵を加へしに係らず、總ての反抗を排して一方の旗幟を立てたり。斯くの如きは固より時勢の然らしむる所なりと雖、之を十五年の當時に見たりしは、實に創始者の大膽なる發奮の致す所なりといふべし。

然れども、彼等の詩歌革新に對する主張は未だ根本的の者に非ざりき。勉むる

所、外部詩形の改革に在りて、未だ詩想の内部に及ばざりき。巽軒は新體詩の特質を數へて、格法の自由なる事、規模の廣大なる事、言語の豊富なる事、語格の近様なる事、字句の勁健なる事、旨意の明晰なる事、進歩の傾向ある事、新奇の着色ある事、の八個條を擧げたりと雖、總て是、詩形上の得失に係り、詩想の根本的性質、乃至詩歌に對する觀念に就ては、何等の言ひ及ぶなし。從來主觀の諷詠に止まり、自己發表を以て要となしたる詩歌の性質は如何變化せしか、社會上道德上に裨益するを以て詩歌の價值となしたる實用主義は如何變遷せしかは、未だ知るへからず。況や藝術の本義を明にし、詩歌は彼の繪畫彫塑等と等しく、藝術家の想像に出でたる一種の美術品にして、詞花言葉を以て宇宙の美を謳歌する者たる事を説くに於てをや。詩は志を言ふに止まるこいふが如き觀念は或は是無かるべし。然れども、道德主義を以て詩歌を評價せんとする思想は、半乎として抜くへからず。換言すれば、文學の獨立は未だ成らず、文學思想の根本的革新は未だ遂げられざるなり。

『新體詩抄』は、斯界の爲に敢て卒先の功をなし、荊棘を拓き蒙茸を開きて去れり。然れども、文學に對する觀念の革新は、擧げて之を後の文學者に委ねたりき。時は

進みて十八年となりぬ。果然新運動は小説界に起りぬ。『小説神髓』の出現即是なり。

『小説神髓』は坪内逍遙の著書にして、一部二卷に分れ、上卷に於て、先づ美術とは如何なる者なりやを論じ、小説は一種の美術なりと説き及び、以て小説其物の根本性質を明にし、次に小説の起原より其變遷の概畧を述べ、次に小説の主眼を説いて専ら人情の描寫に在りとし、以て從來の勸懲主義に大打撃を加へ、更に小説の種類と其四大稗益とを述べたり。下卷は小説の法則を論じ、古來本邦の小説を剖析批判、して將來執るべき方針を指示したる者にして、先づ種々の小説文體の得失を擧げ、次に小説の脚色を論じて主人公の設置に及び、最後に叙事法を述べ。總て十章、所謂小説の神髓を説いて、今後小説家の向ふべきは模寫小説、人情小説に在るを詳論せり。是即ち著者逍遙が東西文學の比較研究より得たる一部の小説論にして、詩學又は美學の新智識の上に立ちて本邦古今の小説を觀察評隲し、併せて小説の性質を明にし、在來の戲作の範圍を脱すべきを説ける者なり。其緒言に曰く、近來刊せる小説稗史は、これもかれも馬琴、種彦の糟粕ならずば、一九、春水の賸物多かり。

蓋し此の間の戯作者流は、ひたすら李笠の語を師として、意を勸懲に發するをば小説稗史の主腦と心得、道德といふ模型を作りて、力めて脚色を其内に工夫なさまく欲りするからに、強ち古人糟粕をは嘗めんとするには非ざめれど、素と其範圍の廣からねば、覺ゆる同轍同趣向の稗史をもものする事なるべし。さはあれ其罪偏に作者の上に在るに非ず。讀者亦與りて力あるなり。何となれば古來小説をもて教育の一方便のやうに思ひて、獎誡勸懲は其主眼なりと唱へなから、尙實際の場合に於ては、ひたすら殺伐慘酷なる、若くは頗る猥褻なる物語をのみ愛で喜び、他のかた苦しき筋の事は目を住めてだに見る人稀なり。而して作者の見識なき、總じて輿論の奴隸なれば、競うて時好に媚びむとして、殘忍なる稗史陋猥なる情史を綴り、世の流行に従ふものから、勸懲の美名もさすがに打棄て難さに、強て勸懲の主旨を加へて、人情を枉げ世態を矯めて、無理なる脚色をなす事なりけり。是併しなから、作者も讀者も、稗史の主眼を悟らざるに因るのみ。因て嗚呼がましき所爲とは思へど、敢て持論を世に示して、先づ看官の惑を解き、兼ては作者の蒙を啓きて我小説の改良進歩を今より次第に企てつゝ、竟には歐土のノベルを凌駕し、繪畫音樂詩歌と共に

に、美術の壇頭に煥然たる我物語を見まくほりすと。是れ此書の出でし由來なり。著者は劈頭美術の本義を説きて、實用主義と目的主義との妄を辯じ、小説は即ち美術なれば、他の音楽繪畫彫刻建築等と等しく、所有美術の約束に従はざるべからずと述べ、次に小説の變遷を叙し、人情世態を寫せる彼のノベルを以て其發達の頂點となし、眞の小説稗史は即是れなりとなせり。而して其主眼に説き及ぶや、則ち曰く、小説の主腦は人情なり、世態風俗之に次く。此人情の奥を穿ち、心の中の内幕をは洩す所なく描き出して、周密精到なるを小説家の務とす。和漢に名ある稗官者流が、ひたすら脚色の骨髓に入らん事を力めたりしも、人情の皮相を寫して足れりとせり。憾むべき事ならずや。夫れ稗官者流は心理學者の如し。宜しく心理學の道理に基きて其人物をは作るべきなり。苟にも己の意匠を以て強て人情に悖戻せる、否心理學の理に戻れる人物などを作り出さば、其人物は既に人間世界の者には非で、作者か想像の人物なるから、其脚色は巧なりとも、其譚は奇なりとも、之を小説とは言ふへからず。中略彼の曲亭の傑作なりける八犬傳中の八士の如きは、仁義八行の化物にて、決して人間とは言ひ難かり。作者の本意も、本よりして彼

の八行を人に擬して小説をなすべき心得なるから、あくまで八士の行をは完全無缺の者となして、勸懲の意を寓せしなり。されば勸懲を主眼として八犬傳を評する時は、東西古今に其類なき好稗史なりといふべけれど、他の人情を主腦として此物語を論ひなば瑕なき玉とは稱へ難し。中略されば小説の作者たる者は専ら其意を心理に注ぎて、我作りたる人物なりとも、一度篇中に出でたる以上は之を活世界の人と見なして、其感情を寫し出すに、己の意匠を以て善惡邪正の情感をば作り設くる事をなさず。唯、傍觀して有りの儘に模寫する心得にてあるべきなり。中略本居大人の玉小櫛に、源氏物語の主旨を論じたる一節の如きは、頗る小説の主旨を解してよく物語の性質を説き明らめたる者といふべしと。人情を模寫して神に入るを理想となし、寫實以外小説を認めざる著者の主旨、細かに説き盡されたり。著者は又曰く、勸懲小説は小説の一種と稱すべけれども、其旨狭く其趣偏れり。模寫小説は人生の種々相收めて此裡に在り。されば模寫主旨の小説には求めずして諷刺諷諭の法備はり、暗に人を教化する力あり。別に勸懲主旨の小説を要せざるなり。されば斯かる小説には、第一人の氣格を高尙にし、第二人を勸奨懲誡な

し、第三正史の補遺となり、第四文學の師表となるの四大裨益おのづから伴ふ。大に模寫小説を揚げて勸懲小説を抑へたり。

斯くの如きは即ち『小説神髓』の主旨にして、所説嶄新、着眼超凡、洵に人の耳目を聳動するに足れり。勿論唱ふる所多少の誤謬なきに非ず。小説を以て總ての文學の最上位に置けるが如き、眞の小説をノベルに限りてロマンズの之と併立すべきを認めざるが如き、寫實小説を過重して理想小説を過軽せるが如き、妥當を缺くの見尠からず。よしや斯かる誤謬なしとするも、今日より見れば當然の說にして特に駭くべき新論に非ずと雖、一世を擧げて勸懲の舊思想を墨守し、空しく實用主義目的主義の奴隷となりて自ら悟らざる時に方り、藝術本位主義の大旗を翻して自然模寫を唱道し、以て從來、因果應報、惡は亡び善は榮ゆる團圓を追はんが爲に、強て人物事件の自然を枉げたりし戲作界を禁醒するに至つては、洵に破天荒の卓說にして、文學史上、一時期を劃するに足る有力なる地位を占むる者と言ふべし。

此書出て、小説の名普く世に行はれ、主人公の稱、模寫寫實の語、廣く文壇に紹介せられたり。小説に對する觀念は一轉化し、十九世紀新文學思潮は觸接せられ、藝

術主義の思想は始めて本邦文學界に入り來れり。是に於てか、曩に翻譯小説によりても又『新體詩抄』によりても未だ遂げられざりし文學思想の根本的革新漸く其緒に就き、文學の獨立は漸く成るを得たり。『小説神髓』は、嘗に小説のみならず、文學全體に向つて革新を促したる文壇有數の著書なりき。

轉じて文學者其人を見れば、所謂戲作者輩は舊文學と共に漸く社會の裏面に退き、教養あり學識ある新作家代りて文壇に現はれたり。『新體詩抄』の作者は悉く當代の學者、東京大學の教授及其卒業業者なり。『小説神髓』の著者は直に作者となりて『書生氣質』を出し、以て其所論を體現せしが、是亦同學出身の文學士たり。就中詩歌の人は古來多少教養ある社會より出でたれば、特に變化の激しきを見ざれども、小説戲曲等に至りては、社會的地位極めて低き戲作者輩の作る所なりしが、逍遙社會の上流に立つべき學者の身を以て敢て此事にたづさはり、舊慣を打破して作者の品位を高め、從て小説戲曲其物の品位をも高めたりしかば、斯界の空氣爲に一新し、陋劣なる戲作の境界を離れて高尚なる文藝の畛域に入り、更に進んで所有文學の中、最發達進歩せる者とならんとす。

斯くの如くにして文學思想の革新は『新體詩抄』に萌芽を發し、泰西文學の流入と共に漸々生長し、『小説神髓』に至りて遂に蕪辭の美觀を呈するに至れり。顧みて此氣運を醸成せし原動力たる泰西文學思潮の傳播の迹を尋ぬるに、先づ創作と批評との二方面より傳はりしを見る。一方に於て英佛の詩歌小説が夙に翻譯せられしと同時に、他方に於て同國の美學、詩學、修辭學、美術論等亦絶えず翻譯せられたり。此結果はやがて翻譯又は著書となりて現はれ、一方に於ては『新體詩抄』『學藝雜誌』の譯詩『花柳春話』以後の翻譯小説となり、他方に於ては、十六年中江兆民が譯せる『維氏美學』佛グイロン原著、其前後に出でし菊池大麓譯の『修辭及華文』、フェノロサ等の美術論となり、前者は一括して泰西文學の標本となり、後者は一括して西洋美學思想の代表者となり、ついでは『新體詩抄』撰者の議論を生じ、遂に『小説神髓』の主旨となれり。二十二年に出でし高田半峰の『美辭學』は『修辭及華文』の系統を承けて、又此風潮を聲援したりき。

此時に方りて、前節に述べたる固有思想の反動漸く實相に入り、延いて古文學の復活運動となり、詩歌美文より始めて小説戯曲に至るまで、或は語法を之に採り、或

は文章を之に學び、連りに固有文學の面影を寫しぬ。是に於てか固有思想は曩に榮わし泰西思想に影響し、古文學は翻譯文學に影響し、兩者相依り相俟つて文學界に一新面目を開けり。明治新文學の勃興は即ち此二者の渾然たる調和に起れり。

第四章 新文學の勃興 其の一

第一節 新文學の曙光

文學思想の革新に伴うて現はれたる新文學の曙光は、十五年に出でたる新體詩に其第一光錠を放ち、爾來十年の間に小説、戯曲、和歌、俳句、等所有文學に更新の彩光を齎しぬ。明治文學は此時を以て本期に入れりといふべく、其の眞面目茲に始めて發揮せられぬ。而も時に先後あり、所有文學が期を同うして勃興せしに非ず。新體詩先づ起り新小説之に次ぎ、新翻譯又之に次ぐ。新戯曲と新和歌と新俳句とは時を経て興起し、其の曙光を放ちしは皆二十五年以後に屬す。

一、新體詩

詩歌の起原や眞に遼遠なり。國民生存の曉、既に其源泉を發してより流れく

て萬葉集に至り、汪洋たる大觀國民の瞻仰する所となる。就中長歌の一體、瑰麗豊満比ぶべきなく、洵に國民雄大の情懷を賦するに適したりき。惜いかな、華彩一朝の榮を奈良朝に止めて世は短歌獨占の壇場となり、轉じて連歌となり分れて發句となり、形體の短小茲に極まる。短詩必しも棄つ可らず。短詩には短詩の利ありと雖、而も斯かる形體は決して國民情感の全體を盛るに足る者ならず。發達せる文壇が有する唯一の詩體としては餘りに憐なりといふべかりき。或は曰ふ、是諸曲淨瑠璃が一種の詩なるを知らずして之を藐視せる誤に出づと。思ふに二者の出でたる、誠に詩歌界の缺陷を補はんが爲にして、其形體亦頗る韻文の素質に富めり。然れども一度之を精査すれば、二者は之を詩歌と稱へんには餘りに散文的屑滓多かり。是を以て本邦詩歌の振はざる事茲に久しく、依樣胡蘆、古人の糟粕に甘んずる者滔々皆然り。此時に方り泰西新思想の傳來ありて詩歌の内容たるべき者益、豊富となり、種々の外來語漸く國語に調和せられて詩歌の用語たるべき言語益、富贍となりたれば、明治の新文壇は到底從來の詩歌を以て満足する事能はず。新詩歌に對する憧憬疑つて二三の新詩人を出し、新體詩の名の下に一新體を開く

に至れり。前節既に述べし『新體詩抄』即此の代表者たり。

然れども此運動は何等の先蹤なくして突然起りし者に非ず。是より先、明治二年福澤諭吉『世界國盡』を著して萬國の歴史地理を簡明に述べ、兒童諷誦に資せんとて平易流暢なる七五調を以て始終せる事あり。既に第一章に述べし如く、素と詩歌の域に遠き者なれども、興湧き情昂る時は筆自ら精彩を帯び思はず一種の詩調に入る。其英京の條下、夜は三十六萬の瓦斯の燈火耀きて五月の暗も人知らず、以下數行、又は北米合衆國の條下、心に誓ふ國の爲、失ふ命得る自由、正理屈して生きんより、國に報る死を取らん、一死決して七年の、永の月日の攻守り、知勇義の名を千載に、流す血の河骨の山、七十二戰の艱難も、消えて忘る、大勝利のあたり、今の鐵道唱歌地理唱歌に比ぶれば遙に詩趣に富む。次で六年『暗誦十詞』あり。前者と同様の主旨を以て作られたる七五調の誦詞にして、皆後の軍歌の素をなし、延いては新詩歌の先驅をなす者なり。

十四年文部省音樂取調掛は、小學校唱歌の教科用として『小學唱歌集』を發行しぬ。是は西洋樂譜に合せて新作し若しくは翻譯せし單簡なる歌曲を集めし者にて、企

圖の新しきに係はらず、歌詞の内容外形共に擬古派歌人の餘唾を嘗むるに止まり何等新機運に貢献する所あらず。然れども彼の長歌にも非ず今様にもあらぬ自由なる變體を韻文界に起し、而も典雅流麗の聲調を失はざりしが如き、後來益々發達すべき樂曲歌詞の先蹤をなし、詩界又別箇の發展をなせるは注目すべき事實なりとす。

幾くもなくして『新體詩抄』初編發行せられたり。作者は、山仙士外山正一、尙今居士矢田部良吉、巽軒居士井上哲次郎の三人にして、尙續編を出すへき計畫なりしも、實際刊行せられしは初編のみなりき。詩篇總て十九。巽軒、尙今二人の序を冠し、久米幹文の跋を附して出づ。十九首の中、創作は五首に止まり、他は總て英詩の翻譯なり。譯せられし英詩人はブルームフィールド、カムベル、テニスン、グレー、ロングフエロー、シエークスピア、キングスレー等にして、就中カムベルの『英國海軍の歌』、テニスンの『輕騎兵進撃の歌』等最人口に膾炙す。創作に在りては『鎌倉大佛に詣て、感あり』、『四季の歌』、『抜刀隊の歌』等最注目するに足る。

新體詩の名稱及由來に就きては、前章既に之を説きつ。其が西詩の模倣に出で、

新體詩抄

外山、山

今 矢田部尙

井上巽軒

若くは之が影響の下に成れるは、譯詩は更にも言はず、創作と雖明かに之を認むる事を得。其詩題、其形體を始として、思想の根本的調子に至るまで、一として之を反映せざるはなし。先づ形體に付て言へば、作者は在來國歌の形式たる三十一文字を棄て、寧ろ今様式を取り、之を西詩の體に應用し、七五一句一行をなし、數行を累ねて一首となし、或は四六八等、一定數の行を連ねて一節スロジヤとなし、數節を累ねて一首をなせり。中に又間々脚韻を試みしあり。一節中、或は行を隔て、或は行を重ね、同一音の字を其行末に置けり。『四季の歌』の如き其好例なり。總て詩形は著しく長大となり、時としては長歌を駕し古詩を凌がんとす。素より西詩の雄大なるに比ぶべくもあらざれども、短歌發句の小天地に踞踏せし從來の眼を以てしては、誠に驚くべき進歩と言はざるべからず。次に其思想を見るに、從來の歌想たりし春花秋月の範圍を超え、神祇釋教戀無常の型的表章を脱して、幾多の新版圖を拓き、淺薄ながら多少の哲理を寓し、平凡ながら人生觀社會觀を謳ひ、又は抒情の一面に馳せたりし舊詩歌に加ふるに、一脈叙事の分子を以てし、等しく花月を詠するにも、其着想の存する所、いたく從來と趣を異にし、蘆庵景樹の博大を以て尙夢想だも及ばざ

至る徑路を描き、以て明治文明の懷に生ひ立ち、新教育の許に長じたる一新階級即書生なる者が、新舊思想の衝突尙止まざる當時の社會に處せる状態に對して諷刺の筆を逞うし、之を貫くに一書生小町田繁爾と藝妓田之次との情話を以てし之を彩るに守山父子兄妹の奇遇を以てす。通篇脂粉の氣あり、情緒奔放の青年が外圍の誘惑の爲に身を誤り、又は誤らんとする情狀寫し得て委曲を極む。而して文章は詞に口語體を用ひ、地に雅文體を用ゐ、交ふるに諧謔を以てし、極めて平易に且巧に書きなされたり。

此書一度出で、褒貶の聲四方より起りぬ。化政以來勸懲小説、豪傑小説に馴れたる眼は此異様の新彩に驚き、十年以來政治小説、演説小説に謳歌せる人々は此變體の作意を異しみぬ。然り。此小説は在來の者に比ぶれば夥多の異彩あり。試みに其要を擧ぐれば、第一、其序に言へる如く「全編の趣向は専ら傍觀の心得にて寫眞を旨としてものせしにて、勸懲を度外に置き、此を訓誨の料にするを之を奨誠の資にするとは讀者輩の心に任せたれば、童蒙を訓ふるか如き口調固より存せず。作中の人物亦其趣を變じ、犬塚信乃白山雪若の如き道義の權化、關羽魯智深の如き模

範的英傑、悉く其跡を没して世間通常の書生となれり。第二、政治小説に見るか如く、作者の主張主義を吐露せんか爲に小説の趣向を借る事止みて、専ら世態人情を直寫する事となれり。第三、從來の小説中若し寫實方面にて類を同うする者を取らば、三馬一九乃至春水一派之に近けれども、膝栗毛の諧謔を存して其鄙野を止めず、梅曆の妖艶ありて其淫褻なし。若し諷刺の筆意滑稽の文致を以てすれば、浮世風呂西洋膝栗毛等其儔たるべしと雖、眞面目の度に於て大なる徑庭あり。浮薄鄙猥なる從來の作物と伍すべきに非ず。第四、在來の小説が事件の變化に重きを置き、脚色を主として所謂目先の奇を求めたりしに反し、人物の性情に重きを置き、多少心理的描寫を試みたり。第五、文章は馬琴春水等に負ふ所多きは言を俟たずと雖、叙事抒情の際、寫實的傾向著しく入り來り、且外國文學の影響として脩辭の上に稍、新趣味を加へたり。之を要するに勸懲の陳腐を避け、善玉惡玉の舊型を捨て、人情本洒落本の淫猥を去り、政治小説の枯燥を除き、全然寫實の筆を以て新時代の生活を描き、童蒙教誨の卑域を脱して教養ある士人の翫賞に入りたりき。

『小説神髓』によりて蒔かれたりし寫實小説の種子は茲に至りて芽を萌し、『書生氣

質』の名は忽ち讀み本草双紙の類を壓倒して世に布き流を汲んで筆を寫實小説に染むる者前後相踵いで輩出しぬ。是に於てか勸懲小説の勢力俄然として地に落ち、爾來寫實の風天下を靡け、文章に於ても新時代を表はすに適當なる一新文體を工夫して略、成功せる者もあるに至れり。此點に於ては『書生氣質』の如き、實に明治文學の新紀元を造れる重要な創作なり。

然り此作は紀元開拓の作なり。然れども、こは其歴史的價値の卓逸を表示する外何等の意義をも含めるに非ず。文學としての絶對の價値を判せんには、おのづから別途の考察を要す。蓋し此作の文學的價値は其歴史的價値の如く優逸なるに非ず。之を寫實小説の立脚地より見るも、第一、勸懲小説を排して起りしに係はらず、其主旨又諷刺誨誡に在るを以て其目的に添はんとするの極、動もすれば露骨なる諷刺に陥り、人情世態の大寫眞鏡たるべき者をして、強いて諷誨の隘型に陥らしめんとす。勿論こは『小説神髓』に「模寫主意の小説には求めずして諷刺諷誡の法備はり、暗に人を教化する力あり」と説ける旨を實にせる者ならんも、開卷第一に「其」とは言はず語らずして讀む人々に悟らしむる覆車の誠因果の關係云々」と叙べ

しが如く、本文中作者自ら此主旨を説ける箇所屢見えたり。其筆致も亦描寫に少くして説明に多く、世態の模寫よりも寧ろ其の解説に近からんとす。第二、人物を主として心理描寫に筆を着けたりと言ふも、其は極めて低き程度に於て然るのみ。主人公として特に提出すべきなく、各人の性格の悉く模糊たる類型に終れるは、所謂氣質物の常態として暫く之を描くも、全體の結構到底事件の變化に重きを置くを免れず。而も其變化や、概ね偶然の機會に出で、人物の性格より來る必然の結果ならず。奇禍奇遇等舊時代傳奇の面影を存する事多く、特に大團圓に近づくや、急轉直下、奇機續發、偶然は偶然を生みてめでたしく、こなる所、宛然夢幻劇の型なり。第三、新舊思想の衝突を描いて切ならず、内面的生活に存する深刻なる衝突を看過して、唯魯文一流の外面的衝突にのみ着目せるの觀あり。第四、其文體に於ても未新時代の寫實小説に相應する迄に發達せず、全體の體裁爲永一派に比して著しき進歩なく、特に地の雅文は掛詞文字鏤り等をもて飾れる馬琴流の七五調を用ゐたり。其他通篇諧諷に富みて輕妙を極むと雖、多くは地口駄洒落の類にして所詮一丸魯文の餘睡に過ぎず。之を要するに『書生氣質』は全然新組織に成れる新時代の

作物に非ず。其の立脚地は新舊作風旋轉の中心に立ちて一代の潮流を喚起せる所に在りて存す。蓋し最嚴格なる意義に於て所謂過渡期の産物たり。

春の屋は續いて『妹と背鏡』内地雜居未來の夢を著はし、心ある青年之に倣ふ者尠からず。尾崎紅葉等の結社硯友社は漸く社員を増し、頻りに創作の練習を力めたりき。此時に方りて二葉亭主人長谷川四迷は、文壇未曾有の一新作を公にせり。『浮雲』即ち是なり。

二十年『浮雲』第一編出版せられ、翌年第二編續刊せられ、共に春の屋主人、二葉亭四迷合著と署す。されど實は二葉亭一人の作にして春の屋の加筆を得しのみ。第三編は後れて二十二年秋、小説雜誌『都の花』に連載せられたり。總て十九回の章齣に分る。叔父に寄寓して某省に判任の出仕を勤むる内海文三、學才ありて世才足らず、冗官減員の際計らず免職となりしかば、叔父園田の後妻お政忽ち下司根性を現はし、曩に一人娘お勢の婿がねにと愛育せしに打て代り、彼を侮辱し薄遇して止まず。お勢は天性浮誇の質、學校に新教育を受け、文三の新議論に感服したりければ常に母に逆て文三を庇ふ。文三見て以て己に意ありとなし、かばお政の薄遇

一、浮雲
二、浮雲
三、浮雲
四、浮雲
五、浮雲
六、浮雲
七、浮雲
八、浮雲
九、浮雲
十、浮雲
十一、浮雲
十二、浮雲
十三、浮雲
十四、浮雲
十五、浮雲
十六、浮雲
十七、浮雲
十八、浮雲
十九、浮雲
二十、浮雲
二十一、浮雲
二十二、浮雲
二十三、浮雲
二十四、浮雲
二十五、浮雲
二十六、浮雲
二十七、浮雲
二十八、浮雲
二十九、浮雲
三十、浮雲
三十一、浮雲
三十二、浮雲
三十三、浮雲
三十四、浮雲
三十五、浮雲
三十六、浮雲
三十七、浮雲
三十八、浮雲
三十九、浮雲
四十、浮雲
四十一、浮雲
四十二、浮雲
四十三、浮雲
四十四、浮雲
四十五、浮雲
四十六、浮雲
四十七、浮雲
四十八、浮雲
四十九、浮雲
五十、浮雲
五十一、浮雲
五十二、浮雲
五十三、浮雲
五十四、浮雲
五十五、浮雲
五十六、浮雲
五十七、浮雲
五十八、浮雲
五十九、浮雲
六十、浮雲
六十一、浮雲
六十二、浮雲
六十三、浮雲
六十四、浮雲
六十五、浮雲
六十六、浮雲
六十七、浮雲
六十八、浮雲
六十九、浮雲
七十、浮雲
七十一、浮雲
七十二、浮雲
七十三、浮雲
七十四、浮雲
七十五、浮雲
七十六、浮雲
七十七、浮雲
七十八、浮雲
七十九、浮雲
八十、浮雲
八十一、浮雲
八十二、浮雲
八十三、浮雲
八十四、浮雲
八十五、浮雲
八十六、浮雲
八十七、浮雲
八十八、浮雲
八十九、浮雲
九十、浮雲
九十一、浮雲
九十二、浮雲
九十三、浮雲
九十四、浮雲
九十五、浮雲
九十六、浮雲
九十七、浮雲
九十八、浮雲
九十九、浮雲
一百、浮雲

にも堪へ、同僚にして戀敵なる本田の侮辱にも忍びぬ。然るにお勢始は本田の無學陋劣なるを忍みしが、本來の華美を好める、文三日頃の不活潑に飽きて本田の快活に親しむ。文三此真相を知らず、遂に之に怨を述べしにた勢は文三を戀ひしにもあらず、本田を戀ひしにもあざれば、事の意外に驚き、且怒り且猛り、本田を疏んじ文三をも憎みぬ。文三尙も斷念し難く、種々の妄想を畫きつゝ、悶々の中尙去るに忍びずといふ筋を以て始終す。

『浮雲』の出づるや、世人は其内容形式共に、全然從來の作物と其選を異にするに驚き、『書生氣質』に比して隔世の感あるを認めたり。實に『浮雲』は『書生氣質』を過渡の樞梁として新時代に入りし小説界最初の創作なりき。思ふに『小説神髓』の所説を最忠實に體認して純粹なる新時代模寫小説の範となりしは、『書生氣質』に非ずして『浮雲』なり。固より前者は模寫小説の粉本なりしも、前項に見えたる幾多の事實は之をして該種小説の範たらしめず、創新の名譽は擧げて後者に歸せり。

其規模は狭小、其舞臺は園田一家の外に出でず、其時日は三句の中に止り、其主要人物は四人に過ぎず。『浮雲』の結構の單純なる事、從來小説の總てを超越す。然れ

とも一篇の波瀾は總て人物の性情に出で、脈絡貫通悉く一主人公を中心として之に集まり、所謂其綱を提くれは衆目悉く張るの趣ありて、全體一箇の有機的結合を形成す。描寫の當體は、主人公園田勢子の性格、及之によりて惹き起されたる内海が心理の葛藤にして、作者は其間に幾多の波瀾を構へて二人が心理解剖を試みたるなり。お政、本田の性格は特に言ふに足らず、内海亦有り古りたる人物なれども、其の勢子の真相を解する能はずして、半信半疑痛心煩悶を極むる所、お政に輕侮せられ本田に愚弄せられて憤懣心頭を衝けども、尙愛着の弱點、其の決心を腐らすあたり、心理描寫の筆委曲を極め、頗人情の幾微に觸る。勢子に至りては、作者が明治小説壇に提出せし一新性格にして、單純放恣輕燥開豁、事となく物となく新奇より、新奇に移り行き、嘗て操守ある事なし。而も其新事物に移るや深く思ひ熱く見てするに非ず、唯、感染の至す所のみ。幼うして學問好なる隣家の少女に感染れ、入塾しては洋風好の塾頭に感染れ、退塾以後は朴茂なる内海に感染れ、其沈鬱に陥るや去つて快活なる本田に感染れぬ。要するに認識未覺醒せざる初心浮誇の一少女にして、一切の行爲、及行爲の因て來る心理の變化は總て此性格より起る。而して此性格こそ彼

の内海をして懊惱せしめ憤懣せしめ、從て『浮雲』二篇を成立せしめし所以の者なれ。』此作は、唯、上述の點のみを以てするも破天荒の小説といふべし。加ふるに性格描寫の技倆の卓逸なる、勢子の人物が殆ど彫り浮められたらんか如く躍動するあり。且其は全然當代人物の代表と見るべき一新性格にして、十八九年の比、皮相文明の光に眩惑して自覺なく省察なく、徃々として新奇を追へる一代民衆の陋態は遺憾なく此性格に現はれたり。思ふに『浮雲』亦一個諷刺の作、お勢をして新思想を代表せしめ、お政をして舊思想を代表せしめ、以て新舊文明の衝突を描かんと擬す。此事や『西洋膝栗毛』以來の各小説家の爲す所に異ならずと雖、之を觀察し之を批評する事、斯くの如く深刻に且嚴格なるは未之あらず、げに二十年頃の明治文明の描寫としての此篇の價值は、之をして當に歴史上に重きをなさしむるのみならず、文學其物の中に於ても輕視すへからざる地位を占めしむ。唯、其批判諷刺の筆、徃々露骨に陥り、或は心理描寫の筆、徃々事實を按配して讀者の想像推理を俟つ事をせず、直ちに作者の談理説明を以て之に充てたるを恨とす。例へば第五回勢子とお政との争を叙して是か新舊主義の衝突なりと明かに辭りたるか如き、或は結末二

回、餘りに書き急ぎ、描寫に勉めずして解説に終れるか如き、頗る興味を殺く。第十六回勢子の性格解剖の條の如きも亦描かすして説く。の弊に陥り讀者玩味の餘地を奪へり。

とにかく此小説の内容は純然たる新時代の産物たり。然れどもかくの如きは獨り内容のみに非ず。其形式即文體に於ても亦空前の試験をなせり。『書生氣質』の文體は尙舊型を出づる能はさりしも、『浮雲』に至りては全く創始に出で、所謂言文一途を以て地と詞との全體を行き、且詞は常に行を改めて地と分ち、決して言者の名を冒頭に細注して地の文の中に書き下す事なし。此文體や實に寫實小説として此作を成功せしめし要素なり。蓋し、文體は思想を盛る容器なれば、或る思想には必ず最之に適切なる文體あらざるへからず。委曲周匝なる新時代の思想を以て、觀察微細に入る寫實の筆を振はんとするに方り、讀み本人情本の文體は到底之に添ふを得ず、乃ち顧みて一新文體を需めざるへからず。言文一途の新體は即此目的に對する最初の試験なりしなり。而して二葉亭か此體を用ゐるや、時に冗漫の嫌なきに非ずと雖、概して洒脱にして才氣に富む。特に自然を叙するや、在來の

文學に見るへからざる清新の趣味に満ち、第三回の月光を寫す所、第七回上野の秋色を描くあたり、楚々として人に迫る者あり。

内容形式兩方面に於ける『浮雲』の得失は略之を盡しぬ。蓋し作者は固と西洋文學に通せる人、其の泰西小説を讀破せる眼を以て『小説神髓』の所説を玩味し、其神を持し來りて之を獨特の彩筆に寓し、以て空前の作を成せり。而も其態度は、春の屋が尙戲作者の風を離れさりしに反し、純然たる文學者の態度を以てしたりき。

逍遙、四迷の二作家出て、明治小説壇の風潮は一變し、所謂寫實の風天下を動かして起り、新小説の曙光爰に輝き出でぬ。事は十八年より二十二年の間に在り。

三、翻譯

泰西小説の翻譯は既に『花柳春話』に其基を開き、爾來歴史小説政治小説の翻譯少からざりきと雖、前章に述へしか如く、此等譯者か之に對する態度は、多くは政論家の其れにして純然たる文學者の其れに非ず。其種類に至りても、傳奇的の一面に限られて、寫實的方面の者未起らざりき、且譯筆の技倆の如き、頗る疑ふべき者ありき。逍遙は此方面に於ても亦卒先して手を下し、純然たる文學者の態度を以て

リットン卿の『リエンジ』を譯し、『開懐慨世士傳』と題して世に示しぬ。然れども此譯の内容は依然として歴史的なれば、之を新翻譯の曙光とせんより、寧ろ在來の翻譯か一轉して斯壇の過渡期に入らんとする際の所産とせん方適當なるを覺ゆ。其内容に寫實的傾向を取り、其形式に比較的忠實洗練の譯筆を揮ひ、専門文學者の態度を以て之に對したる新翻譯小説の曙光は、實に思軒居士森田文藏の作なるべし。而して此氣運を鼓吹するに與りて最力ありしは、即雜誌『國民の友』なりき。

二十年春『國民の友』は徳富蘇峯によりて發刊せられぬ。政治、文學、宗教、社會の各方面に亘りて清新放膽の評論を試み、當時世に存せし總ての他の評論雜誌を壓倒して獨り文壇に雄視せしか、特に純文學の趨勢を觀察して新氣運を鼓吹し、或は文學欄を設け、或は春夏二期に文學附録を添へて當代作家の粹を集め、以て泰西文學の輸入、新文學の興隆に努力し、爾來『柵草紙』の出てし頃まで、隱然として獨り文學の保護者たりき。

思軒『國民の友』に據り、主として翻譯の方面を擔當し、載せし所の長短篇少からず。佛國ジュール・ベルヌ作『鏡世界』二十年及『大東號航海日記』二十一年、同ユーゴー作『替使

「國民の友」

森田思軒

森田思軒の文學活動の概略を記す。森田思軒は、明治二十一年に『國民の友』を創刊し、その編輯に力をこめた。この雑誌は、當時の文壇に大きな影響を与えた。また、森田思軒は、翻譯文學の普及に努めた。その功績は、後述の通りである。

者『同年』探偵ユーベル』二十二年、及『哀史』其他『ツツケ、ヂッケンヌ』等の小品、總て彼の譯筆は間々『報知新聞』に掲げたるもあれど、概ね『國民の友』に出でたり。就中『探偵ユーベル』と『替使者』とは最世に喧傳し、居士の名爲に文壇に高く、遂にはユーゴーの紹介者、佛文學の輸入者として之を仰ぐに至りぬ。是に於てユーゴーの名一時斯界に重く、從來の翻譯界を獨占せる觀ありしリットンを壓して立ちぬ。此間の消息は不思議にも創作界に於ける政治小説等と寫實小説との消長と其步趨を同うす。勿論ユーゴーは所謂寫實派の詩人に非ずと雖、其主觀的、感情的、個人的傾向を有する點を以て、彼の客觀的、理性的、社交的傾向を有する歴史的小説に對照する時は、恰も前二者の關係に似たる者あり。とにかく佛文學輸入の端緒は居士によりて開かれ、曩に民權自由論の當時、中江兆民の筆によりて僅かに其片鱗を見得たる佛文學は續々紹介せらるゝの運に向へり。然れども、思軒の翻譯は總て英譯よりせる重譯なれば、絶世の才筆と雖、佛文學の真趣を傳ふる事恐らくは難し。況やユーゴー其人は、内容の高尙ならん事を求むると同時に、形式即文章の完全無缺ならん事を力めたるに於てをや。且思軒の文體は漢文調洋文直譯體にして、當時に於てこ

森田思軒の文學活動の概略を記す。森田思軒は、明治二十一年に『國民の友』を創刊し、その編輯に力をこめた。この雑誌は、當時の文壇に大きな影響を与えた。また、森田思軒は、翻譯文學の普及に努めた。その功績は、後述の通りである。

を能く西文の情趣を傳へたりと持て嗤されて模倣者も尠からず生じたれ有り體に言へば、文字粗大に過ぎて精緻の情想を寫す事難く、剩へ多少の誤譯あるを否む能はざりき。されば居士は決して成功したる翻譯家に非ざると同時に、崇拜者の言ふ如き佛文學の輸入者に非ず。要するに尙純然たる新文學者たるに缺くる所あり。其の出所の政治小説家と等しく三田塾に養成せられたる新聞記者たるに於ても、其文體の當時新聞文學者の共通文體たる漢文調を擺脫せざる點に於ても正しく其半身を過渡時代に置けりと言ふべく、恰も創作壇に於ける『書生氣質』の地位を占めたり。若し夫れ『浮雲』の地位を占むべき者に至りては、吾人再び二葉亭四迷を推さざるべからず。

廿一年四迷は『あひびき』を『國民の友』に『めぐりあひ』を『都の花』に出しぬ。共に魯國小説家ツルゲネーフの短篇なり。譯筆『浮雲』に似て縦横委曲、情趣盡されば止まず。而もよく歐文の調を存して直譯體の詰屈を脱し、一脈清新の思想聲調を寄與して文壇に貢獻する所少からず。譯者は本邦に於ける最初の魯國文學紹介者たるのみならず、翻譯界全般に對して一新紀元を開ける者にして、爾來斯壇の氣運初めて

長谷川四迷

動き、各國詩文の譯筆徐々として起りぬ。

斯くの如きは新體詩、小説及翻譯の三方面に於ける曙光の概觀なり。事は十五年より二十一年に亘り、就中十八年以下三年間の現象に屬し、二十年以後盛運の基を開けり。然れども其他の文學、即劇詩、俳句、和歌等は其新曙光を現はす事稍遅かりき。劇詩に在りては、依田學海、福地櫻痴の作を過渡として、二十八年逍遙か『桐一葉』を公にするに及びて初めて現はれ、俳句に在りては、所謂過渡の産物なる者無く、二十五年正岡子規出づるに及びて突如新光を漲らせ、和歌に在りては、落合直文等の作を過渡として二十八九年の比始めて現はれぬ。されば之等に關する詳細の叙述は暫く之を後節に譲り、先づ曙光を放ちし三種の文學に就き其發展の跡を尋ねんとす。

第二節 寫實小説の興

文學思潮革新の運動ありて以來、各種の新文學の陸續興起しける中に獨り群を抜いて進歩の先登に立ちしは、即ち『書生氣質』『浮雲』の後を承けたる寫實小説なり

硯友社
 我樂多
 文庫
 石橋思案、山田美妙齋、九岡九華等好文の士相集まり、文會を結びて硯友社と名づけ、各自創作の小説、戯文、紀行、俳諧、都々逸、端唄等を集めて『我樂多文庫』と題し、相批評して以て文學の研鑽に勉めぬ。爾來同志の社員漸く加はり、十九年末には川上眉山、巖谷漣山人、江見水蔭、岡田虛心亭、廣津柳浪、喜多川麻溪等十數人を増すに至れり。

とす。而して此氣運に乗し、或は之に鞭つて一世を指導せしは、即ち尾崎紅葉、山田美妙、及彼等を唱首とせる硯友社の人々なりき。抑も本邦寫實小説の由來を尋ぬるに、中古王朝の物語は概ね之に近く、降て江戸時代元祿の頃、浮世草子の形を以て現はれ、爾來八文字屋本となり、洒落本となり、滑稽本となり、人情本となり、以て明治文壇に移りしが、嚴格なる意義に於て寫實小説と言ふべきは、僅に西鶴等の作數篇に過ぎず。其れも馬琴一輩の讀み本に壓倒せられ、元祿時代一朝の榮華を止めて世は長へに傳奇小説の壇場なりき。此時に方り、春の屋二葉亭、續いて紅葉美妙出で、遙に西鶴を紹き、近く泰西小説の趣味を取り、以て新文壇に寫實の一派を開き、歴史小説全盛の勢を挫いて西鶴を九泉の下に喚起せり。

十八年春、小説神髓世に出づるに先づ事正に二月、大學豫備門在學の尾崎紅葉、石橋思案、山田美妙齋、九岡九華等好文の士相集まり、文會を結びて硯友社と名づけ、各自創作の小説、戯文、紀行、俳諧、都々逸、端唄等を集めて『我樂多文庫』と題し、相批評して以て文學の研鑽に勉めぬ。爾來同志の社員漸く加はり、十九年末には川上眉山、巖谷漣山人、江見水蔭、岡田虛心亭、廣津柳浪、喜多川麻溪等十數人を増すに至れり。

斯る間に新文學勃興の機運漸く熟し、春の屋二葉亭相繼て立ち、國民の友』又發刊せられ、寫實小説の持囃さるゝ世となりしかば、二十一年遂に『我樂多文庫』を印刷發賣する事となし、五月第一號を出せり。之を新文壇に於ける文學専門雜誌發刊の嚆矢となす。當時此雜誌の體裁組織等は柳北の『花月新誌』と相距る事遠からず、載する所、上述の種類の外、新體詩、狂歌、川柳等所有純文學及文界批評にして、或は言文一致を以てし、或は雅俗折衷を以てし、總て戀と涙とを研究するを以て窮竟となす。而も尙微々たる小冊子に過ぎず、作物未だ文壇を動かすに足らざりしも、社中の同人悉く大學豫備門、獨逸協會學校其他に於て新教育を受けたる年少氣銳の士なれば、概して英語若くは獨語を解し、十九世紀學術の一般を覗ひ、泰西純文學の面影を知り、從て其述作にはたのづから新趣味現はれ、其文體、修辭、句讀、記號を始め全體の調子悉く明治の新彩を帯びたり。加ふるにこの新衣の下には江戸文學の深き愛好と巧なる模倣とより出てたる固有風尚の醇なる有り。されば彼等が寫實の筆を振ひ、戀と涙とを以て青春の思想に投するや、此等の作大に青年の間に行はれて、隱然『浮雲』以後の小説壇を支配し、當時の批評界は硯友社を目するに文界の梁山泊

を以てするに至りき。げに硯友社は嘗に當時に於て梁山泊たりしのみならず、爾來長へに斯壇の一大勢力にして、社中の作家盛名を後日に馳せし者少からず、二十八九年に至る迄の我文學界は殆ど其壇場たるの觀ありき。而して社中殊に秀でて之か牛耳を執り、當時直ちに文名を爲し、者は、即ち美妙齋主人と紅葉山人となりき。

美妙齋

山田美妙齋

夏木立

『我樂多文庫』の發行に後る、事三月、山田美妙齋其の短篇小説集『夏木立』を出して盛名を文壇に馳せぬ。美妙は東京の人、紅葉思案等と硯友社を結び、『我樂多文庫』に従事せしが、尙婦人雜誌『以良都女』二十年刊を出し、某新聞紙にも寄稿して短篇の創作を公にしたりしより、舊稿新作取り交せて總て六篇、合して『夏木立』とは題せるなり。就中『籠の俘囚』は沙翁の詩篇『レイブ・オブ・ハウクレシアス』に倣ひて、古羅馬の『アッピアス』と『バージニア』の物語を綴りし者、『花の茨、茨の花』は骨を獨逸に取りたる牧歌風の小品、『柿山伏』はモリエール風の諷刺的滑稽物、『賈金剛石』と『仇を恩』とは、一は滑稽、他は可憐の御伽物、最後の『武藏野』は材を南北朝時代に取り、武藏野に於ける新田

一族の悲劇に織り成されたる一條の哀譚を寫し、者なり。總て歐文趣味の横溢せる嶄新の言文一致體を以て瑰麗の文字を行き、本邦文壇未だ見ざる抒情詩的色彩を小説の作品に現はし、讀む者をして泰西ロママンチック詩人の作品に接する思あらしむ。思ふに『夏木立』の諸篇は寫實的潮流の裡に成り出でし事勿論なり、雖『浮雲』の寫實とは大に趣を異にする者あり。『夏木立』には明治思想の一面を代表すべき園田お勢の如き性格を見る事能はず、新舊思想の衝突を表はすべきお勢母子の爭論を見る事能はず、はた心裡の煩悶を解剖すべき内海文三の如き人物をも見る事能はず。唯『柿山伏』の一篇に、三十未滿の青年にて古今東西の文學を丸呑にせる一政治小説家を主人公となし、當時の政治小説の趣向と文章とを罵倒して完膚なからしめ、新聞記者輩の作品を諷刺して痛切を極むる有るのみにて、他は皆幽韻縹渺たる抒情詩の境に入り、『籠の俘囚』の『バージニア』、『花の茨』の羊飼兒、『武藏野』の秩父民部及忍蕨の如きは宛然詩中の人物なり。之を當代寫實小説を代表せる者としては、固より『浮雲』の匹儔に非ざるなり。

遮莫『夏木立』の本領は内容に在らずして寧ろ形式に在り。其の文壇讚美の中心

となりしは思想の卓絶なるに由るに非ず、文章の清新瑰麗遠く俗流を抜けるに基く。言文一致は『浮雲』以來珍しからずと雖、文脈の上に著しく歐文の組織を交へ、情景を叙ぶるに聯想想像の頗る廣潤なるを以てし、又各種の譬喩を縦横に使用する等に至りては遂に『浮雲』を凌ぐ。特に擬人法の如きは常に非情物の擬人のみにあらず、進んで抽象概念の擬人に及び、宛然洋文を讀むの感あらしむ。例へば、夜は根城を明け渡した竹箴に伏勢を張つて居た村雀は新に軍議を開き始め、閨の隙間から斫り込んで来る曉の光は次第に四方の暗を追ひぬけ、遠山の角には茜の幕がわたり、遠近の溪間からは朝雲の狼烟が立昇る〔武藏野下〕といふが如き、到底在來の文學に見るへからざる脩辭上の技巧となす。作者か文章に留意せるは、『柿山伏』に政治小説者流の文章を諷刺せるにも著るく、特に『夏木立』のはし書を見るに其苦心亦鮮少に非るを知る。彼の述作は常に斯かる研究の結果として現はれ、絶えず新意匠と其試験とを世に提出す。彼か其儕輩を超えて一朝盛名を得し所以亦此點に存す。

『夏木立』發售の頃、美妙齋硯友社を去りて獨り文壇に立ち、二十一年『都の花』に花

車^{トニヤ}を連載し、翌年『國民の友』春附録に『胡蝶』を出し、『ぬれ衣』を單行し、續て『都の花』に

「此の子^{トニヤ}及いちこ姫を掲げ、獨得の文章を以て益々文名を博しぬ。就中『胡蝶』は當年の傑作、紅葉の『色懺悔』と共に一時文壇を動かし、者にて、材を平家の末路に取り、戀と忠義との衝突に煩悶懊惱せる一少女胡蝶が悲劇的運命を描き出でし可憐の小説にして、其趣武藏野に似て脚色一層複雑に、主人公の人物一層明瞭に、其運命一層劇詩的なり。文章は得意の言文一致體、嶄新豊麗の致を儘にす。

斯くて言文一致の文體は文壇の歡迎する所となり、北邨散士を始として之に倣ふ者少からず。彼等の努力によりて種々彫琢せられ、粗笨なる口語も漸く醇化せられんとす。而して之を導て能く圓熟渾成の域に至らしめし者は、即二十七年以後に於ける紅葉及其他の小説家の力なり。

紅葉

明治文學史上の巨像尾崎紅葉は東京の人、十八年大學豫備門在學中、十九歳の青年を以て硯友社の牛耳を執り、^{江島土産}『貝屏風』と題する一九流の戯文を處女作として、『風流京人形』『紅子戯語』等數篇の滑稽物を、『我樂多文庫』に掲げぬ。然れども之等は

尙同志間の研究試験の作に屬し、未だ以て紅葉の文名を爲すに足る者を含まさりき。斯かる間に美妙齋「夏木立」を出して才名江湖に布きしかば、紅葉之に劣らざらんとし、奮つて嶄新の作物に従事し、遂に二十二年四月美妙の「胡蝶」と時を同うして『色懺悔』の一篇を得、乃ち之を世に問へり。

『二人比丘尼 色懺悔』は此年創刊の小説叢書「新著百種」の第一編として出づ。時代を説かず場所を定めざる一種の時代物なり。木枯吹きすさぶ山里の伏庵に、惜しや花の盛を墨染の衣に包みたる主客二人の比丘尼、身にむ夜寒を紙帳に避けて語らふ中、縁なればにや送みに懐かしくて身の上を明かす。主の尼、頼む夫の討死に惜からぬ命を長らへて亡き跡を吊ふ由を語れば、客の尼は振分髪（振分髪）の許嫁、悲しや戦國の習とて敵味方に打分れ、鎗を削りて戦ふ中懐しき其人は傷きて我方に病を養ひしに義理と恩愛と忠義とに身を責められて白刃一閃あへなくなりにし由を物語る。茲に二人の戀人の同一人なる事現はれて互に驚く時、板戸洩る日影白くほの／＼と明くる一夜。是其梗概なり。而して之を寫すに、雅俗折衷にもあらず、言文一致にもあらず、記號に富める一種異様の文體を以てし、之を彩るに彫琢の致を極めた

「色懺悔」
（此年創刊）
（新著百種）
（第一編）
（二人比丘尼）
（色懺悔）
（美妙齋）
（夏木立）
（胡蝶）
（時を同うして）
（得）
（乃ち之を世に問へり）

る絢爛の文辭を以てし、製本の意匠を凝して世に出でぬ。世評は噴々たり、褒貶自ら有りど雖、概して許すに當年の傑作を以てし、或は「胡蝶」にも勝れりと稱せられき。之を作者の側より見れば、此篇は美妙齋に對する紅葉の競技なり。彼が從來の戲筆を棄て、所謂涙を主眼とする「時代物」を作りしは、或は人目を一新せんとするに在りしか。其文體に多大の苦心をなして變風を創始せるは亦是美妙か言文一致に對する抗爭と見るべし。脚色に奇巧を求め、人物の類型を脱せざるは從來の傳奇小説に於ける通病にして、此作亦之に洩れず。勿論讀み本一派に比ぶれば人物事件多少自然の風姿を帯びたれども性格歸趣茫として尋ぬべきなく、絶て時代精神の面影を認めず。然れども其文章に至つては洵に當代の逸品「色懺悔」をして重きを斯壇に爲さしめし所以の主たり。修辭的技巧は暫く措き、文體の側より見れば、先づ地の文と對話と其體を異にする事「書生氣質」等の如く、對話は淨瑠璃體に俗話調を混じたる者、地の文は雅俗折衷の變體にして、簡潔なる文句を種々の句讀記號を以て繋ぎ、各語句は概ね思想の上に印象を残すべき中心概念を提出するのみにて、他は一切之を讀者の想像に任せ、省略縱横、屢論理文法を破り、其手法恰も近

世印象派詩人のに似たり。此變體は、言文一致雅俗折衷共に好ましからざるよりして苦心慘憺の末に得たる者にて、思ふに紅葉が私淑愛讀したりし西鶴也有が俳文に學びて、其簡潔と餘情とを取りしなるべし。

西鶴復活の氣運は此時より漸く熟しぬ。此事や固く紅葉一派の作者か私淑する所あるに出つと雖、之を文壇の趨勢に見る時は、たのづから二三の因縁を數へらる。第一は當時古文學復興の大潮流が西鶴に及べる事、第二寫實的傾向の傳播と共に寫實家としての西鶴の價値の認められし事、第三言文一致體の弊に倦みて理想に近き文體を西鶴に得し事即ち是なり。先づ古文學復興の潮流は前章既に其大勢を述べし如く、和歌和文より院本小説の類に及び、稗史出版社は夙く馬琴物を翻刻し、叢書閣は次て近松戯曲を翻刻したりしが、是に至りて元祿時代文學の一明星たる西鶴に向つて尙古の眼を放ちしなりき。次に春の屋以來寫實を以て旗幟とせる作家が寫實家の典型を我固有文學に求むるや、春水の沃冶三馬の奇警、可ならざるに非すと雖、西鶴の着眼警拔觀察銳利、巧に世態人情の一部を描き社會裏面の消息を寫す筆力遙に之に超えたるを以て、衆目の觀る所期せずして之に就きぬ。

第三の文體に關する西鶴の特點は彼の崇拜を一世に瀾漫せしめし最大の動力なり。是より先き、美妙齋の言文一致體の出でしや、天下其新彩を謳歌せりと雖、此文體は委曲精緻の得ありて動もすれば冗漫繁瑣の失あり。揮灑自在の利ありて往々含蓄餘韻に乏しき弊あり。且語句の末、概同一の動詞助動詞に終るを以て、文體おのづから單調に流れ、勁健の風を缺き、又平談俗語に近きを以て、章句おのづから雅致に乏しく、品位亦足らず。是に於て新しき人情と新しき世態とを寫すへき唯一の文體として採用せられたる言文一致體は、其試験の最中に於て早く既に弊に堪へずと見做され、彫琢醇化の致を極め盡さるるに方り、既に世より見離されんとす。而も之に代るへき好文體は果して文壇に存せりや。讀本體を取らんか、其淺漫なる七五調、懸詞文字鏤の連續を如何せん。滑稽本體を取らんか、含蓄風韻に乏しくして卑野枯淡に傾くを如何せん。獨り西鶴の筆致、平民的にして奇警簡淨輕妙の趣を具へ、文辭卑近にして含蓄甚饒し。古今文學の中、若し明治の世態人情を寫すに足る文體を求むへくんば、西鶴を措て他に在らざるなり。是に於てか西鶴を呼ぶ聲は夙く『夏木立』に見え、續いて『色懺悔』を評せる批評家に現はれ、紅葉の好尙

に著はれ、遂に幸田露伴が『國民の友』に西鶴を論せる頃(二十三年)に至りて殆ど興乘の口に上りぬ。

此時より紅葉は西鶴を基礎とせる新なる雅俗折衷體を編み出で、暫く逍遙したりし傳奇的世界を去りて現實的世界に歸り、『色懺悔』に試みし時代物を棄て、直に『浮雲』の跡を追ひぬ。爾來二十七年の頃に至る迄、『文庫』、『小説群芳』、『國民の友』、『都の花』、『讀賣新聞』、『聚芳十種』及『江戸紫』等、新聞雜誌叢書に出し、幾多の小説は、作意文體一として西鶴の影響を受けざるはなし。二十三年『國民の友』に掲げし『拈華微笑』、『新作十二番』に出でし『此のぬし』、『讀賣』に出でし『夏瘦』、『新色懺悔』、『二十四年』、『都の花』に出でし『二人女房』、『讀賣』に出でし『伽羅枕』、『おぼろ舟』、『むき玉子』、『二十五年』、『讀賣』に出でし『三人妻』、『二十七年』、『同新聞』に出でし『心の闇』等は該期間に於ける佳作と稱せらる。

二人女房
「伽羅枕」

『二人女房』と『伽羅枕』とは、西鶴の影響の下に立てる紅葉の作を代表する好箇の標本なり。前者は官省の裨吏を勤むる士族の娘二人か縁談より結婚懷妊に至るまでの運命を叙し、姉は美、妹は醜、姉は伊達、妹は地味、性情異なるに従ひて好悪を異に

し、姉は官吏に歸き、豪快一時の夢にして家道零落、姑小姑の嫉惡に苦勞絶間なく、妹は幼馴染の職工に歸きて平和幸福に世を送る状態を描き、二者最後の運命に大差を來せる始末を明にせり。後者は傾城佐太夫とて一代に鳴りし廓女、今は六十歳の軀となりて昔十四より二十までの泥水生活を懺悔せる體にもせし者。『芳き名を傳へずはあらぬ者』にてもあれ世に知られんと思ひなりし意氣あり張ある佐太夫が、仔細あつて黄金を好まず、好男子を好まず、一癖者の名は廓中に隠もなし。情意氣張づくにしては随分此命を吝まず、見事立派と言はるゝ程の事をしてのけ、死後末代まで吉原の佐太夫はと、黄金一式の遊女を男の怨言の中に引かれたき身の本願と揚言しての傾城生活、名残なく寫し出されたり。二者共に西鶴の筆意に學び、簡淨なる雅俗折衷體を取れり。然れども『二人女房』は其作風體裁むしろ『浮雲』に近く、地の文と對話とを分ち、作中人物の心理解剖を試み、其精緻ならん事を求むる極、往々談理の筆を執つて説明の域に入る事あるなど、利弊共に其の面影を帶び、總て所謂模寫小説の系統を引きたり。且西鶴の作は其歸趣茫として尋ぬへからざるに反し、此作は自ら一篇の歸趣有り。姉妹の運命に寄せたる作者の人生觀、狹

小なりと雖存す。其西鶴に則りし所は、見來れば偏に文章に集まり文致酷似するの極、往々利弊共に學び、輕妙達筆の利あると共に文情冷靜一味同情の温きを缺くか如き、全く西鶴の面影を傳へたり。此の傾向は『拈華微笑』此主より『新色懺悔』に至りて益、烈しく、遂には文致のみならず、内容即ち思想まで、西鶴の得失併せ學ぶに至れり。蓋し西鶴は熱烈なる同情を以て自然と人生との種々相を描寫せる作家に非ず。大なる詩人は温なる同情を以て觀察し、且描寫す。故に筆に脈々の温情あり。大なる小説家は廣く人生の種々相を寫す。故に其取材の範圍人物の種類おのづから弘大なり。西鶴の筆には源氏物語に見るか如き同情なく、彼の小説には背景を飾るべき自然なく、彼の人生は近松のに比して遙に狭小なり。思ふに西鶴は諷刺家なり。社會の一部に向つて銳利なる觀察眼を放ち、恰も利害相關せざる傍觀者の如く、冷々として之を評し去る。而も其社會の一部分なる者は、不幸にして當時の煩惱界、特に色魔境なりき。斯くの如きは即西鶴の特徴にして、紅葉は其得失共に之を學べりしなり。而して其學ぶや、素と文章筆法に始まりしも、形式と内容とは峻別すべき者ならず、形おのづから心を誘ひて終に其思想をも模倣す

るに至れり。『伽羅枕』の如きは即ち想形共に純然たる西鶴の模倣にして此傾向の絶頂に達せし者なりき。

『伽羅枕』は新思潮に觸れたる明治の人生の真相を描きしにもあらず。明治文明の具體的批評にもあらず。又作者胸中の或觀念の社會現象に映發せる者にも非ず。はた性格の特殊なる者ありて、之より生み出されたる事件の變化を示せるにも非ず。唯、彼の人生の一面なる花柳の煩惱界に向つて銳利精緻なる觀察眼を放ち、傾城社會の豪傑、意氣と張りとの權化、粹道の神としての佐太夫を寫し出し、のみ。而も其は明治以前の事、元祿以來醞釀し來りし大都の花街生活及花街氣質、即ち從來戲作者の寫し誇りし所を描きしのみ。畢竟是西鶴の餘睡、戲作者の境地にして、見來れば宛然たる紅葉の『好色一代女』なり。されば明治の寫實小説としての價値は寧ろ『二人女房』の下に在るべし。然れども文章は實に模倣の妙を極め、長篇恰も無縫の天衣の如く、一部として弛廢を見ず。其の輕妙簡勁の運筆、特に毎回結末の急轉直下、軽く切り上げるあたり、優に西鶴を凌ぎ、瀟洒天麗を以て當代に鳴りぬ。

西鶴模倣は『伽羅枕』に至りて極まりぬ。『臙舟』『むき玉子』『合巻』『二人女』の中以後

の作に至りて其文章、其思想漸く一家を爲さんとし、西鶴的なる形と想との中、おのづから紅葉の特色を帯び來れり。「朧舟」と「むき玉子」とは昔氣質の二親に育てられ、氣立優しくよろづ内わに、而も情厚くて容顏なき佳人が、貧に迫られて親思ひの一念、何も世ぞと諦めて奉公に出づる悲み、終に前者のお藤は妾となり、後者のお喜代は繪師の模倣となりし始末を寫し、「三人妻」は所謂明治紳商の一型とも見るべき葛城餘五郎に仕ふる三人の嬖妾を描ける長篇にして、お才は固く藝者の中の藝者と世間に知られ、意地飽くまでも強き江戸張りの才藏が、葛城の巧計に脆くも根引せられし圍ひ者、紅梅は「初々しき中に無量の情ありて媚を作らぬに媚ある」地女のお角が、河竹の勤に等しき奉公先より望叶ひて葛城に引取られし嬖ひ者、お艶は美色を烙鐵に傷けもせで、二十四まで春を護りて指もさへせざりし一淑女が、ゆくりなく色魔葛城の目に觸れて遂に其漁色の犠牲となりし寵妾、三人三様の趣、其性情の異なるによりて種々の波瀾を起す運命の變遷を叙し、「心の闇」は人を戀すれども遂けらるべくもあらぬ身の、唯、其人の常乙女にて我に情をかけん事をあだに願へる座頭佐之市のあはれを寫せる者なるが、個々の人物に注目を價すへき新性格なく、

描寫の對象動もすれば醜穢に陥らんとする色魔界なる點に於ては、依然として舊型を出てすと雖、尙「三人妻」の紅梅の如く、性情寫實の筆の渾成に近きあり。脚色に於ても「むき玉子」の如き清新にして自然なるあり。特に筆致の輕妙に附帶せる西鶴の弊、即ち筆に同情を缺き、涙を描くも哀を寫すも、共に冷酷なる批評的筆法に陥るの缺點を擺脫し、曩には、佐太夫が涙を揮ひ盡して今は世を茶にせる氣鋒は、寒く冷くして當るべからざりしも、お藤お喜代佐の市等に至りては、涙あり情あり、讀み來りて一種の温みを覺ゆ。紅葉の作は斯くの如くにして西鶴を脱し、漸く自家の特色を發揮し初めぬ。

以上は紅葉か此期に於ける作の大體なり。之を通觀するに、着筆概ね平淡の境に於てし、脚色に嶄新なる者なく、人物に奇趣ある者なく、極めて平凡に極めて自然なる人情の妙用を寫せり。而して其主人公を求むるや概ね女性に於てし、其社會を描くや其局部に偏す。舞臺は東京に於ける中流以下の社會を出てず。而も筆に上る所は多く色魔の煩惱界に限らる。其一生の艶筆を傾倒せし所は、即ち此小範圍に於ける女性の種々相を描き、性情の自然なる發展を寫すに在り。思ふに紅

葉は社會よりは寧ろ人間を観察し、人間よりも寧ろ女性を観察し、女子の性格よりも寧ろ其心理變化を観察せり。故に當時に於ける紅葉の女性は、一として特異の性格を有するなく、一として時代の真相を表すべき性格を備ふるなし。此點よりすれば、紅葉は寫實家と稱せんには狹隘に過ぎたり。唯其の心理解剖を試るや、彩筆縦横、情緒自然の發展を窮め盡さずんば止まず。特に女性の弱點を描いて精緻を極めたり。蓋し女性は智に薄くして情に厚く、細心にして神經敏に過ぎ、猜忌嫉妬の念強くして而も虚榮心に充てる者なれば、其性格に於て既に悲運を構成すべき要素を具ふ。加ふるに女性か社會に於ける地位乃至境遇は益、此の弱點を大ならしめ、遂に彼等をして一生を涙の中に送らしむるに至る。紅葉は乃ち斯る弱點をお銀姉妹に描き、お藤お喜代に描き、お才紅梅お艶に描きぬ。就中後三者に就て此點の描寫は委曲にして痛切を極め、張と意地とに名を賣つて、思ふ一人に情を立て、抜く白金才藏も、此弱點の爲に脆くも葛城の巧みに陥り、大家に仕へて歷々に立交り、容色百人に勝れたるに思ひ上りし鹽煎餅屋の娘紅梅が、遂に身を葛城に任するに至りしは亦此弱點の致す所。況して彼の浮きたる世上の縁組とやらを嫌

うて運命を琴の一技に托したりした艶が、葛城の口車に乗せられておぞくも容姿を大都會に輝さん心驕りを起し、以て夫婦といふ事人の身にせずば濟まぬ契と思ひなし、更に色魔葛城に對する終天の恨を呑んで之に従ふに至りしが如きは、此弱點の最剴切に表されたる者といふべし。然り、作者の筆は此方面に於て成功の域に達せり。然れども、此弱點や個性の發現にあらで婦人通有の情緒なり。人情自然の步趨を追うて女性心理の解剖をなさん者の必到達すべき結論なり。故に此等の作は、女性を描けりといふよりも寧ろ情感の自然を寫せりといふべく、情感の種々相を寫せりといふよりも寧ろ微妙の情操を描き出でたりといふべし。

斯くの如きは、當時文壇の梁山泊たる硯友社を率ゐたりし紅葉の概觀なり。顧みて該社の諸豪を歴觀するに、概ね社中一流の艶筆を以て少からぬ述作をなせりと雖、未だ大名を世に馳するに至らず、未だ自家の特色を構成するに至らず。然れども其二三子既に紅葉と雁行せんとする者なきに非ず。巖谷連山人、石橋思案外史、廣津柳浪、川上眉山人の如き即ち是なり。

連山人は東京の人、又大江小波と號し、瀟洒輕妙の筆、善く可憐なる年少男女を描

曰其代の記述也
岩波の連(大に十七)
味背具(片系)
種は
こから九(十七)

き概純潔清秀の趣を帯ぶ。二十二年『新著百種』に出でし『妹背具』を始として『片系』
『友禪染』等當時の作皆此類なり。然り、山人の特色爰に在るを以て、適する所は小説
よりも寧ろ少年文學に在り。されは二十四年『こがね丸』を作りし以來、自家の本領
に向つて歩を進め、小説の筆を措いて御伽文學の方面に染め、或は少年雜誌に執筆
し、或は古來の昔噺を編纂發行し、或は内外の御伽噺を紹介し、例の輕妙流麗の筆を
以て此方面に貢獻する所少からず。遂に少年文學の壇上に獨占の名を擅にした
りき。然れども連の製作は少年文學として決して上乘の者に非ず。蓋し少年文
學は其情趣清高にして温き同情の溢るゝ者無かるべからず。然るに連の作、輕妙
餘りありて浮薄に陥り、瀟洒餘ありて眞面目を缺き、所謂江戸式恬淡の氣象横溢し
て熱烈なる情味に乏し。且作者か好んで用ゐる滑稽は、往々駄洒落落語の域に入
る事あり。故によく少年をして笑はしむるを得べきも、よく樂ましめ、よく清から
しめ、よく高からしむるに至りては未だ完璧を望むべからず。唯少年文學唯一の
作家として明治文壇の異彩たるに至つては、特筆して傳ふべきなり。

石橋思案

思案外史は同く東京の人、前者と等しく言文一致體を以て小説の作をなし、又滑

石橋の思案
二七心、名鹿子

稽文を善くして屢、駄洒落を交へたる批評文諷刺文をものしき。『新著百種』に收め
たる『乙女心』『小説群芳』に收めたる『京鹿子』等は創作中の佳篇と稱せらる。惜哉
秀才遂に伸びず。一時『我樂多文庫』に盛名を博せしのみにて彼れの時代は去り、爾
後唯筆路の輕妙を讚美せらるゝのみなりき。

廣津柳浪

柳浪も亦東京の人、其の小説を公にせしは、蓋し二十一年自己の經營にかゝる雜
誌『大和錦』に掲げたりし『二おもて』に始まる。次て『新著百種』に『殘菊』をものし、爾來

廣津柳浪
二おもて(柳浪)
殘菊(柳浪)
名鹿子(柳浪)

『いとし子』『糸の亂れ』『五枚姿繪』等數篇を出し、が未大なる成功を見ざりき。さ
れど『殘菊』の如き、人情の極めて深刻なる一面を描き、煩悶あり苦悶ある境遇に於け
る情緒の活動を寫して美妙紅葉以外に觀察着筆の新なるを出し、以て後來大に發
達すへき作者の特色を萌し初めたり。『五枚姿繪』亦此系統を引いて生ひ先の有望
なるを示せり。

川上眉山

眉山人は亦東京の人、二十三年大學を退きて専ら文筆に従事し、夙に筆力の雅健
なるを以て著はれ、『我樂多文庫』以來、也有許六の俳文に學びて、瀟洒艶麗の中一種の
滋味ある文章をものし、以て紅葉と併稱せられたり。然れども二十二年の頃、『黃

川上眉山
其の(眉山)
其の(眉山)
其の(眉山)

菊白菊』『雪折竹』『墨染櫻』等より二十八年に至るまでの小説には、未名作として傳ふべきなし。茲に唯其筆力を稱へて發達を後日に見ん。

以上四家の外、尙江見水蔭、丸岡九華、岡田虛心亭、渡邊乙羽、中村花瘦等あり。『我樂多文庫』及其改題『文庫』を始め、『新著百種』『都の花』『文學世界』『小説百家選』等に多少の創作を出せり。

露伴

紅葉が硯友社を率ゐ、雅俗折衷體を採りて寫實の大旗を翻すや、美妙は『胡蝶』以來の作亦往時の觀無く、紅葉獨り群作家の上に立ちて小説界を指導したりき。此時に方りて、同じく寫實の流を汲み、同じく西鶴の文體を學びし一作家の起りて紅葉と馳聘せるあり。幸田露伴即ち是なり。

明治文壇の將星として文學史上に卓立する露伴は亦東京の人、二十三年の初、其處女作『露團々』を『都の花』に連載し、續いて『一刹那』を『文庫』に掲げ、夙く一種の異彩を帶へる筆力を以て世人の注意を喚起したりしが、同年秋『風流佛』を『新著百種』に出すや、超邁の想と絢爛の筆と、二つなから時流を抜き、盛名一時に世に布きぬ。爾來『奇

④ 幸田露伴
『胡蝶』(新著百種)
『一刹那』(文庫)
『風流佛』(新著百種)
『露團々』(都の花)
『露伴』(新著百種)
『土俗』(新著百種)

男兒』對獨體』綠外縁とも題す『眞美人』を経て二十三年『國民の友』夏期附録に『一口劍』を出し、二十四年『新葉末集』を公にし、二十五年『尾花集』に『五重塔』を收めて出版するに及び、彩光益、發揮して當代並ぶ者なき小説壇の飾りとなれり。

露伴の文章は言ふまでもなく西鶴に出てたり。彼が西鶴に私淑せるは、夙く『國民の友』に同情ある筆法を以て西鶴を紹介せるにても知らるへく、其の初期の作に在りては、作意文體共に元祿の面影を傳へたる者少からず。特に『一刹那』の如き、一刹那の中心機一轉するを主題として人情の或一面を寫さんと試みたる小篇三を合せ、全然西鶴の作風を紹介げり。『奇男兒』『新葉末集』亦よく元祿の神を傳へ、『風流佛』に至りては更に靈動の妙を極め、臨終正念違はず、安らかなる大往生、南無阿彌陀佛は嬌喉に粹の果を送り三重、鳥部野一片の煙となつて御法の風に舞扇、極樂に歌舞の女菩薩一員増したる事疑なしと、様子知りたる和尚様隨喜の涙を落されし(第三)と結ぶあたり、消化し盡せりといふべし。此點に於ては露伴の筆は紅葉の『新色懺悔』『伽羅枕』と等しなみに元祿の模倣と稱するを得べし。然れども彼も亦紅葉の如く、永く模倣の域に止まらず、出て、一家を成し、自己の特色を發揮して雄を一代

⑤ 露伴の文章
『胡蝶』(新著百種)
『一刹那』(文庫)
『風流佛』(新著百種)
『露團々』(都の花)
『露伴』(新著百種)
『土俗』(新著百種)

に稱へたり。而も其文や紅葉と相距る雲泥、紅葉の天艶に對して豪健、優麗に對して絢爛、兩々相照して限なき興趣を具ふ。而して其筆力に至りては、情景並び寫して微に入り幽を闡き、警句屢、口を衝て出づる所、美妙紅葉も之に及ばず。『風流佛』第九回、一向專念佛を刻む條、特に佛體を飾りし、種々の花を削り去る所、續いては第十回、幻に現に戀人と語り、在りし昔を思ひ出で、無我夢中の境に入るあたり、若くは『五重塔』三十二回、夜叉王一齊に暴れ出す状態を描いて、凄壯毛髮を豎たしむる條の如き、洵に渾成の美術たるを得べし。

斯くの如く露伴は其文章に於て既に西鶴を離れたり。然らば其内容は如何。紅葉は前述の如く形式と共に内容をも模倣し、後出て、一家をなし、時に至りても、尙所謂『女物語』の連續に元祿作家の面影を存したりしが、露伴の構想は全然其趣を異にし、世態人情の種々相を觀察して之を活寫せし西鶴紅葉の寫實の筆を學はずして、常に作者の意志より出てたる一定の觀念を以て貫き、又情海に浮沈する所謂浮世女の生活を描ける西鶴紅葉の艶筆に學はずして、好んで意氣在り情あり總ての障害を焼き盡すへき熱烈の一念を懐ける男子を描けり。『風流佛』『一口飯』

『五重塔』の如きは此點に於ける好箇の代表者にして、技藝に對する無上の信仰と無限の熱愛とは全篇を支配する精髓たり。就中『五重塔』一篇最世に喧傳せらる。江都の棟梁に川越源太とて江戸子の生粹、名うての番匠あり。谷中感應寺の塔の建立を受負ひしが、爰に大工十兵衛、技倆は人に劣るべしと覺えねど、才氣足らねば馬鹿よ、のつそりよと蔑まれ、名玉空しく源太の役に服して光を潜むる者あり。之を聞きて執着の念止まず。濟まぬと知りながら意を決して恩ある親方の向に廻り、棟梁を己に引受けんと計りぬ。源太は江戸子腹の清くさばけて讓歩又讓歩、遂に一切を舉げて十兵衛に委し、尙も從來の計畫調査の書類を贈りて助成せんと申出てぬ。然るに自己の技倆を確信せる一刻者、斷乎として其親切を拒み、怒れる源太が意趣返しの宣言にも恐ぢず、源太が子分の暗撃に劍を負ひしも屈せず、のつそりと嘲る數多の工人を督勵して遂に金剛力士が魔軍を睨んで十六丈の姿を現じ、坤軸動かす足踏して巖上に立つたる如き五重塔を造り出でぬ。落成の式近くなつて何事ぞや。一夜半の鐘の音、曇つて平日に似つかず耳きたなく、滿天の夜叉一時に荒れ出し、暴風暴雨天地晦冥、塔は搖き、軌り、又撓む。十兵衛は立てり。やをれ彼

の塔倒るゝは愚か釘一本、抜け板一枚動く事あらば生きて居ようかと生雲塔の頂に上りて勾欄を握み血眼開きて暗黒を睥睨せる様凄じく、手には六分鑿今にも之を含みて十六丈を眞倒に飛び下りなんとす。而も風雨は止みぬ。生雲五層の巨塔は昂然として屹立せり。江戸中の堂塔破れさるは無かりしを目にせる萬衆は、驚異の眼を以て十兵衛の技倆と熱中とを讚歎し、川越の源太も遂に屈しぬ。是れ『五重塔』の梗概なり。一篇女物語を含まず又戀愛譚を帯びず。其中心思想を構成する者は、技術家が其の技術に對する無限の愛着と牢固たる自信なり。其精神的製作の自然界及人間界に對する至大の權威なり。實に此思想は嘗に『五重塔』の中心を形作るのみならず、廣く露伴の小説に入りて隨所其中心となれり。試みに筆を復して『五重塔』以前の作を檢せん。

露伴の小説に現はれたる思想を知らんとする者は、先づ小説中の人物を見るべし。『新葉末集』の西村道也が多才多藝多情多欲の諸質を具へ、所謂粹道の神たる觀あるは、是れ恰も紅葉の『伽羅枕』に於けるが如く、元祿模倣の勢力が、文章のみならず、人物の性格にまで及びし者にして、むしろ露伴の眞面目に非すと雖、尙心機靈活の

妖物として、一片の意氣地没すべからざる者あるは、即ち西鶴以外、此作者の一特質なるべし。げに此意氣や、露伴の作を通じて存する人物の特性の一にして、『一刹那』の風連より『五重塔』の源太に至るまで、皆同一轍に出づ。一世武士の遊惰を憤りて、村政の一刀朱鞘に黒漆もて何時にても死に申候と記せし『奇男兒』の喜劍は、やかて針程も心に面白き事あらば命さへ呉れてやる男、人を救うて恩に着せるは大の嫌なる『風流佛』の珠運なり。世に捨てられて世を捨て、神を罵り佛を憤り、今世に若し正體在さば針の先で衝てやりたきまで心通りたる『對獨體』のお妙は、やかて釋迦を大詩人と稱へて世の短見者流を罵殺せる『毒朱唇』の女なり。三十二相具足の美人を需めて得ずんば天帝に決闘を申込まんといきまく『眞美人』の主人公は、やかて無上の美詩を需めて世にすね我儘を盡せる『血紅星』の皆非居士なり。露伴の作中かくの如き意氣あり張あり、俠氣と奇氣とを併せ有する人物を見ざる事蓋し稀なり。然れどもかゝる類型的性格は、ようせずば一種の性癖若くは傾向に陥り、一步を誤れば單調なる仁俠一式の人物とならんとす。當代の批評家『奇男兒』に讚歎する者ありきと雖、今日より之を見るに斯かる性格は決して露伴の價値を高ふする所以

に非ず。作者の中心思想を形作る人物に至りては全然別種の性格に求めざるべからず。

別種の性格とは何ぞや。藝術に對する非常の熱愛を有する者即是なり。露伴が作に特有なる氣象は、即ち此の一技一藝に達せし人若くは之に憧るゝ人が無限の執着と洪大なる同情とを以て其技藝に對し、意力と情緒と二つなから高調に達して一身を之に抛つ所に存す。試みに見よ。『真美人』は一場の落語に過ぎずと雖、其主人公は眞美に對する愛慕者なり。『風流佛』の珠運は自家の藝術たる彫刻に對する執著の念止み難き者なり。『毒朱唇』の女主人公は大詩人に對する深甚の同情を體現せる者なり。『一口劍』の主人公は鍛刀に對する狂熱的愛著を懷く者なり。『五重塔』の十兵衛は木匠の術に對し、献身の執著動かすべからざる者なり。『血紅星』の皆非は唯、專念に詩を思ふ一個の畸人なり。『新葉末集』は元祿模倣の頂點ながら尙脱俗の釜師淨珠老を點出するを見る。思ふに此等は總て是一個奇矯の性格、現實の社會に於ける普遍的の者に非ずして、其一角に存する特殊の氣質なり。而も其の描寫たるや此等性格の忠實なる寫實的筆路に出でずして、悉く作者理想の

熱火を以て陶冶醇化し、多少超世間的の色彩を有する者として描出する理想的筆致を取れり。此性格や實に露伴の小説の中心思想を形作る重要なる者にして、彼の前條に述べし意氣俠氣の如きは畢竟一の屬性たるに過ぎず。然れども作者の想髓は、斯かる性格が現はす藝術家の自信と自家の藝術に對する無限の愛著とのみにして止まらざるなり。

作者が其高調の詩筆を驅つて寫し出でし所は進んで此等藝術家の精神的製作が永遠の生命を有する事と、其作物の自然界乃至人間界に對して至大の權威を有する事との熱烈なる信仰に及べり。實にや吾生は須臾なり。蜉蝣に等しき人間か、斯の轉瞬の生涯に經營する所の者、孰か亦須臾ならざるべき。人の力に出づる者一として不壞不滅なる者なきなり。一代の功業久しからずして跡方もなきは恰も結びては消ゆる泡沫にも似たり。唯、彼の藝術家の手に成り出づる精神的作物のみは、所有破壊の力に抗して永劫の世に活く。之を作り出でし人間其者も之を破滅する力無く、人力を超越したる大自然の力も之を破滅する能はず。露伴の小説が描ける究竟事象は即ち斯の信仰に外ならず。他作家に在りては往々究竟

事象として作中重きをなす戀愛の描寫の如きは露伴に在りては決して其の要部に非ず。「風流佛」に見えたる熾烈なる戀愛は、其の描寫の妙、直に人の肺腑を衝く者ありと雖、畢竟永劫普遍の一靈作風流佛の一軀を得んか爲の所縁に過ぎずして、戀愛其物の轉瞬の性質に對照して益、藝術品の永劫的性質を明瞭ならしむるを得るなり。

斯くの如きは即ち露伴の小説に現はれたる思想なり。「風流佛」「一口劍」「五重塔」は殆ど此思想を體現せる者にして、特に「五重塔」の十兵衛は上述性格の好箇の標本たるべく、彼の篇中の絶唱と稱せらるゝ暴風雨の一段には、作者か人天の關係に於ける信仰の明かに現はるゝを看取すべし。人は到底天に勝たず。而も往々天を贖す者あり。飛天夜叉王一度怒つて此等贖天の人間を膺懲す。當る者破壊せざる無く、人の經營せる者一として全きなし。唯、高尚なる心靈より出てたる卓越の藝術のみ獨り昂然として千古滅せず、天の威力も之に加ふる能はず、直立十六丈の生雲塔は長へに動かさりき。斯くの如きは固く是れ抒情詩の畛域に入るべき者、現實界の事象を醇化して高く理想の仙界に造る。等しく寫實小説の流を汲むと

蹊、硯友社一流の寫實とは相距る事頗る遠し。之を此節に序するは唯、其源流を同くするか故のみ。

是に於てか吾人は彼の硯友社一派の代表者たる紅葉と比較するの甚興味あるを思ふ。夫れ紅葉は都市生活の寫實小説家なり。其の觀察の及ぶ所頗る狹隘にして、人物や舞臺や、常に作者主觀の限界を出でず。到底彼の人生の種々相を包括し、千狀萬態の社會人物を驅使する客觀的寫實の大筆力を望むへからずと雖、描寫の方法は頗る客觀的に近し。故に其の假作の人物は、假令作者の性格に似、其主觀に入り易き範圍に限らると雖、悉く現實の社會に見らるべき性格にして、決して作者の意志を以て創り出でたる者に非ず。露伴に至りては全然趣を異にし、其想を構ふるや常に一個の觀念の上に立ち、其人物を描くや常に一個の理想の上に寄す。故に其弊流れて脚色の單調となり、人物の一律となり、作者其人の面影至る所に其光輝を閃出す。蓋し作者學博く識高く、篤く藝術を愛し深く佛典に參す。されば人情を寫すや闡明詳に過ぎ割拆細に入り、作中の人物悉く酸いも甘いも噛み別けたる悟道の人たらんとす。人情の偽多きを知りては一旦の恨に神を憤り佛を憤

りし者も、飄然悟り來つて浮世を見れば皆面白き人様々、慘かりし昔時の胸の氷砕けて東風吹く空に糸遊のあるかなきかの身も面白く、佛も可愛く凡夫も可愛く、天地に一つも憎き者なくなりしは獨り『對獨體』のお妙のみに非ず、多くは諦め過き悟り過き、一度仙に入りて復俗に返りし聖者の如く、動もすれば世と相關するなき超絶界に入らんとす。是を以て當代の時尚に投せんには餘りに豫言的にして又餘りに詩的なりき。智識ある讀者鑒賞家を代表すべき當代批評家すら、尙唯筆力の妙をのみ稱へ、幽玄にして凡人の窺知すべきに非ずなど、無意義の讚辭を呈するに止まる、況や一般の讀者に於てをや。批評家は紅葉露二家を併稱すと雖、之を時尚に係けて當代の中心作家を求むれば露伴終に紅葉の敵に非ざるなり。思ふに維新來文明史上の大事實たりし新舊思想の衝突は、社會の外面的生活即ち政治經濟界に於て既に調和を遂げ、其の内面的生活即ち思想界文藝界に於ても亦漸く相融和せんとす。是を以て從來小説家の描寫の對象たりし新舊分子衝突の諷刺も『浮雲』以來鋒銳漸く鈍り、當時正に形成せられつゝありし明治の新生活の忠實なる描寫之に代るに至れり。紅葉及硯友社派は恰も此氣運を代表せるに似たり。斯くて

人心漸く調和を感じ、餘裕を生じ、從て文學上の好尚粗笨を離れて精緻に趣き、諷刺のこちたきを避けて寫實の瀟洒なるを喜ぶに至りぬ。然れども其の調和や、未だ思を形而上に馳する程の安靜に到らず。其の餘裕や未だ藝術の權威を認むる程の深厚に達せず。露伴が藝術の愛慕、其の權威の信仰等の思想か、到底當時の民衆に解せられざりし所以、亦恐らくは茲に存す。

蓋し露伴の作は信念の上に立ち、道念の上に立ち、文藝に對する熱愛を謳ひたる抒情詩なり。之を小説と言ふべくんば一個の理想小説なるべし。而も描く所は徹頭徹尾超絶的事象に非ずして、現實的事象と神秘的理想的事象との渾然融和せる者とす。斯くの如きは小説内容の一進轉歩にして、文藝鑒賞の資格ある國民が異日必ず一度味ふべき詩想に屬し、國民思想の調和一層進み、餘裕豊かなるに及べば、必ず這般深甚の意義を有する作物を要求すべきなり。畢竟是等は後來將に起らんとする小説界の一新時期に到る先驅にして、一般時尚に先つて此の詩的思想を鼓吹せし豫言的述作なり。げに此の豫言的特色こそ露伴の作をして、時尚の如何に係らず、文壇に重きをなさしむる者なりけれ。

紅葉には硯友社一派の諸衛星ありき。露伴は恰も彗星の限なき大空を辿るが如く、孤影孑然として特異の軌道を廻り、決して露伴一派なる者を有せざりき。されば露伴に關する叙述は茲に之を終り、筆を轉じて紅露二家の圏外に立てる二三の小説家に言ひ及ばん。

其の他の作家

『書生氣質』に新小説の端緒を開きし春の屋おぼろは、此期に於て亦二三の作を出せり。二十二年『國民の友』春期附録に載せたる『細君』の如きは、寫實的に完璧に近き點に於ては、短篇なりと雖、遙に前者の上になりと云ふべし。

當時の小説界に於て、竹の舎主人鑿庭篁村は、亦看過すべからざる一方の將たり。篁村は江戸の人、夙に『讀賣』に入り、後『東京朝日』に入り、小説隨筆及劇評に筆を執る其の小説の作、多くは短篇にして江島屋風の戯作に近し。其の『讀賣』『新小説』等に載せたりし者、二十二年『むら竹』と題する合巻の叢書として出版し、同年尙『新著百種』に掘出し物を出し、『國民の友』に『良夜』を出し、單行本として『當世商人氣質』を公にし、翌年『新作十二番』に『勝鬨』をもつし、其他雜誌叢書に載する者少からず。當年の批

評家、筆路の輕妙を賞し、描寫の洒脫を讚し、觀察の奇警を美し、紅葉美妙以外、明治文壇に一旗幟を樹つる者と稱へ、遂には篁村宗の目を生ずるに至れり。蓋し、篁村は世人か馬琴春水の外小説家あるを知らず、鯉丈魯文の外戯作者あるを知らざりし明治十年代の文壇に現はれ、八文字屋江島屋の戯作を涉獵して深く元祿の昔を味ひたる才筆を以て、『讀賣』を江湖に重からしめ、新泉居士太阿居士の名をして斯壇の異彩たらしめし者なり。當時未だ元祿文學の何なるを解せざりし世人は、漫然此の異裝の文章を歡迎したりしが、幾くもなくして文壇元祿を呼ぶ聲漸く起り、美妙紅葉露伴の徒、復興の氣運を鼓吹するに方り、曩に其の眞趣を闡明せられざりし篁村の文章、茲に其の由る所を明にせられて益其の聲價を増し、遂に盛名を一時に馳するに至れり。然り、篁村の價値は是のみ。江島屋八文字屋一流の諷刺文を模倣せりといふに止まる。之を稱揚すべくんば模倣の筆の巧妙を稱せんのみ。明治の文壇を飾る作物たるに至つては與り知らざるなり。此の點に於ては、『當世商人氣質』は蓋し其の傑作たるべし。總て商人は地道に稼かん者成功すべしといふ平凡なる思想を江島屋ぶりに述べたる所、模倣の上乗なり。故に篁村は飽くまで江

島屋ふりを以つて立つべき者にして、決して明治風を試むべきに非ず。若し世潮に連れて寫實小説の筆を執らんとする時は失敗踵を旋さず。彼の『掘出物』の如き或は篁村の傑作と稱し、或は紅葉の『色懺悔』に勝ると褒する者ありと雖、其趣向の平凡なる、其の人物の舊型を出てざる、到底新時代の描寫たるに堪へず。加ふるに文章亦平素の輕妙を缺きて著しく稚氣を帯び總體の調子其積風の清楚を棄て、馬琴風の繁縷に陥る。畢竟篁村は舊思想の人、過去を知れる頭腦を以て舊思想の支配せる社會を観察すべき、戯作者にして、現在及未來を知る眼光を以て新思想の支配せる社會を観察すべき小説家に非ず。其の諷刺の筆を向くる所は、『浮雲』の如く新舊分子の衝突又は明治の新人物に在らずして、明治の御代に残存する舊時代の遺物遺習に在り。而して此の特色を最明瞭に發揮せる者を、『むら竹』に收めたる百餘の短篇となす。要するに篁村は舊文學の殿將、元祿時代諷刺家の面影を今日に示し、者に過ぎず。之を文壇の一異彩とするは可なり。然れども之を激賞して舊文學の筆致よく新時代を寫せりと言ひ、或は美妙紅葉に多く譲らざる小説家なりとなすか如きは、蓋し其眞を失ふといふべし。

○齋藤綠雨

舊文學の系統を引ける作家の中、正直、正太夫即ち齋藤綠雨は著しき特色を有する者なり。正太夫文才早熟、十三四歳の頃既に戯文を草し、俳諧を作りて新聞に投書せりしが、當時盛名ありし魯文の滑稽と諷刺とを歎美し、其門に入りて後日諷刺家たるべき素地を養へり。十七年『都新聞』の前身たる『今日新聞』起るや、魯文に従うて入社し、いたく社主小西義敬の愛する所となりき。此時より綠雨は豪華を喜び、瀟洒を尙ぶ都人士となり、江東みどりの號を以て單純なる人情話を綴り、四六駢體詩歌發句を綯ひ交せ、濃艶華麗七五の馬琴調を恣にせり。後二十三四年の比に至り、正直正太夫の名を以て諷刺家として現はれ、『讀賣』などを舞臺として特色ある批評諷刺の奇才を遺憾なく發揮し同時に小説作家として現はれ、『かくれんぼ』『門三味線』『油地獄』の傑作を出し、盛名一時に世に布けり。前者は二十四年頃『文學世界』の第六卷として出で、一小篇に過ぎずと雖、簡淨流麗精練の致を極め、綠雨作中の代表的逸品なり。中者亦苦心の作にして最成熟せる感想と筆力とを見るべく、後者は同しく二十四年の作にして比較的苦心を経ずして成り、而も世評最噴々たりし者なり。總じて之を見るに、彼か作の内容は必しも大なる價值ある者に非ず、描寫の

對象は下層社會に限られ、取材範圍は江戸の町家東京の狹斜に限られ、人物は若且那難妓等に限られ、總て狹隘にして一種の特色ある部分にのみ其銳利なる觀察眼を向けたり。是を以て概ね同工異曲、舊文學の習氣を脱せず。其精髓は上述何れか一篇に盡きたりといふべし。唯形體即文章に至つては綠雨の價值の主なる部分にして、或は巧緻烹練の限を盡し、或は進んで清淡瀟洒の境に入り、機鋒潑刺として才氣溢るゝか如く、亦一代の文章家たり。

吾人は又森鷗外漁史の名を忘るべからず。鷗外は固と翻譯家又は評論家として重要な地位を占むべき者なるも、作家として亦棄つべからず。二十三年『國民の友』に掲げたる『舞姫』、『柵草紙』に載せたる『うたかたの記』、『及翌年』、『新著百種』に載せたる『文使』の如きは、着想文章、共に作者か私淑し精通する獨乙文學の面影を移して清新幽高の趣致に富む。三篇共に天涯客寓の日本青年と薄命可憐の獨乙少女との關係を描き、同情に富める本邦青年か少女の困厄を救ふに端を發し、熱烈なる愛情を懷ける少女が衷心の感謝を表はすに局を結ぶ。特に『舞姫』、『空象の記』の二篇は、青年か留學生なる事、少女が藝術に關係ある逆境の兒なる事、少女が青年に對

（森鷗外）

る感謝の念終に發して熱烈なる戀愛に變ずる事等、殆ど其の軌を一にす。脚色かくの如く變化なしと雖、着想は純然たる新時代の者にして、確に明治思想の一面を傳ふるに足る。唯『空象の記』、『文使』、『聊か本邦青年の思想生活に縁遠く、寧ろ西洋短篇の翻譯を見るの思あり、且小説よりも寧ろ抒情詩的趣致に富めりと雖、『舞姫』は全く之を擺脫し、心理描寫、性格發揮の一點など當年寫實小説の間に伍して十分重きをなすに足る。憾むらくは其の文章、品位餘ありて情熱足らず、委曲餘ありて勢力足らず。然れども情景並至りて清楚比ひなき所、一新文體を斯壇に寄與して後來流行の源泉となりし功亦没すべからざる者あり。

上述諸家の成人らしきに對し、矢崎嵯峨の舍主人（おむろ）は青春の情感漲り溢れたり。二十一年『大和錦』に小篇『薄命のすゝ子』を掲げ、次て『都の花』に『初戀』の佳作を出し、より既に美しき夢の如き幼時の追想に無限の美感を懷き、可憐純真の情趣を描きて幽玄の境に入る者あり。其の好んで描寫せる女性は無垢稚嬌天女の如く、之に配せる男性は陰鬱にして一種の悲觀を抱ける狷介の人なりき。彼の北邙散士の名を以て『國民の友』に掲げたる『流轉』の如きも亦此の陰鬱なる觀念と純真な

○矢崎嵯峨の舍

る情緒との發露せる者、當年の傑作として「初戀」と共に懊惱の詩人たる彼の面目を遺憾なく表示せり。其他「涙の谷」及「都の花」所載の「腐玉子」「婿選み」等より二十四年「國民の友」に掲げし「夢幻境」に至るまで、獨特の大作あるに非ず、篇什の豊富なる者あるに非ずと雖、筆意一脈の情熱を帯び、高潔なる觀念を含みて、明晰直截、能く青年の肺腑を刺す。類を以て分たば、露伴と同じく理想小説と呼ぶべく、寫實の野に生じたる一異草として性格世相の忠實なる描寫以外、情緒發動の一部を描いて、天真流露、殆ど抒情詩の境に入る。而も其の抒情詩的色彩は、露伴の如く高遠にして理想的なる者に非ずして、熱烈にして哀觀を湛ふる者なり。露伴を以て、陽春白雪の詩を歌ふ者とすれば、彼は即ち月下相思の詩を賦する者なり。彼は又新體詩抒情文の作家として、當時に重きをなせるを併せ見れば、斯かる詩的情緒の特色の由來甚遠きを知るべし。

當年の文壇に多少の作を出し、小説家には、尙「數鶯」の作者、田邊花圃女史、「露子」の作者、石橋忍月、其他宮崎三味、須藤南翠、前田香雪、高橋太華、堀紫山人、渡邊霞亭等あり。或は「國民の友」「都の花」「新小説」「柵草紙」「日本の文華」等の雑誌に、或は「新著百」

此文字新小説

二庫

女新説

日本新説

新著百

種『小説群芳』新作十二番『聚芳十種』『文學界』等の合巻に、或は諸新聞に、或は單行本に、皆多少の創作を出せり。又滑稽趣味を以て現はれたる作家には、南新二、幸堂、鈴木得知等あり。戯作者の滑稽方面を傳承して多少其品格を高めたり。明治の滑稽文學を導く先驅として、必しも棄つべきに非ず。

譯外(翻譯家としての)

終に臨みて翻譯小説の概觀を述べし。曩に新文學の曙光を論するや、思軒の英文翻譯と二葉亭の露文翻譯とを以て之に擬しぬ。爾來小説の翻譯は、詩歌戲曲等他方面の翻譯と共に徐々として現はれ、森鷗外、内田不知庵、原抱一庵、小金井喜美子、若松賤子等の翻譯家を見るに至れり。就中譯外獨乙文學の紹介者を以て立ち二十二年以來の翻譯壇を双肩に荷うて、二葉亭の後繼となりぬ。

譯外素と醫家の出、其獨乙語學に於ける、因る所有るなり。彼は語學の智識を媒介として深く獨文學の精髓に參し、兼て彼國美學並に文藝批判の精神方法を學び、翫賞の餘、進んで評論に従ひ、更に又筆を翻譯に染めたり。而して譯する所、小説を始として、劇詩抒情詩に及び、多くは「國民の友」及「柵草紙」によりて世に出せり。劇詩

森鷗外

抒情詩は之を後節に譲り、特に小説に就て觀察するに、其原作を選ぶや、リットン、ユーゴー、ツルゲネーフ等一二作家に限らるゝ事なく、比較的廣く諸國諸種の作家を探れり。今二十六年の比に至るまでの譯筆を列擧すれば、『戰僧』、『みくづ』、『綠葉歎』は佛のドーデーより、『黃綬章』、『二夜』は獨のバックレンデルより、『惡因縁』、『地震』は同クライストより、『浮世の波』は同ステルンより、『瑞西館』は露のトルストイより、『該撒』は同ツルゲネーフより、『新浦島』は米國アルキングより、『洪水』は同ブレットハートより、『玉を抱いて罪あり』は獨のホッフマンより、『埋れ木』は同シュビンより、『女丈夫』は同フレンチエルより、『ぬけうり』は露のレルモントルフより來りし者にして、悉く收めて二十五年出版の『水沫集』と三十年出版の『かけ草』との中に在り。然れども獨乙以外の作物は悉く其の獨乙譯より重譯せる者なれば、之を以て直に各國文學の面目を紹介したりと稱し難く、讀過一番して獨文學の色調の横溢せるを見る。而して集中の作、『埋れ木』を除くの外、皆短篇小品たるに過ぎずと雖、『二夜』、『地震』、『該撒』等、尺幅尙實惜すべき者なきに非ず。『埋木』に至りては藝術家を題材とせる幽趣限なき名作にして、天才煥發、キオリンの精藝時人を驚かしたる二十四歳の青年樂手ゲザ、ファン、ザイレンを

「水沫集」

「埋れ木」

主人公となし、之を周るに落魄の記者デリレオ、之か子なる可憐の少女アンネット、身天才あるに非ずして好運よく名利の俗念を満足するを得たりし、ピヤノ弾きステルニイ及巴里モンマルトン街に住める數多浮浪の伶人文士を以てし、斯くして、かの空想ありて實行なく、自家の才能を過信して生涯何事をもえ遂げざる一種の性格を名殘なく寫し出でぬ。主人公ゲザ誠に斯道の天才、自負自信の念強烈にして美しき妄想を未來に馳せ、胸中滿幅の妙譜、紙に寫さば手に從つて成るべく、不朽の名忽ち一世に高かるべしと思ひ上りぬ。然れども藝術家に通有なる倦怠病コンヒトは彼の希望をしてはかなき妄想に終らしめたり。彼が神興に乗して事に從ふや恰も熱を病める者の如く、數日の間萬事を抛つて之に凝る。されど感興の天馬一たび彼を搖り落さば、想像の糸忽ち斷絶して倦怠身を襲ひ、加ふるに曲譜瓊瑾百出嫌厭の情堪ふへからざるに至る。斯くて此の天才の作は僅にダンテが『地獄篇』の譜に面影を止めて他は悉く倦怠病の墓穴に烟の如く消え入りぬ。而も此曲は彼の戀人、許嫁、所有寶にも代へ難きアンネットと共に陋劣なるステルニイに奪はれたれば傷心の極遂に癡狂となり、空しく行末の成功を夢みなから、一代の天才、あはれ埋れ

木の花咲く時に遭はずして老い朽ちぬ。斯くの如きは近代歐洲に於ける著しき現象にして、所謂世紀末の病的期間には特に其勢を逞うする者なり。囑外閑雅の筆、譯し來りて感興深く、正に是れ、本邦藝苑に起らんとするウルテリズムの豫言とも見らるべし。

囑外の譯文は其の得失共に彼が創作の文に似たり。否創作の文體却て翻譯の筆に出でたり。思ふに彼の創作は思想形式共に外國文學に學べるを以て、之を二葉亭に比するに、二葉亭は翻譯も猶創作の如く見ゆるに反し、囑外は創作も猶翻譯なるか如き感あり。運筆悠々として迫らず、悲壯を描くも優麗を寫すも、等しく高雅なる擬古調を以てし、温藉ありて激越に缺くる處、曩に創作に就て述べし所以の者又移して茲に言ふべし。然れども囑外固と深遠の學識を具へ、一定の審美見を抱くを以て、落想着筆一に其典據に依り、決して一點一劃を濫にせず、立案慎重注意周到、彼の多作濫作の輩をして走り且僵れしむるの概あり。

當時の翻譯小説には尙二十六年の『世界文庫』あり。田山花袋はトルストイの『コサアク兵』を内田不知庵は同『めごと』を松居松葉はセルバンテスの『鍾機翁』を譯せり。

されど概ね抄譯又は梗概譯に過ぎず、特に重きを置くに足らず。

第三節 傳奇小説の興廢

春の屋二葉亭以來寫實小説の潮流天下に瀰漫し二十年より二十六年頃に至るまで、一代の文壇を被うて其全盛を誇りぬ。特に二十二、二十三兩年は斯界無前の盛觀を呈し、名家の輩出、名作の出版、前後相望み中にも『色懺悔』『胡蝶』『細君』を始め『むら竹』『當世商人氣質』『露子姫』『堀出物』『風流佛』『殘菊』『墨染櫻』『流轉』『舞姫』『一口劍』『新作十二番』『葉末集』『空象の記』『夏瘦』『伽羅枕』等、此一期間に於ける名篇の殆ど全部を産出しぬ。勿論是等は、今日より之を見れば、其の質に於て必しも優等なる者に非すと雖、少くも歴史的價値に於て輕からざる地位を有する者なり。げにや此の二箇年は、啻に寫實小説の一類のみならず、傳奇小説、韻文、各種の翻譯亦競うて起り、雜誌叢書も連りに刊行せられ、特に評壇の花新に咲き出て、高等批評の端緒開かれ、總て文學界の所有方面に於ける活動頗る目覺しかりし年なりき。寫實小説は實に此の文壇の順潮に乗じて進歩の先頭に立ち、以て一代の文運を支配せる

なり。

須藤南翠

斯かる間に本邦小説の他の一種たる傳奇小説は如何に成り行きしか。曩に馬琴の勢力失墜して元祿文學復興せるより、傳奇的趣味を帯べる總ての小説は、新に勃興し來れる寫實的小説に壓倒せられて一時其の聲息を潜め、僅かに前期政治小説の系統を引ける鐵腸龍溪南翠等の作、及時代物の作者たる學海篁村三昧等の作によりて其の命脈を繋きたりき。南翠は巧に時と推移し、或は政治小説を作り或は歴史小説をもつし、更に進んで寫實小説に指を染め探偵物に手を下さんとす。前期以來『改進黨新聞』に據りて俗流に愛讀せられ、此期に入りて『朧月夜』『照日葵』下『雜黃鸝』『こぼれ松葉』等を出して一部讀者に迎へられたり。鐵腸は専門文學者に非ず

矢野龍溪

雖、此期に於て又『南洋の大波瀾』等を出して政治家の空想を小説に寓したりき。龍溪は政治家中の學者にして、既に前期に於て國民政治思想の漸く發達せんとするを見るや、『經國美談』を作りて之を鼓吹し、此の期に至りて學術思想弘布の必要を見るや、科學應用の冒險小説たる『浮城物語』を著して科學者の空想を小説に寓したりき。2 依田學海は漢學者より出て、小説の批評、演劇の評判に筆を執り、兼て小説

3. 依田學海

4

脚本の創作を試みし者にして、其小説は『楠木』『十津川』等、主として南北朝時代の事蹟を綴りたる時代物なりき。篁村は江島屋風を本領とするも、時に又時代物の作『勝鬪』の如きあり。されど筆路の輕妙を見る外取り出て、言ふべきなし。三昧の『桂姫』『塙團右衛門』等亦世話物作者の手に成りし時代物たるを免れず。要するに當代の傳奇小説は事件の爲に人物を作る弊に陥り、其の人物は悉く無理なる結構に操らるゝ、傀儡の如き者、其の量に於て到底寫實小説に及はさると共に其の質に於ても亦紅葉露伴の作に匹すべき者あらざりき。唯一篇の長短に至つては、寫實小説の概ね短小なるに反し、傳奇小説に屬する者は比較的長大なるが故に、傳奇を揚ぐる者、往々其雄大の風姿遙に寫實小説の規模狭小なるに勝ると稱す。然れども傳奇物の雄大は、少くも馬琴の域に進まされば、以て識者を動かすに足らず。内容空虚にして何等人生と相關する事なき者、徒に外形の大を以て誇るも、到底寫實小説に加ふる能はさるなり。故に教養ある社會の同情は大抵後者に注かれ、重なる評論家即ち春の屋、隅外、悉月、不知庵、美妙等連りに心理的小説を鼓吹せり。勿論是等評家は、皆一方にては寫實小説の作家なりと雖、以て當代教養ある讀者社會を代表

せしむるに故障なきなり。天下は依然寫實小説の天下たるを失はず。

然れども勢窮まれば則ち返る。世の好尚は移りぬ、紅葉一派の寫實小説は漸く倦厭せらるゝに至りぬ。全盛は二十三年に止めて翌年よりは著しく衰へ、『聚芳十種』『文學世界』『小説百家選』の諸什は片々たる小品に過ぎず、紅露二家さすがに『二人女房』『三人妻』『五重塔』等の名作ありて斯派の爲に光耀を揚げたりと雖、知名の作家、或は隨筆に隠れ、或は諷刺文に通れ、或は評論に移り、創作寥寥、一般の風潮は遂に前年の繁榮を持續する事能はさりき。思ふに國民新奇を追ふ性質は、獨り物質界に存するのみならず、藝術界に於ても亦著しき者あり。春の屋か模寫小説を唱へ出で、より斯派の流行かくの如く盛なりしは、馬琴春水の末輩、一九三馬の末流の陋猥なる戯作に比して遙に卓越せる品格と價值とを有するに因る事論を俟たずと雖、一には又舊時代千篇一律の勸懲乃至駄洒落に嫌きて、明治小説の新奇なる色彩を喜べりしならずや。且文學の讀者は必しも教養ある識者ならず、彼等の好尚必しも識者の其れと一致するを保せず。勿論識者の指導よく一般讀者の趣味を左右する事少からずと雖、當代の評論家か寫實小説に謳歌せるを見て、直ちに一般讀者

か之に對する意見嗜好を斷ずるは少しく輕卒に過ぎたり。されば當年の批評家即ち教養ある讀者を代表すへき人々が、尙寫實小説を捨てざるに際し、既に其の盛運を經過し去りしを見れば、一般讀者の之に對する倦厭漸く起りしを知るべし。

人心既に罅隙あり、新奇の作物に對する翹望爰に起り、乃ち此罅隙を充し、此の翹望に應ずる小説界の新潮は、從來屏息したりし傳奇的方面に起りぬ。國民好奇の念に投じ寫實小説に嫌きたる人目を一洗せんは、唯傳奇物のみ之を能くすへかりしなり。村上浪六の遊俠小説、黒岩涙香の探偵小説は即ち此要求に應じて現れし者なりき。蓋し當時の寫實小説は假令教養ある讀者に捨てられさりしと雖、其裡おのづから凋落の素因を藏せざるに非ず。夫れ寫實小説は固と自然を宗とし、一切の私心を去り自我を解脱して世相の眞を寫す者なり。されば其の究竟は實世間を觀察して褒貶なく黜陟なく、所有作者の主觀を排して逍遙か所謂沒理想の域に入り、以て世態人情の眞相を披瀝するに在り。故に其至れるや、大自然を尺幅に縮め、大造化を壺中に收めて、渾成無瑕、之を探れば愈深く之を索むれば愈杳かに、恰も彼の逍遙か寓言に見わたる「底知らずの湖」にも似たり。然れどもかくの如きは

總ての作家に望むべきに非ず。假令觀察自我を解脱するも、觀察力其物の鋭鈍、其力の及ぶ範圍の廣狹は固く天分に出づ。故に其眼睛に映する世相は自己に親しき世相なり。觀察に上る人情は自己に近き人情なり。捉へ得たる材料の上には敢て褒貶の私見を狹まずと雖、材料其物は既に主觀的選擇を経たるを如何せん。要するに意識的には能く沒理想純客觀の描寫を試み得べきも、無意識的には其根本に於て主觀の影、即ち作者の采采を帯びざるを得ず。故に其の下れるや、自己の管見に出でたる一種の世態人情を寫し出づるに止まる。且寫實の手法や、其眞を得んとするの極、巧拙共に往々寫美の約束を破り、描寫の對象動もすれば美の域外に逸する事あり。斯くの如きは寫實小説の凋落する素因となるべき者にして、其傾向の強弱は直に作物の價值を高下するに足るべし。當時の寫實小説は正に此の則を以て律せらるべきなり。

二十三年逍遙は『讀賣』紙上に『小説三派を論じて主事派(固有派)、性情派(折衷派)、人間派の目を設け、當時の小説を評して悉く性情派の初歩なる者となし、主事派なる舊作家以外に新旗幟を樹てたるも、性情を活寫するを主としながら、尙之を寫すに方

りて偏に事件に依らんとする所、未だ性情派の境を出でずと稱し、人間派に至りては當今の文壇絶て無しと言へり。『柵草紙』の隅外之を批判してハルトマンの類想、個想、小天地想を配當し、性情派を以て正しく個想派なりとせり。げに當代の新作家は性情派個想派に屬して而も未だ至らざる者なりき。性情の活寫や、世相の觀察や、固より主事派の如く類型的ならずと雖、因て來る根本が狹隘なる小主觀に存するを以て、其の弊や同一範圍内の世相人物を描寫するに止まる。故に當時の小説を讀んで彷彿し得べきは、唯東京の中流乃至下流社會の中、特に作者周圍の一部分に於ける世態人情のみ。加ふるに元祿文學復興の結果、利弊共に之を承け、形より入りて遂に神をも傳へ、動もすれば沃艷なる色魔界を寫して其實相を得んとし、野の花の如く美しく自らなる人情の發動を斥けて、一向きに彼の魔界の趣味に養はれつゝ、粹よいきよと曲りくねりたる人情の發動を描き、其極往々寫美の域を脱して醜猥に陥らんとす。斯かる作物の社會に於ける壽命は決して長かる能はず。寫實小説を回護し助長したりし識者社會と雖、爰に至りて嫌焉たらざる者幾何ぞ。茲に於てか小説の理想を問ひ觀念を論じ、當代小説の今少し深く且廣からん事を

村上浪六

求むる傾向批評家の間に盛に起り、作者に在りても、從來辭句の鍛鍊文體の選擇に苦心し、狹隘なる主觀に限られたる局部小説を以て能事畢れりとなせる者、反省し考慮して恣りに製作に逸らす。既に名を成せる者、將に名を成さんとする者、齊しく默想の裡に沈みて、茲に一般小説界の不振を來しぬ。此の趨勢は彼の恒心なき俗衆の倦み易く厭き易きと相扶けて、大勢遂に寫實小説を見捨てぬ。

此の時に方りて浪六が遊俠小説世に現れぬ。浪六は思軒の下に『報知新聞』に在り、其の『叢談』に原抱一庵村井弦齋運塚麗水等と執筆せし後進作家にして、二十四年『三日月』を出版するや、奇矯の筆、善く市井の遊俠三日月次郎吉を寫し、『俠客傳』にも見るべからざる生采の奕々たる者ありしかば、一代の讀書社會は翕然として之に就きぬ。次て『井筒女之助』『奴の小萬』出で、皆愛すべき遊俠を描きて成功したりしかば、後進の浪六一躍して大家の列に入り、先進作家をして一時後へに瞠若たらしめたり。爾來三十六七年の交に至るまで、『鬼奴』『破太鼓』『夜嵐』『深見笠』『髯の自休』『安田作兵衛』等、作る所皆過去の歴史に於ける三日月一流の人物を描いて江戸時代中流以下の社會に於ける粹と俠との理想を發揮し、其の主人公は宛ら此の思想の

『三日月』

權化の如く、脚色事件、總て傳奇的色彩を帶び、以て寫實に倦みたる一般の時好に投じぬ。是に於てか、傳奇小説の反動的流行を小説界に見るに至れり。

げに此反動は寫實小説の失勢と民心の倦怠とに根ざし、新奇を好む一般傾向に出でたりと雖、特に浪六に至りて其の盛を極めしは別に故あり。蓋し浪六の作は主事派類想派に屬する點に於て南翠龍溪等の作品に異なる無しと雖、讀者を動かすへき一種の魔力を有する點に於て大に趣を異にす。而して其の魔力たるや、一に小説主人公の性格と國民性との契合、及之を描くに恰當なる奇矯の筆致に存す。夫れ三日月一輩の性格を形作る俠と粹との二特質は、江戸時代國民の間に醗酵し來りし一種の氣象にして、假令往々笑ふべき不自然沒人情の屈曲ありきとするも、既に三百年間中流以下の理想となり、明治の今日に傳へて尙其の胸奥を充せる者なれば、任俠風流の行動直に讀者の肺腑を衝き、加ふるに描寫の筆力亦之に添ふ所ありしかば、讀書社會は茲に新なる形式を以て復活したる俠客傳を得て、歡喜措く能はざりしなり。

然れども浪六に取るべき所唯是のみ。題材と筆力と共に、『三日月』『女之助』に盡

きて、爾來唯千篇一律、奇構も奇に慣れては興なく、索然として情味共に失ふ。文章亦舞文弄筆に流れ蘊蓄なく研究なきの致す所、時に杜選に過ぎ孟浪に失し、到底紅露一輩の精練なる文章に備すべきに非ず。内容の空虚は之にも勝り、彼の管見的人生觀を寓せりと非難せられし寫實小説に較ぶるも、尙數等の下に在らんとす。是を以て觀衆の隨喜讚歎するに係らず、識者夙に之を却け撥鬢小説の名を與へて小説界墮落の一現象とせり。要するに撥鬢小説は主事派類想派の劣等なる者なれば、性情派個想派たる從來寫實小説を壓して獨り隆盛の域に上る事あらば、小説界は明に後退せるなり。斯かる間に、倦み易き看衆は、内容形式共に變化なきに嫌きて復浪六に同情せざるに至りぬ。

物滯れば必ず腐る。西南の妖雲去りて國家事なき、最早二十年に垂とし、十七年朝鮮の變亂は深く國民を刺撃するに足らず、二十三年國會開設の事一時人の耳目を側てしめしと雖、尙太平の氣象海内に充ちたりしかば、民心茲に倦怠の色を現せり。倦怠は延て文壇に及び、文學思潮革新の活動ありてより十年の今日、斯界の意氣又當初の如くならず。罅隙百出撥鬢小説を喚起して茲に墮落の端を發き、幾も

なくして之を棄つるや、停滯又停滯、墮落は進んで探偵小説の流行を來すに至りぬ。探偵小説は恰も當時劇壇に起りし壯士芝居の如く、疑獄の始末を以て骨子となし之に人情の糸を搦みたる者、欺騙、邪淫、殺人、強盜等所有犯罪の秘密と、之を偵知する探偵社會の苦心の秘密とを描いて好奇の俗衆に投するなり。多くは西洋物の抄譯又は繙案にして一時の盛榮に乘じ、出づる者甚多く、遂に其の叢書すら見るに至りぬ。涙香小史は實に是等作家の代表者なり。

涙香は通俗新聞文學者として成功せる者の一にして、西洋探偵小説を繙するや唯其の意を取りて自家藥籠中の者となし、俗衆の智識本邦の事情を以て了解し得へき範圍に於て之を平易精細の文章に綴り出せり。『鐵假面』非小説『大金塊』『死美人』『人耶鬼耶』等は一時讀書界を風靡したる者にして、其の探偵的興味は讀む者をして巻を措く能はざらしめぬ。然れども其の興味たるや、畢竟探求的にして、恍惚觀照の文學的畛域に甚遠き者なるは言を俟たず。

彼も一時此も一時、操守なき俗衆の嗜好は、推移する事走馬燈にも似たり。二十四五年以來不振に陥りし小説界は卑俗なる浪六涙香小説によりて漸く命脈を維

澤塚常水
村井瑞育
坂本法橋

きしも、二十六七年に及びては其も亦廢れて今や不振の極に達しぬ。小説不振の我文壇は如何なる者を要求せしか。抑も讀書社會に如何なる好伴侶在りて小説を捨てたりしか。逍遙は當時小説不振の因縁を尋ねて、史傳の流行宗教熱の昂上等を數へたり。げに當年文壇に起りし人物評傳、歴史評論と哲學宗教の問題とは人心をして小説を離れしむるに力ありしと共に、又小説を離れし人心を收めて此が好伴侶たるに適したりしなり。宗教界の活動はかの國粹運動勃興の際に萌し二十五年有名なる宗教々育衝突の大問題起るに及んで狂騒を極め、且哲學及神學の研究漸く盛にして思想界多事なりき。然れども純文學に對する此事象の影響は必しも重大なる者に非ず。吾人の注目すべきは即ち史論評傳の側に在り。思ふに史傳の流行は二十二年頃既に其の萌芽を發し、民友社博文館等の書肆か連りに内外豪傑の傳記を出し、より始めて、二十四年田口鼎軒が雑誌『史海』を發行せし頃、に及んで斯界の活氣大に加はり、人物の評傳史實の評論相次て出で、論争一時の問題たりし者少からず。續て二十六年民友社の諸文士が『十二文豪』を發行せし頃に至り、文壇の嗜好は一轉して之に向ひ、小説に嫌らざりし讀書界は相率ゐて之に歸し

九史傳の流行

相傳史海田口鼎軒

十二文豪

村井瑞育

ぬ。

史傳流行の勢力は一方に於て小説の讀書を奪ひ、作者を屏息せしめつゝある間他の一方に於ては小説其者に影響して、爰に新なる小説を喚ひ起しぬ。讀書社會に於ける過去願望の情感は、新奇を追ふに疲れたる社會の現状と相縁りて爰に歴史小説の渴望となりぬ。『小説神髓』以來一切の過去を抛つて革新を稱道したる識者社會は、國民文物に對する過去の歷程、即ち歴史の權威を感じ、劇部に於ける時代物と團菊の演技との遂に除くへからざるか如く、歴史小説亦捨つべきに非ざるを知り、且其の師表とする泰西騷壇に於ても、歴史小説の一派、優に世話小説に對立するを見て茲に自覺を生じ、今更に馬琴の精力に驚き、其荒唐の過、勸懲の失以外、別に歴史小説家としての價值を認め、更に進んで斯かる過失なき優秀なる歴史小説を現今の文界に得て、以て墮落の極に達したる斯壇を廓清せんとするに至りぬ。二十六年『讀賣』新聞が賞を懸けて歴史小説を募集せしは、即ち此渴望の一端を表はす者にして、高山樗牛の『瀧口入道』は之に應じて出てし者なりき。其他運塚麗水村井弦齊塚原澁柿園(後の蓼洲)等の作家は皆此氣運に乗じて世に用ゐられたり。

然れども當時歴史小説に對する渴望は、唯渴望に止まりて遂に充さるゝに至らざりき。上述諸作家の篇什、唯勸懲の臭味荒唐の弊套を脱せるのみにて、別に從來の主事派的時代物に優る所なく、其分量を以てするも、成功の度を以てするも、到底紅露一派の敵に非ず。唯澁柿園の筆力稍望を屬するに足る者ありきと雖、麗水弦齋漸次に方向を轉じ、歴史小説勃興の氣運遂に去りぬ。斯壇に於ける成功は暫く之を後の世の大才に俟たさるへからず。

第四節 新體詩及戯曲

新體詩

『新體詩抄』が詩界革新の運動を起してより既に五年の星霜を閲したりと雖、斯界之に續く勇者なくして空しく十五年の故態に停りぬ。小説界の革新を遂げたる『小説神髓』は後れて起りしかども、硯友社一派差し次きて崛起し、寫實小説の大旆文壇を風靡し、詩界の寂寥を餘所に見て獨り進歩の道程に上りぬ。思ふに『新體詩抄』の諸篇は、文學史上の位置を以て論すれば、正に小説界の『書生氣質』に相當すれども、其

内容實質に至りては恰も、織田純一郎等の翻譯小説政治小説と相若くの觀あり。嚴格に言へば新體詩界の『書生氣質』は未だ起らざりしなり。況んや『浮雲』をや、況んや『夏木立』、『二人女房』、『風流佛』をや。蓋し『詩抄』の詩篇は、聲調新なりと雖、卑しきを免れず、用語自由なりと雖、蕪雜なるを避け難く、思想の廣濶は可なるも爲に散文的に陥り、表現の法明瞭なるは可なるも爲に露骨に過きたり。されば格调用語の雅醇ならん事にのみ熱中する歌人乃至國學者等の之を嗤笑せしは勿論、一般文藝界に於ても亦其の崇拜者甚多からざりき。曙光を十五年に發して今に其繼續者なく、唯徒に學童の傳唱して軍歌の代りとするに任せたるは、斯かる事情に基く事少からざるなり。然れども新時代の思想感情は到底在來の形式を以て表現する能はざるを以て新體詩は遂に没すへからず。果然此の圓融自在なる形式に充用するに比較的雅醇なる詩語を以てし、以て一面には、勉めて卑野と蕪雜と散漫と露骨とを避けんと試みたる一派の詩人を輩出せり。

落莫たる詩界は、二十年美妙紅葉九華か『新體詩選』を刊行し、湯淺半月(吉郎)が時々小品を『國民の友』に掲げ、二十一年落合直文(孝女白菊の歌)を『東洋學藝雜誌』に出し、二

十二年鷗外等、新聲社の人々譯詩『面影』を『國民の友』に載するに及んで漸く面目を改めたり。就中、美妙齋の軍歌は今も兒童の口に誦はれ、白菊の歌は井上巽軒の漢詩を繙せる長篇、當時の呼物として忽ち數箇の雜誌に轉載せられ、『面影』は鷗外喜美子直文器堂等か獨英諸家及明の高青邱の詩を和譯若くは漢譯し、或は原意のみを取り或は字句韻法をも辿りて譯出せる長短十二篇を集めたる者にて、獨の『ギョオテ、シヨツ、フオル、ハイネ、ホフマン、レナウ』英のバイロンを主として其他二三作家の小篇を交へたり。爾來翻譯創作兩なから起り、二十三年に入りて作家の輩出少からさりき。此方面に於ても『國民の友』は隱然たる保護者なりき。『於母影』と同年、既に可行懐郷淺水疎影、詳郷等の名を以て、ゲーテ、シルレル等獨乙諸名家の短章を譯せる者、及美妙齋の創作小篇を收め、翌年更に矢崎北邨、散士、嵯峨の屋、宮崎湖處子、中西梅花道人等の作を收め斯壇の中心となれり。是より大西操山、戸川殘花、磯貝雲峰等の新作家を出し、『日本評論』、『文庫』等の文學雜誌皆新體詩を以て誌上の飾りとするに至れり。就中、美妙湖處子、梅花の三者最勉め、恰も當時の詩壇を代表する觀ありき。

(二) 山田美妙

美妙は創始の才ある人なり。新小説の作家として、言文一致體の研究家として

(三) 宮崎湖處子

又文界評論家として、既に其の才名を成し、が、今又新體詩の作者、韻文の研究家として現はれたり。二十三年『國民の友』に掲げし『醉沈香』を始め、長短の創作及翻譯を同誌に出し、者少からず。或は瀟洒或は妖艶なる小説的詩想を詠出し、且つ深く詩形に留意して洗練の語句を行き。湖處子は小説を作り、又美文をものし、常に純潔天真なる抒情詩の思想を表せり。二十三年世に問ひし『歸省』の一篇の如きは、作者か一夏歸省の二週日間の感想録に過ぎずと雖、理想の清高、情感の純潔、共に青春の氣象を帯びて恰も萌え出てたる若草の如く、文章亦英文の脈調を以て和漢の語句を驅使し、想と形と相俟つて優に新散文詩の境に入る。されば新體詩の如きは最力を用ひ、同年以後『國民の友』誌上に其什を見ざる事稀なり。而して其の作風は勿論『歸省』に類似し、詩材亦田園の趣を帯び、自然の描寫に富み、美妙か事る人事を驅へるに對し、好箇の對照をなせり。梅花道人は樂天詩人なり。飄逸にして奇氣を負ひ、性情流露して天真覆ふへからざる趣あり。二十四年『國民の友』に出てたる『十九の姫』等、前年よりの作夥しく、遂に同年『新體梅花詩集』を刊行するに至れり。此集固とより片々たる小冊子なりと雖、『新體詩抄』以來最初の詩集にして、且つ唯一作

(四) 中西梅花

矢崎嵯峨の屋

家の創作をのみ集めたる新體詩集の嚆矢なり。其他嵯峨の屋は其の小説に於けるか如く、情感の激越を以て優る。西詩反譯の如きは、口語を用ゐて能く詩趣の饒なるを得たり。

上述新作家の用ゐし詩形は概ね『新體詩抄』の採りし所に従へりと雖、用語は『詩抄』の詩人が漢語俗語併せ用ゐて羈束する所なく、其の弊や蕪雜に陥り乾燥に失し、詩の成立の要素たる言語美を没却して顧さらんとせるに反し、著しく雅醇の度を増し、用語を古文學に取り、句調を和歌に學びたりき。勿論嵯峨の屋の如き、言文一致體を詩に試みし者無きに非ざるも、美妙齋の如き散文に於ける言文一致の勇將も韻文に於ては雅語雅調を主張せる程なれば、一般の風潮は『詩抄』の用意と方向を異にせりき。是れ一は當時復興の勢凄じかりし古文學の影響にも因るなり。

此の時に方りて、一般評論界の活動につれて、新體詩も亦斯壇の問題となり、韻文論詩論は小説論と共に評家論争の好題目となりき。而して之に活氣を與へたりし者は亦美妙齋なりき。二十三年末より翌年に亘り、一篇の長論文を『國民の友』に連載し、題して『日本韻文論』といふ。此論の主とする所は勿論新韻文の形式に在

りて未だ其内容に及はざりきと雖、詩歌研究の端緒之より開け、不知庵忍月鵬外等交々之を論じ、辯難應酬甚盛なりき。此論争や當時の新體詩に直接影響する所さまで大ならざりしかども、從來詩歌に對する蹈襲的習慣を破り、大に研究的精神を養ひし一條は没すへからざる功績なり。

前記作家に引續き、國文家歌人の徒か、世潮につれて筆を新詩形に染めし者少からず。『白菊の歌』の作者落合直文は二十六年『騎馬旅行』の長篇をもつし、其他中村秋香大和田建樹、佐々木信綱、小中村義象、黒川真頼等あり。然れども此等皆擬古體長歌體を取り、詞章雅醇を極むれども、詩想格調共に陳腐にして、美妙等か清新に比ぶべくもあらず。

斯かる間に美妙梅花の統を引き、清新の思想聲調を謳ひ出てたる一團の詩人現はれたり。雜誌『文學界』の同人即ち明治學院の諸詩人は是なり。北村透谷は之か主領にして、『透谷全集』收むる所の數篇、概ね二十六年の作に屬す。透谷夙に詩に志あり、二十二年既に『楚囚の詩』といふ長篇をもつし、強て七五調に依らざる變調を以て國事犯の新囚を詠じたりしが、事によりて世に出さざりきと雖、詩界の未だ存せざ

(土) 北村透谷

りし新體の者にて、創始の詩才頗る見るへし。爾來文學界等に出し、者少からさりし中に、「行きたをれ」^{「雙蝶の別れ」}「眠れる蝶等」^{「片々たる短章」}に過ぎずと雖、一種の幽韻當代の珍とすへき者あり。若夫れ、長篇「蓬萊曲」に至つては、泰西劇詩の體裁を借りて奔放の詩想を披瀝せし者、三齣八場より成り、長句短句錯綜して必しも七五五七等の節奏に依らず。世を憤り戀人を捨て、尙足らずして己の滅びを願ふ憐れの塵の子が内界に於ける神人二性の戦に惱みて蓬萊原にあくかれ歩き、危巖削立雪崩大地を動かす靈山の絶巔に攀ちて大魔王に遭遇し、其の嘲罵に反抗して物皆滅びよと叫び、憤悶遂に死滅を呼び巖頭身を踊らして千仞の壑に投ず、是此曲の脚色なり。章句散漫にして渾成の詩體に遠く、間々甚しく散文的にして全體の詩調を破る事ありと雖、其内容に至りては想像奔逸情緒熱烈、透谷か多恨の一生と心界の煩悶とを最よく代表し、二十七歳の秋に於ける悲惨の最後を豫言する者の如し。思ふに斯かる人生問題の煩悶を懐く者、常に透谷一人のみに非ず。所謂世紀末の思想界往々かゝる神經質的煩悶を湛ふ。特に當代青年の一部に於て、泰西哲學思想の傳播と、其の文學思潮の浸潤との結果、從來實利の一方に偏倚せる國民の間に

到底見るを得ざりし一種悲痛の觀念を養成したりき。勿論其の苦悶懊惱や、決して深刻偉大なる者に非すと雖、兎に角從來思想界に於ける厭世觀と著しく趣を異せにり。「蓬萊曲」は即ち此思潮に觸れたる好箇の紀念にして、透谷は正しく當代思潮の一部を代表し、將に來るべき横流の先聲をなし、者といふべし。「文學界」の詩人には尙、戸川殘花島崎藤村あり。作多からずと雖多望なる前途ほの見えたり。以上諸家の詩之を今日に見れば深く言ふに足らずと雖、詩界草創の當時、「詩抄」の乾燥なる散文的思想の後を承け、擬古派一流の陳腐なる和歌的思想の間に介し、清新の詩想を歌ひ、幽韻ある趣味を鼓吹したるは、假令其聲調に於て擬古派に劣る所あるも、詩想發展の上に没すへからざる功績を残し、斯壇第二の革新を遂けたりといふべし。此點に於ては美妙湖處子梅花及透谷の如きは正に新體詩界の「浮雲」「夏木立」たり。然れども國語の智識猶不十分にして語格措辭の完きを望み難く、思想に於ても猶器局狭小、思索に乏しく觀察に粗にして、未だ明治詩壇に誇るべき創作を見ず。翻譯の如きも片々たる斷章のみにて、到底泰西詩宗の面影を偲ぶに足らず。詩界の紅葉露伴未だ出でず。總ての發展を擧げて次期に委ねたり。

屋敷 紀 實
馬 塚 半 月
か 合 身 十 三 二
大 正 十 三 年 外
大 正 十 三 年 外
大 正 十 三 年 外

脚本
上
新

戯曲

戯曲の發達は新體詩に比して一層後れ、未だ明治新戯曲の曙光すら見る事を得ざるなり。此の期に於ける斯壇は將に新曙光を見んとする時代にして、之を新文學の條下に序るは少しく儻を失ふの感あれども、年代の順序上、暫く劇界の遷轉期に在る戯曲を検せん。

坪内逍遙

混沌たる當時の戯曲界に一道の光明を與へ、後年起るへき新戯曲の先驅をなし、は、吾人再坪内逍遙を推さるへからず。十六年逍遙はシェークスピアの『ジュリアス・シーザー』を淨瑠璃體に翻譯し、『該撤自由太刀餘波銳鋒』と題して世に出しぬ。是實に西洋戯曲の面影の我文壇に紹介せられし嚆矢にして、明治の戯曲界は此時を以て過渡時代に入りなき。是より先依田學海小永井少舟等の『新評戯曲十種』等ありしも、皆單に文章の評釋にして、戯曲としての研究に非ず。『歌舞伎新報』の如き劇部雜誌出ても、梨園の消息狂言の筋書を載するのみなりき。『該撤奇談』出でし頃劇壇の刷新及改良の事朝野の注目する所となり、演劇の改良を唱ふる者漸く多く遂に十九年演劇改良會の成立を見るに至れり。改良論や固より劇の全部に關し

社會組織の變遷と
時代物
守田勘次
依田學海
小永井少舟
尾上松竹
市川右太衛門
依田義賢

劇場俳優技術等を議する事少からざるも、特に脚本改良に重きを置けるを以て、將來の戯曲脚本に影響する所頗る夥しかりき。

維新の變動は社會組織を一新すると共に、演劇の觀客と嗜好とに著しき變化を與へたり。從來の觀客は専ら中流以下に屬し、從て劇其物の社會的地位甚低かりき。然るに維新以來從前の觀客たりし中流以下の士分の人は風雲に際會して顯官に上り紳士となり、一躍上流の列に入りしより、演劇も亦上流社會の娛樂となり上りぬ。且泰西交通の結果、彼國に於ける劇部の消息のいたく我國と異なるを知りしかば、當時比較的進歩せる思想を有せる彼等新觀劇家は、在來の演劇に不滿の點少からず。茲に於てか改良論は先づ是等新觀劇家の口より唱へられぬ。然らば則ち彼等は如何に改良せんと欲したりしか。思ふに彼等は維新當初の思潮を形作りし社會の有力分子にて、從つて概ね實利思想を以て満ちたる人士なりしかば、自然の傾向より荒唐を斥けて實歴を尙び、夢を喜はずして現を重んずるを以て、演劇に對する嗜好も著しく實歴的となり、荒唐夢幻的なる在來の劇の如きは最好まざる所なりき。而も彼等は社會の上に大勢力を有する人士なりしを以て、忽に

又は選擇し、之を場にならして演劇の品位を高うせんとし、創作は篁村南翠主として
是に當り、篁村は『朝日』に南翠は『改進』に掲げたり。

此時に方り、關外評論家として文壇に立ち、一定の審美見を以て演劇を談じ併せ
て當時の改良論を評しぬ。彼は機關誌『柵草紙』に於て、或は演藝協會の演説に於て
其意見を發表し、改良論者が劇場構造の末に走り極端模實の弊に陥らんとするを
警め、從來の作者か座主俳優に迎合し、俗衆の嗜好に阿附するを難して、戯曲は本演
伎は末なる所由を説き、深く戯曲演藝の根本問題に論及せり、此等の論議は逍遙が
劇に向て人情描寫の自然ならん事を要求せしと等しく、當代斯壇に對する好箇の
警醒にして、後來必ず實現せらるべき新思想の萌芽なりき。惜いかな、當時の好尚
を距る事餘りに遠かりき。

改良論の聲大にして呼ぶ事疾き上述の如かりしも、其の實効は遂に擧らざりき。
協會の規模徒に大に名聲徒に高きも、選んで以て場に上すを得し新作は僅に宮崎三
昧の作一篇に止まり、劇部と新文學者との間に於ける鴻溝は容易に除くへからず。
會合遂に中絶して羸ち得たる結果は、劇の社會的地位の昂上と活歴の流行と劇場

改良論の聲大にして呼ぶ事疾き上述の如かりしも、其の實効は遂に擧らざりき。
協會の規模徒に大に名聲徒に高きも、選んで以て場に上すを得し新作は僅に宮崎三
昧の作一篇に止まり、劇部と新文學者との間に於ける鴻溝は容易に除くへからず。
會合遂に中絶して羸ち得たる結果は、劇の社會的地位の昂上と活歴の流行と劇場

の改良との瑣末事に過ぎざりき。されば歌舞伎座の大劇場は歐風を參酌して宏
壯なる建築新に成り、團十郎之に據りて頻りに活歴を演じ、且つ俳優の社會的地位
は劇其物の地位と共に進み、川原乞食一躍して演藝家と稱せらるゝに至りしかど
も、根本的重大事は依然舊態を存せりき。

斯の不振の作劇界に在りて最新作に勉めたりしは學海なり。學海は當時の學
者派の評論家にして且つ作家たる者、夙に舊劇の卑猥殘忍背實を厭ひ嘗て『吉野拾
遺名歌譽』を作りて模本を示し、卷尾に附記して曰く、此戯曲は男女の情態を描きて
情義二ながら得しむるを主となし、傍弓馬衣冠の故實を示し、又言語を述ふるに雅
にして耳に遠からず、俗にして野鄙猥褻に入らざるを旨とす。又殺伐殘刻なる形
を示さず、又悲痛哀歎に過ぎて衰弱狼狽の狀を現さず、哀むと雖勇壯奮烈の意を寓
し、武勇を示すと雖酷薄粗暴の所爲を見する事なしと。當時遍く行はれし理想論
と寫實論との奇しき混和なりと言ふべし。彼は此主義を以て二十二年又『文藝上
人勸進帳』と『拾遺後日連枝楠』を作れり。共に寶岑との合作にして、前者は全篇盛
衰記に據り、特に勸進帳と院宣との二齣は純然たる正史なり。此年場に上り、座附

(一) 依田學海
遺名歌譽

作者に非ずして作を場に入れたるを以て稱讃せられたり。されど尙外題を「那智瀧誓文覺」と改め、竹柴其水作と署せざるべからざりき。後者は「名歌譽」の後日にして史實を重んずる事前者に等し。學海と寶岑との外、尙二三の新作を出し、者あれども、皆注目を價せず。各劇場は依然繼承作者の似而非脚本を演じ、東京の河竹新七、竹柴其水、大阪の勝能進、同諺造等、古院本新小説或は講釋種の一節を取りて訂飯補綴せるのみにて、毫も戯曲の約束に従はざる陋作のみ行はれたり。

二十四年の比、學海の説益極端なる考古主義に傾き、團十郎亦默阿彌の史劇に活歴を標幟せし時、櫻痴居士往年政論の筆を止めて梨園に投じ、團十郎と協力して史劇の創作と之か上場に勉めぬ。是より先き、團十郎と學海とは、所見の骨髓に於て一致せしも、學海の直截急激なる、實行の上にて遂に藝壇に容れられざりしが、櫻痴は急激なる改革の到底行はれ難きを見て漸進の穩なるに従ひ、一旦團十郎と意氣相投するや、能く梨園の關門を破り、歌舞伎座の立作者として其所見を實行するに至りぬ。是實に明治の演劇脚本史上に於ける一變動にして、文壇と藝壇との調和に一歩を進めし功迹没すべからず。且其の史劇や、新作にても改作にても舊來

櫻痴居士の
史劇の
功迹没すべからず

櫻痴居士の
史劇の
功迹没すべからず

の不自然背實を際き、多少泰西性格劇の趣を參し、以て默阿彌の史劇に一轉進を與へたり。爾來二十六七年至るまで、劇界は宛ら櫻痴團十郎の史劇時代たるの觀あり。新作改作多かる中に「春日局」「關原譽凱歌」「大久保彦左衛門」「日蓮記」等最名を得たり。然れども櫻痴か劇部に容れられしは、彼の革新意見の全部か行はれしによるに非ずして、新脚本を舊劇に調和するに勉め、團十郎の活歴的腹藝的趣味に迎合せん事を計りしに因るなり。されば一方に於て不自然背實の名の下に所^有舊劇の夢幻的妙所を除き、他の一方に於ては未だ十分なる性情劇的新脚本を上場する事能はず。爰に一種沒趣味なる折衷劇を生じたり。是に於てか障害は二方面より起りて櫻痴の努力と團十郎の活歴とを失敗に歸せしめぬ。

二方面よりの障害とは即ち舊劇に慣れたる觀客の不評と、新思想を抱ける評論家の非難と是なり。當時猶觀客の多大數を占めたる俗衆は、舊劇の夢幻的美觀に慣れていたく、櫻痴の改作を喜はず、彼等歡樂の中必を奪はれしを見て團十郎の活歴を斥けぬ。又彼の識者社會の櫻痴に期待する所甚大なりしも、其の爲す所未た新劇の美を發揮するに足らず、新作も改作も往々默阿彌に若かさらんとするを見て

十、新劇起、一、
左、大坂、
東、大坂、
角、新、
と、
一、
二、

は、
三、
二、

いたく失望しぬ。即ち観衆は彼が破壊的方面に、評論家は其の建設的方面に、各少からざる不満を懐けるなり。果然舊劇崇拜の潮流は社會を動かして折衷史劇に對する反動をなし、二十年以來の改良論の精神も全く行はれざるに至りぬ。是に於てか文壇の先覺坪内逍遙、夢幻劇論を『早稲田文學』に掲げ、性格劇の新標準によりて史劇を論じ、評壇新に波瀾を揚げたり。時恰も二十六年以後二年間に當る。此論は劇界の『小説神髓』といふべく、曩日の改良論以外、一新思潮を文壇に導きし者なれば、其の内容及之に伴うて起れる新脚本は、之を次期に説かんとす。

終に臨みて此期に於ける戯曲の翻譯を記さざるべからず。此の方面に於ける活動は固より小説に於けるか如くならざるも、猶二三の西劇の、囃外と其弟にして劇評家たる三木竹二との手に譯せられたる者ありき。二十二年『讀賣』に出でし『調高矣洋絃一曲』と、同年『柳草紙』に出でし『析蓋薇』と是なり。共に『水沫集』に收む。前者はカルデロンの『サラメヤ村長』、後者はレッシングの『エミリヤ、ガロチイ』にして、翻譯に取しし用意は、原文に忠實ならんよりは寧ろ邦語の調に近からん事を求め、其の句の如きは勉めて戯曲慣用の語勢語彙に従はんと試みたり。然れども是等譯筆の

劇壇に残し、影響は、小説の翻譯の如く大ならず舞臺に上る事固より是なく、之に續く翻譯も亦出づる事なかりき。

第三期

第五章 新文學の勃興 其二

第一節 文運興隆の因縁

思想界の進運につれ、文學思潮革新の事成り、茲に新文學の活動を起してより殆ど十年、明治二十七八年の交に至りて思想界は再び一大轉進をなすへき時機に際會せり。勿論思想界の事は一晨一夕忽然面目を改むべき者に非ず。其の由て來る所甚遠く、其の根さす所甚深し。十年の間、冥々の裡徐に發展し來りし斯界の芳蕈、會々二十七八年に於ける國家的大事件に遭遇して茲に煥然たる美觀を現じたるなり。

日清戦争は本邦文明史上の一大現象なり。思想界に第二の革新を促したる動機、國民の自覺を普遍ならしめ、信念を確固ならしめし大勢力なり。げにや自覺は國民思想の至寶にして精神的活動の生氣と發展とは常に其の裡より湧く。蓋し

國家的思想、
國光勃
政治を教ふる物は
其の初めしも、自覚
が、
一層、
り、
の、
の、
の、

第二期初頭の盛觀は専ら國粹主義の勃興に伴へる國民自覺の賜なりき。而も當時國粹思想の影響する所は社會の全般に非ず。従て其の自覺も亦比較的範圍の狭きを免れさりき。然るに日清戦争の影響は殆ど社會の隅より隅に亘り、津々浦々、貴きも賤きもおしなべて新なる自覺を喚起したり。且つ自覺に伴ふ國民の信念は、前期に在りては多少不安なりしに反し、今や確固不動の者となれり。自覺の資賜なるべき精神界活動の、前期に比して一層の隆盛を來し、は亦宜ならずや。

而して此の精神的活動の根底は、言ふまでもなく一般學術界の進歩に在り。二十年以來、博物窮理の諸科學より地理歴史宗教哲學に至るまで、日に月に面目を改め、研究的精神は學界の全般に亘り、不斷の飛躍長足の進歩、精神的生活の状態を一新せり。斯くして醗酵し來りし斯界の盛運、一朝國民の大自覺に遭ふ。華彩燦たる發展を遂げさらんと欲するも得べからざるなり。

明治思想界の、國家思想の發動によりて動されし事前二回なり。而も第一期なるは國內に於ける歐化思想に反動して起りし者なりしが、新に起りし第二回は國外に對して國民の存在を自覺するに起りしなり。前者は理論又は主義より

して起りしが、後者は國家の運命に關する嚴肅なる事實と國民の力量を證明せる嚴格なる實驗とよりして起りき。是に於てか從來海内に跼蹐したりし眼を轉じて廣く世界に注ぎ、世界に於ける我大日本の地位を觀察し、此國に賦與せられたる至高至大の天職を意識し初めたり。斯の自覺斯の自信は所有方面の活動を促し、思想界に空前の偉觀を興へたり。元良外山諸學者が國家的色彩を帯べる宗教上の新信仰を提出したるが如き、井上元良木村等同志の士が新神道或は日本主義を唱道し、國家至上主義現世主義を標榜したるか如き、皆此の國民的意識の發現の一端なり。されば等しく國家主義と言ふとも、二十年代の國粹主義とは大に其の面目を異にし、悉く世界的觀察より出で、特に飛躍せんとする國民の意氣を表示せる者なりき。

思想界の活動既に斯くの如くなれば、社會萬般の事象一として進歩せざるなき固より言ふを俟たず。況んや精神的活動の一として思想界の消息に密接なる關係を有する文藝界の現象に於てをや。且つ文藝評論の進歩と共に、之が根據たるべき美學美論の發達を來し、曩に囂外等二三の評家がハルトマン等に立脚して評

論の筆を執りし頃は、文壇未だ普く此智識を享受するに至らず、唯彼等評家か論争に資するのみにて未だ一般作品に影響するに及はさりしが、二十七年の比に至りては新智識を有する作家評家相續て現れ、嚴正なる美學の規矩を應用して詩歌小説の批評を試る者漸く多く、從て作家の間に思索的傾向を生じたり。是に於てか戦勝後の文壇は著しく活氣を呈し、二十八年より二十九年に亘る斯界の盛觀は、前期二十二年より二十三年に亘る其れにも増して花々しかりき。

今や筆を新にして戦後文學の盛況を詳説せんとするに方り、前期末葉の衰へたる文壇を承けし戦争當時の文學を一瞥するの要を見る、所謂戦時の文學は此の兩期の推移する中間に在ればなり。夫れ戦争の文學に及ぼす直接影響は由來悲觀的の者なり。されば二十四五年頃より漸次衰へ來りし創作界は茲に至りて其の衰を極め、小説界に在りては紅葉の『隣の女』、『冷熱』、『露伴の』、『有福詩人』、『浪六の』、『安田作兵衛』、『樗牛の』、『瀧口入道』、『脚本に在りては櫻痴の』、『日蓮記』等の外、見るに足るべき者殆ど無かりき。之に反して戦争を題目とせる新體詩小説脚本、及戦記書報等種を接して起り、小説には鏡花、天外、水蔭、篁村、松葉、南翠を始め、弦齋、湖處子、澁柿、櫻痴等

の諸作、脚本には櫻痴の『豊島嵐』、松葉の『昇旭朝鮮太平記』等、新體詩には外山正一の『我海軍』、旅順口のヒーロー可兒大尉、殘花の『靈鷹高千穂』を始め、佐々木信綱、湖處子半月等の諸作、數へ來れば枚擧に暇あらず。然れども是等の文學は果して戦時の文學として誇るに足る者なりしか。あらず。當時の戦争文學は悉く一場の際。物に過ぎざりき。國民戦争熱の昂上する所、鬱結して詩歌小説となる者なれば、描寫諷詠する所天真流露、往々至情の聲をなす。然れども戦争文學は固く其性質に於て優秀なる文學たり難き要素を具ふ。戦争文學は歳時と方處とに狹隘なる制限を有する特殊差別の文學にして、彼の古今東西に通して誤らず悖らざる平等普遍の大文學に非ず。國民一時の好尚に投するのみにて、長く其價值を保つ事難し。況んや二十七八年の戦争文學の如き、強て時好に迎合せんとする膚淺沒趣味の者むしろ多きを占めたるをや。評壇之に命するに際物の名を以てしたるは極めて恰當の稱呼なりき。

然れども斯くの如き大戦争の思想界に及ぼす影響を考察すれば、國民の精神的活動の一時に雲蒸し來るに伴ひ、文學界の新旗幟亦動かんとするを看取すべし。

即ち思想界を通して文學界に及ぼせる戦争の間接影響は、其の直接影響の悲觀的なるに反し甚樂觀的なり。戦後文壇の現象は、常に特殊文學の繁榮のみに非ずして、普く諸般の文學の興隆なり。思ふに二十七年の沈衰は落滅に近き其れに非ずして、將に大に起らんとする前の其れなりき。戦捷の報連りに至るや、膨脹的國民世界の日本、東洋の經綸、清韓の輔導等の言辭は天啓の如く國民の胸裡に閃き、二十年この方蓄積し來りし潜勢一時に勃發して、或は大博覽會に於ける繪畫界の活動となり、繪畫協會を組織せる新進畫家の出現となり、白馬會を開ける洋畫新派の運動となり、或は彫刻鑄金の術、陶磁染織の技の進歩となり、或は洋樂の振興演奏會の成功となり、更に進んで文學の興隆となりぬ。小説は一轉進をなし、新體詩戲曲は全く面目を新にし、俳句と和歌とは維新以來の舊風を打破して明治の新風を起し、紅紫燦爛無前の盛觀を呈したりき。以下次を追うて其詳細を述べん。

第二節 俳句の革新

新文學思潮の革新運動は今や本邦文壇の最短詩に及びぬ。新思潮の赴く所、あ

の點に於ては泰西の如何なる文學も之に比ふべき者あらず。又泰西の如何なる詩人評家も之か詩想と趣味とを正當に解する事難し。故に輒近本邦の短詩を味うて之を譯出する泰西詩文の士少からずと雖、手を俳句に下せる者に至りては失敗せざる者稀なり。或は句を解して意を誤り、或は意を解して趣を失ふ。思ふに俳句の趣味は恰も禪宗の如く、又文人畫の如く、純東洋的にして、西洋美學の則を以て律すへからざる一種の東洋詩美なり。嘗に西人のみならず、本邦文藝の士と雖或は鑑識を謬り或は謎語として之を斥く。されば明治二十年頃の革新家が遂に指を此の方面に染むるに至らざりしは、其の思想の泰西より得たりしよりすれば寧ろ當然なりといふべきか。

然らば舊俳の内部より之か革新を計る者あざりしが。彼等宗匠商賣の門流にも亦二三新智識を有する者なきに非ずと雖、一度其の門に入るや、依然舊俳の渦中に陥り、遂には皆純然たる宗匠商賣の繼承者となりなき。故に當時の俳句は依然第一章に述べたる状態に在り、永機幹雄等所謂宗匠商賣の輩、徒に正風の虚名を呼號して祖翁の精神蕩然と空しく、穿ちを求めて理窟に陥り、風情を求めて晦澁に

流れ、要するに詩の何たるを知らず、詩境と非詩境の別を悟らず。相率ゐて非文學の畛域に赴けり。而も其の流を追うて俗俳を弄ぶ者、三都を始め諸國に滿ち、宗匠の門に集りて社中を成し、月に幾卷の集を作り、發句聯句に點を乞ひ、謝禮馳走をなし、入花景物を置き、圍棋雙六と同様なる消閑の遊藝となす者、所として存せざるなし。俳諧の墮落殆ど極れり。『俳諧古選』總論に「作者年々に多く風格日々に乖き門戸競ひ開けて多岐羊を失す、所謂盛極つて衰兆す」といへるは、明和以前の俳壇を評せし言葉ながら、移して以て明治の舊俳を評すべし。

俳諧の革新は二十年頃の文學革新家に望むべからざると共に、到底舊俳の門に望むべからず。斯界若し革新すべくんば之を別種の新人物に望まざるべからず。果然革新の曉鐘は、夙に泰西文學思潮に浴し、而も自國文學を研鑽して俳諧固有の趣味を解し、且つ舊俳以外に立ちて其の門に入らざりし新俳人によりて撞き出されたり。正岡子規尾崎紅葉の徒即ち之か巨擘なり。

既に述べし如く、俳諧革新の標準は之を泰西に求むべからず、而も一代俳諧の墮落救ふべからざる者ありしとすれば、新俳人の取るべき道、唯標準を過去に求め現

代非文學的傾向を打破して之を文學の地位に進むるに在るのみ。されば當時舊俳の門を避けて新風を起さんとし、或は文學として價值ある俳諧を創めんとせる新作家は、期せずして古人の作に就き、其批判の標準など、從來俗俳の徒が稱ふる傳說的の其れを取らず、自己の新見識を以て之か妍醜を分ち、新に妙句名吟を其の間に求めて之を研究の材、創作の師となせり。或は談林を採り、或は蕉風を採り、或は蕪翁を取り、其宗とする所にこそ差あれ、天保以後の俗俳を斥けて天明以前の古俳に活眼を開きしは蓋し一なり。

古俳復活の先鋒たる子規と紅葉とは、其の年齢を同くし、其の學校を同くし、共に大學國文科に入り、共に半途退學し、而も等しく俳諧に指を染めたり。且つ子規が其の著『蕪祭書屋俳句帖抄』に言ふ所によれば、彼が俳事を始めたるは十八年の頃なるが如く、硯友社員の紅葉追憶談によれば、彼の俳諧も亦子規と同年『我樂多文庫』と共に始まりしか如く、而も二者共に、舊俳と何等門流の關係なくして直に古俳の趣致を得んとしたりき。然れども二人相互の間には何等の交通なくして各獨立の發展をなし、其俳に入るの動機と師宗とする作家とを異にす。『俳句帖抄』に

正岡子規
尾崎紅葉

依れば、子規が身を俳句に投するに至りしは全く『俳句分類』の編纂に因す。曰く『俳句分類』の研究が昔の連歌時代より始つて、貞徳派の無趣味なる滑稽時代を過ぎ、宗因の談林に至つて僅に一點の活氣を見とめながら、尙五里霧中に迷うて居る有様であつたが、春の日荒野など、漸く佳境に入り始めて、猿蓑を繕いた時には一句々々皆面白いやうに思はれた、これが俳句に於ける進歩の第一歩であつた」と。時に二十四年なり。知るべし、子規の俳に入りしは古俳句の歴史的研究に基し、其の宗とせし所は『猿蓑』を中心とする蕉風の一派に在るを。紅葉は即ち之に異なり、其の俳句は素と文才の餘技にして、狂句川柳に近き諧謔の調を弄するに止りしが、既にして小説に於ける西鶴崇拜は延て俳諧に及び、遂には西鶴の屬する梅翁一派を宗として之に趣き、未だ『猿蓑』以下には及ばざりき。時正に二十二年なり。知るべし、紅葉の俳諧は西鶴摸倣に始り、宗とする所は談林の一派に在るを。斯くて同時に起りし二作家、一は直に談林に復歸し、他は一步進んで蕉風に適從しぬ。

爾來紅葉は硯友社一派を率ゐて紫吟社を結び、子規は所謂日本派を率ゐて新聞『日本』に據り、兩々歩武を進めて流風世に布けり。此の間紅葉は談林の奇調より

漸く平淡の調に入り、子規は元祿より一進して天明の俳風を追ひ、以て二十八年の盛時に及べり。兩派の趣く所同じからずと雖、之を復興俳諧といふ大旗の下に一團と見るを得べくんば、吾等は江戸時代文學史に於ける梅翁以來蕪村に至る前後百年間の俳諧史がさながら最近五六年の間に縮寫せられたるを覺ゆるなり。されば兩派時を同うして立てりと雖、之を歴史的發達の跡に見ば、紅葉派は即ち俳諧復興の先驅にして、子規派は即ち之か主力なりといふべし。

紅葉が俳諧は談話の奇調を以て始り、小波、漣山人、思案、眉山、水蔭等紫吟社の一派類りに談林風又は虚栗集風の發句を吐きぬ。時恰も小説勃興の機運に際會し、硯友社の聲望江湖に布ける折なりしかば、其俳風も亦青年文客を動かして一時の流行を作りぬ。舊派は驚いて之を排斥し、書生、俳諧と冷罵しぬ。既にして文學の進運小説をして戯作の境を脱せしめ、紅葉か作風亦滑稽談話の戯作者風を擺脫するに及んで、其の俳諧もおのつから格餘の戲筆たる境界より出で、眞面目の文學的作品に入り、華麗より一轉して平淡に移り、想も調も漸く談林を離れぬ。時に二十七八年の交なり。然れども新に起せる俳調は談林の其れの如く青年俳客を動か

すに足らざりき。凝り性なる江戸氣質に洒脱を求むる餘り、平淡益、平淡となりて遂に主觀的醇化の極に達し、從て其の趣味著しく個人的となりしかば、文壇多數に容れられて一世の流行をなすべき性質を失ひ了んぬ。蓋し紅葉か俳諧は決して明治文壇を飾るに足るべき者に非ず。之を創作せし事實は決して文學者としての彼の價值を増す所以に非ず。彼が『太陽』『秋の聲』等の雑誌、及『煙霞療養』と題する紀行文の中に收めたる吟什の如きは、決して小説の手を停めて之に従事すべき程の者に非ざるなり。

紅葉に次きてこの紫吟社中の作家を大江小波即漣山人となす。紅葉門下にては鏡花風葉最優る。此派作家の特徴を擧げれば、趣向に時間と事件とを含める小説的の者を喜び、多少複雑なる人事を取らんとする傾向ありといふべし。

俳壇革新の先驅たりし談林復興の一派は、普遍的傳播をなすに至らずして其の勢力を失ひしに際し、蕉風復活の子規一派、革新の主力として文壇に現れたり。正岡子規は伊豫松山の人若うして東都に遊學し、高等中學に在る頃恰も紅葉か同窓の人々と文社を結びしが如く、同郷の内藤鳴雪、竹村黄塔、五百木瓢亭、新海非風、藤野

古白等と文會を組み文集を編めり。二十四年大學國文科に在り、始めて俳句分類に志し、古來の俳諧を歴史的に研究して元祿の絶調に及び、茲に斯道に於ける活眼を開きて爾來一身を俳事に委ねたり。翌年の初燈火十二月「男女句合十二月」を始め連りに一題十二月の俳句を作りしは即ち此の時頃の事にて、調未だ整はず、句尙幼しと雖、縦横の俳才鬱勃の活氣おのづから其の裡に現はる。同年又俳論を『日本』に投じ、遂に大學の業を抛つて日本新聞社に入り文苑の一隅に俳欄を設けて同人の句を載するに至りしかば、新聲始めて斯壇に上りぬ。爾來東西に旅して句作に耽り遂に『猿蓑』に私淑して俳句の寂を悟り、蕉翁か自然觀察に眼を開きて古池の吟を得たりし如く、客觀叙景の一門を立て、俳句の領域を擴張したりき。『はて知らずの記』『高尾紀行』等に出てたる者は即ち當時の作句にして、以て彼の格調を窺ふべし。

斯る格調は當代の俳壇に見るべからざりき。舊俳の俗調は勿論、談林復興の一派と雖、此の清新に遭ひては一疇を輸せざるを得ず。而して子規と歩調を一にせる者には前記鳴雪瓢亭等あり、之に加はりし者には佐藤肋骨藤井紫影伊藤松宇等

あり、來り學べと者には高濱、虛子、河東碧梧桐、佐藤紅綠等ありて、新俳風漸く起り、二十七年『小日本』を發兌して句を江湖に募るや、應募者連りに出で、勢力愈張る。加一方にては子規俳話俳論を公にして益此の運動を進めたり。されば今、新派の句品を詳論するに先ち、暫く子規が俳論の主旨を畧述せん。

曩に硯友社の俳家は非文學の極に達せる當代俗俳を斥けて談林を取りしが、子規は談林の格調思想を以て尙非文學的なりとなし、『虛栗集』を以て尙幼稚なりとなし、『曠野』『猿蓑』に至りて始めて文學として推稱すへき俳諧を認めたり。彼の俳話はこの論を以て始まり、爾來論述する所少からず。就中新思想宣傳の上に最力ありしは即ち二十六年に出でたる『芭蕉雜談』を以て始となす。こは實に明治新思潮を以て俳諧を論じたる嚆矢といふべく、芭蕉を藉り來りて宗匠者流の没詩眼を指摘し、進んで新詩眼の標準を示し、者なり。曰く、芭蕉の人格は偉大なり。五十年の短生涯能く一代の崇拜を博して俳道の宗と仰がれ、恰も宗教の祖師の如く後世に神視せられたり。然れども人格の偉大は直に文學者としての偉大を證する料とはならず。彼の俳諧を以て完全無缺超批評の靈物となし、は即ち憐むべ

き舊俳者流の無識に出づ。乃ち斷案を下して曰く、彼か俳句一千餘首、過半は悪句駄句にして、古來靈句として傳へたるか中にも、宗匠者流が金科玉條とせる「古池や」道のべの「枯枝に等は一として凡句悪句ならざるはなし。彼等が此等の句を尊ぶは批評眼の明なるありてするに非ず、唯文學上何等の價値なき傳説によりて之を神視するのみと。該句を舉げて縦横に批判し、以て二百年來の盲目的信仰を破りぬ。次に新に芭蕉の眞價を闡明せんとし、新審美見を以て集中の名句を精査し、芭蕉の芭蕉たる所以を發揮せり。曰く、本邦詩歌に雄渾豪宕の致を缺けるや久し。此の間に介し、獨り豪壯の氣を藏め雄渾の筆を揮ひ、天地の大觀を賦し、山水の勝概を叙し、直に萬葉を追ひ實朝に及かんとせる者は即ち芭蕉なり。試に「夏草」最上川「荒海」「大井川」野分等の諸吟を見るに、老健雄邁殆ど空前絶後なり。而も彼の技倆は之に止まらず、或は自然なる、或は纖巧なる、或は華麗或は幽玄、其他奇拔滑稽蘊雅、行く所として可ならざるなく、格調亦必しも一格に拘せず、凡百の姿態普く包容して滞るなし。芭蕉の偉大なる所は即ち愛に存すと。是れ子規の芭蕉論の概略なり。

芭蕉論は當時に在りては實に空谷の梵音破天荒の論評なりき。其の直接の目的は千載誤られたる芭蕉の眞價を發揮するに在りきと雖、其の結果は舊俳折伏と新俳顯揚との二者となりて現れたり。勿論子規の説多く獨斷に傾き、且つ連俳の第一句たる發句を評するに獨立せる一個の文學に對する標準を以てし、而も其の批評は彼自らの趣味見識に依據して疑はざる嫌ありと雖、彼の趣味は明治の新趣味に養はれ、彼の見識は明治新思潮に養はれたる者なり。「芭蕉雜談」一篇小なりと雖、俳壇革新の曉鐘として長へに耳傾けらるべし。此點に於て之か俳史に於ける地位は『小説神髓』の小説史に於けるに似たり。子規か宗匠者流の神聖視せる幽玄主義寂滅主義を打破して新蕉風を發揚せし態度は、即ち逍遙か馬琴一流の勸懲主義を排斥して心理主義を鼓吹せし態度なりき。「雜談」及其他の俳論を收めたる「癩祭書屋俳話」一部永く明治文壇の珍たるべし。

子規の古俳研究は歩を進めて安永天明の中興俳傑に及び、「猿蓑」の高古を喜んで他を知らざりし彼は、是に於てか蕪村等豐麗の趣味を解するに至りぬ。二十七年より翌年に亘る彼が俳論と創作とは、即ち此の間遷移の消息を表す者にして、作

句に著しく妖艶雄健等積極的趣味を帯び來れり。當時蕪村の俳壇に於ける價值未だ世に知られず、畫人の名のみ獨り高うして其の句集の如き殆ど坊間に存せざりしが、子規等類題集中蕪村の句の散在せるを見て其の異彩に驚き、乃ち故紙堆裡に一寫本を搜索し得て始めて其の全豹を窺ひ、之を研究する益深うして之を評價する益高く、遂に漢語を含める一種詰屈の異調はいたく『日本』の俳句に影響を與へたり此變遷は子規一人に止まらず、延ては普く彼の一派に及び、『小日本』の募集に應ずる者、『小日本』廢刊して『日本』の俳欄に投稿する者、亦悉く之に倣ひ、相率ゐて夜半亭の格調を追へり。此時に方りて、斯派の俳風天下に布き、新思潮に養はれたる青年競うて子規の麾下に趨りぬ。世稱して日本派と言ふ。『日本』に據りて立てるを以てなり。

日本派俳句の内容は爾來、又多少の變遷をなしたりき。『俳句帖抄』に依れば、子規か蕪村の真相を解して眞の蕪村調を創り出てしは、二十九年『新花摘』を讀めるよりなりき。然り、子規を始め日本派一輩は、蕪村に得る所多かり。然れども、思想と聲調と、必しも蕪村の模倣に終らず。思想に明治の特色を帯び、聲調に長短拘

二、世世の俳句
 子規(俳句)
 河東碧梧桐
 高橋(子規)
 高橋(子規)
 高橋(子規)
 高橋(子規)

河東碧梧桐
 子規

る所なき異格を加ふ。此傾向の極端に發達して宛然當時の風潮を代表する者を虚子碧梧桐の二人となす。二人は郷貫を同うし、修學の徑路を同うし、俳句に入りて其歩武を一にし、各特色ある思想聲調を以て斯壇の急先鋒となりき。思ふに碧梧桐は冷静に事物を觀察し、虚子は熱情を以て事物に同感す。從て前者は客觀に傾き、後者は主觀に傾き、一は寫實的、他は理想的なり。碧梧桐は寫實に傾くを以て常に印象の明瞭ならん事を求む。十七字の短詩形の中に印象の明瞭なる詩想を盛らんとするか故に、其の描寫の對象は範圍極めて小なり。虚子は然らず。彼は理想に傾くを以て或は主觀を詠じ、或は複雑なる人事時間を含める事物を描く故に彼の句は印象の明瞭碧梧桐に及はず。雖、餘韻あり、時間の延長あり、間々大景臺を描かんと試みぬ。

斯くの如きは子規か認めて以て古人以外の新調となし、蕪村に出で、一步を進めたりとなし、者なり。蓋し二人の爲せし所、悉く粉本を蕪村に求むべく、蕪村の企畫を紹き來りて之を極度に發展せしめたるなりき。而して此事實は思想よりも意匠よりも、句法聲調に於て一層甚しきを見る。彼等は先づ五七五の格を破り

十九字二十一字の句を取てし、漢語漢文の句法を用ひ、虚字を省きて實字を充てたり。且つ句切れに於て從來見るへからざる新工夫あり。極端に走るや、虚栗集にも求むべからざる奔放自在の異調を取り、一時評壇の物議を招けり。斯る詰屈の調破壊の調は、動もすれば韻文の美を失うて散漫無味の語句とならんとす。要するに永續すべからざる一時の變象なり。

内藤鳴雪

是等の點に於て鳴雪の俳風は虚碧二人と反對に立てり。鳴雪は弱冠の青年のみなる日本派に於ける唯一の老俳人にして、子規に次て該派の有力者たり。彼は思想に於ては純客觀の事物にして餘韻の長きを喜び、形式に於ては五七五の正調を固守して虚碧の變調を斥く。彼は又、用語は雅言を好みて虚碧の漢語を取らず。詩材は過去社會の事物を用ひ、總て優美典麗若くは幽寂清雅の趣を受す。

其他當時日本派に重きをなし、者には、東京に佐藤紅綠石井露月あり。伊豫に村上霽月柳原極堂あり。熊本に夏目漱石あり。就中、紅綠は碧梧桐に似て、而も變化の才あり、露月は漢語調を好む事虚碧に同じくして而も藻思多面なり。霽月風に蕪村調の眞を得、極堂は巧緻清新の作をものし、漱石は嶄新警拔の句を吐く。共

本城の八景... 大野切竹... 任... 中島五文庫... 角田竹冷... 尾山... 同野... 三川...

秋聲會

に一方の雄なり。以下、下村半伴、福田把栗、坂本四方、太等數ふるに暇あらず。

筑波會

此時に方りて俳運大に起り、舊俳家角田竹冷は戸川殘花と共に秋聲會を起し、二十八年、紫吟社、雪人派を包容して新俳の一部と舊俳の一角との大連合を企て、雑誌『俳諧秋の聲』を刊して之か機關となし、帝國文學會の佐々醒雪、大野酒竹等、筑波會を立て、二十九年、作句を『帝國文學』に掲げたり。筑波會の俳人は論評の精透なるに比して、作句未だ熟せず。秋聲會は數十の會員を擁し、新舊調和の標榜を掲げたれども、新派の粹と舊派の粹とを招致する事能はずして、唯、準新派、準舊派の多少趣味を同する者のみを集むるに止まりぬ。何れにしても、俳社俳人の増加夥しく、俳書俳誌の發刊亦盛に、新聞雑誌は競うて俳句を載せたり。當時都下新聞十六種の中之を載せざる者六種に過ぎず、雑誌にては苟も文學にたつさはる者一として之を収録せざるなし。

然れども日本派以外の俳人俳社は、其の活動常に受動的に出づ。彼等は日本派が一切の異趣味一切の異色を拒否して、只管自派擁護に勉むる反撥的排他的態度に、其競争心を激發せられて是に至りしのみ。故に其の活動や概ね末頼もしから

ず。加ふるに彼等か俳句研究に於ける熱心は到底日本派に及はず。彼等が俳句を作るは閑人の閑事業の如く、日本派の之に於ける純然たる文學者の態度を以てし、研鑽擁護に至らざる所なし。是を以て二者が斯壇に於ける進歩は頃刻にして著しく懸絶し、日本派獨り其の進歩を續けたり。三十年に入りては紫吟社振はず、雪人派潛み、秋聲會亦衰へて『秋の聲』も倒れたり。之に反して日本派の傳播、各地方に亘り、極堂松山に俳誌『ほとゝぎす』を發刊し、爾來俳會の起る者各地相次ぎ、根岸子規庵の會衆益多きを加へ、翌年遂に一派の選集『新俳句』を刊行し、次で『ほとゝぎす』を東京に移して虚子之に當るに至り、斯派の勢力牢として抜くべからざるに至りぬ。

斯る間に日本派の俳句は内容に於ても少からざる進歩をなし、二十九年に於ける變調漸く捨てられて平正の常調に復し、奇想を弄する事少くして着眼を平淡の境に求め、絢爛の趣致漸く減じて淡泊の情趣加はらんごす。而して蕪村の研究益々歩武を進め、子規は『俳人蕪村』を『日本』に連載して縦横剖拆、所論精緻、俳人としての蕪村を天下に紹介し、更に鳴雪等と『蕪村句集』を研鑽講評して之を『ほとゝぎす』

「ほとゝぎす」
「新俳句」

に連載したりき。是に於てカス派俳句の趣致傾向格調句法乃至文學上の地位、社會の批判、大體に一定の境に達し、俳壇の優者として一般に認めらるゝに至れり。故に吾人は『新俳句』の刊行『ほとゝぎす』の東遷を以て、俳句革新の事業の略完成せる時期と見做し、乃ち筆を三十一年以後に進むるを停め、願て明治俳句の高潮たる日本派の作を檢し、古人以外明治の特色の如何なる者を含めるかを究めんごす。三十二年の初、子規『ほとゝぎす』に論じて曰く、文明が簡單より複雑に、粗大より精緻に、散漫より緊密に越くと共に、美術も亦同一の傾向を取りて進み、俳句亦從て此の迹を追ふ。多様と變化とは進歩の階段なり。明治俳句の進歩も亦此の中に攝せらる。明治俳句に古人以外の特色ありとすれば、其は即ち古人より一層複雑精緻緊密なるに在り。元祿は天明に進めり。天明は更に進みて明治となる。新興の特色は常に純粹なる新分子を含む所に存せずして概ね複雑精緻緊密の度を増す所に在り。碧梧桐の『強力』の清水濁して去りにけり、は蕪村の『二人して掬べは濁る清水かな』に比し、虚子の『繪踏して生残りたる女かな』は蕪村の『御手討の夫婦なりしを更衣』に比して一層時間的複雑を加へ、印象の明瞭ならん事を勉めたる碧梧

桐等の句は概ね描寫の精緻を見るべく、一句充實勉めて冗漫の嫌なからん事を期せる虚子等の句は句調の緊密遠く、古人の外に出でたり。若し夫れ明治俳句の新趣味に至りては、當時洋畫界及小説界にも現はれし如く、濃厚に非ず高遠に非ず、むしろ淡泊平易、元祿天明に發達するを得ざりし一種の新俳味なり。此の俳味や實に三十年以後の發達に屬し、虚子の「宿借さぬ蠶の村や行き過ぎし」の句に見ゆる如く、蕪村の「牡丹ある寺行き過ぎし恨かな」と恨を言ひ出でしに似ず、又「宿借さぬ火影や雪の家續き」とて其の光景を辭りしに異なり、唯前村後村の間中途に在りて歩むを言ふのみ。此の間の趣味は新俳人にして始めて味ふを得べし。明治俳句に於ける古人以外の特徴は蓋し之に盡く。是に於てか明治俳界の進歩の小説界の其れに比して著しく遜色あるを覺ゆ。元祿化政の小説と明治の小説との間に存する如き鴻溝は遂に之を安永天明の俳句と明治の俳句との間に見る事能はざるなり。

俳句革新の運動は一段落を告げぬ。乃ち願て其の主唱者たる子規に就て再説する所あらしめよ。子規既に蕪村調に入りしより其の作句絢爛の域を過ぎて平

淡の境に入り、彼の所謂新趣味は最早く彼其人の句に現れたり。「俳句帖抄」に曰く「新花摘」を讀むに、蕪村の頭を惱まして修正したる句は概ね好句ならず。又自慢の意を洩せる句も餘り好き句に非ず。最感服する句は多く一題七八句の中に在る極めて無雜作に成りきと思はるゝ句なり。蕪村の大才を以て尙且かくの如くなるを見て俳句の如何なる者なるかを始めて悟りぬ。子規の句か平易淡泊の趣を得たりしは、蓋し之より後なりしならん。「大風」に近よる「鶯もなかりけり」「夏川や中流にして願る」「椎の木を切り倒しけり秋の空」「夕鳥一羽後れてしぐれけり」「水の仙の誓に星の露を孕む」などの如きは此の期に屬するものか。然れども子規の俳才は一格に拘泥するか如き小なる者に非ず。一派の俳人、虚碧を始め、一として一時の僻調に走らざるなき中に立ちて總ての格調を容れて餘裕綽々、常に進歩の先登に立ちて一派を指導したるは即ち子規なりき。彼は多様の變化を一身に集め思想聲調行く所として可ならざるなし。二十六年「日本」に掲げし「古人調十二ヶ月」及二十九年同紙に出し「俳句二十四體」の如き子規自身も其の杜撰なるを言へりと雖、どにかく變化の才を見るべし。思ふに多數を率ゐて一派の指導者たらん者

は常に此種の才なかるべからず。而も其の蕪村に悟入するに方つてや、變化の裡おのづから子規獨得の俳風を生じ、遂に獨立して其の新趣味を宣傳するに至れり。而して彼の俳才は常に俳句に止まらず、聯句にも現はれ、夙く二十五年以來時々試みし者少からず。然れども是れ固と彼の餘技、深く究むるの要なし。

子規は又小説に指を染め、夙に『月の都』を草して、『小日本』に掲げ、三十年又新小説に『花枕』を出し、又新體詩を試み、二十九年以來、『日本人』はとゞぎす等』等に載せたり。然れども是亦楮餘のすさび、鬱勃たる詩想の十七字詩の中に收むべからざる者あるに方りて是等大詩形を試みしに過ぎず。唯短歌に至りては、三十一年『日本』紙上之が革新に着手せし者にて子規に取りて甚眞面目の事業なれば、重ねて後節に説くべし。

文學者としての子規はかくの如く多方面なり。而も其の事業の最赫灼なるは言ふまでもなく俳句復興の一事に在り。彼は俳句を墮落の深淵に救うて文學の境域に引き上げたり。詩歌の何たるを解せざる非文學者の輩に弄はれし俳句をして學識ある文學者、趣味卓越なる詩人の手に移らしめたり。此の點に於て彼の

事業は頗る小説界に於ける逍遙紅葉等の事業に似たり。若し古今俳史の上に其の儔を求むべくんば蓋し蕪村か。蕉翁後百年にして其の遺業を起し、者は蕪村にて、蕪村以後百年にして俳句を暗黒の中に救ひし者は即ち子規なり。然れども一派の俳人を率ゐ、一流の俳風を以て世を動かし、を以てすれば、孤獨なる蕪村の如きに比すべきに非ずして、むしろ蕉翁其人に比すべし。其の俳才の大なる其の俳徒の普遍なるはた多數の子弟をして各其の才を盡さしめたる、略其の面目を移せり。加ふるに子規が梅室蒼虬等俗俳の勢力を排斥して審美眼を發句の上に開きしは、頗る芭蕉が貞門檀林の勢力を打破して自然美の上に活眼を開きしに相似たり。然れども是は俳史上の位置、俳人としての彼等を比較せしのみ。其の性格に於ては必しも相同じからず。子規は熱烈の人なり。俳壇の革新に着手して以來之を畢生の事業として身命を献じて悔いず。斯壇擁護の爲には如何なる外敵も排撃殲滅せずんば已まず。常に陣頭に立ちて一派の爲に長城となれり。師弟の道全く其の面目を改めたる今日に方り。文壇稀有の佳話を殘せる者、主として彼の性格に出づ。此の點に於て蕉翁の稍閑寂冷靜なると趣を異にす。子規の句集

は『俳句帖抄』と題し、三十五年に至りて上巻を公にせり。二十五年より二十九年までの作を収む。不幸續巻を公にするに至らずして止みにき。

第三節 和歌の革新

歌壇革新の思潮は夙く國學復興の際に萌し、國文教育家落合直文等の運動に其の泉源を有す。彼は二十五年淺香社を結びて文章和歌及新體詩を研究し、門下教を受くる者少からさりしが、特に盛なるは即ち和歌の研究なりき。然れども彼の歌は固く御歌所一派の孱弱に反抗し、桂園末流の卑俗を排斥して起りし者にて、即ち純乎たる復古なり。勿論彼の創作は必しも議論に伴はず、歌格常に古調たるを得ざりきと雖、とにかく純日本想を以て古歌の粹を明治聖代に發揮せんと志したりき。彼は猶紅葉の元祿小説に於けるか如く、子規の元祿俳句に於けるか如く、近代俗悪の文學を捨て、直に古文學の靈泉に汲まんとする者、門流を率ゐて能く後進を導きたるも亦二家と蹟を同うす。而も復興の文學は常に多少の新采あり。淺香社の和歌亦然らざるへからず。假令萩の家其人は泰西の詩美思想に縁遠き

三新文學の中心
イ、歌壇の中心
直心、小島、大田、阪正臣、後所、敦子、等

人なりとするも、新思潮の文學界に於ける勢力至らぬ隈もなく、四圍の物象皆新詩美思想によりて進める今日に方り、關外等『桐草紙』の徒と交り、紅葉子規等の目覺しき革新運動を目にするに及んでは、彼か和歌に對する態度も亦漸く變せざるへからず。彼か門下を教ふるに和歌は時代の進運に伴ふべしとの主義を以てするに至りしは即ち此時に在り。

當時歌壇を支配せる潮流は言ふまでもなく舊派の其れなりき。俳壇の宗匠か天下に遍きか如く、歌の師匠も亦津々浦々到る所に存し、詩歌の何たるを知らず、詩美の何たるを解せず漫然心に思ふ事を見る物聞く物につけ言ひ出せる者即ち和歌なりと考ふる固陋無識の徒が、恣りに子弟を取り詠草を集め、賻を收めて點を加へ其の俗了せる事、點取俳諧者流と擇ふ所なかりき。是を以て所謂歌人なる者多士儕々として其多きに堪へず。所有國學者は即ち歌人なり。所有公卿は悉く歌人なり。廟堂の有司亦多く歌人なり。而して皆流を競ひ派を立て或は會を組み社を結び、各類を以て集り、門を開きて風を布く。當時斯界の中心たる御歌所には、高崎正風、小出粲、植松有經、大口綱二等あり、其他鈴木重嶺、阪正臣、黒川真賴、稅所、敦子、本居豊

海上胤平

類等、或は某園或は何遁舎と稱する者頗る多かりき。然れども彼等は、其流派の如何に係らず、畢竟桂園の末輩に非されば則ち四大人の糟粕に止り、想形共に陳套相襲ひ、千年の舊型を墨守して詩歌に對する根本的誤謬を悟らず、歌詞を制し、嫌忌を定め、範裡に籠居して井蛙の見を固持したりき。獨り海上胤平の和歌は一種の異彩を此間に放ち、其の萬葉集模倣の作、頗る豪健の趣を帶べり。然れども彼の議論と製作とは萬葉集の外に一步も出づる能はず、唯加茂真淵が百年以前になしたかりし驚歎を再せしに過ぎずして、其製作の如きも固より橘曙覽に比ふべくもあらざりき。特に詩歌に對する根本思想に至りては依然傳來の誤謬を繼承し、從て當代歌壇に何等の事蹟を残さざりき。

新思潮を餘所に見て、歌界の状態が今日に至るまで其の舊様を存する事斯くの如くなりしは何故ぞ。和歌革新の獨り大に後れたりしは何故ぞ。思ふに和歌は三千年の傳統を有する本邦最古の文學にして、前代以來小説以下の平民文學に對し、貴族文學堂上文學として立ち、因習の久しき、革新を以て破壊と考ふる傾あり、新思潮の奔流も之に加ふるに由なかりき。否、之に加ふる能はさりしに非ず、革

口、或は此を以て
目よるるをたれと
石蓮を(秋)とてに
停。

落合秋家

新の手を下す價值なしとて之を抛棄せるなりき。蓋し新體詩の創始者は其精神に於ては即ち和歌の革新家なり。彼等は泰西詩歌の精神を本邦詩歌に加へんとするに方り、和歌なる者の到底複雑清新なる新詩想を容るゝ能はざるを知り、乃ち去つて新體詩を起しゝなり。故に斯道の先覺は夙く十年前に存し、詩歌に對する觀念の更新も亦既に成就せられたりき。然れども之を和歌其物に及ぼし、短詩としての發達を促しゝ者未だ之あらず。即ち和歌は長く新思潮に見捨てられたるなりき。さばれ御歌所一派の歌は依然斯壇の牛耳を取り、『國光』『明治會叢誌』等保守的國家的主義の雜誌に其吟咏を載せ、堂上の和歌尙跋扈せり。淺香社は實に斯る時に現はれたるなり。

淺香社は歌壇革新の先驅をなせり。萩の家の歌を教ふるや舊型に依らず、舊様を追はず、歌題の如きも新を取り陳を避け、其の新しきも唯大體の着想の方向を示すのみにて、極めて自由なる態度を取り、學弟をして各其の才を盡さしむ。『萩の家遺稿』收むる所の日課歌題を見るに從來月並的の題とはいたく趣を異にし、着眼新にして題目奇拔、材料豊富にして吟咏の對境甚しく廣濶となれり。是を以て創

作も亦たのづから舊套を脱して清新掬すへき者少からず。而も彼れの和歌に對する愛慕は無限にして、其の熱心や殆ど献身的なり。我歌をあはれと思ふ人ひとり見出で、後に死なんぞ思ふと述べしは實に彼が素懐なるべし。彼は猶紅葉子規等の如く、自己の文學を以て其の生命となしたりしなり。彼が斯界革新の先驅となり、其の事業を果すべき幾多青年の歌人を養成し得たる洵に故なきに非ず。然れども萩の家の思想は其根底に固有思想の半乎たる者あり。飽くまで新思想を容れて着想聲調に大膽なる更新を加ふるに至らざりき。かの夢に見し女神の跡を慕ひ來てけさ我見たり白百合の花の如き理想的の和歌は、蓋し彼れの本領に非ず。萩の家の歌は、猶其新體詩孝女白菊歌等の、動もすれば七五調の長歌たらんとする形跡あるが如く、全然舊様を擺脫する能はざりき。彼はげに最妥當なる意義に於て過渡の歌人と稱すべく、革新の事業は渾て之を其の門下に附囑しけり。

今や文運興隆の機熟し、各種の文學競うて其の面目を改め、俳諧革新の事業も亦着々成功しぬ。和歌界のみ豈獨り舊態を存すべけんや。曩に和歌を以て改良す

るに足らずとなし、之を捨て、新體詩を創めたりしも、詩人胸裡に存する詩想は必しも長大の詩形を俟つて發露すへき者と限らず。或は三十一字詩に表はすを以て最も適切なりとなし。或は十七字詩に表はすを以て最妥當なりとなす。詩想無限なり。豈和歌に盛るべき恰好の者無からんや。況や新詩想の流入詩材の増加、詩語の擴張特に著しき今日に於てをや。是を以て新體詩起るも和歌は爲に倒るへきに非ず、兩々相並びて別個の發達をなすへき充分の餘地あるなり。

淺香社中の青年歌人は、萩の家の鼓吹の下に斯壇に新風を導かんを努力しぬ。與謝野鐵幹、金子薫園の徒即ち是なり。就中鐵幹年少の銳氣を以て新調を鼓し、革

新の先頭に立ちて健闘最力めたり。

の鐵幹は京都の人、萩の家に學びて和歌新體詩に一新調を出し、霸氣旺にして常に豪健の風を喜べり。二十八年征清の役中、韓國京城に在り。病んで重きや、歌うて曰く、韓にしていかでか死なん我死なばをのこの歌ぞ復すたれなむと。以て從來婦女的和歌に反抗し、自ら男子の歌を以て任せる彼が意氣を想見すべし。二十九年長短各種の詩歌を集めて『東西南北』を出し續いて三十年『天地玄黃』を刊行する

や、一種の特調を帯べる短歌及新體詩は、其想形の粗放癡拙にして圓熟渾成に至らざるに係らず、いたく文壇の注意を惹き、佐々木信綱と共に最有望なる青年歌人と目せられたり。彼の新體詩は別に之を論すべし。今特に短歌に就て之を見るに、萩の家の詩風を承けて温藉の情、清新の致、掬すべき者、亦なきに非されども、是等はむしろ其特調に非ず。所謂鐵幹調は、年少の客氣、世を憤り俗を恨める慷慨の歌、若くは、太刀、虎、鷲等の豪語を連ねて剛快の情景を叙べし歌に於て最善く現る。蓋し鐵幹古今集以後の纖弱と優美とを嫌ひ、萬葉集の雄壯と剛健とを喜び、乃ち粗豪の一風を立て、斯壇の沈靜を破り、從來新體詩に壓倒せられて評論界の問題とならざりし和歌をして復好箇研究の對境たらしむるに至れり。然れども彼れの萬葉を學べるは、雅樸高古の詩想莊重なる五七の詩形に非ずして、單に其の雄壯の姿致のみ。唯夫れ雄壯ならんとす。故に往々街氣あり、強て粗豪の語を連ねて、佚宕を粧ひ、真情の流露却て見るべからず。之を要するに、鐵幹の和歌は、革新の急先鋒たりし歴史的價值に於て重すべき者にして、之に取るべき所は即ち才氣縱橫、大膽なる詩風を試みたる點に存するのみ。

ついでに
鐵幹調

鐵幹調
佐々木信綱

鐵幹と流派を異にし、詩風を異にしながら、同時に新詩人として評壇の注意を惹きし青年歌人を竹柏園主人佐々木信綱となす。二十一年大學古典科を出で、爾來竹柏會を立て、和歌を門生に教へ、『日本歌學全書』『歌の彙』等斯道に關する編纂出版をなして其の弘布に益する事少からず。二十九年其の詠草を『めさまし草』に出すや、漸く世の注目を惹き、聲調の流麗なるを以て稱せられたりき。彼の和歌鏗幹の弱氣なき代りに其の俗氣なく、鐵幹の街氣なき代りに其の意氣なし。唯かの舊時代の發達に屬する和歌を以て新時代の事物に調和せんとし、多少清新の趣致を得んと勉むるに至つては、亦新歌人たるを失はず。試みに『めさまし草』所載の歌を檢するに、

星一つみ空に高くきらめきて空しき谷に木枯の吹く。

鐘の聲さ霧に消れて天地に到りわたれる夜の色かな。

藥賣る家の門べをたたく子が髪ふきみだすさ夜嵐かな。

等、從來歌人に比して想像の範圍廣く、彼等に見るべからざる清新の趣致あり。其の調の流麗暢達なるは、十年來専門の宗匠としての竹柏園が獨得の壇場にして、鐵

幹の遠く及はざる所なり。然れども、竹柏園は用語に於て保守的の主張を有し、新事物新思想を詠するに、總て雅語を以てせんと擬するか故に、弊や流れて牽強となり、往々笑ふべき滑稽に陥る。思ふに彼の長所は宛轉たる聲調と千篇立ろに成る達腕とに在り。而も短所亦茲に存し、動もすれば平弱無力の凡調を出し、詩趣索然として空しきあり。歌壇革新に對する態度も、頗る穩和にして、新派と言はんよりむしろ新舊調和派と稱するの妥當なるを見る。従て新文學界に於ける勢力も亦おのづから鐵幹等の下に在るを免れず。

此時に方りて、正岡子規は俳句革新の餘勢を振うて和歌革新に着手しぬ。三十一年の初「日本」に掲げし「歌人に與ふる書」は、即ち子規が斯壇に討つて出てたる名乗の聲にして、續て「百中十首」の創作を同紙に掲げ、爾來竹の里人の名を以て一種の新調を詠みて出でぬ。

綠先に玉巻く芭蕉玉解けて五尺の綠手水鉢を掩ふ。

病みて臥す窓の橘花咲きて散りて實になりて尙病みて臥す。

立並ふ榛も椶も若葉して日の照る朝を四十雀鳴く。

の如きは當時の歌壇に見るべからざる異彩を帶べり。而も其異彩は鐵幹信綱と趣を異にし、調子歌題の上よりもむしろ一首に磅礴する趣味の上に存す。思ふに子規の和歌を讀みて先づ感ずるは俳趣味の掩ふべからざるに在り。本邦の文壇短歌ありてより、歴代の歌人によりて養成せられたる和歌の趣味は、遂に特立して一種固有の者となり、漸々發展して茲に文壇一方の趣味を代表するに至れり。竹の里人の短歌は即ち之に加味するに俳句の趣味を以てせるなり。此の特色や、漢語を含めるを指して言ふに非ず。漢語は鐵幹も之を用ひたりき。又間々萬葉の古調を交ふるを言ふに非ず。萬葉調は海上胤平も之を用ひたりき。用語句法の末に在らずして根本の趣味に於て存するなり。げに此の事は俳人にして和歌にたづさはらん者の、必ず然るべき傾向にして、芭蕉蕪村の徒が指を之に染めたりしならんには夙に斯の風體を得たりしならん。而も前人之を成さず、竹の里人乃ち本邦文壇に於ける和歌趣味と俳句趣味との調和者として之が創始の譽を負うたり。

俳趣味はげに竹の里人の異彩なり。而も尙第二の特色として調のしまりて一

點のたるみなきを擧ぐべし。彼は從來の和歌の一大通弊として調のたるめるを指摘し、斯る歌を以て調と、のはぬ歌となし、語の配置、句の連續に於て冗漫弛廢の病なく、飽くまで緊張勁健なるを尙ふ。竹の里人は此の點より古來の和歌を通觀して萬葉集の卓逸せるを喜び、其以後に於ては源實朝を推し、田安宗武を擧げ、井手曙覽を稱し、更に備前の歌人平賀元義を暗黒の中に救へり。斯くして彼は從來歌人の纖弱にして弛廢せる聲調、陳腐依様の思想を排斥し、溯つて萬葉集の剛健にして緊張せる聲調を取り、自然及人事に對する新しき著眼より得來れる詩想若くは彼の既に得たる俳想より形作れる新歌想を詠み出でたりき。

三十二年以後の作歌も、大體に於て、前條所說に異ならずと雖、唯萬葉崇拜の度の益加はり、管に剛健の趣緊張の調のみならず、延て句法用語を模し、更に長歌旋頭歌等の形體を模し、進んで思想さへ學はんとするに至れり。然れども之既に加茂眞淵等に見たりし如く、萬葉崇拜の極、皮相に走りし一時の變象にして直に以て竹の里人の本領となし難し。其の歌想漸く神に入れる頃の作『曇』五首、『雨中庭前の松を見て作る』十首、『風』八首、『星』九首等の如き、重厚勁健の古萬葉調を以て明治の新

詩想を詠じ、詩味津々として清新の氣盡きさる者あり。且つ一題數首乃至數十首をもつて各其趣を得たるは、本と俳句にて養ひし手腕なるへしと雖、亦彼れの詩想の富贍なるを見るに足る。唯事彼が晩年に屬し、一臥起たさりし病牀の執筆なるか故に其詩材題目概ね病室乃至庭前の小範圍に限られ、動もすれば同一の歌想を繰り返さんとする嫌あるを恨とす。

竹の里人が『日本』紙上歌論創作を載せしより、麾下に集まりし者に、香取秀真伊藤左千夫等あり。三十二年春根岸短歌會を起し、作歌は常に『日本』ほととぎす、『心の華』等に載せ、歌論亦之に伴ひ、頻りに革新の説を稱へたり。

竹の里人の期する所は蓋し短歌革新の事業を成就するに在りしならん、然れども其運動の文壇に及ぼし、影響は到底俳句に於けるか如く雄大絢爛なる能はざりき。思ふに是當時和歌界の革新は既に萩の家竹柏園の徒によりて其の幾分をなされ、加ふるに革新の大勢力たるべき青年好文の徒は、多少貴族的、女流的なる和歌よりも平民的、男子的なる俳句に趣く傾向ありしを以てなるべし。況んや竹の里人の病漸く篤く、意氣復當年の如くならず論壇筆を振ふ事既に絶えたるをや。

へ明星派の成り
馬酔木 不振

三十三年鐵幹新詩社を結びて雜誌『明星』を發刊し、和歌を主として新體詩俳句其他一般文學を收録し、以て自家一流の和歌を擴布するに勉め、遂に所謂明星派の一團を形作りぬ。次に根岸派は又機關雜誌『馬酔木』を發刊して斯派宣傳に勉めしが其の青年の間に於ける勢力は遂に『明星』に及ばざりき。

ト新加の成り
不振

茲に暫く和歌に關する筆を擱き、翻つて上述の運動が文壇に残せる結果を列舉すれば、從來單に志を述ふる要具となし、又は風を移し俗を推す方便となされし和歌を一箇の美術品として取扱ふに至りし事、其の一なり。花鳥風月に限られし歌想著しく擴張せられ、蘆庵景樹等が夢想だも及ばざりし無數の題材新に入り來りし事、其の二なり。古來歌人の最得意となし、枕詞掛詞及縁語の類漸く其姿を隠し、勉めて虚字を去りて實字を充つる傾向生じたる事、其の三なり。古來制定せられたる歌詞の小範圍を脱して新詩想を述ふるに足るべき總ての言語を用ゐるに至りし事、其の四なり。從來の和歌を評する者、概ね作者の感想の仔細に表章せられたるか否かに標準を置きしに反し、藝術の本義よりして該作物が讀者に與ふる詩的効果に就て論するに至りし事、其の五なり。其他新現象一にして足らずと雖

とにかく、一時新文學界に顧られざりし和歌が、再び新文人の手に保育せらるゝに至りしは、複雑なる詩想中、又此の可憐なる小詩形に寓すべき恰當の者存するか故なるべし。然れども、革新の事業は今尙試験の際に屬し、當時の新壇未だ明治の特調を見る能はざりき。

第六章 文學の轉進

第一節 小説 其の一

一 觀念小説

前記末葉に方り甚しく沈衰せる小説界は、文運興隆の機に乗じ俄然として頭角を揚げぬ、累年蓄積し來りし潜勢力爰に勃發して桃李一時に花咲き、而も前期の小説に比して一段の進歩をなしぬ。小説専門の雜誌『文藝俱樂部』は二十八年新に發刊せられ、創刊の『太陽』亦小説に盡し、『國民の友』の小説に對する推挽も従前に劣らず、其他諸新聞殊に『讀賣』『國會』『朝日』等、競うて小説を載せ、單行本の新刊益多きを加へたり。翻つて作家を見れば、紅葉露伴等前期の大家復び振ひ、柳浪眉山等、未

だ大名をなさゝりし者著しく發達し、加ふるに鏡花一葉宙外天外等新進の作家踵を接して起り、各特有の詩想を鼓して斯壇の一方に雄視せり。二十九年に入りては、此の傾向益甚しく、専門雜誌「新小説」新に發刊せられ、創作出づる者愈盛なりき。而して此の間最早く其の萌芽を露し、小説界大轉進の陣頭に立ちし者は、即ち觀念小説の一派なりき。

曩に論せし如く、第二期に於ける淺薄なる寫實小説は長く文壇の聲譽を繋ぐ能はず、代つて起りし歴史小説は成功の域に至らずして衰へ、撥鬚小説は粗笨淺薄、在來の寫實小説にも過ぎたり。小説内容の進歩は二十五年以來全然停止せりと云ふへかりき。是に於てか意義内容の一層深刻なるを求むる傾向文壇に生じ、之に應ずる新進作家相次て寫實小説の部内に出でぬ。彼等の作たるや、之を在來の寫實小説に較ぶれば、結構單純にして篇章亦短小なりと雖、其の心理描寫の精緻なる其の性格表出の刻劃なるに至つては遙に從來の者に勝り、而も概ね一定の觀念若くは傾向の上に立ち、人物の性格心理の發展主として之に出づ。故に是等の人物の性格及心理は從來の小説に於けるよりも更に複雑、更に微妙にして、其發展の如き

ハ、觀念を述べろ
淺薄なる寫實
小説は粗笨淺薄
在來の寫實小説
にも過ぎたり
小説内容の進歩
は二十五年以來
全然停止せりと
云ふへかりき
是に於てか意義
内容の一層深刻
なるを求むる傾
向文壇に生じ、
之に應ずる新進
作家相次て寫實
小説の部内に出
でぬ。彼等の作
たるや、之を在
來の寫實小説に
較ぶれば、結構
單純にして篇章
亦短小なりと雖
、其の心理描寫
の精緻なる其の
性格表出の刻劃
なるに至つては
遙に從來の者に
勝り、而も概ね
一定の觀念若く
は傾向の上に立
ち、人物の性格
心理の發展主と
して之に出づ。故
に是等の人物の
性格及心理は從
來の小説に於け
るよりも更に複
雑、更に微妙に
して、其發展の
如き

川上眉山

藤田
藤田
藤田

「うらおもて」

も因果關係一層確然たり。作家か斯る描寫を試みんとするや、特殊の人物を取り特殊の舞臺を取り、以て特殊の觀念思想を寓し、特殊の心理現象を描き、所謂寫實以外に或物を捉へんとせり。事二十八年に起り、世に稱して觀念小説といふ。眉山の「裏表」「鏡花の夜行巡查」「外科室」等の如きは、即ち此種の小説の代表的製作なり。川上眉山は硯友社中の才筆と稱へられしも、前期に於て未だ名をなす能はざりしが、二十八年に至りて、從來の纖麗妖冶の筆に加ふるに一種深刻の觀察着想を以てし、いたく在來の西鶴的寫實と趣を異にし初めぬ。「太陽」に出せる「書記官」は實に此の傾向の萌芽にして、「國民の友」附録に掲げし「うらおもて」は即ち之か精華なり。「書記官」は、純潔の處女が父の名利の爲に一身の貞操を犠牲に供する一種悲惨なる社會現象に着想せし者にして、世間往々存する、名利の繋累を利用して處女の純潔を弄ぶ惡むべき行爲を提げ來り、之を描くに一箇清新なる具象的作品の形を以てせるなり。次に「うらおもて」は、同じく社會の罪惡に着想し、徳行家として知られし者が冷酷なる世人に其の慈善心を翻弄せられ、遂に財産を蕩盡し、はては社會に突き放さるに至りて始めて社會の無情なるに驚き、熟々世相を觀察して我利私慾の世

となし、遂に自らも盜賊となれる順序を描き以て、社會を痛罵せるなり。斯くの如き趣向は從來の小説に見るへからさりき。大詩才にして筆を此の方面に向け、複雑なる心理變化の剖拆を試みる事あらば、沈痛深刻人の肺腑を穿つべき異彩出色の作を得べし。然れども作者、理想を表すに專にして事件甚自然に遠く社會觀を體現するに急にして心理變化の徑行甚分明ならず。僅かに其の一端に觸れしのみにて未だ優秀なる藝術たる能はざるを憾となす。唯小説題材を一新せし功績小ならずといふべし。

吳鏡花

斯くして眉山は觀念小説作家の一代代表者となりぬ。然れども此の作風を文壇に捲き起して之か陣頭に花々しく戦ひし者は即ち紅葉門下の新進作家泉鏡花なりき。眉山の如きはむしろ後れて此風を學びしか如し。鏡花は二十六年紅葉の門に入り、夙に峻峭の筆を以て「讀賣」に異彩を放ちしが、二十八年春、先づ「夜行巡査」にて「外科室」を「文藝俱樂部」に掲ぐるに及び、彼の名は俄然として評壇の論題となりき。

「夜行巡査」

帝都の夜を守る一巡査あり、職務に忠實なる事類なく、夜行巡査の職務を行ふに

一點の懈怠なく、又一點の假借なく、宛然たる職務の權化なりき。然れども彼も亦木石の無情漢ならず。熱情を傾けたる一箇の愛婦を有せり。其の冷々氷の如くなるは職務の觀念強烈にして凡百の私情暫く屏息するのみ。偶々愛婦の父泥酔し、彼の女に扶けられて夜を歸り、彼を嘲罵誹譏して兩者の愛を割かんとす、巡査は黙々として酔漢の後に從へり。忽然酔漢誤て濠に陥りぬ。巡査は身を躍らして濠に入りぬ。彼は人民保護の職掌を行はんか爲に、惡むべき戀の妨害者をも救はんとするなり。憫むべし、氷の如き濠水は此の職務の權化をして長へに逝かしめぬ。斯くの如きは「夜行巡査」の主旨なり。蓋し鏡花義務の觀念を寫さんと欲し、戀愛の私情に對する此の觀念の勝利を描き、以て人生悲劇的の一方面を深刻に體現せんとす。故に巡査か職務に忠なれば忠なるだけ、彼の情熱の高ければ高きだけ、戀愛の妨害の大なれば大なるだけ、作者の成功は其れだけ光榮ある者となりぬべし。此篇固より渾成の名什に非されども、其の題材着想全然創始に出で筆致亦幽峭にして詩趣に富み、洵に小説一轉の機を云せりといふべし。「外科室」の醫學士と伯爵婦人との間、亦這般斷腸悲慘の趣を盡し、遂にわりなき戀に一身を献するに

至る所、更に人生の恨事を體現せり。

二小説出で、鏡花の名文壇に普く、奇峭の想、俊爽の氣、沈痛の筆相俟つて人生の或物を描出せんとする彼の作は、教養ある讀書社會に多大の歡迎を受けたり。同年の「鐘聲夜半録」「二十九年の琵琶傳」「化銀杏」「海城發電」の如きは皆此の系統を引ける者、構想益慘憺、筆法益瑰奇、「化銀杏」に至りて特に此の傾向を示せり。然れども物一度新傾向を帶ぶるや、往々極端に走り、從て其の弊に陥る。鏡花亦此の弊實を承け、着想奇に過ぎて恠に流れ、筆力玄に過ぎて趣を失ひ、其の極不自然非人情の域に落ち、人物の如き、往々常識を超へ常情を離れたる奇癖の怪物となる。故に其の事の悲惨なる讀者の胸を刺る者あるに係らず、惻々として人を動かす事なく、特に主人公の悲劇的没落以外、屢殺人の慘事を仕組みたれば、中には却て不快の感を起す事なきにあらず。

吾人は鏡花眉山の二人を以て小説界に於ける新傾向の唱首となせり。爾來或は社會の罪を寫さんとし、或は人生の目的としての戀を描かんとし、其他倫理上心理上の種々の觀念或は概念を捉へ來りて之を作品の上に體現せんと試みたる小説續々出で來れり。批評家は概ね之を觀念小説と呼べるも、尙時には概念小説と稱し、或は其の傾向より名けて深刻小説、悲惨小説とも言ひ、又は心理描寫を主とする點よりして漠然心理小説とも言へり、然れども心理小説は觀念小説深刻小説などよりも範圍廣く、所謂觀念小説は小説全體の心理的傾向の一部なり。一部先づ起りて種々の部類之に繼ぎ、遂に各種の心理小説競ひ起るに至る。此現象は獨り小説界に存するのみならず、文藝界の全部を通じて現はれたり。國民の自覺學術の進歩と共に、從來比較的淺薄なりし思想界の比較的深厚となるや、文藝界に於ても一種深刻幽玄の新思潮起り、世態人情の機微を捉へて直に人の靈界に觸れんとす。繪畫界に於ける心もち主義、印象主義の如き皆此の思潮に出づ。特に小説に於ては、或は作者自ら泰西小説に接し、或は小説の理想觀念などを論せる批評家の論議に鑑み、從來の小説の輕浮單調に對して漸く不満足を感せるか上に社會生活の現状は人をして人生の嚴肅なる方面を経験せしめたりしかば、愈益此の傾向を助長せるなり。

觀念小説に次て現れたるは、即ち廣津柳浪の深刻小説悲惨小説なり。彼は前期

黒蜥蜴

二、何物作、此中流

まづ、
観念小説の類
ありて、
今、
眼を、
柳浪、

に在りて既に一種人生の機微を寫すに長したりしが、今や新興の氣運に乘じ、二十八年「黒蜥蜴」變目傳を出し、其他翌年に亘りて「白百合」「龜さん」等を出し、愈其の本領を發揮し來れり。就中黒蜥蜴は、隻眼痘面の醜婦にして而も貞實至孝なる大工の嫁が、貞操の爲に無慈悲酒亂の舅を黒蜥蜴にて毒殺し、己亦自殺すといふ悲惨なる脚色、變目傳は侏儒變目の醜貌に生れて而も心尋常の情を解する心身不調和の男が、性格境遇の否なるに激成せられて遂に殺人の大罪を犯すに至る凄惨の事象を描き、其の他概之に類せる病的人物の憫むべき忌むべき運命を叙せり。此等の作出で、柳浪の名大に揚り、鏡花等と共に新派と稱せられたり。

柳浪は概ね筆を人生の暗黒面に着け、性格と肉體と境遇との關係より凄絶なる破綻を來すに至る徑路をば、極めて痛切に寫し出さんごせり。其の主人公が常に肉體上精神上の不具者、若くは強度の神經家なるか如きは、た其の大破綻の結末が概ね殺人自殺等鮮血を以て染めなされしか如きは、即ち此目的を達せんが爲に外ならず。鏡花を以て之に比するに、彼に在りては觀念或は概念といふべき者全篇を支配するも、此に在りては必しも然らず、唯世相の悲惨なる一面を深刻に描き出

さんごするを見るのみ。彼は又理想に馳せて超人間の不自然界に入る事ありと雖、此は決して然らず、人生一部の寫實として特殊の場合に於ける心理自然の徑行を寫せり。而も人の靈界に觸れて其消息を描き出でんとせるは二者等しく新派小説家たるを失はず。唯惜む、柳浪の小説往々殘酷に流れて不快の感を惹起するを。

觀念小説深刻小説一たび出で、文壇爲に活氣を生じ、讀書社會は其の新奇の色彩に眩して頻りに之を謳歌せり。然れども、少しく思慮ある批評家は激刺たる新彩の裡に潜める幾多の缺點を見て屢之を難せり。蓋し是等小説の失ごすべきは主に、規模小にして觀察概ね主觀に偏し、從て不自然病的に陥る事多きに在り。是を以て一時の革命的現象として心理的傾向を小説界に残しつゝも、漸次勢力を文壇に失へり。

吾人は叙述の順序として當時續々起りし心理小説の新進作家を擧げ、觀念小説悲惨小説以外如何なる發展をなし、かを論すべき場合に立向へり。されど上述三作家の作風も亦之と同時に多少の推移發展をなせるを以て、便宜上暫く他を差

措いて三作家其後の作を見ん。

眉山が「裏表」以後の作に在りては、二十九年作「松風」翌年作「臙富士」と「絃聲」と稍見るに足る。「松風」は詩人は狂に類すといふ思想を體現せる者と見るべく、「臙富士」は葛藤ある戀愛と悲惨なる運命とを叙して、女子心理状態の一方面を描き、「絃聲」は人心の奥妙を寫すに夜半おのづから起る絃聲を以てせる幽玄の作なり。是等の作、聲譽固より前年の作に及はずと雖、觀念小説の矯激なくして心理小説の自然的なる分子著しく加はり、作風の推移鮮少に非ず。唯其の筆力未だ眉山の名を高うするに足らざるを恨となす。

鏡花は怪奇に過ぐるゝ人情に遠きとの故を以て、一時評壇の批難を受け、爲に二十九年の主たる作「一の巻」より「六の巻」に亘る長篇を「文藝俱樂部」に掲げし時も、苦心の作なるに係らず、世の視聽を惹く事少かりき。然れども鏡花の鏡花たる所は、幽玄神秘の詩的風韻に在りて寫實的筆力の精細に存せず。鬼才益幻性を逞うして「龍潭譚」となり、「照葉狂言」となり、「風流蝶花形」となり、「化鳥」となり、「清心庵」となり、「髻題目」となり、三十一年に入りて更に「辰巳巷談」「笈草紙」「梟物語」等となり、一方より性に違ひ

情に悖るとの貶評、邪路に入れりとの警策を受けなから、兎に角才筆斥くべからざる者ありき。

「龍潭譚」は薄暮一幼童の魔に魅せられて夢幻に入るを描き、「風流蝶花形」は恠蝶を材として遊女の咀死を寫し、共に凄婉の致に富む。「化鳥」は落魄の佳人半狂して夫の形見の一塊肉を抱き、世を恨み人を罵りて己れ獨り天女なりと言ふに至れる悲痛の物語、「清心庵」は貴人に嫁せし美女が幼馴染の少年に邂逅して其零落に同情し、遂に相共に一草蘆に止りて其家に歸らずといふ奇矯の筋、共に幽玄の詩趣を認むべし。「髻題目」「辰巳巷談」とは、一は藝人の末路、他は女郎の末路を描きて、嶄新又凄涼、梟物語は眞宗寺院の内部を寫して恠奇なる人物性格を集め、幽玄蒼涼人をして悚然たらしむ。而して作家か是等の趣向を筆にするや、獨得の省筆法を以て含蓄餘韻あらん事を求め、隱約の消息を讀者の想像に一任す。是を以て彼の小説を讀むや、先づ神秘的の想髓と脚色とに魅せられ、文字の恠奇、詞章の凄愴とは之を助けて恰も幽界に赴くか如き思あらしめ、次て此の省筆に遭ふや、益其の想像を逞うして夢幻の恠境に走せしめらる。蓋し鏡花は人情世態の機微を寫す作家に非ずし

て、神秘界の消息を穿たんとする作家なり。彼れの立脚地は正に茲に在りといふへし。

然れども斯る特色を發揮して渾成の域に至らんには非常の修養を要す。鏡花の筆力惜むらくは未だ圓熟せず、堂に上りて未だ室に入らず。其の人物と事件とは、一面に於て現實を超て幽怪の眈に入ると共に、他面に於て未だ超自然の神秘界に觸れず、徒に結構の不可思議と詞章の幽玄とを弄して思想の神秘を装はんとす。故に形式に於て多少の成功を見ると雖、内容に於て意外の空虚に驚く。彼の讀者を魅する所以の者は主として脚色の不可思議なるによりて催起せらるゝ探偵的の好奇心と、詩味津津たる描寫の往々幽玄の高調に達する箇處あるか爲に惹起せらるゝ感情の昂上との二者に在るべし。思ふに鏡花の作、全體としては散漫の失あると共に、局部に於て緊密周匝、及ふべからざる者あり。是に於てか作者の名復び揚り、模倣する者少からず。盛名當年の如くならざれども、筆力の發展決して尠に非ず。又以て後進作家の冠冕たるを失はず。

悲惨小説の名家柳浪は、其の深刻の筆鋒を以て心中物を作り初めぬ。二十九年

『文藝俱樂部』に出でし『今戸心中』、『新小説』に出でし『河内屋』、『小説六佳選』に出でし『淺瀬の波』の如き是なり。皆情海に浮沈する男女の複雑なる關係と葛藤ある戀愛とを描き、結ぶに悲惨なる情死の現象を以てし、即ち元祿の昔、巢林子の靈筆に詩化せられし心中を取り來りて一篇の主眼となし、之に戯曲的結構と心理の解剖とを經緯せりき。就中河内屋は當年の傑作にして、所有柳浪の長所を集めたりと稱せらる。げに寫實小説心理小説在りてより此作程人情世態の自然なる現象を描ける者少く、人物の氣稟性質に應じ、其の境遇の上に凡百の色彩を與ふる狀況も明瞭に描かれ、特に對話の如きは作者獨得の筆力其巧妙を極む。げに此作は當に柳浪をして名を當代に高からしめしのみならず、明治の文壇に重きを爲すに至らしめし傑作なり。

爾來柳浪は『信濃屋』、『段々染』、『異り種』等、創作少からず、皆深刻の觀察を恣にし、陰森の氣に滿つ。げに柳浪獨得の壇場は即ち人の思ひ至らぬ一種疾痛すべき人生問題を捉へ、一種深刻なる詩題を自然界より擇み出して、之を讀者に提供する手腕に在り。此の特質は『殘菊』以來の者にして、慘憺の境遇と悲痛の運命とに蘊弄せらるゝ

情的人物を描いて其の心裡の苦悶を叙する所人の腸を九回せしむ。唯描寫の筆力惜むらくは之に伴はず。對話の巧にして隙なき當代を曠うするに係らず、心情流動の迹を寫すや、往々説明の疎筆を以て忽々叙し去らんとす。讀者か斯る文章を讀みて、尙無限の妙味と一種の魔力とを感ずるは、詩題結構其の物が極めて奇抜にして、讀者の想像をして文筆の形似を脱して直に事象の中心に突入せしむるか故なり。彼の長所は結構の戲曲的發展に在ると共に、對話を以て始終すべき戲曲的形體に在り。此點に於て三十年『太陽』に掲げし『畜生腹』の如きは最よく作者の特色を現せる者といふべし。『畜生腹』は『河内屋』と共に柳浪一代の傑作にして、畜生腹の一婦人苦惱の餘り悪婆の勧誘に應じ一兒を暗に送りてより悔恨と恐怖とに身を悶む心を勞し、夫の疑惑と悪婆の強迫とに挟まれて懊惱憂苦、遂に夫婦の間長へに疎隔するに至りし始末を寫し、通篇讀者の感興を緊張して一點の弛みを與へず凄慘の氣人に迫りて卒讀に堪へ難し。作者嘗て曰く、深夜燈下に非ざれば小説の作をなす能はずと。其の能く凄婉なる脚色と筆致とを得來るは孤燈暗影の下に思を凝せばか。然れども事利あれば必ず弊を伴ふ。柳浪の如きも往々慘酷に過

ぎ殘忍に流れ、刺激強烈に過ぎて間々不快の感を起す。此の傾向は彼を驅りてか其の精神上肉體上の不具者を寫さしめ、然らざるも下等の人物社會に想を構へ、延て殺人自殺心中等、衝動の強烈なる結果を取らしめたり。之を以て彼の作には詩想の高尙脱俗なる者なく、寫す所の戀愛概ね汚れたり。かの情死の如きは愛情發動の最美しき者なるも、之を狹斜の巷に求めんは、品位あり見識ある詩人の爲すべき事に非ず。階級の嚴制ありし昔に在りては、人情の自由にして自然なる活動を現じ、複雑にして曲折ある戀愛を構成すべきは、獨り楊臺柳巷の間に在りしを以て詩人の着想亦此の地に向ひし事争ふべからずと雖、明治の新天地に入りて尙且つ遊女漂客に非されば戀愛を語るに足らずとは言ひ難し。

同年の作の可なる者には、尙あに『青大將』七騎落あり。手腕漸く老熟して強て悲慘を求めず。作風漸く中正に赴き、歩一步自然派の領域に近きつゝあり。三十年『羽拔鳥』、『新著月刊』、『女仕入』、『新小説』等を出すに及んで益此の步趨を取り、前者は從來の悲慘小説に比して、結構性格の自然なる、結末の光明的なる點に於て大なる差異を現し、後者は多少悲慘小説當年の面影を存すと雖、心理自然の徑行を描いて

一系亂れず、好箇戯曲的發展をなせり。此の自然派的心理小説は、當時の小説界を風靡せる者にして、柳浪實に此の間に重きをなし、多作縦横、彫琢を用ゐずして直ちに稿を脱する所、亦異才なりといふべし。

斯くの如く新潮流の擴布に最力ありし三子者の作風は、一時極端に走りて其の反動を受くるに至りしかば、飄つて多少の變更推移を其の間になし、概ね中正折衷の風に赴けり。獨り鏡花は自然派的寫實を離れて幻性の境に入りしも、眉山柳浪特に柳浪は其の心理小説益自然的となり、比年大に奮ふ。而して三子者皆明治寫實小説の祖門たる硯友社に出でしを見れば、斯壇の進歩に對する該社の因縁蓋し淺からず。況んや江見水蔭大に振ひ、小栗風葉新に起りて之に貢獻する所ありしをや。此の時に方りて後進作家踵を接して起り、文壇之を歡迎するの聲高く、十九年創刊の『新小説』、『世界の日本』、『翌年創刊の』、『新著月刊』等、皆之を標榜せり。既に新進作家あり。乃ち之に對して從來の作家を先進作家又は老大家と呼び、二者是非の論喧しく、反動又反動、後進奇峭の氣は先進老熟の風に宥和せられて、極端に奔逸する事漸次少かりき。此の先後新舊融和の潮流は、夙く女作家一葉に萌し、早稻田専

門學校出身の諸作家に至りて其の勢を逞うせり。以下序次を追うて是等新進作家を叙すべし。

二 心理小説

觀念小説深刻小説の天下を風靡するに方り、筆は露伴を學びて氣骨ある西鶴風を取り、想は心理的主觀的の最新思潮に出てたる一新作家の、忽焉として文壇に現れ、佳作連出、盛名一時に世に布けるありき。樋口一葉女史是なり。一葉は東京の人、二十五年始めて筆を小説に執り、爾來二十九年、其の病没に至るまで文壇に於ける生命僅に四歳、而も其の間作る處二十餘篇皆傳ふるに足る。没後蒐輯發刊せられし『一葉全集』に就て見るに、其の處女作は『闇櫻』にして、二十五年の中に得たりし短篇總て七種ありと雖、世に公にせられしは『都の花』に出でし『理れ木』などや嚆矢なるべき。其後『文學界』、『文藝俱樂部』等に掲げし者數篇あるも未だ作家の名を高うするに至らざりしが、二十八年一代の傑作『たけくらべ』、『文學界』に出で、續いて『行く雲』、『太陽』に、『沔江』、『文藝俱樂部』に、『十三夜』、『閨秀小説』に出で、翌年『わかれ道』、『國民の友』に、『わかれ』、『文藝俱樂部』に出づるに及び、才筆忽文壇を動かすに至りぬ。

樋口一葉

「たけくらべ」

「濁江」

「たけくらべ」は楊臺近き大音寺前、一體の風俗餘所と變りて少年少女のませかた恐しき市井に人となり、春は櫻の賑ひ秋は仁和賀の折々に、迭にくらべ來し振分變の間にも情、意氣地、戀無常、種々の世相の幼きながらに見らるべき情味ある舞臺に筆を着け、全盛の華魁を姉に持てる十四の少女美登利を主人公となし、界限種々の少年少女を之に配し、以て美登利の快活勝氣なる性格を彫り浮め、此の如き氣象者のいつか物恥かしく人なつかしくなるに至れる心理變化の微妙を躍動せしめたり。

「濁江」は塙末新開地の銘酒屋菊の井の出女お力が嘘のありたけ串戯に其の日を送る中、怨の刃にかゝりてお寺の山の人魂と化するに至りし筋を叙し、遺傳と境遇と閱歷と相倚りて成る人生の複雑なる徑行を描きて筆力最深刻、平和快活の大海の下奔激悲惨の暗流あるを示し、絃歌嬉笑の裡悲壯の涙の潜むを寫して筆鋒熱烈を極む。「十三夜」は貧乏士族の娘お關が夫の虐待に堪へ兼ねて夜私に親里に趣きしに、殘し置きし一子の愛やら物堅き父か訓戒やらに思ひ返して歸る途中、十三夜の月影に、處女なりし昔思をかけたたりし男の、車夫とまでなり下りしに遇ひ、浮世に辛きは一人と思ふなどて相別れ去るといふ筋、憂きは互の世に思ふ事多き世相の一

部を描破して凄婉痛惻人を動かす。其の他「行く雲」「別れ道」「われから」等、皆夫々の人情の機微に觸れ、世相の凄慘を表せり。斯くの如くにして一葉の名は文壇賞讃の中心となり、或は誠の詩人といふ稱を贈るを惜まずと言ひ、或は當今の小説界は一葉時代なりと呼ぶに至りき。かゝる過大の讚美は勿論才華一時に煥發せる強烈の光彩に眩惑して冷靜なる鑒識を誤りしに出でしならめど、亦是れ從來觀念小説悲惨小説の奇恠慘酷に嫌惡の情を生じたりし時に際し、比較的、自然温藉にして而も意義の深刻なるを失はざる新小説を得たりしに因らすんばあらず。尙其の全集に就きて觀察せん。

一葉の見たる社會は、冷酷無情個人の發達を抑壓する意地惡の者なりき。まゝならぬ憂世とかこつは一葉の社會觀よりすればむしろ穩和に過ぐ。社會は個人と對立して屈せざる者に非ずして、個人の上に駕して之を埋沒せんとする者なり。「行雲」の中に「二葉の新芽に雪霜の降りかゝりて是でも伸びるかど押へるやうな仕方」と言へるは正に社會か個人に對する態度を説けるなり。社會果して斯の如しとすれば、此の間に生を享けし者、醉生夢死の徒に非ざるよりは如何で平穩無事なる

べき。苟も一節あらん者誰か社會の冷酷無情に萬斛の憤涙を澀ぎ、之に抗し之に逆ひ、當つて摧けさらん。一葉の小説に於ける人物は即ち是なりけり。

斯る性格を以てこの意地悪の社會に處せんには忽ち起るは衝突なり、葛藤なり、熱涙なり。續いて起るは悲むべき大破綻、恐るべき大破壊なり。然らば則之に繼て來るべき結末は何ぞや。正に是れ一葉の小説の主眼とする所、全集二十餘篇は即ち此の間の消息を描かんと試みたるに外ならず。思ふに古來の文學にして此の消息に觸るゝ者、概ね自殺若くは遁世を以て其の結末となせり。然れども是等は一葉の小説の結末たらんには餘りに淺薄、餘りに古風なり。深刻の思潮文界に横溢せし當時に在りて斯る陳腐なる人生觀の容れらるべくもあらず。是に於てか一種沈痛なる人生觀を生じ、萬斛の憤涙を揮ひ盡せる後に於ける異常の諦めを生せり。一葉か甚深の同情を以て氣骨ある筆を揮ひしは即ち此の恐ろしき諦めを生ずるに至る消息にして詩人として成功せし所亦茲に在り。而して男女人物の中全幅の同情を傾倒せしは勿論女性に在りとす。蓋し弱きにつれなき冷酷の社會は人の中の最弱き女性に向つて特に其の横暴を逞うす。持つて生れし一ふし

あらん女の涙を揮ひ盡して所有強情我慢に恐しき決心を示すに至るはむしろ憫むべからずや。一葉は即ち是等無告の女性の爲に萬丈の光燐を吐ける者、明治文壇に在りて當代の女性を描く事かくの如く痛切なるあらず。紅葉一派の寫實家か創れる女性の如きは、之に比すれば尙未だ淺薄なるを免れず。

吾人は一葉の小説を通觀して略其の特質を盡しぬ。顧みて之を思ふ、全集二十餘篇悉く同一人生觀の上に立ち、同一性格を描けり。女史の小説は大自然を描かんと爲に人生の種々相を寫せるに非ずして、一定の人生觀を表現せんか爲に人生の特殊相を寫せるなり。換言すれば各篇其の結構を異にするに係らず、畢竟同一問題を解決すべき實例の蒐集に過ぎず。是を以て主觀の基彩は全作品に亘り、篇中の人物動もすれば作者其人の影子たらんとし、而も其影子や、作者の人生觀の明晰直截なるだけ、所謂寫實派の其れに比して甚しく明瞭著大なり。故に其の筆に上る所、狹隘なる社會に限らるゝ代りに、描寫の深き、奥底に徹し、單調なる性格に限らるる代りに、刻劃の生采、躍動の妙を極む。此の點に於て一葉の思想筆意は所謂深刻小説に似て其の奇怪と慘酷と無く、却て同情の人を動す者あり。且夫れ一葉

の自然を重んじ背實を忌む事必しも所謂寫實家に劣らず。女史は即ち寫實家の心を以て深刻小説を作る者、從來の寫實派と觀念小説一派との最善き調和家析衷者なり。

一葉は小説に師事する所なかりしかど、私淑せるは蓋し露伴に在りき。人物の性格の如きは頗る露伴のに類似し、特に「埋木」の主人公の如きは全く露伴固有の人物なり。従て文章亦露伴を學べる者少からず。蓋し一葉の文、初め西鶴を師としたりしが、西鶴を脱して一家をなせる露伴を見るに及び、更に之に私淑するに至りしなり。「埋木」の如きは元祿の大家を模倣せる跡没すべからざると共に、頗る露伴の初期の文章に類す。然れども「濁江十三夜」に至つては既に獨立して一新體を創出し、精練にして才氣縱橫、雅俗の言語句法を驅使するの妙一世に秀づ。特に「たけくらべ」の一篇は、文情清婉、文氣老熟、洵に渾成の名什たり。且つ從來等閑視せられし小説中の敘景分子著しく増加し、特に「行雲」の末段「たけくらべ」十回に於ける情景雙敘の一節の如きは、清新簡淨にして趣味溢るゝか如し。不幸にして詩想文章並に成熟の境に至らずして病に伏し、一臥遂に立たざりき。年僅かに二十五歳。大橋

『一葉全集』

乙羽齋藤綠雨等『一葉全集』を編纂發行し、以て紀念となす。

一葉文壇に出てし比、女流文學者の筆を小説に染むる者一時に輩出しぬ。從來女流文學とし言へば和歌に限られたりしが、文運の興隆以來往々小説翻譯新體詩等に及べり。三宅花圃の小説に於ける、若松賤子、小金井喜美子の翻譯に於ける、夙に才筆の目ありしが、是に至りて一葉を出し、北田薄氷を出し、田澤稻舟を出し、大塚楠緒子を出し、二十八年末遂に一部『閨秀小説』の出版を見るに至れり。收むる所の作家は上掲數人を合せて總て十二、就中花圃は曩に「露のよすが」を『太陽』に、今は「萩桔梗」を『閨秀小説』に出し、共に無垢の娘心、可憐なる處女の情を寫して温藉の姿致を極む。作者は當時に於ても、又其の前後に於ても、作品多からずと雖、さすが女流小説家の先輩として、老練の筆ぶり一葉と共に當代閨秀の首班たるに足り、一葉の悲觀的厭世的なるに對し、樂觀的光明的の觀察に富めり。げに二人の特質は好箇の對照にして、一葉の社會の缺陷を指摘するや秋霜烈日の嚴しさを以て之を冷罵し、花圃は其の缺陷を認むるも、其の裡又一點の調和を求め、春風滋雨の温さを以て之を謳歌せんとす。一は人生の暗側を寫し、他は其の明側を描き、一は文章の奇拔を以

三宅花圃

て勝り、他は其の温和を以て優る。故に二者の觀たる社會は等しく不調和缺陷の集合なりきと雖、人物の性格は大に差あり、從て個人對社會の葛藤は、其の終結に於て甚しき相異あり。「露のよすが」の露子姫、何一つ不足なき身ながら與はらぬ容色に赤繩結び難く、千行の紅涙強て抑へて唯醜草の疾く枯れよと祈るは好箇人生の悲劇、一葉をして材を此に取らしめば、正に一個世のすね者を描き出でしならん。而も花圃の露子姫は無情なる子爵の筆意に倣うて靜に富士を畫く餘裕と和平とあり、末段一點の光明を示して慰藉する所少からず。「萩桔梗」の浪子亦失戀の恨を懷いて傷まず狂はず、曠昔一時の夢を忘れて和平の局を結べり。斯くの如く二作家の人生觀は根抵より異なりと雖、各人生の一面を寫して雙璧の價値ありといふべし。薄氷と稻舟とは之に次く作家にして、前者の作は「鬼千疋」あり「黒眼鏡」等あり。結構着想共に人生の悲觀に出で、而も這理女作家の温藉を見る。後者は「白薔薇」等の作あり。筆熟せずと雖、才氣おのづから現る。山田美妙齋に配して二三の合作ありしが、二十九年一葉に先ちて没しぬ。「閨秀小説」に漏れし作家の中、田中夕風は亦有望の名ありき。

北田薄氷

田澤稻舟

心理描寫の潮流は、一方に於て江見水蔭と田山花袋との散文詩的小説を出しぬ。二人は共に深刻なる寫實、高遠なる理想の筆を缺けりと雖、其代りに津々たる詩趣に富み、縹緲たる詩韻を藏する事群作家に超ね、鏡花の怪奇柳浪の悲惨一葉の沈痛以外、別に一異彩を新作家の間に放てり。

水蔭は漣山人と同じく獨乙協會學校に出で、硯友社初期以來の社中たり。所作概ね小説なれども夙に脚本に指を染め、且つ艶筆を鳴れる社中、比較的氣骨ある文章を屬し、同人間の異色と稱せらる。早く「中央新聞」に入りて小説をものし、戰爭酣なるや數多の軍事短篇小説を出しぬ。然れども第二期に在りては特に注目すべき作なかりしが、二十八年短篇集「水車」を刊し、「女房殺し」を「文藝俱樂部」に出し、二十九年「炭燒の煙」「泥水清水」「絶壁」等を出すに及び、詩想の頗る見べき者ありて忽ち文壇の注目を惹き、就中「水車」の中なる「兜の星影」「斷橋」「温泉」「狂詩人」等、及「女房殺し」「炭燒の煙」の二篇は其の傑作と稱せられたり。而して彼の文章は多様多變或は雅俗折衷、或は言文一致或は對話體或は獨語體、行く處として可ならざるなしと雖、其の長所は蓋し言文一致の說話體に在るべし。

江見水蔭

水蔭の小説は、世相を描き人情を寫す小説としては成功の域に遠き者なりと雖、之を詩篇として見る時は、後に散文詩の境に入る。彼は硯友社中獨り理想小説を以て任じ、從て其の詩題は多く理想界に生活する人物、即ち藝術家に關し、然らざるも之に類似せる抒情詩的題目を選べり。彼の好める人物は畫師詩人巡禮漁夫山樵旅客等にして、從て都門塵俗の風よりもむしろ山海林野の趣を受す。「炭燒の烟」に於ける炭燒男の愚直にして一圖なる性格及行爲、絶壁の主人公たる詩人か身世の不遇と戀愛の失敗との爲に破壊し盡されたる半生の生活の如き、共に作者か着想の傾向を覗ふに足る好例といふべし。「女房殺し」は當時一葉の濁江と並稱せられ、可憐の賤女に同情して所謂社會の罪を鳴らし、人生の迂餘曲折を盡して深刻小説の吟域に入り、文章亦精練にして緊張せる所以て當代傑作の一に數ふべきも、是實に水蔭作中の異色にして、以て他の篇を推すべからず。彼は飽くまで理想界に遊ぶ人物を描くを特長となす。而も其の藝術家を描くや、必しも露伴と趣を一にせず。露伴の藝術家は一向專念にして、意志強健道念高潔なり。水蔭のは之に反し、信念堅固ならずして世間の毀譽に惑ひ、道念確固ならずして或は墮落の淵に陥

る。斯の如きは水蔭か理想として描き出し、詩人に非ずして、正に當時の詩人に模本を取りて其の憫むべき運命を寫さんと試みしなるべしと雖、要するに理想派の小説家として未だ至らざる所少からざるなり。

翻つて之を詞藻の方面より見るに水蔭は詩人としても亦未だ至れる者に非ず。其の文辭精練を缺き其章句推敲を缺き、速筆一過復顧ざる趣あり。「女房殺し」さすがに清婉の氣難すべき所少しと雖、其の他の諸什可惜詩想を傳ふるに足るべき十分の詩筆なきを憾となす。

田山花袋

花袋は二十七年頃に現はれし新進にして、二十八年作「山家水」「水車小屋」「小桃源」「翌年の無名草」「忘れ水」等、皆幽婉純清、無韻の抒情詩なり。描く所概ね青春の純潔なる戀愛にして、之を織りなすに優美なる山色水光を以てし、之を行るに詩趣饒き雅俗折衷體の文章を以てし、情景錯綜する所限なき韻致を含む。花袋の戀を描くや、其の成立の因縁順序を細寫せんとはせず。直に成立以後の心狀に及び、思内に溢れて而も言ひがてにする年少初戀の情、又は獨り片戀を胸に懷きて人知れず煩悶する狀を寫せり。之を嵯峨の屋か描ける青春の戀に比するに、其の純潔なる點相似た

り。其の煩悶の態相似たり。其の人物の性情相似たり。然れども、情感の熱烈に於ては花袋到底嵯峨の屋に及ばざると共に、着想の自然にして描寫の妥當なるは花袋固より嵯峨の屋に超えたり。蓋し花袋に取るべき所は一篇を掩ふ詩的情緒に在り。之を外にしては彼の小説は稚氣滿幅、脚色單純にして篇章概ら短く、従つて小宇宙としての小説たるに甚遠し。「忘れ水」の如きは、彼の所有特色を代表すべき好作例といふべし。要するに花袋の作より大なる教訓を得、深き戀愛を味ふ事難しと雖、清く美しき戀を味うて青春の慰藉となすに足るべし。

小栗風葉

硯友社の後進作家として鏡花に接踵して起りし者を小栗風葉となす。風葉は紅葉の門人にして、二十九年「寢白粉」「龜甲鶴」を出すに及んで、忽ち評壇の注目を惹きぬ。「寢白粉」は人情自然の徑行を描いて、着筆亦輕妙、紅葉の面影を模し得て才藻見るべき者あり。唯着想奇矯、強て人生特殊の一方面を描き出でんとせしが爲め、一時評壇の批難を招きたりき。思ふに斯かる紛糾せる逆境の戀を描きしは、從來戀愛の單調を破らんか爲に葛藤烈しき者を求めんとしたると、葛藤を個人と人倫との衝突に取りて悲劇の効果を大ならしめんと企てたるに由る。かくの如き

は、企畫必しも非ならずと雖、取材の奇を弄するに過ぐるを誠むべしとなす。「龜甲鶴」の著想かゝる弊なくして、詩趣に富み、才氣を見るべし。然れども彼の發展は尙未來に在り、後章に説くべし。

紅葉門下にして當時世に出でし者には、尙柳川春葉、徳田秋聲等ありと雖、未だ特に説くべき者なし。繚つて硯友社作家の全體に就きて其作風を思ふに、概ね逸氣奔放所有試験企畫を敢行して常に小説界新潮の先頭となりき。かの中和自然なる折衷的手腕は遂に早稻田派作家に俟たざるべからざりき。

新作家勃興の氣運熟するや、坪内逍遙の指導せる早稻田専門學校文學部は、多數の創作家を輩出せり。就中小説の作家としては後藤宙外、水谷不倒、島村抱月、三木天遊、繁野天來、伊原青々園等あり。「早稻田文學」を始め「文藝俱樂部」「新小説」等に其の作を掲げ、遂に三十年自家の經營に成る小説雜誌「新著月刊」を發刊するに至り、新進の銳氣旺盛なる事、恰も前期初頭に於ける硯友社の如くなりき。是に於てか評壇此の二者を對比論評する者多く、所謂早稻田派は小説界に於ける一大勢力となり、硯友社と角逐して新進の文壇を二分するの觀ありき。且彼等は概ね相當の學

識素養ありて、一方に於て批評家たる能力を有したりければ、硯友社の才人等か黙々と語らざるに反し、『早稲田文學』を中堅として諸種の刊行物に、逍遙流の記實的論評又は精到平正の議論を掲げ、以て重きを評壇になせり。

後藤宙外

批評家としての彼等を論せんは暫く措き、作家としての方面より見れば、彼等の先頭は宙外不倒の二人なるべし宙外の現れしは蓋し二十八年作『ありのすさび』に始る。此の小説は翌年『青年小説』に收められ、失敗落魄の實業家、家庭の圓滿を破りて懊惱遂に發狂し、妻亦煩悶病を發して死すといふ筋を叙し、煩瑣に流れ説明に過ぐるの弊ありと雖、人情分拆の筆機微に入り、心理變化の描寫精緻を極む。次て『關のうつゝ』を『新小説』に掲げぬ。教育もなく節操も辨へぬ勝氣一方の孤女が、零落せる家道を恢復せんとする努力と、之か手段を否認する世間の道德との衝突の爲に蹉跎相次ぎ、遂に飄然志を世に絶ち山に通るといふを脚色となし、心理の描寫前者に劣る所あるも文章精練情景並び至れりと稱せらる。次で三十一年『思ひざめ』亂れ心、『白露』等の佳作を出し、多く心理の精微なる消息に描き入る。

宙外の作概して平正淡雅、春野分け行く流水の如し。心理の機微を捉へんとし

『ありのすさび』

て、好んで神経質の人物を描き、又好んで自殺や情死などの結末を取る事、或は柳浪の如く、或は鏡花の如くなるも、心理を描いては柳浪一葉の如く刻劃ならず。神経質の人物を寫しては鏡花柳浪の如く甚しからず。自殺情死を筆にしては柳浪の如く悲惨ならず。然れども人情の委曲を盡して精緻老熟群を抜き、所謂心理小説の陣頭に立ちて一葉柳浪に接踵し、新作家としては、鏡花の觀念小説と共に斯界の二潮流を代表せり。唯其の缺點は、描寫精細に過ぎて煩瑣冗漫に流るゝに在り。蓋し宙外一方に於ては戲謔滑脱と注意周到との資質を逍遙より受け、他の一方に於ては深刻悲惨と葛藤煩悶との趣味を新思潮より受け、二者融合して此の折衷の風を生せしなり。故に彼れの作は客觀的寫實の門より出で、而も純然たる其の者ならず。むしろ主觀的心理的ならんとす。是彼が特質の第一なり。次に宙外の特質と認むべきは田園的色彩と家庭的趣味と是なり。田園的色彩は當時の小説にはむしろ缺乏せる處、知名の作家概ね東京の人たるを以て、取材の範圍都會を出でず。會々田園を寫すも觀察皮相に止まりて情景眞に入らず。宙外は此の點に於て確に孤尊の價あり。此の事實に附帶して考ふべきは叙景の筆力なり。そ

も小説中の自然の描寫は、逍遙紅葉等より甚しく疎外せられ、露伴一葉に至りて稍注目せられしも未だ宙外入神の筆に及はず。「ありのすさび」の萩の湖の曉色を叙せる條、闇のうつゝの末段野中の荒祠を寫せるあたり妙趣真に掬すべし。家庭的趣味の饒多なるは彼の特徴として總ての作に亘り、從て教訓的なる點少からず。思ふに彼や青年新進と稱せらるゝも、年齢既に長ず。其作の平淡にして老熟せる、嘗に其の資質と教育とのみに因るに非ざるか如し。

不倒の現れしは少しく後れたり。二十九年「枯野の眞葛」等を『早稻田文學』に載せ、『新小説』發刊に際し、第一號に「鑄刀」「薄唇」二篇を掲ぐるに及び、作家としての目定まり、續て『新著月刊』等に數篇の作品を掲げたり。總して之を言へば、其の想到神韻なく、其の筆に精彩なく、爲に往々陳腐平凡などの酷評を受くと雖、平淡自然の境地に一脈人生の機微を寓せる所亦趣なしとせず。蓋し不倒素と江戸文學の研鑽家にして、深く巢林子八文字屋に私淑し、逍遙よりも長せる齒を以て始めて小説壇に現はれ、後進作家なれども、もはや青年に非ず。故に其の趣向往々江戸文學の面影を存し、「鑄刀」の如きは多少近松の某戯曲を想起せらるゝ所あり。其の文章の深刻なる

水谷不倒

島村抱月

事象を寫すに適せずして、むしろ輕快諧謔の作に宜しきは、亦私淑する所に出づるか。かの青春激越の調に乏しきか如きは、思ふに宙外と轍を同うする者なるべし。

二子に踵を接して起りしを抱月となす。三十年作「女をど浪」翌年作「月暈日暈」共に哀深き夫婦心中の物語なり。着想筆力特に目を側てしむる者なしと雖、布置整然、細心なる注意全篇に行き亘りて弛廢する所なきを取るべしとなす。同年の「墨繪草紙」も亦此の特長を發揮して佳作ならずとせず。蓋し抱月は同門作家中最學識ある者、特に美學及美辭學を以て本領となし、最理論的の頭腦を有し、從て批評家としては夙に儕輩に抜んで、穩健中正を以て名あり。是を以て彼か創作おのづから此事實を反映し、甚しき光なき代りに甚しき瑕なく、哀れに情深き所あれど、奔放激越の趣なく、唯其の結構布置の劃然として整へるに驚く。

天遊と天來とはむしろ新體詩家として知られ、小説の作は甚多からずと雖、共に詩的空想に富めるを珍となす。青々園は滑稽の作に富む。而して滑稽の存する所、言語形式の皮相に非ずして、意義内容の裡に立入り、おのづから大人を笑はしむるに足り、文章亦圓熟せり。

三木天遊
繁野天來
伊原青々

要するに彼等の創作は、概ね着想穩健、筆意平淡にして、其の長所は細心周到なるに在り。短所は熱烈なる情緒を缺くに在り。之を硯友社の新作家に比するに、同じく寫實の海に生ひ立ち、新潮流に養はれし者ながら、硯友社派は宛も逆捲く瀧津瀬の如く、逸氣奔放想像の馳するに従ひ、情熱の之くに任すの趣あり。早稻田派は淀みなき野川水の如く、温雅自然の姿態を盡さんとする。而も一身を創作に献じ、終生小説家として立たんとするに至つては、早稻田派は遂に硯友派に一步を輸せざるべからず。思ふに後者は批評家たり學者たる能はざる人々なるに反し、前者は兩方面を兼ねるを以て、會一方に專なるを得ざりしか。果然抱月美學者となり、宙外『新小説』の批評家となり、不倒江戸時代文學史家となり、青々園劇評家となり、他諸人亦漸く創作壇に遠ざかりぬ。

新進の心理小説家は略之を説き盡しぬ。乃ち去りて先進作家の心理小説を述べんとするに當り、新進中の別味たる小杉天外の諷刺小説を附記せんとす。而も天外を説かんに先づ其の前續者にして且師たる綠雨より叙ふるを便となす。

前期の批評家諷刺家として、『小説評註』『荆鞭』の筆者として其の名高かりし正真正

齊藤綠雨

太夫は、此の期に入りて綠雨の名を以て諷刺の才を小説に試みたり。二十八年『國民の友』に出し、『靦面』、『翌年』、『太陽』に出し、『雨蛙』の如き即是なり。前者は意志薄弱の書生、世間の所謂女房等を諷刺し、後者は自惚と沒常識との化身ともいふべき所謂文學者輩を嘲罵せる者にして、諷世嘲俗、冷笑骨を穿ち、熱罵髓に入り、筆鋒銳利、警句應酬に暇あらず、其の文章も亦奇絶妙絶、特に前者の如きは一氣奔放の走り書、文體修辭共に珍奇類なく、而も辭句洗練、當代に卓越せり。げに此の二篇は、綠雨の特質を最よく表彰せる者にして、諷刺小説中の珍品たり。

小杉天外

天外は綠雨の門に入り、鬼才が諷諧の筆を傳へて夙に文壇に現はれたり。二十四年『國會』新聞に『改良若旦那』の短篇を掲げし以來、二十八年『奇病』二十九年『卒都婆記』『改良若殿』三十年『ひとり者』『珈琲店』其他數多の創作を出し、宙外等と共に新作家の名を恣にせり。就中『奇病』は國會議員を刺り、『卒都婆記』は所謂社會主義論者を諷し、『改良若殿』は痴愚の華族を中心として世上百般の俗物を罵倒し、總て筆路輕妙、諷刺奇峭にして共に當代の佳作たり。

げに天外の作は深刻沈痛の域に遠く、性格心理の描寫亦其の能に非ず。加ふる

に筆意頗る同情を缺く。然れども從來諷刺といへば魯文一流の淺薄幼稚なる者のみ行はれしに方り、事象を平坦自然の境に取り、人物と社會との所有缺陷に向つて銳利なる諷刺を投する所、靈犀奇警人を魅するあるか如きは、洵に斯壇の進歩といふべし。げに彼か滑稽は、動もすれば審美上何等の價値なき所謂落ちおちに近からんとす。然れども、從來滑稽といへば、瓜生政和南新二等の如く、強て笑を求め、道化を盡し、以て匹夫匹婦を笑はしむるに過ぎざるに方り、社會や人物を觀察するに常に皮一重の裏に及び、美しく賢しき外觀の裏に潜める汚く愚かなる好笑的材料を求め、之を暴露し來りて乃ち哄然大笑するか如きは、以て識者の頤を解くに足り、多少諷滑の體を得たりといふべし。彼は文才の縦横なると諷刺の奇辣なるとの點に於て、到底綠雨の敵に非ず。然れども天外の筆、綠雨の神經質なるに比して甚磨揚に、綠雨の腥氣毒焰を吹くか如くなるに反して、温藉輕妙の致あり、綠雨の世上一切の者を嘲り盡さんとするに反し、専ら諷刺の筆鋒を虚偽と醜陋と愚劣とに向けたり。要するに天外は新文壇寫實の園に生ひ立ちし一種の異草にして、滑稽諷刺の花は此時始めて新粧を凝し出でたりといふべく、綠雨の尙舊文學の面影を存して

過渡の地位に立てるに異なり全く明治の新時代に入れりといふべきなり。

後進作家の擧ぐべき者には尙遲塚麗水、三宅青軒、松居松葉、堀江松華、前田曙山、太田玉茗、藤本藤蔭、有本樵水、緒方流水、黒田天外、半井桃水等あり。多少の新作を残せり。

紅葉門下の才筆濟々たるに對し、露伴門下は甚多からず。中谷無涯は二十九年始めて現はれ少しく後れて田村松魚、藤本夕隱の二人現はれ、多少狂熱を帯べる彩筆を揮ひしも、惜いかな、鏡花風葉の如き發展をなさざりき。

三 先進作家の心理小説

曩に後進作家の勃興するや、其の直接の刺撃に勵まされ、又評壇後進を揚げて先進を抑ふる者あるに激せられ前期に名を爲し、先進作家復び振ひ立てり。而も其の作風大に前期と面目を異にし、悉く心理的寫實小説の新彩を帯びて現れたり露伴以下紅葉に至るまで、一として然らざるはなし。

『五重塔』以來暫く唯伏したりし露伴は、二十六年『風流徹塵藏』の大篇に着手し、初篇『笹舟』を『國會』に掲げ初め、爾來連載二十九年に及び、『菊の濃松』『獨寐』及『雲の袖』の諸篇を

幸田露伴

出し、無前の大篇として文壇の呼び物となりぬ。然れども『微塵藏』は未だ其の局を結ばず、且つ局面廣大事象複雑なれども、既出の分のみを以てすれば各篇唯一二人物の連鎖あるのみにて、全く別の舞臺を現じ、其の間に有機的結合の見るべきなきを以て、大局の歸趣茫として知るべからず。唯其の部分的に現れたる巧妙なる描寫に至りては、さすがに天來の趣あり、人事の表裏を寫して痛切に、人情の秘奥を描破して靈犀なりといふべし。

此の篇出で、褒貶の聲交々起りたりと雖、大體に於て『五重塔』以來、現實の觀察に入りて一段の進歩をなせりといふに一致せるか如し。思ふに露伴の作風は明に一變せり。然れども彼が本領たる散文抒情詩の幽玄を離れて現實描寫の精緻に入りし者、果して彼れか爲に慶すべきか。之を人物に見るに、人夫れ夫れの性格を描いて躍動の趣あり、心理變化洵に自然的發展の妙を盡せり。然れども是等の人物詮すれば皆同一性格にして、悉く作者自身に粉本を取れる者なるに似たり。彼等は概ね酸いも甘いも噛み分け、人情世態を洞觀するに過ぎ、動もすれば作者の人生觀を時所に應じて述べ出すべき傀儡ならんとす。されば人生の奧秘人情の

機微、多くは説明に過ぎて讀者想像の餘地を奪ふ。作中人物か滔々數千言、人情哲學を講ずる所、此の作者に非されば望む事能はさるも、其の間又讀者をして嫌厭せしむる者なきに非ず。蓋し此の篇或は作者胸中の蘊蓄を披瀝せる人生哲學たるを得べしと雖、美術品としての成功は、かの抒情詩的高調に達せる『五重塔』等に比して未だ優れりと言ふを得ず。故に本期に於て露伴の露伴たる所以の作を求むべくんば、『微塵藏』よりはむしろ『新浦島』を取らんのみ。

「新浦島」

「新浦島」は二十八年『國會』に連載せる者にして浦島傳説の上に想を構へたる一部の抒情詩的小説なり。後經めて三十五年刊の『露伴叢書』に收む。浦島太郎龍宮に趣きてより、其の家を承けし同次郎の子孫相傳へて百世、明治の聖代に至りて一個俊秀の詩才浦島次郎を生じぬ。少時郷を去りて京に遊び、天成の詩才忽に當世の寵兒となり、邊海の漁子榮華と戀愛とに身を没して郷を忘るゝ事數十年。偶々戀に敗れ榮達に敗れて茲に悵然望郷の念を生じ、飄然として悟れば漁夫の生活なつかしく、二十五歳の壯年復父母の膝下に歸りぬ。歸れば老親世を譲らんとて傳來の玉手箱を渡し、に、異寶奇瑞を現じて父母一夜に登仙せしかば、次郎始めて仙緣

あるを知り、天界俄にゆかしく、九轉の大丹を煉りて仙道を得んどの大願を起しぬ。而も仙道成らず、憤りて魔道を修し、一向専念大地震動して遂に通力を得或は驪山の靈泉に浴し或は蘭陵の美酒を味ひ飛行自在の身となりしが、一夜終に化石して靜に生死の外にありきといふ。是れ新浦島の梗概なり。通觀すれば前半は現實の分子多きを占むるも、後半は全然超絶界に入り、詩情一段昂進して最後の大發揚に至る。此の結構は『對獨愷』以來作者固有の手法なり。

此の篇の骨子は浦島傳説に唐土神仙譚の附會して構成せられたる悟道の寓話より得來りし者にて、斯道に入るべき三階段を示せる寓話を取りて直に理想的生活に進むべき四階段を表せしに似たり。物質的榮華の生活は清淡自然の生活に若かず。清淡自然の生活は超絶的神仙の生活に若かざるを説けるは、かの寓意的仙譚なり。學と詩と富と戀とは未だ以て人を解脱せしむるに足らず。一切世間の欲を絶ちて身を一竿に托するも亦然り。凡界を離れて神仙の間に遊ぶも亦然り。生死の外なる寂靜の境に入るに至つて始めて眞の解脱を得べしとなせるは即ち露伴の『新浦島』なり。兩者の間多少傳説の發展あり、形式に大差なきも意義は

全く更新して時代の色彩を帯べり。思ふに浦島傳説は本邦の傳説中最發展せる者の一にして、萬葉集風土記の古より『新浦島』に至るまでの發展は他傳説に見ざる所なり

之を小説として見るに、其の超絶的なるは遙に從來の作に過ぎ、理想的なるは更に甚し。されど其は現實を超絶せる一場の仙譚的空想に出で、著しく冷靜の調を帯びたり。『五重塔』以前の作を以て之に比するに、彼には人生に執着する熱情あり。此には人生を達觀せる理性あり。現實以外奔放なる空想の行く所を恣にせる態度、兩者其の軌を一にすと雖、通篇の趣味傾向に著しき差あり。此の新傾向は疑もなく『微塵藏』以來の變象にして、篇中各人物の人生觀、人情觀、女性觀、はた社會觀等滔々揮灑し去る所、一に作者か凡百の人事に對する平生の達觀悟入に出でたり。

『新浦島』を以て作者の本色を現はし、者とすれば、二十九年『讀賣』に掲げし『髯男』は彼が作中の異色として注目するに足るべし。武田勝頼の家臣笠井高英といへる髯男が覆滅せる主家を擁護せんとする苦衷を描き、義あり情ある甲州武士の面目を發揮せる歴史小説にして、文章瑰麗奔放、『風流佛』以後の名文と稱せられたり。

「髯男」

既に述べしか如く、露伴の作には常に作家の影を宿せり。彼が小説を読む毎に其の人格の這裡に躍動するを覺ゆ。蓋し露伴は江戸兒の粹。霸氣稜々たるに又よく物に凝る。而も藝術に對する熱愛未だ嘗て衰ふる事なく、從つて讀書の嗜好極めて高く、其の造詣蘊蓄常に創作に表はる。此の點に於ては其の風尙頗る紅葉と相似たり。然れども露伴は固と深く人生を洞觀し、冥想沈思其の眞諦に觸れんとする人なり。此の性格は彼を驅つて深く佛典に參せしめ、老莊に入らしめ延て悟道の人たらしめんとす。且つ彼は神祕を認め、神仙を究め、佛力を信じ、神籤易トを拒まず。總て信念の固き道念の高き、當代作家に多く見る能はず。淺薄なる寫實の風天下を吹き荒れる時、獨り高遠なる詩的哲學的理想を小説に寓せたりしは一に此の性格より來る。此の點に於てはいたく紅葉と趣を異にす。且つ露伴の文を行る、逸氣奔放千言立ろに成り、而も絢爛瑰麗の致を極むる事頗る紅葉の遲筆刻劃に反す。彼が作は忠實なる實世間の描寫、乃至奇警深刻なる實社會の觀察に出つるよりも、むしろ人生に對する沈思冥想より來る。されは露伴の如きは、憬仰すべき人にして模倣すべき人に非ず。時流に超然たるべき人にして門下を

養ふべき人に非ず。是れ紅葉門下の多士濟々たるに反し、露伴の門遂に俊髦を見る能はざる所以なり。

山田美妙

言文一致體の主唱者として、『夏木立』『胡蝶』の作者として、盛名一時に鳴りし美妙齋は、二十四年以來消息を小説壇に立ち、新體詩の作家としてのみ聞えたりしが、此の頃に至り再起つて小説壇に現はれ、前の盛名固とより望むべからすと雖、尙健筆多作、當年の意氣を存し、文界をして此の才人の健在を慶せしめぬ。

二十八年の『お千代』『鰻旦那』翌年の『若白髪』は、趣向の平凡なるに係らず、獨得の言文一致、當年の嫌味を脱して瀟洒圓熟の境に入る。此の三篇は、共に評壇の一大問題たりし狹斜小説にして、寫實の手腕益精妙に、進んで心理の細寫に及べり。此の點に於て美妙亦新潮流の影響を受け、柳浪の深刻なる者なしと雖、穿細或は之に過ぎたり。爾來數篇の歴史小説及狹斜小説を経て、三十年『閻魔地藏』『可憐狂』を出すに及んで、或は寫實の筆力を以て、或は文章の妙を以て多少文壇を動かし、特に『可憐狂』は律義一徹の老父が至誠、自墮落の娘を悔悟せしむる筋を描き、評壇佳作の目ありき。げに美妙の作は筆力を以て優る。惜むらくは同情を缺き、小説家として願はし

き熱血と性靈とを具へず。故に筆鋒愈銳利にして觀察愈皮相に走り、描寫益巧にして讀者の肺腑に入る事益少し。好んで狹斜の巷を描き、特殊の通と穿ちとを銜うて脂粉の氣輕佻の風厭ふべき者あるは、彼が第一の缺點にして、所謂内容のいや味は總ての作物に満ちたり。加ふるに當時多作に過ぎしかば、筆漸く荒み、想亦漸く型に入り、好作家遂に唯文章家の名を止めしのみ。

硯友社の小説家にして少年文學に名を得たりし漣山人は、『日本昔噺』『日本御伽噺』『幼年讀本』等を編し、『雜誌』『幼年世界』『少年世界』等を發行して益其の本領を進むる傍、時に小説を出して特長なる輕快の筆を揮へり。二十八年、小説界の潮流か人生の深刻なる方面に向ふや、山人『昭君怨』を作し、清淨無垢の華族の處女が、破産せる父子爵の犠牲となりて高利貸の新平民に嫁く悲惨の運命を寫し、續いて出でし『燒火箸』等も亦現社會に對する諷刺的筆致を見るべし。然れども山人の本色は飽くまで平易圓熟なる文藻を以て無邪氣なる情緒を描くに在り。二十八年、『國民の友』に出し、『董日記』の如きは、正に其の代表的作物なるべし。『董日記』は岡外の『舞姫』に似て、獨逸留學中の一學生と薄命可憐なる金髮少女との情事に關する詩趣横溢の着想を

自叙日記體にもものせる短篇にして、文情清高、塵俗の氣なく、詞章亦言文一致の妙を盡せり。

前期の寫實小説家にして、文學一轉の今日、多少の述作を出して世人の記憶を新にせる者には、嵯峨の屋、抱一庵、篁村、採菊、思案、忍月、湖處子、三昧、雪後、花瘦、乙羽等あり。就中嵯峨の屋は例の言文一致益圓熟し、短篇集『文の庫』『古反古』を始め各雜誌に掲げし作少からず。抱一庵は思軒と共に、『報知新聞』に在り、魯文學の翻譯に名ありしが、創作に於ても多少の績を残せり。篁村は老練安平の筆致例の如く、三昧は傳奇小説の外世話物に筆を染め、文章は漢文流の奇氣を帯びたり。雪後と乙羽とは硯友社員にして、共に短篇を諸雜誌に掲げ、才筆の譽ありしが不幸にして早世せり。

上來先進作家を列叙して今や一紅葉を餘すのみとなりぬ。紅葉は今期に入りて連りに外國文學の翻譯物を出し、創作に用ゐし圓熟渾成の彩筆を以て之を翻譯に試みたり。之より先、紅葉は『臚舟』『夏小袖』等既に此種の者に指を染めたりしが、二十七年以後に至りて著しく之に傾き、創作却て兩三篇に止まるに至りぬ。即ち二十七年の『隣の女』、二十八年の『不言不語』、二十九年の『冷熱』の如き、當時有名の作は、皆翻譯

案に屬せり。

「不言不語」は紅葉が傑作の一にして、又是等翻案の代表たる者なり。「讀賣」に出づ。新參の小間使環が、目見之の當時より疑團晴れさりし笠原夫人の憔悴煩悶嗟嘆の原因、不言不語の胸中を探求せんと苦慮する筋を経となし、主人の弟民之介が環に對する戀語りを緯となし、遂に事變の偶發より一家に潜める秘密が隱約の間に推測せらるゝに至る始末を環の自叙體に描ける小説にして、一篇の生命は、讀者が此の秘密の伏在せる家庭に對する不安の念と探求の心を繋いで最後の大破綻に導く所に存す。されば其秘密の闡明せらるゝに及びて感興頓に去るは亦免れ難き缺點なるべし。唯末段夫人が懺悔の爲罪滅しの爲、病兒を救うて自ら犠牲となる所、慘憺たる悲劇的結局なから尙一道の光明を見る。民之介環の情話は素と一挿話に過ぎずと雖、陰森の氣充滿ちたる大筋に對照して、其の凄慘に過ぐるを調攝し、兩々發展歩趨を共にして團圓に向ひ、悲劇の終結を彩るに愛の成立を以てするなど、有機的結合の頗る周密なる者あり。然れども、全體の趣向及人物は、到底本邦の者に非ず。又紅葉の筆致に適應せる者に非ず。而も尙多數の愛讀者を

有ちしは、其の探偵的趣向の人の好奇心を繋げると、其の文章の鋭練完璧に近きとの致す所なり。

然れども文運興隆文學一轉の盛時に際し、紅葉の製作はかゝる翻案物に止まり、然らざるも「四の緒」の如き翻譯物、「片戀」名曲「クレーツェロワ」『笛吹川』等の合作物に過ぎさりしかば、批評家は漸く彼が健在を疑ひ、中には想泉涸れたりさまで罵る者あるに至りぬ。偶々「讀賣」に載せし創作「青葡萄」は、門人某か青葡萄を味うて不測の大病に罹りし一夜の出來事を叙へしに過ぎさりしかば、悲觀的批評益其の度を高めたり。是に於てか紅葉奮然と立ち、二十九年「多情多恨」を「讀賣」に載するに方り、宣して曰く、是れ俳諧に非ず、雜報に非ず、翻案に非ず、合作に非ず。實に快腕一揮の創作なりと。乃ち連載數月に亘り、前後兩篇五百五十頁の長篇をものせり。

「多情多恨」は甚しき神經質の男が最愛の妻を失ひて追慕の情に堪へず、懊惱日を重ねて薄らがず。寂寥の感屢身を變ふ状態を描き、以て失戀者の情緒を委曲に精寫せし者にて、打見たる所波瀾なく奇巧なく變化なし。其人物を以てすれば、重なるは主人公鷺見と親友葉山、其の妻お種との三人に止まり、舞臺を以てすれば鷺見

「多情多恨」

葉山二家の間を出でず。事件を以てすれば鷺見が悲歎懊惱を反覆するに過ぎず。時日を以てすれば百五十日にだも満たす。人物の寡少と脚色の單純とは、明治小説の新傾向なりと雖、かくの如く甚しき者未だ多からず。而も四十六回五百頁の長編をなせるなれば、從來の小説の刺激強烈なるに慣れたる人をして、或は冗漫と感せしめ、或は無趣味と感せしめ、或は鷺見の如き性格は國民に存せずとさへ斷せしめぬ。然れども「多情多恨」の描かんとする所は、依戀の情緒其物なり。寫さんとする所は、此の情緒の最微妙なる作用なり。粗大なる想像、淺薄なる同情を以てしは、往々看過せらるべき最微極細の消息をも限なく具象化するは、即ち此小説の極意なり。吾人は既に粗大なる感情の描寫、強烈なるるれ、及深刻なるそれを見た。未だ此の小説が描けるか如き平淡微妙なる者を見ざるなり。又人物の性格に就ても、吾人は既に幾多の英雄を見、幾多の才子佳人を見、はた夥多の片輪者を見たり。未だ此の小説の人物の如く平凡にして而も面目躍如たる者を見ざるなり。變人と言はれし理化教師鷺見の性格固より善く、温良貞淑の家妻お種も亦よく、洒脱にして俠氣あり、伶俐にして情理具はる實業家葉山最善し。若し夫れ一篇の結

末の何等段落を劃すべき事件なく、唯快々の思を残して之を閉づるが如きは、新派傾向の一要素にして、其妙趣を解せんには多少の新教養あるを要す。之を要するに、「多情多恨」は平淡自然寫實小説家としての紅葉の特質を最明瞭に發揮せる者なり。觀念小説以來、新進作家競うて深刻の想を凝し、先進諸家亦之に動さるゝに際し、獨り平淡の境地を選びしは、頗る彼が立脚地を見るに足る。彼が此小説を草するや、曰く、世間の小説は珍味なり。我家の小説は米の飯なりと。斯間の消息を道破して餘ありといふべし。

斯の小説は精練なる言文一致體にて書かれたり。是より先、美妙齋か盛に此體を用ひし頃は未だ之に倣はさりしが、一たび「隣の女」に成功するや、「青葡萄」「冷熱」等にも之を取り、遂に「多情多恨」の大篇に之を用ひぬ。さすがは詞章の大家、一たび振へば優に美妙嵯峨の屋の諸先輩を凌駕し、恰も雅俗折衷體に一流を出し、か如く、言文一致の最醇化せられたる一體を創め、洗練平淡、よく斯文の儀表となり、第一期以來の言文一致體も茲に始めて稚氣を脱し、街氣を離れし文章となりぬ。

「多情多恨」の終を告ぐるや、紅葉は更に他の雄篇「金色夜叉」に着手し、三十年一月よ

「金色夜叉」

り『讀賣』に連載せり。高等中學の秀才間貫一、已か寄寓せる鳴澤家の一女お宮に婿たるべく定められ、相愛して歡樂の未來を夢想せしに、美色に誇り富貴を冀ふ婦女通有の缺點はお宮をして富貴の奴隸となりて貫一を棄てしめぬ、貫一、憤怨深く骨髓に徹し、決然宮と袂を分ちぬ。之を此小説の序幕たる前編の梗概となす。斯くて傷心の貫一は絶望の餘りに自殺すべきか、はた白刃を宮の胸に擬すべきか。あらず。彼が金に見易へられたる無念は、空しく自殺せんには餘りに強烈なり。彼か怨恨は平凡なる復讐を敢てせんには餘りに深刻なり。彼は人の頼むべからず世の依るべからざるを悟り、乃ち總身の欲を金に集めて世と戦はんと思ひ定め、遂に彼の極悪非道の高利貸と爲り了りぬ。かくて貫一は男らしき復讐を加へ、前の失望と怨恨とを霽し得て、然る後正に死ぬべしと慰めたりしも、其の情を矯め己を托けて魔道を行ふ痛苦と、之よりも遙に大なる失戀の痛苦とは交々身を責めて、肉瘦せ色疲れ、形神共に破れて面を蔽へる陰日に黯きを加へぬ。中編は即ち此始末を叙す。宮は貫一に別れてより始めて心の奥に潜める切なる戀を覺りぬ。げに宮は胸中最奥の眞要求を知らざりき。彼女の心裡には二個の要求ありき。愛と

富とは是なり。而して二者の一致せざるに臨みてや一時旨進して富に就きぬ。而も其富を得了りし時始めて自己の眞要求は其戀人と共に此富を樂むに在りしを悟りぬ。今にして悔いぬ。二者共に得ん事の難き時、其の執れを取るべきかを知るの晩かりしを。別れて四年、會々貫一に邂逅して心火洞然と燃之上り、赤繩一度斷せしも又繋かるべき時のなからずやはと感じ、遂には彼人の恨解くべくんば此富棄つるに惜しからずと思ひなりぬ。斯る間に貫一は蝟集せる所有誘惑を却け、初一念を徹せずんば止まじと決せり。是後編の大概なり。願れば起稿以來正に三年を經、三編四百五十頁に上り、而も尙完結に遠し。貫一の痛苦と宮の煩悶とは如何に發展せんぞすらん。

吾人をして紀年の都合上茲に暫く梗概叙述を中止し顧みて之か評論に移らしめよ。「金色夜叉」の出づるや、着想に空前の異彩あると、脚色の劇的變化と活動とを具ふると、主人公か教養と地位とありて而も青春の情に満ちたると、詞章の精練絢爛なる時文體なるとは、教育ある中等社會に於ける青年男女の讀者をして悉く之に心酔せしめぬ。先づ著想に就て言はんか。新思潮起りてより露伴鏡花等の作

世に行はれしも、露伴の理想小説は膏粱の美味却て重ぬるに厭き、鏡花柳浪等は事物を極端の場合、暗黒の一面に取れるを以て、好奇一時の念を釣り得べきも、永く同情を繋ぎ難かりき。况やかの狭斜小説に於てをや。是に於てか、小説の内容は益深かれ、理想は實の上に立てる者なれ、取材は中等社會に於てせよ、舞臺と人物とは尙少しく高潔なれとの要求は讀書社會に普かりき。「金色夜叉」は即ちこの幾分を満さんと試みし者なりき。貫一と宮との戀愛、清き事花袋の小説に見るが如くにして、而も斯くの如く幼稚ならず。貫一か痛憤と無念との反動として夜叉の家業に身を墮し、は多少一葉の「われから」に似たりと雖、而もかくの如く單純ならず。特に宮か罪の自覺によりて激烈なる煩悶に陥るが如きは從來の小説に多く見ざる處なり。思ふに紅葉の才藻よく世運と推移し、泰西小説に於ける造詣亦漸く深く、其の影響の創作に現はるゝ事少からず。罪の自覺に懊む宮と、之を恕宥せざる貫一とは「不言不語」の笠原夫婦に淵源を求むべく、貫一か境遇の大變化は正しく泰西大家の作に其の粉本を求むべきなり。

次に脚色を見んか、この小説は常に情操を描けるのみならず、尙事件を寫せり。

「多情多恨」の徹頭徹尾情操の小説なりしに反し、頗る劇的變化と活動とに富み、波瀾の起伏遙に從來の作品に超えたり。後年小説の戯曲化の流行するや、紅葉の小説にして舞臺に上りしは、實に之を以て嚆矢となす。進んで其の文章を見んか前期以來の西鶴流雅俗折衷體に非ず、「多情多恨」に光彩を放ちし言文一致體に非ず、純然たる一種の時文體にして、字句烹煉、細寫委曲を極む。

斯の如きは「金色夜叉」か新教育の下に立てる青年男女にもてはやされし所以なり。之を「多情多恨」に比するに、總ての點に於て著しき對照を見る。瀟洒に對する濃艶、平淡に對する絢爛、單調に對する變化、沈靜に對する活動、皆是全體に亘る差異なり。二者各得る所あり、軒輊容易にすべきに非されども、苦心の度を以てすれば「多情多恨」恐らくは「金色夜叉」の上にあらん。蓋し前者に在りて成功の域に達せんは、凡筆の能くすべきに非ずと雖、紅葉の才筆を以てすれば、後者の成功難きに非ざるべし前者を以て紅葉の所謂米の飯とすれば、後者は所謂滋味なるを免れず。作者自身も亦、後者は苦心の作に非ずと稱す。且つ其の文章に於ても、作者自身之を「穎才新誌」的なりとして擯け、言文一致を尙んで之を理想的の地位に進めんと企て

たりといふ。要するに「金色夜叉」は紅葉の傑作なりと雖、決して其の本領に非ず。得意の作はむしろ「多情多恨」にあらん。

第二節 新體詩

『國民の友』及『文學界』の詩人が、七五調の短篇を以て新體詩界を領せし時に方りては、斯道の發展は小説界に比して甚しく遜色ありしが、明治二十八年以來、俄然として長足の進歩をなし、面目頓に一變するに至れり。

是より先き、國家的大戦争ありしや、事に文筆に従ふ者競うて之を謳ひ、「拔刀隊の歌」以來、絶えて久しき軍歌再び世に出で、戦争中の事物を詠める新體詩は、斯道にたづさはる所有文人に試みられたり。然れども、是等戦争詩歌は例の如く一時的傾向を帯び、逸作亦遂に出づる事なく、影響從つて殘る事なくして其の跡を絶ち、七五調の擬古的短詩再び詩界を領しぬ。思ふに此潮流の來るや實に久し。遠くは新聲社の詩人より、『國民の友』の詩人を経て、『梅花詩集』『文學界』の諸詩人に至るまで、古語の智識の深淺之を驅使するの巧拙措辭の手腕の熟否に多少の等差ありと雖、概

して用語聲調に於ける擬古派たるを失はざりき。今や此の作風益發展して詩壇の大勢力となり、遂に『帝國文學』に現はれたる文科大学の詩人に繼承せられ、詩想の清新を加へ、詩形の長大を致すと共に、用語の雅醇なる聲調の流麗なる、遂に湖處子殘花等從來詩人の作に抽んでたり。

此時に方り、十四年前新體詩創始の運動をなし、外山、山仙士は、再び一新體を提出して一世の耳目を聳動しぬ。二十八年二月『帝國文學』に掲げし「旅順口の英雄可兒大尉」は、實に此の新運動の第一着手にして、續いて「輸卒」忘るゝな此日を「我は喇叭手なり等を出し、尙之に關する意見及其の朗讀法をも發表せり。而して是等の詩篇たるや、いたく從來のと趣を異にし、先づ七五又は五七一聯の詩形を打破して最自由なる無律沒韻の散文的句節を採り、次に典雅流麗にのみ傾ける古語を棄て、漢語と現代語とを交へたる日常普通の言語を用ゐ、次に作者の創意に出でし獨得の表情朗讀法を試みて其詩形と用語との散文的渣滓を除かんと勉め、名けて朗讀體と言へり。

「開闢以來未嘗て今日の如く我邦人の名譽の高大なるはなし。

「新體詩歌集」

良運なり。幸福なり。此の時期に遭遇せるの日本人は、『可兒大尉』
 右はたゞ冒頭の二行を出し、のみなりと雖、以て其一般を推すに足るべし。此の
 體一たび出で、評壇の排撃盛なりしも、作者は之に屈せず、多少意見を同うする人
 々と共に『新體詩歌集』を編み、同年秋之を世に問へり。收むる所、山仙士作十一篇
 上田萬年中村秋香阪正臣作長短七十九篇。中數首を除けば、悉く七五の舊調を脱
 し、而も大多數は『可兒大尉』の型式に依る。

此に於てか、評壇詩形論の沸騰を來し、律語詩非律語詩の論議甚盛なりき。然れ
 ども、此論争は遂に何等の効果を殘す事なく、創作界は依然として律語詩に適き、七
 五調に歸しぬ。されば彼の井上巽軒が長詩『比沼山の歌』を出すや、亦七五の舊調を
 襲ひ、革新の範圍を用語の種類と思想の規模とに限れり。『比沼山の歌』は二十九年初
 『帝國文學』及『太陽』に掲けたる叙事詩にして、丹後風土記なる羽衣傳説を骨子となし
 竹取物語を血肉となし、天人の志は信を本とすといへる思想を一篇の理想となし
 たる者。完結を見ずして止みしも篇章節句形式整齊、空前の長詩なり。作者の詩
 論を見るに、大體『可兒大尉』の作者に同じと雖、未だ一言七五調の非難に及はず、又律

井上巽軒

比沼山の歌

語拘束の害を説かず。唯用語の豊富遒勁なると旨意の明瞭なるを以て、擬古派
 に對する優勝の理由とせるのみ。

外山井上二家の運動は、詮する所、擬古派に對する反動なりき。而して其の成果
 を見るに、前者の朗讀體ははやく失敗に歸し、後者の古語漢語俗語の混用も、著しき
 不調和の爲に、同じく失敗に終りぬ。蓋し、前者は廣義の詩即ち科學に對立する詩
 の意義を取り來りて、直に新體詩に附屬し、以て散文詩と韻文詩との差別を棄却し
 たりき。否、口演法の如何によりて諧調自ら生ずと信じ、一定の律體種々に結合し
 て万人の心律に共鳴する者即ち詩の韻律なりとはせざりき。此を以て、世の律語
 詩を主張する人、七五律を以て邦語韻律の主なる者となす人、詩歌は必しも謠ひ物
 に非ざればお自から格律を形體に求めざるへからざるを知らぬ人、萬邦の詩歌皆一
 定の韻律と句節とを有するを思ふ人等、總て此の體を取らず。次に後者は、結構の
 壯大なる、尙に文壇の珍たりと雖、長詩の價值たる内容の優秀と詞章の精美とに至
 りては缺陷なきを得ず。和漢雅俗の言語を混用するか如きは、選擇なく醇化な
 くして成功する事難し。

然らば其の内容即詩想は如何。前者題材の狹隘なる、常に現實の事件に拘泥し而も概ね戦争中の事象に屬するを以て、多く恒久の價值なし。彼は人事及自然の種々相を諷詠せず。幽遠の情感高邁の冥想等に至りては全然之を缺く。後者の著想はむしろ奇抜なり。神話を題材とするは、本邦詩人に取りては好箇の暗示なり。唯其の構想理に偏し、且其の根本思想を倫理的功利主義に置けるを憾むべしとす。

要するに二家の作品は、遂に大なる成功なかりき。唯彼の長大の詩形を推稱せると、用語に勁健の分子を加へ、聲調に剛強の風趣を添ふるに至りしとは、此運動か齋し、二個の賜なり。

斯かる間に擬古派一輩は、用語の古雅なると、題材の概ね抒情的なると、作風の餘韻を尙べるとよりして、評壇に臙體の名を得たりしも、其の詩想は深く主觀界にも入り、詩形は整齊、詩語は醇粹、加ふるに泰西詩歌を味ひ、總て詩的非散文的なる事遙に前二家に超え、擬古派其の物の爲に、大に光燭を擧げたり。武島羽衣は是等詩人の白眉にして、二十八年初墨染櫻の一篇を帝國文學に掲げて始めて始めて斯壇に現は

武島羽衣

れ、同年小夜砧を出すに及んで、新詩人としての價值、文壇に認められたり。「小夜砧」は西詩翻案の叙事的抒情詩にして、秋夜征人を思ふ少婦の心、惱亂して夢幻の境に入り、既に戦没せる夫の靈に伴はれて廢寺の塚中に陥るを叙して、幽婉幻怪の趣に富む。此類の思想は本邦從來の詩歌には絶て有るなく、寧ろ國民の情想に遠き者なりと雖、清新温藉縹渺として幽韻掬すべく、從來の擬古者流が、徒に詞藻の富麗を以て内容の空虚を飾る者に比較して其の間超ゆべからざる畛域あるを覺ゆ。加ふるに、詞章の典雅精練にして雅言を驅使するの自在なるは詩壇稀に見る所にし、七五四句一節をなせる者、總て四十三を以て成れる長詩、讀み去りて些の滯滞を見ず、泰西語脈の混用も自然にして調和を失はず。總て新詩壇に寄與せる一新作風として推稱せらるべき者たり。爾來詩神「草刈笛」月「人生」等數多の創作皆温藉の詩思を發揮して悠容の姿致を凝らし、時に渾然として天衣無縫の概ある者あり。此の如きは羽衣の獨擅にして當代及ふ者無かりきと雖、長所はやかて短所の潜む所、彼の詩は情感の激越なる者、情熱の強烈なる者なく、其の調往々散文的の弊に陥り、單調の失を免れざらんとす。

鹽井雨江は二十八年『帝國文學』の初刊に「深山の美人」と題する抒情的敘事の長詩を出して名を江湖に馳せ、其より「深山の花」「故郷の花」「磯の笛竹」等長短數篇の創作あり。之を羽衣に比するに、吟什の少きだけ題材も少く、詩想亦純王朝的にして、西詩の面影を傳ふる所少し。形式に於ても古語古格の分量多きに過ぎ、粉飾の痕少からずして、高雅悠容の姿致に乏し。唯詩形の散文的ならんとするを避くるに於て多少の苦心と成功とあり。「磯の笛竹」の如き、句節の配置、措辭の選擇に於て、各種の修辭的技巧を用ひ、荒磯岩の松蔭に夜毎に憧れ出で、思を笛竹に吹きすます海人が子を詠じて、情緒の昂揚遙に羽衣等に超え、想髓の舊きに係はらず、一種清新の詩調に入る。雨江の特長茲に在り。大町桂月次で現はる。彼は寧ろ文章家と稱すべけれど、新體詩に於ても、純主觀の短篇、情感の激越、詩調の昂揚を以て遙に前二家に絶す。桂月の特長は詩形に非ずして、詩思の純真情熱の強烈に在り。其の他杉鳥山等二三の作家あり。皆擬古調を取りて王朝の麗藻を學べり。

以上は『帝國文學』の詩人の主たる者なり。顧みて之を概観するに、純主觀の作甚稀にして概ね敘事的色彩を帯び、小説的趣向を取りて之を律語に述へしか如き者

少からず。地の文と詞とを分ち、詞は對白獨白並に之を用ひるか如き手法は、最普通なりき。蓋し彼等が専ら用ひし雅語の性質として、最近の思潮に觸れたる主觀界を表現するに足らず。事を敘し景を描くには大なる欠陥を感せずと雖、一旦内觀の深きに入り冥想の幽なるに至らば到底適切明快なる表彰を得る事能はず、從つて卓逸なる抒情詩を見る事難し。かくの如きは擬古派の發展に對する致命的缺點なれば、羽衣雨江を頂點として其の發達は長へに阻止せられぬ。

然れども擬古派の努力は、非律語論に對する律語論の勝利を確實ならしめ、爾來崛起せる新詩人は悉く律語の門に出でぬ。二十八年より三十一年に至る四年間特に二十九年は斯道勃興の機にして、新詩人は輩出し舊詩人は奮起し、各種の文學雜誌に現はるゝ創作甚盛なりき。以下次を追うて之を列叙せん。

用語及聲調に於て擬古派に反對の態度を取る者を歌人與謝野鐵幹となす。鐵幹は二十九年短歌と共に『東西南北』の一集を公にして始めて詩壇に上りぬ。集中の作は韓山羈旅に關する者多ければ、概して風雲の氣ありて神往の詩趣なし。三十年再び詩集『天地玄黃』を出し、豪語奇句一段の進境を示しぬ。「山中の石」「乾坤寥廓」

「海嘯」人鬼等集中の主たる者、概ね理想的怪奇を弄す。就中山中の石は深山の白雲に獨り寝ねたる太古の石の述懐に托して、星の都に在りと聞く、一百五絃の玉の琴、嵐の神の音につれて、一時に裂くの慨あらむ、詩人の胸懷を詠出す。總じて彼の詩、勁健を求め豪壯を好み、客氣横溢して却て淺俗に陥る事其の和歌に同じ。所謂男子の歌なるべけれど、固より高遠の詩想あるに非されば、擬古派の未だ開拓せざる抒情の好詩境に足を入れながら、世上一時の事象に拘して永遠の姿致に乏し。唯漢語を交へ漢語脈を採りし一事は尙生硬を免れずと雖、擬古派の平弱單調を救ふに多大の効果ありき。

正岡子規

歌人鐵幹に續きて俳人子規も亦新體詩に指を染め、二十九年竹の里人と名のりて『日本人』に現はれぬ。「鹿笛」父の墓「小蟲」四季「洪水」獨特の俳詩想を長詩に托し、中には全く俳句を新體詩にしたるか如きあり。されば詩人としての子規の得喪は一に此點に歸す。總じて彼の作意洒脱にして語緊密措辭弛廢なくして聲調常に張り、好んで自然を詠じ、多く客觀叙法を採り、觀察微にして且新なり。故に想到陳套なる少く形に散文的なる弊なし。然れども規模狭小なる者多く、著想即興的

に偏し最冥想を缺く。三十年に入りて押韻論を稱へ、其の作例をも示したりしが其は十五年の昔『新體詩抄』に試みられし阿行五音の脚韻に過きさりしかば、幾もなくして事止みぬ。

美妙齋

前期以來の作家にして餘勢を今日に振ふ者を美妙齋及『國民の友』の詩人となす。美妙齋は韻文論以來逸作なかりしが、二十九年雜誌『大和琴』に現れ、翌年『魔界天女』を連載して詩壇に異彩を放ちぬ、數回に亘る長篇精練の措辭、凄婉の情思、當年の意氣を偲ばしむ。『國民の友』の諸詩人は湖處子を始として、客將湯淺半月嵯峨の山人等前期に比して進歩著しからず。抒情の短篇、平淡にして規模小に、情感女性的にして想像亦稚氣を脱せず。詩形に於ても優雅の辭を操れども『帝國文學』一派の絢爛に及ぶべくも非ず。詩調平弱散文的の弊最甚し。唯可憐の感情を和平の言辭に寫すを以て其特長となす。三十年夏、湖處子嵯峨の屋は、國木田獨歩、松岡國男、田山花袋、太田玉茗と共に詩集『抒情詩』を出版しぬ。

詩風に於て『國民の友』一派と正反對に立つ者を『早稻田文學』の詩人、即ち三木天遊及繁野天來となす。共に小説家として二三の作ありし者。夙く新體詩に入り二

「抒情詩」
三木天遊
繁野天來

「鈴虫
松虫」

十八年以來、天來は、笛の音「雨聲鳥語録」等を、天遊は「紫姫」月の國等を出し三十年夏遂に合集「鈴虫松虫」を公にせり。收むる所、天遊十九章、天來二十章。概して詩思情熱に富み、青春の客氣に満ちたり。初めは當時の流風に從ひ、抒情的叙事の長詩に傾きしが、後漸く主觀抒情を主とするに至れり。詩形は五七の韻律を好み、渾成の詩品に遠けれども、概ね調強くして弛廢なし。用語に於ては最自由なる意見を有し、漢語俗語併せ之を用ゐんとする事、銕幹に似たり。

『文學界』の詩人は、由來詩風の清高を以て知らる。情操清婉詩品高潔、地の濁穢に在りて天の淨界を憧憬するか如きは、即ち其の特色なり。星野天知、島崎藤村、平田秃木、戸川秋骨、樋口一葉、田山花袋、松岡國男、馬場孤蝶、太田玉茗等、皆悲痛哀絶の調を以て自然を語り、聖愛を歌ふ。就中詩人として知られし者は、藤村、花袋、國男、孤蝶、玉茗等に於て、花袋、國男、玉茗は「國民の友」にも出で「抒情詩」に收めらる。其中にも國男は詞藻穩健にして想像亦溫藉「抒情詩」の白眉なり。孤蝶は未だ特筆すべき無く、藤村此の間に立ちて恰も鷄群の孤鶴たり。

島崎藤村

藤村の詩を『文學界』に試みしは、當期初頭以來の事なれども、其名を斯壇に現せし

は、二十九年後半に屬し、「一葉舟」秋の夢と題せる數篇の抒情詩に、一新聲調を出して時人を驚かし、よりなり。就中詩人中野逍遙を悼める「哀歌」朝と暮とを詠じたる「二つの聲」戀さまの姿を歌ひし「こひぐさ」星影水の如き夏の朝、匂ふあやめの邊りに、妻鳥を得んと闘ふ二の雄雞を詠じたる「鷄」の如きは、詩壇嘗て見し事なき清新の格調思想なりき。爾來「薄氷」に六人の女性を詠じて各性情を描き分け、三十年春「天馬」の傑作を『文學界』に出しぬ。「天馬」は序、雄馬、雌馬の三章、二百三十句に亘る長詩にして、星影夜なく、動き奇瑞箱根の山に現はれて、蘆の湖の邊り村の南北に賤か屋の片廂をかりて人の世に生れ出てたる雄雌の天馬の詠せる者。序に於て此の由來を叙し、「雄馬」の章にては、朝に富士の雪を踏み夕に御嶽の岩を超え、青雲に嘶きて電影を追ふべき天馬の身を以て暫く槽檻に委して主人に伴はれ、今し箱根を下りて遠く近江の湖畔花橘の蔭を行くを詠じ、次に「雌馬」の章にては、青毛優しき牝馬が蘆の湖を去りて遠く陸奥の野に下り、四時の勞役、冷く情なき人間に驅使せられて頻りに天の靈泉を戀ひわぶるあはれの姿を歌ふ。想像雄偉、詞章清新、當代詩界の通弊たる纖弱弛廢の想調を擺脫し、理想幽遠詩境高潔、抒情詩壇の一大進運を劃せ

り。しかも彼は更に進んで「深林の逍遙」を『帝國文學』に寄せたり。陽春花深く霞かをる頃、斧鉞未だ入らざる深林の緑を分け、悠遊自適、靜に自然懷裡に同化し去るか如き詩境を寫す。深林の中山精と木精とありて相呼び相應へ、到る處春の徳を頌し、春の意を語る一誦先づ幽韻人を襲ふ。

花の紫葉の緑、うら若草の野べの糸、工を盡す大機の梭の林に來れかし。

古き落葉を柔き青葉の蔭に葬れよ、冬の夢路を覺め出で、春の林に來れかし。山風たび渡れば、簫管自ら鳴り、白妙の雲峯を分れて樹々に棚引く。巖を攀づれば脚下忽ち激湍啞嗒の聲あり。既にして彩雲見るく、色變る夕まぐれ、林中の湖邊に出つれば、春日水に沈みて殘紅紫に交り、遊子自ら暮色一様の彩りに沫し去らる。斯の如きは詩の大要にして總て二百餘句、自然を描きて悉く生命を賦與し高韻清致人をして神往せしむ。「天馬」の奔放と崇高と無けれども、沈靜と幽遠とは遙に之に優り詞章の圓熟亦遠く之に過ぐ。蓋し新體詩創始以來の名篇にして、詩人としての藤村の名嶄然として卓出しぬ。同年秋一集を結て『若菜集』と題し、長短五十一篇を收む。形式多様にして句節の構成單調ならず。用語は概ね雅醇なるを

選びしも特に平易なるを用ゐて耳遠きを取らず。但し其の修辭に新工夫あるを以て清新の聲調獨特の妙あり。歌ふ所の題材は自然と戀愛との二方面ありて、自然を詠せる者は「深林の逍遙」を始として、「秋風の歌」明星等、最誦すべく、特に「明星」は清高無比短詩中の珠玉にして渾成の詩域に近し。戀愛を詠せる者は、熱情熾烈、從來の詩人の如く怠慢なる戀に非ず。「わくめ」四つの袖等は其の代表と見るべく、總て英國近代のラファエル前派の面影を傳ふ。思ふに藤村の作は、詩壇最も西洋趣味に富める者なるべし。

藤村起りて幾もなく、又一個の藤村現はれぬ。三十年『新著月刊』に「花密藏難見」と題して短詩數篇を公にし、清婉の調を以て可憐の情操を歌ひ出でたる薄田泣菫是なり。其の特色は「紅絹袖」夕等に見ゆる如く、自然懷裡に戀愛の慰藉を求むるに在り。此の點に於て確に藤村の一面を傳ふ。唯夫れ泣菫は藤村に比して情操一層可憐なるだけ熱烈の度低く、形式の變化措辭の技巧を求むる事多きだけ、神韻に乏しく、嶄新の譬喩を用ゐ各種の語彙を取らんとするだけ聲調を傷くる事多かりき。獨り彼か試験に成りし八六の調は一種蒼涼の趣を具へて幽婉の詩思を傳ふる所

なしとせず。尙後の發達に徴すべし。

之と相前後して出でしは土井晚翠なり。二十九年の末、紅葉青山水急流及枯柳を『帝國文學』に掲げて、夙に一種の新調を示し、が三十年より三十一年にかけて、希望『造化妙工』破鐘の響、山わろし、萬有と詩人、送笛餘韻等、頻りに冥想的抒情詩を出し、世評噴々たりき。是より先き、『帝國文學』の詩人相次て潜み、羽衣等二三の作家、僅に擬古派の名残をとむるのみなりしが、茲に又新作家を興し、而も其の作風全く異にして、前者の擬古的にして動もすれば朦朧の嫌あるに反し、後者は泰西詩想を咀嚼して之を清高の大和文字に寫し、思想用語共に明晰爽亮なり。又前者の抒情は淺近平板にして、深刻の煩悶も向上の憧憬も無かりしに反し、後者の抒情は高く理想界に入り、常に憧憬の眼を天の一方に注ぎ、進んで冥想思索の哲學的風趣を求む。且つ漢語漢文脈を操つる事頗る巧妙にして、詩調爲めに道勁、前者の女性的なるに反して男性的光彩を帶ぶ。蓋し晚翠深く泰西文學を愛し、日夕名家の詩篇に親しみ、而も又漢詩國歌を誦するを怠らず。冥想思索の結果を詩篇に構成するに當りて、要する所の抽象語は、概ね漢語に求め、更に洋語を以て之を補ふ。斯の如きは、常に『帝

國文學』の詩人の中に異彩を放つのみならず。所有新體詩人の雋逸たり。

晚翠の特色は冥想思索に在り。觸目万象の中、常に一種神秘の意を觀せずんば止まず。彼自然を詠じ、人生を歌ふ。而も其の描寫に止らずして、或意義を其の後景に探る。彼は美神を謳歌せんよりは、寧ろ造化の幽を闡かんとするなり。「希望」『造化妙工』雲の歌、星と花、夏の夜、墓上の花、登高、鷺等に見わたる自然觀、夕の思、光等に見わたる人生觀、及詩人「万有と詩人」に見えたる詩人觀を窺はん者、何人も晚翠の理想的傾向の一斑を知了すべし。若し夫れ『暮鐘』の一篇に至りては、詩人としての作家の特色を名殘なく發揮せる者、落想文辭聲調一として具らざるなく、沈痛雄渾晚翠が作中の絶唱なり。此詩は三十一年春、『帝國文學』に掲げし長篇にして、十七節百三十句に及ぶ。暮色降り來りて世上千萬の思を一様の暗に包まんとする時、一打の鐘聲に群がり起る詩人の思は何ぞ。鯨音一過餘韻浮世の耳に絶ゆるとも知るや無象の天の外、下界の夢のうは言を、名殘の鐘に聞きとらん、高き尊き靈ありと。靈よはた何とか之を聞く、下界の暗は厚うして、聖者の憂絶えずと、か、浮世の花は脆うして、詩人の涙涸れずと、か。げに此の鐘聲は、濁世の福音靈鷹橄欖の法の聲

なり。願くは理想實現の曉に至るまで、絶えずも響け長へに、天籟地籟身に兼ねたる夕入相の鐘の聲よ。斯くの如きは暮鐘の神髓にして、又晚翠の詩想の精粹なり。思ふに彼の詩底を敲けば必ず厭世の響あり。曰く「自然は笑ひ人は泣く」。曰く「人は死に疑ひの子のみ」。而も詩人の向上的憧憬は茲に起るなり。思へらく、かゝる人生を厭離して何所に適くべき。戀愛の花園に逍遙せんか。世に不變の戀なきを如何せん。現實以外永劫不變の大理想に向つて精進せんか。其の容易に企及すべからざるを如何せん。頼に人に想像の力あり。想像に成り出でし詩歌あり。即ち之を以て理想實現の機至るまでの慰藉となし、暫く想像の翼を張つて光明の天國に神往し、美妙の詩歌を玩賞して永劫の樂土に逍遙せんと。是れ晚翠の作品に通ずる根本思想なるに似たり。

以上晚翠の詩想を説きて其の明側を盡しぬ。然れども暗側の之に伴ふ者亦少からず。夫れ晚翠の詩は勉めて哲學的宗教的ならん事を求めたるか故に、多くは理智に走り、描寫せずして説明し、謳歌せずして論述す。されば其調常に冷靜にして、情火の熱烈なる者絶て無し。而も彼の思索は單純なるを以て、究竟詩想一たび定まるや、千篇唯一の思想を繰り返すに過ぎず。且其の文辭も、明澄の極、餘韻を欠き、聲調も奇抜の利あると共に圓熟を缺くの害あり。然れども新體詩有つて以來始めて得たる冥想詩人なるを以て、彼が詩壇に於ける地位甚輕からずと言ふべし。

願れば我新體詩も、三年か間に長足の進歩をなしけり。湖處子殘花より藤村晚翠に至るまでの想形の進歩洵に驚くべし。而も其の間輩出せし詩人、概して壽命長からず。自然淘汰の鐵鞭に驅られて相次て斯壇の外に逸し去り、殘る所は健闘の勇士藤村晚翠の二家となりぬ。今や二家の詩風江湖に布き、青年輩の文學雜誌たる『文庫』『青年文』及『新聲』等に見えたる年少の作品は、曩に羽衣の麗藻を揮ふや、靡然として之に越きしも、今は即ち藤村調晚翠調となるに至りぬ。要するに、新體詩は草創日尙淺く、正に試験時代に屬し、從て試み、從て驗す。一として恒久の威力ある事なし。唯藤村二家のみ望を未來に屬せしむる者あり。請ふ。其の後の發達を見ん。

藤村が三十年以後の作は纂めて翌年刊行の『一葉舟』と『夏草』とに在り。彼の詩想

は『若葉集』に比して著しく面目を改めぬ。『一葉舟』巻頭の『白磁花瓶の賦』は、失戀の恨綿々として盡きさる若き藝術家が、萬斛の悲涙を一技にこめて作り出でし純白の花瓶を詠じ、情緒清婉楚楚として人を動かす者なるが、一方失戀の恨を抒べて他方藝術の歎美に及ぶ所、頗從來と趣を異にす、從來の藤村は戀を謳ひ愛に憧るゝ者なりしが、茲に至りて戀の破れ易きを恨み、却て永劫の美常世の歎たる藝術に憧る。爾來彼は藝術愛慕の詩人となり、歌ふ所常に其の風韻を帶ぶ。勿論『鶯の歌』の如きは、千里の蒼溟、忽黒雲湧き疾風起り、怒濤紫澗を捲いて白沫四散する所、磯際の岩角に暫し身を寄する老若二羽の鶯が、健翼一搏烈風に逆うて萬里の雲を追ふ光景を叙して、崇高雄渾、天馬と併び立つて圓熟は之に勝り、晚翠の諸什と拮抗して迂餘曲折は之に優り、其風趣を察すれば、正に『若葉集』の遺韻を傳ふ。然れども、『晚春の別離』「曉の誕生」月光等に至りては、何れも藝術に對する無限の愛慕を表はして一種の特色を帶ぶ。試みに『晚春の別離』に詠せる詩人を以て晚翠の『萬有と詩人』に於ける詩人に比し、『曉の誕生』に於ける嬰兒を以て晚翠の『小兒』に比すれば、藤村の面目愈明なるべし。かの皎月千里の清光を歌ふにも、一樣の彩りを以て萬物を理想化する神

秘の色を謳はずして、百代易らぬ月影に藝術の永劫を觀じ、深夜の月光に藝術國の靜寂を思へるか如き、以て其の本色を見るに足るべし。

此時に方りて彼の詩風は再び轉じ初め、空想的藝術的世界より出で、實際的自然的の生活に入れりぬ。『夏草』收むる所の『新潮』と『農夫』とは明に之を示す。『新潮』は漁夫の生活に托して人生の行路を描き、最後に處生の方針を示せる者。幼稚なりと雖、作者の新傾向を見るに足る。『農夫』は序、及上下二卷、八章より成り、一千句に垂んとする叙事的抒情詩にして、新詩壇空前の長篇なり。利根河畔の農夫鍛工の女と相思ひ、征清の役に召されて征途に上り、三年軍終へて歸れば少女が離恨に悶死せしを聞き、絶望の餘り、身を雲水に托せんと決せしが、會鍛工が愛子を失へる悲愁を勞働に慰めて奮勵するを見て、驟然昨非を悔ひ、再び利根川邊に己か生業を勵まんと思ひなるを叙し、前者より更らに一步を進めたり。時恰も『文學界』の倒るゝに際し、藤村亦信州に入りて實際的生活を營むに至りしかば、其の『新小説』に寄せし吟詠益實際的自然的となり、『文學界』時代の面影復見るべからず。當時の詩集たる『落梅集』を見るに、感情生活よりも意志生活を尙び、藝術戀愛を歌はずして汗顔の事業

を説き空想の叙述よりも現實の描寫を取り、仰いて翹望せずして俯して慰蕪す。總て感興の湧くがまゝに任せずして考察反省するを其の特徴となし、通篇著しく沈靜の調を帶ぶ。「壯年の歌」及「勞働雜詠」は此集の代表と見るべし。されば偶戀愛を歌へる「胸より胸に」の如きありと雖、戀愛其物は、もはや「若葉集」の其れに非ずして、人生の戦線に立てる者の唯一の慰藉となれり。茲に至りて藤村の詩想の中心は事業の謳歌となり、生命の戦闘は其の套語となり、明澄透徹、昔日の朦朧なく、靜平なる觀察頗る客觀的に入る。従つて其文辭の如きも青春の心情を踴らしむる詩的魅力なく、絢爛の賦彩既に見るべからず。唯彼が胸奥に潜める沈靜の詩思を抒べし者は、淡彩の中、大雅の光あり。「小諸なる古城のほとり」及「寂寥」など、清楚の賦彩奕々たるを見る。三十四年秋「落梅集」を公にして後、復歌はず。

「天地有情」

晩翠は三十二年春、詩集「天地有情」を刊しぬ。收むる所、長短四十篇、「帝國文學」反省雜誌等に掲げし從來の作の全部なり。中に「馬前の夢」「星落秋風五丈原」の二長篇あり。彼の主題及作風の一變せんとするを示す事、藤村の「新潮」と「農夫」どの如し。

「馬前の夢」は、不能の文字を笑ひし蓋世の英雄も、玉樓の春短くて、魚龍淋しき秋の水

「曉鐘」

「其の常勝の劍折れて、獨り小島の波枕、疾風暴雨の夜更けて、終焉の床に横はる拿破崙を歌ひ、星落秋風五丈原」は集中の最長篇、六章三百五十句に上り、南陽の臥龍草廬を出で、天下を三分して王者の師を學びしも、成敗遂に天の命、一代の希望未成らずして、祁山の陣營、大星俄に落ちし諸葛亮を詠じ、共に偉人の歎美と運命の哀傷とを抒べて、悲壯沈痛を極む。其の形式に於ても共に三段に分れ、最初終焉の床に在る偉人を描き、中段作者得意の叙事的技巧を以て一代の功業を叙べ、結ぶに詠歎と憑弔とを以てす。結構雄偉、詞藻壯麗、抒情叙事併せ得て手腕頗る見るべし。之を従前の作に比するに、厭世懷疑の遺韻尙響きて、而も理想を戀ひ光明に憧れし面影、復見るべからず。彼は理想の實にし難く、不朽の求むへからざるを史上の事實に見て、俯仰今昔、遂に感傷の悲音を洩せり。爾來晩翠は破られたる理想を悼む詩人となり、第二詩集「曉鐘」三十四年刊の各篇、概ね哀絶の調を帶ぶ。「萬里長城の歌」「秋興八首」「惆悵吟」「黑龍江上の悲劇」等、是か代表者たるべし。萬里長城の歌は、秦皇の霸圖空しく消えて、獨り史上の名を残すのみなるを傷み、二十朝の興廢を閱せる古壁、今既に清室の運命を語るを哀しみ、「秋興八首」は悲風蕭殺の夕、詩人自身を歎き、故郷を偲び

母國の詩運を愁へ、海外の詩國を慕ひ、友を惜み、昔を戀ひて、痛切なる哀傷の聲を放ち、黒龍江上の悲劇は、三十三年北清戰役中、滿州國境に於て演せられたる悲劇に憤を發し、文明の理想の爲に泣き、人道の大義の爲に悼みて熱烈奔放を極む。共に集中の長詩にして、措辭益圓熟に、詩形益整齊、修辭上の進歩著しと雖、青春の翹望を披瀝したる頃の如き豪華の風調なし。

「弔吉國樟堂歌」「富嶽の歌」「登高賦」は集中の絶唱なり。前者は、芳蘭花脆く、運命の神に嫉まれて萬古の恨を殘せる故友を弔ひ、孤燈の下、「静寂」と「暗」の中に、冥想の眼を閉ぢし一夜の思を叙し、清怨綿々至情切實、加ふるに詞藻の富瞻を以てし、洵に好哀歌なり。「富嶽の歌」は渾沌の世に湧き出で、太古の雪の膚清く暗を照して立てる姿不變の富士の高嶺に、天上の星永遠の光を送りて露と凝らしめ、其の星の精銀漢と共に下りて嶺上の明水となり、餘滴靜かに谷あひに流れて花を誘ひ香を浮け、幽泉細流集りて大河となり、滔々東海の波に注ぎ、南溟の風北溟の雲、群る友を呼びて靈山に集る處詩神降りて不朽の調を奏つるを叙し、玲瓏の想像、崇高の風趣、莊麗の詞藻、集中に異彩を放つ。「登高賦」は吹き去り吹き來る無限の秋風に對して、十九世

紀の禍惡悉く吹き拂ひ、新に來らん二十世紀の世をして光と愛と詩との世ならしめん事を祈りし者にして、沈靜の想、莊嚴の辭、老熟の域に入る。而して「弔吉國樟堂歌」は流轉の相を觀じて懷疑に陥り、哲學を彈じ宗教を効する處、依然して感傷の詩なりと雖、末段に至りて、靈の光を蓋ふ僧俗の聲を棄て、沈思冥想すれば、有象世界の遙あなた美妙圓滿の無象世界ありと説いて從來嘗て有らざる慰藉を含めり。爾來理想實現の時あるべきを信するに至り、「富嶽の歌」にては、靈山の曙光を見て萬邦比類なき理想國を我邦に現出せん事を信じ、「登高賦」にては、更に進んで理想界の實現を渾球上に見ん事を無窮の靈に祈り、「愛の神、進化の神、詩人の神……願くは爾の呼吸、天の果てより地の隅に吹き來る無限の風となりて禍惡盡く吹き拂ひ、光と愛と詩とをして永く此地を掩はしめよ。」と呼べり。即ち昔日理想の悩みは化して現實の悩みとなり、無象淨土の希望は變じて現象淨土の希望となりぬ。

上述諸篇は何れも「曉鐘」集中の長詩にして、其の短詩は思想修辭共に比較的精彩なし。詩形に於ては七五二句を連ねて一行をなせる一體を始め種々苦心の痕を止め、「萬里長城」以下勉めて變化ある詩調を得んと試みぬ。七五二句一行の詩形は

夙く二十八年羽衣の月に現はれ、藤村亦鶯の歌に之を試みし者なれば、晚翠の新案に非されども、最多く之を用ゐしは彼なり。「登高賦」に至りては全く七五の單調を脱出し、前條抽出の斷片に見えしか如き新形式を試み、以て一種蒼涼の調を出せり。而も藤村の『落梅集』に於けるが如く、『曉鐘』以後暫く高遠の聲を收めぬ。

二家の盛なるや、『花密藏難見』の作者泣菫も亦『新著月刊』誌上一種の聲調を以て、可憐の情操を歌ひ、頗る江湖の囑目を得、三十二年末、遂に一集を公にして、『暮笛集』と言へり。試みに其の詩想を覗ふに、彼も亦他の詩人の如く、最初に、現世に對する不満、俗人に對する嫌厭より、懊惱懷疑の雲に閉されて茲に一種の翹望を生じぬ。晚翠は斯る時、仰いで天上雲のあなたに無窮を戀ひ、未來の世に樂土を夢想して心を遣りぬ。然れども泣菫に在りては、所謂現世とは趣味なき世、所謂俗人とは趣味なき人にして、彼の懊惱は主として趣味なき人生に對する嫌惡の情より起るに過ぎず。されば彼の翹望は甚簡素にして、單に趣味ある人生を實現せんと冀ふに止まる。然らば即ち人生の趣味とは何ぞや愛と詩と、是のみ。彼か憧憬の歸着點は即ち此の二者に外ならず。卷頭詩のなやみ既に此の思想を體現し、次ては『星鐘』『蟋蟀』等に

詩の憧憬を示し、『琥珀』『玉腕』『紅絹袖』『夕』等に戀の憧憬を示し、更に其の後の仕に於て此の思想を明白ならしめたり。就中兄と妹一篇、詩歌の人なる兄と才敏く情切なる妹とを描きて最よく彼の詩想を代表す。「尼が紅」は四行節百五を重ねたる集中の最長篇にして、浮世ゆかしと思ひそめし若き沙尼が、寺を遁れて、若き戀に惱む綿々の恨を叙して精細を極め、少しく冗漫の弊ありと雖、想形共に集中一方の代表者たり。

泣菫の戀を語るや、熱情時に奔逸して頗る藤村の『若菜集』に似たり。さはれ、彼の特徴は熱烈なる感情に非ずして可憐なる情操に在り。かの『村娘』『鶴鷄』などに現はれし同情、『古鏡賦』『盃賦』などに現はれし想像、『秋の歌』『燕の賦』に見ゆる自然感情等、其の著しき者なり。就中『燕賦』は、此の點に於ける代表作品にして、『圓き頭』は葉隠れにかゝる葡萄を見る如く、胸の和毛の白妙は、女子の恥づる肌に似て、瞳の色のらうたさは、潮に澄める一つ星、上毛の艶の紫は、朱冠に彫れる雲母の如く、やがて八重の潮路を越えぬべき力ある翼を打ち、霞める青柳に新月を呼び出づる清き音に歌ひ出でたる燕子に寄懷せし者、恣態文辭最よく整ひ、集中の佳作なり。

『新著月刊』倒れて泣菫は『新小説』『明星』『小天地』等に其詩を掲げしが『落梅集』『曉鐘』の刊行と同じ年に第二詩集『行く春』を出しぬ。詩想は前集と大差なしと雖、其の懊惱は空想より來る事少くして、現實の上に存する事多くなりしは『暮笛集』に見ざる所、頗る晚藤二家の傾向に似たり。特に時事問題に憤を發して『遺憤』とあゝ杜國とを爲し、は彼の現實的傾向の極端に走りし者なるべし。爾來作者の翹望せる「新たなる日」は、愛と詩との満足せられたる華やかなる若々しき趣味の世より、轉じて平和の世特に平和の田園生活となれり。「牧笛」より始めて「夕暮海邊」に立ちて「夕の歌」「小鼠に與ふ」「郭公賦」「金絲鳥を放つ歌」等は、即ち平和の理想を謳ひし者。「野に立ちて」「及」「南畝の人」に至りては、全然農民生活の讚美にして、藤村の「勞働雜詠」と歸趣を一にす。

以上述ぶる所を通覽するに、泣菫の詩風は、大體に於て藤村の後影を追ふに似たり。而も其可憐なる情操を抒ふる一面のみを傳へて「天馬」「鷺の歌」「深林の逍遙」の高渾なる情調に及はず。唯「石彫獅子の賦」の一篇、長鬣背に巻き、廣胸強く張りて、夏の日盛り光を浴びて立ち、威風百獸を潛伏すべき石彫獅子の雄姿を寫し、進んで藝術

の不死無窮を叙べて、雄偉壯麗、彼れの作に始めて見る所、宛然藤村が「一葉舟」の詩想なり。

詩形に關して、作者は諸般の試験をなし、『暮笛集』の八六調以外、種々變化ある格律を用ひぬ。但し一句一行概ね短く、晚翠の漸く長からんとするに反し、漸々短からんとする傾あり。之を學ぶ者、青年の間に少からざりき。

當代の詩壇、三家を除けば他は皆振はず。從來の作家にては、鏡幹新詩社を起し『明星』を發刊して短歌及新體詩に勉むるあり。三十四年其詩歌合集『紫』を公にせり。後進にては、高安月郊、蒲原有明、兒玉花外、岩野泡鳴、今村敬天等あり。月郊は、三十三年小説詩歌合集『金字塔』及『夜濤集』を出し、特有の聲調を以て勁健の詩想を歌ひ、有明は、『帝國文學』『明星』『文庫』等に現はれしが、三十四年『片袖』に掲げし「高潮」最稱せらる。花外は集『風月萬象』(三十二年)を出し、泡鳴は『露霜』(三十四年)を公にし、敬天は同じ頃『短笛長鞭』を出せり。又かの『文庫』の詩家醉若は『無弦弓』を刊行せり。三十四年には詩集の出づる事盛なりしも、皆前年の作を編みし者に過ぎず。實際に於ては、詩壇沈降、新興の氣運一段落を告ぐるに至れり。

第三節 戯曲

明治二十年前後に方り、文學界の新潮として其勢を逞うしたる寫實主義が、戯曲演劇界に入りて誤つて邪徑に走り、性格寫實精神寫實の旨を離れて、徒に事件寫實衣裳道具の寫實に流れたりし由は既に述べぬ。又かの歐化主義の反動として起りし國粹運動と同様の原因より來れる保守主義の運動が、從來の夢幻史劇を推奨して斯界の前途を妨遏せるをも説きぬ。二十六七年至る劇壇の形勢は、要するに此の二流の消長に外ならざりしなり。然れども少數の識者は、之に満足する能はず、去つて新戯曲を求むるの念甚切なりき。前期劇界を叙し終るに落み、一言云ひ及びし坪内逍遙の評論は、即ち此の少數者を代表する者と云ふべし。

二十六年秋逍遙は『早稲田文學』の論壇に立ちて『我國の史劇』を論じ初めぬ。彼は先づ本邦古來の史劇作者を擧げて其作品を批判し、併せて自家の史劇に對する見解を述べたり。曰く、巢林子の史劇は一種の夢幻劇にして、單に眼に翹る技術としては、巧妙驚くべきも、嚴密に言ふ史劇としては、事件荒唐、人物單純、到底今の觀客を

坪内逍遙

して歴史的幻影を起さしむるを得ず。唯、人情を描寫せんか爲に、時所と人名を過去歴史に藉りしに過ぎず。默阿彌の史劇は其の作意過去の事相人物の再現に在るを以て、多少歴史的寫實に近づけりと雖、彼や素と天稟の世話物作者にして、其の學殖識見共に、時代物英雄物作者たるに足らず。彼は僅かに野史俗説を典據として、史實人物を想像し、而も其直覺は現在以外に及はざるを以て、時勢境遇地位器度人情及風俗を異にせる過去の事相人物を寫して正鵠を得ん事到底望むべからず。況んや治亂興亡の理を釋ねて英雄の心事を描出するをや。學海の史劇に至りては、過去再現の主義を極端に解釋して單に正史の事實を其儘に取り、道具衣裳臺詞等盡く之に依り、言はゞ非劇的非詩的の考古博覽會なり。蓋し脚本の精髓は個々人物の性格を因となし、境遇を縁となし、此の因縁によりて、成れる著大なる業果を描き、以て人事の真相を現はすに在り。従つて史劇は件の人物を過去の特殊なる境遇の中に立たしめ、以て人事の真相を過去事實の中に表現せんと力むる者のみ。さればかの史上の事相と人物とを寫實的に舞臺上に現はすか如きは抑も末なり。史劇の過去相は普通の觀者をして過去の幻影を起さしむれば則定る。學海の如

きは此本末を顛倒せる者なり。櫻痴の改作史劇は言ふに足らず、其の新作史劇は唯史的人物を取り來りて之に當代俳優の個性を與へたるのみ。作者の筆に上りし史上幾多の英雄は、盡く之を演ずる一俳優の儀型になり了らすんば止まず。加ふるに作者自身の影子を帯びて、俗智世間智に長け、明察機微に通ずる人物ならざるなし。彼等は現在を洞觀し、未來を先見し、奇禍偶福、忽其の由來を察し、他人心事の隱微忽之を付度し、事の成敗は一に此の世間智の優劣によりて決すとす。斯くの如きは獨り史上の人物と異なるのみならず、所有人間の通有性を失ふ。次に逍遙は新史劇に反動して起りし夢幻劇崇拜の潮勢を摧かんと勉め、夢幻劇の形式美は近松當時の時勢に在りて始めて發揮すべき者なりと論じ最後に將來の改良策に及び從來の劇の根本的缺點は、第一叙事詩の體と劇詩の體との混淆、第二性格を無視して事件を主とせる事に存するを以て、先づ此點に改良を加ふべしと説き大に泰西式の性格劇を主張せり。

逍遙か史劇論は、げに斯壇の新聲にして、性格劇の發展を鼓吹せる點に於ては全然斯道の『小説神髓』なり。文學革新の著手せられて茲に十年、演劇革新の合理的に

近き論議は始めて世に出でぬ。是より先き『柵草紙』の隅外、穩健の思想と妥當の見解とを以て斯界を警醒せしも、彼れの態度は冷靜なる批評的にして、逍遙の如く熱烈なる鼓吹的に非ず。従つて其の江湖に對する影響遂に此の如くなる能はざりき。逍遙は、其の著眼の卓拔嶄新なる、其行動の華やかにして鼓吹的なる、假令多少の缺陷誤謬あるを免れずと雖、文壇の先覺評界の明星として、卒先の功没すべからざる者あり。

然れども、史劇論の評壇に與へし影響の大なりしに反し、作劇乃至劇場文人に及ぼし、感化は、不幸にして甚小なりき。『小説神髓』ありて小説界の作風一變せしが如くなる能はざりき。蓋し劇界の革新は、脚本劇場俳優の革新以外、觀客の思想を一新するに非ざれば得て望むべからず。而も當時の觀客は概ね教養なき舊世界の遺物なり。其水新七の徒、尙よく梨園作者として其の餘喘を保つは、即ち此の惰力の恩のみ。斯くて爛熟せる舊劇、模倣陋劣の新作は、依然として活氣なき劇界を支配し、活歴流行以來、兎に角舊劇の範裡を脱せんとせし寫實史劇すら、櫻痴一たび蹉跌して、復起らずなりぬ。

此時に方りて、日清戦争起り、戦争文學の流行は所有方面を侵して演劇界にも入りぬ。此勢に乗じ、戦争劇を標榜し、俄然として頭を擡げし者を所謂壯士芝居となす。壯士芝居は二十四年西鳥越中村座に始めて政治的世話物を演せし川上晋次郎一派の劇を指す。此の粗放露骨なる芝居も、二十七年「又意外」等の新作を演ずるに及びて、不思議にも江湖の喝采を博し、『戦争見聞誌』以下の戦争劇を出すや、一時舊劇の疊を摩し、眇たる貧書生の一團、都下の大劇場に據り、積年の大勢力たる歌舞伎俳優をして後に蹙著たらしむるに至り、劇評家は驚きて劇界革新の機運と稱し、之を呼ぶに新演劇を以てし、彼等を名つくるに新俳優を以てしたり。此影響は延て大阪に及び、成美團等の壯士役者團を起し、四方に傳播して、少からざる團體を見るに至れり。

此の運動は總ての點に於て美術の域に遠きに係らず、演劇史上甚重要な事件なるべし。然れども之を詳説するは本論の主旨に非ず。茲には唯脚本の方面より觀察するを以て足れりとなす。抑も劇界革新の事あるや、其の鋒先は先づ史劇に向けられ、世話物の天地は風靜なる別世界なりき。思ふに世話物に在りては、稀

世の名作家默阿彌の存するありて、寫實的世話劇必しも貧少ならず。然るに、二十六年默阿彌没して、凡庸作者獨り存し、且其作る處、明治の假面を著けたる舊幕物に過ぎざりしかば、新時代の新世話物としての價值終に空し。新演劇の勃興は、即ち此の虚を衝けるに外ならず。彼等の脚本は拙劣を極むれども、其水新七よりは明治の現實に近し。即ち此運動の事効は、曩きに史劇に施されし寫實主義を新に世話物に導きし點に存す。換言すれば、世話物に於ける活歴主義の擴充に在り。

然れども、是史上の價值のみ。之を脚本の側より見れば、筋の支離滅裂なる寫實の皮相なる學海櫻痴の作よりも甚しく、明治の世話物としての價值は全然缺けたりといふべし。顧みて劇壇の状態を見れば、舊夢幻劇の精粹復びもて嚙され、活歴物、川上物の總てを壓倒しつゝ、無前の繁榮を致し、斯壇の刷新、脚本の改良は、前途亡羊の歎なき能はざりき。或は敢て新作をものして梨園の關門を打破せんと試みし者なきに非ざりしも、時運は未だ至らず。新作家にして上場するを得る者、依然櫻痴居士に止まり、其すら改作の俗劇のみ用ゐられて、『豊島嵐』の如き比較的好新脚本は遂に容れられざりき。

「桐一葉」

此の時に方りて史劇論の記者逍遙は奮つて創作壇に立ち、二十七年末より、春の屋主人の名を以て史劇桐一葉を『早稲田文學』に連載し、二十九年の初より同「牧の方」を同誌に連載し、完結するや、共に之を刊行して廣く世に問へり。蓋し是れ著者か理想とせる脚本に非ざるべきも、亦以て多年の所論の具體的發表の第一着歩と見るを得べし。

「桐一葉」は豊臣家遺托の重任を負へる片桐市正且元を主人公とする悲劇にして且元が駿府に使用して大御所の難題を受け、己むを得ず淀君關東下向の儀を承諾なし、別に苦計を胸に秘めて大阪に歸りしに、讒者の爲に關東に内通せりと稱せられ烈しく淀殿の不興を蒙るに端を發し、奸臣の阻格偶發の錯誤の爲に、胸中の秘計遂に施すべからず、乃ち望を大阪に絶ち居城攝州茨木へ退かんとして、曉霧の中長良堤の上に木村長門守と訣別し、後事を托して悄悄と落ち行くに至りて終結す。之を本筋として、且元の一女蜻蛉が長門守に對する戀物語を織り込み、淀君が夢幻妄想の狂態を以て之を彩り、總て七幕十五場に分る。其の材料は概ね正史に取りたるも、作者は素と、正史の事實が單に段幕に按排せられたる者を以て劇と見なさず、

るが故に、事件の進行を助け、人物の性格を活現すべき幾多の醇化を加へたりき。作者は此の悲劇の葛藤は、一時關東に屈して大御所百年の後を待たんとする且元の秘計を知らざる淀君の猜疑憤怨と、且元を退けんとする大野父子の野心と、相依り相助けて且元の苦忠を破却し去らんとする所に存すとなし、遂に且元をして退身の己むを得ざるに至らしめたり。故に其の終結は、普通の悲劇の如く悲壯の死に非ずして慘苦の生なり。事件の取捨按排は總て此の著想より來る。作者は又、筋の統一を求むるが故に、挿話の爲に離裂する弊を避けて、一道の本流全篇を貫かしめぬ。作者は又、人物に作家の影子を宿し、劇に作家の觀念を寓するを忌むが故に個々の人物各特殊の性格を具へて、其の間に褒貶を挿まず、學海櫻痴の弊套を擺脫して、最自然的なる描寫を勉め、特に且元淀君に於て其の著しきを見る。作者は又、俳優の爲に人物を作るの非を知るが故に、舞臺上の注意周到なるを期しながら、強て當時の梨園に媚びて團菊輩の藝風に迎合せん事を勉めず、而して其文字に於ては、從來戲曲の修辭たる七五調、掛詞、縁語等を用ゐたる叙事詩的分子尙少からずと雖、概して精練暢達、一代の才筆没すべからざる者あり。

曙光は暗黒を破れり。曉鐘は寂寞を破りぬ。默阿彌以下過渡時代の史劇を超出して近世思想に成りたる新戯曲は、其の頭角を露はしぬ。百千の群議は一人の實行に若かず。脚本改良の聲起りて、所謂評論家の囂々は其聲徒に大にして、功果一物をも残さざる事數年、茲に至りて、漸く劇壇渴望の一端を充たしぬ。

然ども、此劇を讀む者、主人公の苦忠に同情を表すると共に、其性格の明確を缺けるを覺ゆ。思ふに且元は主君の面前に奸臣と激争し、乾坤一擲悲壯の最後を遂ぐるが如き老忠臣に非ず。遠謀深慮、内忠奸を操縦し、外老獐を控制し、以て主家百年の安寧を致すか如き智者に非ず。壯烈の意氣は重成に及ばず、老熟の智略は家康に若かず。謀りて誤り、誤りて斷せず。因循姑息、一日を緩うせる者。斯かる概括的性格は稍明なりと雖、其云爲常に含糊にして直截ならず。或は故主の恩に感じて孤忠盡瘁するが如く、或は首鼠兩端、自家の安きを計るが如く、悲劇的境遇に處して煩悶の痛烈なる者表はれず。壯烈なる大破綻なくして、早く身を退くなど、往々吾人の同情を冷却せしむる事あり。要するに性格悲劇に非ずして境遇悲劇なるべし。蓋し「桐一葉」は、完結せる戯曲に非ず。且元の悲劇的最後は、別に續篇ありて

之を詳悉すべかりしなり。作者は三十年「沓手鳥孤城落月」を「新小説」に掲げ以て此の脚本の局を結べり。

「沓手鳥孤城落月」は大阪落城の一刹那を舞臺として、且元の最後を描ける悲曲にして、落城の早朝、生命旦夕に逼れる重病を推して家康の陣營に候し、秀頼母子助命と共に、禮を以て出城を迎へん事を請ひ、且自ら其の使節たらん事を求め、十年の苦心、鬢髮霜の如き老武士、籠を急がせて城に向ふに始まり、本多正信の計略に阻まれ、自己の重病に時機を失ひ、遺恨千秋、本丸炎上して母子生害となり、乃ち悲憤の涙を揮つて城門の前に瞑目するに終る。總て三幕七場を以て成る。通篇悲愴の調を以て被はれ、彌庫階上淀君の狂亂秀頼の愁歎人の腸を斷たしむるは勿論、末段且元落命の一場、巻を掩うて痛憤せしむ。而して曩に模稜含糊の趣ありし且元の面目此の一場に至りて漸く明かにせられぬ。彼や素と、石田三成の所業を以て猿才覺となし、機を熟するに時方ありと中心竊に戰を期しながら、大御所存命の中は平和を陽に一時を欺き、徐に計を運らすを以て唯一の希望、畢生の事業となせる者。彼の苦心經營せるも、卑怯と罵られ不忠と認められしも、總て此に出づ。彼をして悲

劇的最後を遂げしめし者は、主として、大勢を達観すべき神智なく、因循姑息一時の小策を弄して機微の動くを悟らざる彼自身の性格なりといふべし。「孤城落月」を「桐一葉」と共に二部曲と見るを得ば、始めて性格悲劇の面影を彷彿すべきなり。

「牧の方」

此の曲は幾多の瑕瑾ありと雖、とにかく明治文學の一記念にして戯曲史上期を劃すべき著作なり。小説史上空前の事業を成し、春の屋主人は、茲に再戯曲史上の大業を成せるなりき。而も其活動は之に止まらず、更に「牧の方」を創作せり。「牧の方」は、鎌倉執權北條時政の後妻牧の方を主人公とする悲劇にして、牧の方が所出政範の愛に溺れ、之を將軍職に就かしめて尼御臺の榮華を學ばんとし、乃ち千幡將軍尼御臺及義時を除かん大陰謀を企て、事現はれて義時の前に自盡するに至る筋總て六段十七節、北條時代初頭の罪惡史中特に著しき一女丈夫の末路を描けり。然れども、此曲は之を以て完結せるに非ず。續きて出つべき「源實朝」及「左京兆」と三部曲の形式をなし、以て義時を主人公とする一史劇を爲すべかりしなり。故に此曲は女性牧の方を主人公とする獨立の曲に非ず。隱謀家牧の方を中心として、更に大なる隱謀家義時の前半生を描けるに過ぎず。唯惜らくは作者續稿を出さず

して止るぬ。されば單獨に之を評論せんは、頗る當を失するも試みに其の脚色を窺ふに、政範を擁して簾中の權を振はんとする牧の方、牧の方を擁して全權を握らんとする稻毛父子、稻毛父子を使喚して政範に代らんと巧む平賀朝雅、是等總てを自滅せしめ、將軍を擁して執權の天下を謳はんとする義時、巴の如く相追うて、一起一伏、野心は野心と戦ひ、隱謀は隱謀と相衝き、所有罪惡を盡す。故に場面變化に富み、事件參差として常に讀者の注意力を緊張せしむ。然れども、一部の主動たるべき牧の方の隱謀が、常に黒幕に潜める義時の爲に操縦せらるゝ傀儡に過ぎざる趣あるか故に、時々之に對する感興を破らる。且此の曲には、幾多の豫想せられたる事實を含み、讀者の歴史上の智識に委ねて其の叙述を省略せる者多きを以て、讀者をして、此の曲は甚だ大なる史劇の中間に位する一小部に過ぎざる感を起さしむ。牧の方の性格の如きも、直截明晰なるに係はらず、悲劇の勇者として讀者の注意を一身に集むべき偉大の資質を缺く。其の隱謀もお自ら所動的にして、所有外敵と戦ひて壯烈なる没落を遂ぐるか如き大觀は遂に見る事能はず。

之を「桐一葉」に比するに其の目的が、歴史の發展の隱微なる消息を描破するに在

る事兩者相同じ。『桐一葉』は豊臣家滅亡史の裏面に潜める隱微を描くを主とせし如く、『牧の方』は鎌倉三代將軍時代の罪惡史の隱微を寫すを主とせるに似たり。唯取材の時代及史料の選擇に於ては、『牧の方』の取りし所は、古今罪惡史の頂點にして、史的研究の鋤未だ入らざる荒野なれば、作劇家が想像を逞うして一大悲劇を編み出すべき餘地を存する點に於て、大に『桐一葉』に優れたり。蓋し作者は先づこの神秘なる罪惡史に著眼し、其黒幕の陰に立てる義時を認め、之を中心として此時代の史實を網羅せる三部曲を作らんと企てしなるべし。然れども、局面宏濶事端繁瑣に過ぎて劇の進行に餘裕なく、且事件の全部が陰謀の連續なれば、總て秋霜逼促の趣ありて、詩興お自ら乏しきを免れず。此の點に於ては、『桐一葉』に一籌を輸せざるを得ざるなり。

逍遙は上掲三曲の外、尙『二葉楠』の一篇を『新著月刊』に掲げたり。小楠公を主人公とせる抒情詩的小戯曲なり。三十一年『孤城落月』と共に『菊と桐』と題して出版せり。逍遙か作は何れも場に上らざりき。然れども、聰明なる評壇の大部は嘖々之を稱揚し、新作劇家の之に倣ふ者漸く現はれぬ。高安月郊は、二十九年『重盛』をものし、

翌年眞田幸村を『早稻田文學』に掲げ、其他譽田綠堂、土居春曙、松居松葉、及水蔭澁山人柳浪等、各戯曲の才を一二の創作に試みたりき。

三十年夏、櫻痴居士、俳優團十郎、芝居師森田勘彌の應援を得、從來の立作者、舊劇の殘類たる新七、其水を排斥して、自ら歌舞伎座の立作者となりぬ。是より先き櫻痴の作の演せられし者少からざりしも、舊慣の關門固うして未だ立作者たるを得ざりしなり。されは此事あるや江湖の囑望一方ならず、往々斯界の形勢一變して新作大に行はるゝに至らんと夢想する者さへありき。然れども、彼が入座以來の作は『俠客春雨傘』を始め、舞臺面の變化面白く、役々善く俳優に適ふのみにて材料着想に些の新彩なく、脚色主旨に何等の統一なくして、全然舊劇の後塵を拜するが如き者なれば、到底新時代の要求に應すべき者に非ず。要するに新舊過渡の作家たるを免れず。純乎たる新文士にして梨園の關門を打破せるは、蓋し松葉を嚆矢となす。三十二年松葉、史劇『惡源太』を草し、左團次に附して上場す。俳優を標的として人物を作りし舊式の者なるが上に、脚本としても失敗の作なりと雖、幼稚なる梨園は、先づ此種の新作を以て啓發せらるべきなり。

右の事件を一小波瀾として、劇壇の状況は不活潑を極めたり。往年の脚本改良會の再興とも見るべき青葉會起りしも、何等の功なく、新演劇は一敗地に塗れてより、僅かに、知名の小説、例へば思軒譯の『替使者』紅葉作の『心の闇』冷熱等を脚色上場して、一時の人氣に投せんと試るのみ。元來小説の脚本化は、大阪の劇壇にては通例の事なれども、脚本化其事既に不合理なるか上に、脚色者概ね無識の輩なれば、脚本としての價值問ふに足らず。總て劇界の進歩は、いたく小説界に後れ、唯一の機關雜誌『歌舞伎新報』も一たび倒れ、三十三年に至りて、漸く復興して『歌舞伎』となれる者あるに止まる。

纏つて作劇界を通觀するに、史劇の盛行に比して世話劇は甚貧しく、悲劇の發達に較して喜劇滑稽劇は皆無に近し。前期末紅葉がモリエールを翻案せる『夏小袖』『戀の病』に似たる者すら當時の喜劇界に現はれざりき。

戯曲の翻譯は二十九年の初『早稻田文學』に掲げし逍遙の『ハムレット』最注目すべく、苦心精練の好譯なりしが、惜いかな中絶す。三十二年『太陽』に出でし戸澤姑射の『オセロ』當時出色の譽あり。三十四年月郊か譯出せる『イブセンの社會劇』は、北歐現

代の名家の作『社會の敵』人形の家二篇を收め、獨得の詩筆を以て、最新思潮に觸れたる傑作を紹介せり。其他二三の譯述特に擧ぐべきなし。

第四節 小説 其の二

心理解剖、性格描寫、乃至情操細叙の小説が文壇を風靡するに方り、其の超世間的傾向の極端に趣かんとするに不満を懷き、社會的傾向、即ち實世間と小説との深密なる交渉を旨とする傾向の盛ならん事を望む者漸多く、實業小説、宗教小説、諷刺小説、政治小説、家庭小説、社會小説等種々の形式を以て其の新要求を表せり。此の風潮は、夙く二十九年に其の萌芽を發し、二三の論者か、或は活動を叙せる實業小説、或は道念高き宗教小説を求めたりしが、民友社が社會小説の名を掲げて之を募集するに及び、此論漸く盛なり。然れども、社會小説の意義に至りては、頗不明にして、或は所謂社會主義の小説となし、或は戀愛を以て唯一の材料とせる從來の小説に對し、政治宗教等社會の所有部面に廣く材を取る小説に附せる名稱となし、或は個人を描き、心理を寫せる小説に對し、社會を描き其實相を寫せる小説を指して言ふと

なし、造語解釋各區々たりき。而も實世間に觸れよ。社會に相渉る作を出せと勸むるに至りては即ち一なり。

論壇の風潮斯くの如くなるに際し、創作壇に於ても一新潮を揚げたり。社會的諷刺小説の續出即ち是なり。風葉の「失戀詩人」柳浪が「非國民」は、共に當世文壇の一部を諷刺し、思案外史が「五濁惡世」は宗教界の葛藤を諷し、澁山人が「從五位」は華族を刺り、美妙齋が飛影の名にて出し、「白日鬼」は元老排斥の鋒鏘を見はし、某作家の「初露」は某内閣を暗刺し、何れも實世間の現象に向つて諷嘲の矢を放てり。斯かる一時的性質を帯べる作品は、小説の理想より見て決して推奨すべきに非ざれど、其觀察及諷刺の著しく實世間に密接し來りしは、注目すべき現象ならずとせず。

抑も此の社會的ならん事を求むる主義は、藝術獨立主義と共に、文藝に於ける二大主義にして其の消長は小説史上悠久の事實に屬す、前者は之を人生相關主義と稱すべく、教訓主義、道德主義、諷刺主義等を包括し、後者は文藝獨立主義と稱すべく、性格主義、心理主義、寫實主義等を包括す。前者は人生と密接なる交渉を有するを利となし、實用主義、差別主義に流れて永遠の生命を失ふに至るを弊となし、後者は

平等無私百世に通じて誤らざるを利となし、出世間主義、非國民主義に流れて人生と相關するなきに至るを弊となす。曲亭馬琴、勸懲の旗幟を翻して教訓小説を出すや、人生相關主義は一大潮流をなして明治以前の文學を貫流し、末流弊を生じて世益主義、實用主義に走りぬ。此に於てか藝術獨立主義の反動は、逍遙の「小説神髓」となりて現はれ、寫實の大旆を擁して勸懲の舊主義を打破し、明治新小説は此間に生れて赫々たる功績を文學史に残しぬ。然れども末流遂に實世間と離れ、國民の性情に遠かり、偏に小主觀に出てたる情操小説、異邦民性に出てたる翻譯小説を作るに至る。此に於てか、反動は再び人生相關主義の側より起らざるべからず。方今小説の新傾向は、即ち是なり。

内田魯庵

げに此の事實は、既に社會的諷刺小説に現れぬ。三十一年に入りては、更に内田魯庵の宗教小説となりて現れたり。抑も江戸時代儒教及武士道の人心を支配せし以來、宗教思想が文學の根本思想となる事、其跡を絶ちぬ。明治の作家に在りて佛教思想の片影を小説に寄せしは、獨り露伴あるのみ。基督教の如きは、未だ文學の思想となるべき地位に達せざりき。魯庵は即ち此の棄てられたる基督教の思想を

「暮の二
十八日」

取り來りて之を小説に寄せしなり。魯庵は不知庵の名を以て前期の批評家たり。後専ら力を翻譯に注きしか、此の年轉じて筆を創作に染め先づ「暮の二十八日」を出し、大望を抱き事業に憧る、青年が事志と違ひ、煩悶遣る方なきに際し、宗教的光明に接して迷夢忽ち覺め、終に靜平なる家庭生活に適歸すといふ筋を描いて一種清高の趣を帶び、從來陰慘の小説の間に一新面目を開けり。爾來「太陽」「新小説」「文藝俱樂部」等に掲げし短篇皆宗教趣味を帶ぶると共に、社會の諷刺を含む。就中「今様厭世男」は執拗優柔なる自稱薄命詩人を描き、「浮き枕」は上流社會が權勢と富みとを濫用して横暴を逞うする當世の社會現象を寫し、「片鶉」は失戀の令嬢が悲惨の運命を藉りて、官人と商人との間の情弊を暗刺し、其他の作概ね之に類す。

此の時に方りて、時代精神の論、文壇に起り、時代の精神を顧みず、之と相關る事なき文學は價值なき者なり、大文學は常に時代精神を代表し、當代國民の感情に最明瞭なる發聲を與ふる者なりと唱へて、益々文學の社會的傾向を鼓吹する者ありき。「太陽」の高山樗牛先づ之を唱へ此の精神を表はせる文學を稱して近代主義の文學と言ひ、近代主義の文學は藝術獨立主義の文學に非ずして、十九世紀末の日本文明

社會の眞精神を描破せる文學なりと言へり。「新小説」の魯庵次て之を説き、方今の小説徒に戀愛に狂して社會と相關するなきは、是れ作家が明治思想の眞相を解せざるが爲ならずやと言へり。就中魯庵は、嘗に論議するのみならず、創作界に立ちて之を實現せんと勉め、三十二年「落紅」「霜くづれ」「血櫻」「電影」「青理想」等を連出せり。不幸にして筆力其の抱負に伴はず描寫冗漫に流れ、此種作物の成功の要素たるべき沈痛の風趣を缺き、其の着想に至りても、新舊思想、信仰、道德の衝突に關する觀察必しも神に入らず。然れども、其諷刺や批評や眞摯切實にして從來作家の如く冷嘲的ならず。勉めて時代の實相に觸れんと試みたる態度は、亦以て異彩とすべきなり。

此氣運は延いて新進作家の間にめぐり、宙外の「腐肉團」「時事新報」「風葉の」「政黨」「新小説」、秋聲の「情けもの」「同等」社會的傾向の者少からず。三者は共に當今の政黨員を主題とせる政治小説にして、就中「政黨」に、政黨員の家庭を寫せる所最讀むべし。然れども、是等も亦魯庵の如く觀察の皮相にして、時代政治界の神に入らざるの弊を免れず。却て作家從前の作なる心理小説に劣れり。其他前田曙山は「東京朝日」

に「濁り水」「千枚張」「腕くらべ」等を連載し、當世の暗黒面社會の裏面に於ける種々の現象を暴露せしも、固より社會的小説の成功せる者に非ず。斯くして、三十二年の社會小説は、何等の著しき痕跡を残さずして止み、爾後復發展せざりき。

さはれ、實世間に觸接せよとの要求は、磨すべからざる眞理を含み、理想派の泰斗として知られたる露伴すら尙之を唱ふるに至り、心理小説の作家も人を精寫するを主眼とする從來の着想以外、社會を寫さんと試みる者漸く多く、個人の研究以外社會に近接せんとする傾向漸次現はれたり。所謂新寫實的傾向是なり。

小説の新寫實的傾向とは、從來の寫實よりは一層廣濶なる意義を有し、個人より進んで、個人對社會の實相に入らんとする者なり。即ち從來の心理的傾向が新に興れる社會的傾向の影響を受けて成立せる一變形に外ならず。此の傾向は夙く『多情多恨』より『金色夜叉』に移りし場合に現れしが、三十二年頃より宙外、柳浪、天外、風葉等の新作家の製作概ね此の流風を追ふに至れり。宙外の『新機軸』縁不縁先づ彼が以前の作に對して新彩を加へしが、論壇に文士生活問題起るや、田園生活論を

田園生活論

後藤宙外

主唱して、悲觀説を寛和せんと勉めしより此のかた、其の論旨製作の上にも現はれ三十五年の「遺る光」「乳母が家」「新小説」を始め、總て精細穩健の筆、田園の情景を寫し來つて獨壇の妙あり。「ありのすさび」以後の作者の特徴は最よく、此の和平自然、波瀾なく奇巧なき田園小説に發揮せられたり。

廣津柳浪

「縫れ糸」

「骨ぬすみ」

柳浪は多作第一の目あれども、佳作多からず。「羽拔鳥」以後三十五年迄の間に、舉ぐべきは「縫れ糸」「骨ぬすみ」「紫被布」「二人やもめ」「亂菊物語」「雨等の數篇に止まる。「縫れ糸」と「骨ぬすみ」は、三十二年初に「新小説」と「文藝俱樂部」に出で、前後連關せる者、「紫被布」と「二人やもめ」は、同年「文藝俱樂部」に分載せし前後連續の小説、「亂菊物語」は長篇の新聞物、「雨」は可憐の小品なり。何れも機智縱横、地の文は粗笨なるも、對話の巧妙なるを以て之を補ひ、優に戲曲的活動を示すに足る。一篇の情趣、恍惚として觀照するか如き美感を催起するなきも、痛切人の肺腑を衝くの實感を誘起す。總て曩日の特徴依然として存すれども、唯其の着想、往年の如き陰慘の事相、病的戀愛はた變嗜の人物に向ふ事なくして、事相人物自然に出で、戀愛亦純眞となり、「紫被布」の如きは多少當年の條を存すと雖、尙「二人やもめ」に於て之を調攝せり。特に「縫

れ糸「骨ぬすみ」は、着想筆力共に新發展の先頭に立ち、「河内屋」以後の佳作と稱せらる。惜むらくは作者の達筆、一氣呵成に過ぎ、従つて濫作の弊あり、量に於て一世に超出するに係らず、明治文學の傑作として傳ふべき者甚多からず。

新寫實主義は、風葉天外に至りて自然主義的傾向を取るに至れり。抑も此の主義は近代思想界の一潮流にして、文藝に在りては、美の極致を發揮するよりは、むしろ實際生活を描寫せん事を求め、總ての思辨冥想を排して、唯自然のまゝを體現せんとするなり。故に此主義に成れる文學は美醜を識別して詩材を選択するを要とせず、自然世界百般の人事、其儘に寫せるもの、やがて詩篇たるべしとなす。されば罪惡必しも避けず、卑猥必しも去らず、悲惨必しも却けずして、社會に存する程の事相は一毫の微も之を網羅せんとなす。是素より其の極端なる者に就て言へるなれども、風葉天外の作風多少之に類する所あり。

風葉は曩に「寢白粉」を作り、社會暗黒の一面に筆を着けて評壇の問題となりしが、三十一年より次年に亘りて、「戀慕流」「鬘下地」等を出して再注目を惹きぬ。前者は「讀賣」に連載せし者にて、一管の吹奏斯界の天才と囑目せられし青年樂師と、洋樂界多

小栗風葉

「戀慕流」

望の秀才と稱せられし少女とが、近親を棄て名譽を棄て、多感の情燭に殉せしが、彼等が藝術の誇りと共に懐きし未來の空想、夢の如く破れ、情に脆く意に弱き彼等は社會の劣敗者となりて暗黒の裡に葬られ、はては辱められ汚され、赤繩遂に完きを得ずして「埋れ木」の樂師と少女との如き結末を告げし薄倖の譚を叙し、尙此の本筋に編み込むに、暗黒界裡の消息を少からず綴れる傍筋を以てしたり。此の篇實に風葉の名を重からしめし傑作にして、又當時の彼を代表すべき總ての性質を具備す。後者も亦薄倖の藝人を主人公となし、戀と子の愛と揉み纏れて遂に狂ひ初むるに至れるを寫し、文章の雅文を學べるを瑕とすべきも、前者と同じく葛藤の深刻なる戀譚りを綴り、當時社會の一部に存する思想煩悶を描き出で、妙趣なきに非ず。凡て作者の文辭凄艶にして滑脱精緻にして婉曲紅葉門下、最も師の衣鉢を傳ふと稱せらる。其の詩趣饒かにして一種の光彩あるは柳浪天外の遠く及ばざる所、獨り鏡花に一籌を輸するのみ。且其の結構の緊密にして戯曲的開闔に富む事眞に柳浪に接踵すべし。然れども、其着想の餘りに現實的なるや、時に不倫の行爲を寫して願みず。絢爛なる詩筆も遂に其の醜を蔽ふ事能はざるを憾む。三十

四年以後に於ける「醒めたる女」「黒装束」心中くらべ「沼の女」等は皆此作風を追へる者にして、就中「醒めたる女」は、所謂本能満足主義乃至個人主義の思想を含み、當代思潮に關聯する者あり。

小杉天外

「初姿」

天外は此の風潮の最極端なる代表者と見るを得べし。彼は從來諷刺小説家として知られしが、三十三年「初姿」を公にするや、揚言して曰く、小説作家は唯實世間に在るが如き人物を描き、其の人物の當然爲すべき行爲を正直に丁寧に筆記するを勉むべし。小説は其事相の如何を問はず、作家の空想せる世界に讀者の空想を遊ばしむれば足る。要は讀者をして實世間の事に感ずるが如く感せしむるに在り。即ちかの十九世紀後半の佛國自然派の主張を以て信條となすに似たり。爾來公にせし幾多の小説必ず寫實小説の標榜を冠し、勉めて叙事を省き獨語を斥け、對話と動作とのみを以て一切を描き去らんとす。蓋し此傾向は突然「初姿」に始まりしに非ず。既に三十二年の作「眩枕」「亂れ髪」「蛇いちご」「娘心」後に「左繩」と改む等皆作意なく、結構なく、日常囁目の人情世態を實寫するを主として、其の由つて來る因果の關係を追求する事をなさず、概ね斷片的にして有機的の一個體を形成せざりき。

「初姿」は此の傾向の益明かに益意識的になれるに過ぎず。之を其の後篇「戀と戀」及後れて出でたる續篇「にせ紫」と併せ見るに人物事件の出入偶發的にして、讀者の同情を集中し、其感興を昂上せしむべき中心の人物事件なく、唯或る性格の人が或る境遇の下に正に爲すべき行動を實寫せる者なれば、之を斷片的に見るに、個々自然の姿を寫して美醜共に嫌ふ所なし。爾來「女夫星」「新學士」等の作、皆此の作風に從ひ、客觀寫實の筆淡々として他奇なく、唯事件の變化進行に興味を感ずるのみ。

「はやり唄」

天外が自然主義は「はやり唄」に至りて代表的製作を出せり。嘗に「初姿」以來の寫實の筆力漸く蔗境に入り、巧妙ならざりし對話も漸く圓熟し來りしのみならず、佛國自然派の好題目たる遺傳と境遇とを以て總ての行爲を説明せんと擬し、且つ其の題材を下層社會に取りて不倫の醜事をも避けざりし事など、所有方面に於て作家の特質を發揮したりしなり。筋は淫亂の血統を享けし女性が、夫に他の女あるを知りて嫉妬の末不和となり、次て姦通をなし、狂ふ仇花親の種と流行唄に唄はるゝに至る始末を寫し、自然の模寫を以て藝術の要義と觀じ、善惡美醜の取捨をなし、又は醇化理想化を加ふるを欲せざる作者の實驗小説の標本と見るべく、此の見地

よりすれば、彼が一代の傑作なり。大體に就て言へば、女主人公の行爲の因て來る所、第一遺傳、第二境遇に存する事、おぼろげながら認められ、總ての動作をば是より演繹し得へきに似たり。然れども、各個に就て見れば、云爲唐突に失して因果の關係模稜に過ぐ、蓋し作者は其の主義よりして叙事の細きを望まず、心理描寫の主觀的筆法を用ゐず。只管外面に現はれたる對話と動作とによりて其の進行を示さんどす。斯る客觀的描法は、常に感覺を本とするを以て、時としては冷々淡淡、同情の温きを缺き、想像の貧少と詩趣の缺乏と、亦之に伴ふ。特に下層社會の病的現象を寫すや、風葉と同一對境を取りながら、詩筆遙かに及はざるを以て、益々感覺的に流れんとす。

泉鏡花

ハ、他新の方面

自然主義的傾向に對立してロマンチック傾向を代表する作家を鏡花となす。彼は現實界よりも虚靈界を重んじ、自然界よりも神秘界に傾き、其の空想は人間實を超越して夢幻境に入り、其の空想を載せたる詩筆は、幽玄の高調を帯びて空靈の域に上る。彼は現實自然の境地を描きて寫實小説と呼ぶべき者を作らざるに非ず

然れども、之を作るに方り、常に一種の神秘なる着想と幽玄なる筆致とを交へ、或は實世間の裡に超自然超人間の或物を覓め、然らざれば、現實界と神靈界との間に或交渉を發見せんとす。唯其の想像の飄逸なる、往々常軌の外に顛脱するを以て世或は妖怪小説の名を以て其神秘的美點をも没し去らんとす。然れども、人生何時か神性を絶えたる。社會に光明的半面と暗黒的半面とあるか如く、人間に凡と聖とあるか如く、人生亦尋常知見の及ぶ半面に、不可思議なる神秘界を藏せずんばあらず。天外は即ち、かの平凡なる人生の半面に就き、其下層社會暗黒界を寫せる者にして、鏡花は即ちその神秘なる人生の他の半面に就き、下層社會暗黒界を描ける者なり。

『鼻物語』以後、三十二年に入りて益々幽性を逞うし、錦帯記『通夜物語』黒百合『湯島詣』五の君』より、三枚續『高野聖』註文帳『袖屏風』等を経て、三十五年『女仙前記』起請文等に至るまで、一として瑰奇の想を凝さざるなし。中に往々材を尋常の境地に取りし、所謂寫實小説に近き者、例へば『通夜物語』湯島詣』三枚續等の如きあれども、其は神秘的分子の量の多寡によりて分るゝ皮相的差異にして、根本的性質に至りては即一なり。

「湯島詣」

故に其構想概ね或特徴を帯べる人物、或特種の神秘的事實を中心として、全篇の動作之に向つて集中するか如き型式を取る。例へば「錦帯記」は月夜五色の彩暈の出現に、妖女お禮の運命を附會し、「通夜物語」は吉原のお職丁山といふ傳法肌の女性を中心とし、「湯島詣」は憂世に辛酸を嘗め盡したる勝氣の少女蝶吉を中心とし、「三枚續」は我儘育ちの氣象者の柳屋お夏を中心となして、三者共に數奇の運命を叙し、「黒百合」は古來人跡至らず魑魅魍魎の巢窟と傳へられし石瀧の奥深く、稀世の珍草黒百合の咲けりといふ事實を中心となし、之を採取せんとて此の神秘境に足を入れたる花賣少女と、之を救はんか爲に恠窟を搜りし少年華族とを點出し來つて一篇幽玄の曲を作り、「女仙前記」は轉生といふ靈界の現象を取りて貴族の奥方の前身を描きしか如き、即ち是なり。就中「湯島詣」「黒百合」「高野聖」等は當時の傑作として傳ふべく、前者は神秘的分子の少き方の作を代表すべく、後二者は神秘的幻境を寫せる好標本とすべし。

「黒百合」

「高野聖」

鏡花は人生の下層暗黒の一面に詩眼を注けり。社會凡俗の間に薄遇せられ、壓伏せられて孤弱伸ふるに處なく、而も先天の氣象鬱結して反抗の氣焰を揚げ、進ん

で凡俗界を翻弄せんとする者、即ち彼が創作せる人物なり。其の凡俗反抗の一面より見れば、飽くまで意力の人の如くなれども、底を叩けば熱情の暗涙を湛ふ。故に其の敵に對するや猛然として破壊の暴腕を振ふと雖、其の知己の懐に在りては赤子の如く可憐に、半生の薄命を混々たる涕涙に渾ひ盡さんとす。斯かる境界に同情せる作家は曩に一葉女史あり。然れども一葉の人物は飽くまで人間なりしに異なり、鏡花の人物は、常に一種神秘の色に包れて獨得の怪氣を現はし、遂には飄渺として超人間の幻境に入らんとするなり。若し夫れ彼の文章に至ては、洵に當代の雋逸にして、詩韻饒かに幽味掬すべく、省筆一過すれば簡淨警拔餘情言外に在り、精描細寫すれば愼密委曲錯銖を分つ。二方面を兼具して何れも短句短文錯落して變化の妙を極む。其の一たび瑰奇の想像を載せて奔逸するや、或は深山晝寂かなる「高野聖」の夢幻境となり、或は天麗かに氣澄み深林幽水咽んで滿地のうつぎ花雪の如く、閑として一鳥鳴くなき「黒百合」の別乾坤となり、其の對話の形を以て人物の口を出づるや、熱罵怒嘲、紙面に躍動する所、紅葉風葉か濃艶妖冶の方面に於けると同じく、斯壇之に接踵する者を見ざるなり。

以上は明側より見し鏡花の一斑なり。然れども、彼の作品は必しも至醇の藝術に非ず。其の傾向の極端に走するや、暗側乃ち現れずんば止まず。彼れの缺點は怪奇を弄び怪奇を銜ふに在り。筆端の凄愴脚色の幻怪を以て想髓の淺薄を蔽はんとするに在り。彼が多數の作、此の弊に陥らざる者甚多からざるを憾とす。

文學轉進の運に乗して發達せし小説は略之を説きぬ。翻つて小説界の他の半面、即ち歴史小説傳奇小説の消息を覗ふに、時運の影響極めて少く、又新進の名手出づるなく、依然として舊態を存せり。蓋し斯道の大家は、數百年にして僅に存する者、學識筆力準備、共に尋常にして足らず。馬琴の大才を以てして、其の歴史小説は事件と人物とを史上に求むるのみにて、其内部生命は純乎たる江戸時代の者たるを免れず。況んや過渡の空氣中に呼吸する明治文壇に於てをや。今の世に在りて歴史小説の逸作を得んは殆ど不可能に屬す。されば前期以來、唯新聞物に生命を維き、俗衆に投じて文壇の一隅を占有するのみ。但し讀者の數を以てすれば、必しも心理小説に劣らず。特に弦齋の如きは、版圖の大なる事當代恐らくは匹なから

ん。茲に少しく此種の作家を取り、總て寫實小説心理小説、はた社會的小説等の範圍に入らざる小説類を叙せんとす。皆文學の進運に洩れし者なり。

村上浪六

浪六は、二十八年「たそや行燈」を出し、次て「大阪城」當世五人男「原田甲斐」等をもものし、皆例の遊俠氣質を寫せり。就中「五人男」は二十九年より「朝日新聞」に連載せし作者仕中の長篇にして、一屋の破窓に苦學を共にせし五人の書生が風雲を見て世に立つに至れる消息を描ける者。舞臺は明治なるも精神は依然として水滸傳的なり。弦齋は、世話小説をも作れども、觀念的的心理的傾向は全く之を缺き、唯新聞紙上其の日々を面白く讀ませ、間々婦幼の教訓を含めたる實用小説なるに過ぎず。「衣笠城」「日出島」「小猫」「深山の美人」等、作甚多く、當時健筆第一と稱す。就中「日出島」は、其量を以てすれば、明治文壇の大作にして、二十九年より三十五年に亘りて「報知」に連載し、巻を重ねて十二に至る。百般の社會事象を取りて悉く材料となし、總て之を作中人物の閱歷として表出す。以て明治世態の皮相をも知るべく、無學者の學問にもなるべし。涙香は、近時連りに西洋通俗小説の翻譯又は編案を「萬朝報」に掲げて依然時好を維きつゝあり。以上三者は當時の通俗小説家、新聞小説家とし

村井弦齋

黒岩涙香

て知られ、文章平易、取材多面最俗耳に入り易し。大阪にては『朝日』の南翠此の時好小説を代表す。二十八年頃の『荒海貫一』最世に知らる。

澁柿園の歴史小説は多少の進歩を見る。二十八年の『最上川』北條早雲等より『伊達政宗』島左近『五月女阪』脱走兵』に至るまで、或は浪六を模せる痕ある者もありしが、後お自ら一家をなし、主に戦國時代の戦争譚を綴り、美人勇士を點出して因果應報の結末を描けり。大體に於て依然舊様を脱せされども、文章豪健にして内容に適應せるは、讀みて心地よし。多くは『日々新聞』に出で、新聞小説家として讀者の多き、弦齋浪六に次ぐ。麗水は文章家なり。『不二』の高根『首陽山』一帶の風光等紀行美文に在りては、麗藻美辭有數の地位を占むるも、小説に在りては内容貧少なるか爲に、文辭誇張の弊に陥る。二十八年の『半月城』を始め、『さんざ時雨』『照日松』等皆此の類にて、總て澁柿園の後影を蹈めり。其他松葉、青軒、大阪朝日』の加藤紫芳、渡邊霞亭等、皆多少の作あり。就中紫芳の『臺灣陣』二十八年は鄭成功の事蹟を描いて當時に名ありき。

終に臨んで殘存せる舊作家中、諷刺滑稽の一面を記さん。南新二は舊文學戲作界か殘し、最巧妙なる滑稽作者にして、前期中『新作十二番』に出し、『鎌倉武士』及現期に入りて、『太陽』に掲げし『滑稽道中雙六』の如きは、輕妙洒脫、現代の傑作と稱せられしが、二十八年末遂に没しぬ。幸堂得知は、黃表紙の系統を引ける戯作者にして、亦輕妙なる滑稽の筆を弄し、篁村と共に斯道の殿たり。元來滑稽の名作は、明治の文壇に乏しく、僅かに是等舊時代作家の什を以て其の面影を偲ぶのみ。

吾人は既に此期の小説を説き了りぬ。繙つて當時翻譯界の趨勢を窺ふに、其の進歩亦著しき者あり。抑も明治文學の一進轉歩をなせしは、一般學術の進歩と文藝趣味の發達とに因る事論を俟たずと雖、之か原動力となりし文學者評論家を練成して此事業を爲すに至らしめし者は、即ち泰西の思想文學ならすんはあらず。今や國民の外國語を解する、智識亦往時の比に非ず、新著新作の舶來する者、古來の名著傑作と共に日に多きを加ふ。されば我文學者は、嘗に之を玩味して自家の著作に資するのみならず、之を翻譯して江湖に紹介する者益盛になれり。此に於て

か、翻譯文學は文壇の一勢力となりて絶えず創作壇を刺撃し、兼て國民をして泰西文學の面影を偲はしめぬ。而も此の活動は小説に於て最も著しきを見る。

曩に思軒、鴈外等の翻譯界に立つや、翻譯家未多からず、紹介せらるゝ泰西作家作品の範圍甚狭く、且つ其の譯出紹介、多くは抄譯梗概譯若くは翻譯案に過ぎずして、謹嚴忠實なる譯述は極めて寥々たりき。然るに今期初頭に入りては、文科大學、早稻田專門學校、明治學院等は、數多の新進翻譯家を出し、從つて翻譯紹介の範圍もリットン、ユーゴーに限らず、古今東西に亘りて廣く之を勉め、且つ其技倆精力も著しく進みて、翻譯案に非ず、抄譯にも非ざる完全譯を出すに及べり。今次を追うて少しく之を述べん。

森田思軒

思軒居士は、當初『報知新聞』に據り、其の『報知叢談』に抱一庵等を率ゐて譯筆を揮ひしが、後轉じて『國會』に入り、『萬朝報』に移り、老熟の手腕を以てユーゴー、ポー、ベルヌ等を譯し、三十年末没するに至るまで、斯壇を啓發して怠らざりき。不知庵も亦斯界の先輩にして二十九年以後に於ては、『ゾラ』を譯せる『戰塵』、『コンウェイ』を譯せる『彫像師』を始め譯述少からず、文辭暢達を缺くと雖、譯風誠實の稱あり。彼が創作壇に活動

内田不知庵

小金井喜美子

『かけ草』

若松賤子

『小公子』

せし素地をなせりと見ゆ。鴈外は前期に引きかへて譯筆寥々たりと雖、妹女史喜美子、レルモン、トフの『浴泉記』(二十七年)、『ビンデルマン』の『名譽夫人』(二十八年)、『ハイゼ』の『浮世のさが』(同年)等數篇の譯あり。皆幽婉なる雅文を以て之を綴り、活動の趣なき代りに氣品高尚なるは鴈外に似たり。三十年二人の譯稿を集めて『かけ草』を公にしぬ。若松賤子は亦女流翻譯家にして、英語の素養文藻の才力斯壇の異彩と目せらる。『女學雜誌』及『閨秀小説』に收めし『忘れ形見』は、『ミス、プロクトル』の韻文を散文に譯せる者、三十年(没後)遺稿として出版せられし『小公子』は有名なる『バーネット』女史の作を譯せる者、共に明治翻譯界の珍として永く減びざるべき名作なり。其の他飯田旗軒、卯花庵、抱一庵、嵯峨の屋等、皆二三の譯あり。斯壇繁榮の序幕は開かれぬ。

三十年に入りて、翻譯界は局面を開展しぬ。『第二閨秀小説』なる喜美子の『心つくし』、『桂香の初恋』、『故賤子のローレンス』小品なりと雖、幽味掬すべく、今野愚公が『コッパル』を譯せし『結婚』及『小説家』共に筆力見るべし。此の時に方り、文壇に跡を晦す事十年なりし二葉亭四迷は、再び當年の詩筆を揮うて斯界の進運を鼓舞しぬ。二十九年

長谷川四迷

『片戀』

末『片戀』を出してより、肖像畫『浮草』を『太陽』に、夢語『親心』腐れ縁『酒袋』を『文藝俱樂部』に掲げ、獨得の言文一致を以て暢達渾熟の逸品を作せり。就中『片戀』はツルゲネーフの原作にして、ライン河畔の自然美を背景として詩情清婉の片戀物語を編める者。『浮き草』親心亦同作家の名品にして、特に後者は、母親の至情に感激して墮落娘の悔悟する筋を叙せる者。共に長大ならずと雖、内容の神韻に富めると譯筆の精嚴遒勁殆ど渾成に近きことにより、嶄然として當代に傑出し、二葉亭をして斯壇の第一流として、鷗外と對峙するに至らしめぬ。その他『文學界』の星野天知、馬場孤蝶、戸川秋骨等、連りに南歐文學を唱へ、飄逸優婉の詩想を鼓吹して、其の斷片を紹介するに勉め、『帝國文學』の上田柳村、之に呼應して近代佛英のロマンチック派文學を説き、主として小品の翻譯に力を用ゐぬ。長田秋濤は、梗概抄譯の傾あれども、『浮かれ蝶』『戀のナポレオン』『王冠』等、比較的長篇を出して、斯壇に貢獻する所ありき。

斯る間に譯風漸く謹嚴に越き、抄譯梗概譯に非ず、又翻譯にも非ざる完全譯の出づる者漸く多く、而も小品短篇に止まらずして比較的長篇を首尾悉く譯出する風漸く盛になりぬ。先づ淺野憑虛は、三十四年『スケッチ、ブック』を公にせし以來、翌年には

森鷗外

『即興詩人』

『クリスマス、カロール』翌々年には『グイカー物語』を出し、皆譯文の清爽、譯風の着實を以て知られたり。次に從來翻譯案物を以て名ありし『萬朝報』の涙香も、亦眞面目の態度を以て、『レ、ミゼラブル』を譯し、『噫無情』と題して、三十五年の紙上に連載せり。此の時に方り、曩に、二十七年の頃、『柵草子』に譯載し初め、一時草子の中絶と共に中止し、三十年再び『めさまし草』に稿を續けし鷗外の『即興詩人』は、起稿以來、八年を経て完結刊行せられぬ。原著はアンデルセンの傑作『インプロヴィザトル』にして、カムパニヤ生れの即興詩人がローマの歌妓と相愛して而も相悟らず、流浪落魄、幾多の轉變を経て、中心の愛嘗て渝らず、遂に歌妓か邊陲に窮死するに及び、其の遺書を得て始めて濃情熱愛十年衰へさりし真相を知り、感謝と追悼との悲涙を尼院の新墓に澆ぐと言ふ筋を詩人が自叙の體にも、し、ローマ及其附近の自然と人事とを背景として清婉の戀物語を綴りし者なり。想像饒かに叙述微に入り、詩趣縹渺として清楚の情掬すべく、譯筆亦優雅圓熟、例の擬古文ながら、『埋れ木』に比して一層の洗練を加へたり。且此篇、從來紹介せられさりし北歐文學の一名什なるを珍とすべきのみならず、堅實の意志不斷の精進を以て完成せし譯者の意氣を貴むべしとなす。

三十六年に至りては、翻譯文學の機運頗に動きぬ。是より先き、歐洲近代の文學者、特に現代新思潮を代表すべき作家の思想製作連りに我文壇に入り、或はニイチエを鼓吹し、ハウプトマン、ゾーデルマンを紹介し、ワグネルを論じ、シエンキーウイッチを説き、或はゴルキーの浮浪思想を唱へ、マーテルリンクの神秘思想を道ひ、一代の思潮將に一變せんとする兆あり。従つて紹介翻譯雜然として群起し、小説に在りても富永蕃江の『緋文字』、ホーソーン、吉田荻洲の『走馬燈』、ドーデー、本多増次郎の『驢語』(セウエル)、抱水庵の『聖人歎盜賊歎』、リットン『巴里の秘密』、シユー、秋濤の『椿姫』、ヂューマ、紅葉の『鐘樓守』、ユーゴー等を始め、長短各種の作甚多く、韻文戯曲の譯と共に無前の盛觀を呈しぬ。就中抱一庵は、一時文壇に忘れられし者、再び往年の譯筆を揮ひ、絢爛の致なしと雖、瘦勁にして一種の趣あり、『椿姫』は二十八年の頃雜誌『白百合』に掲げ初められしのみにて、久しく中止せられ、八年後の今日一部となりて出てし者なり。原作は所謂十九世紀五大作の一にして、愛すべき人にして世に愛せざりし薄命の人に洪大なる同情を濺ぎ、愛すへき人を愛せざる社會に攻撃の矢を放ちし者。譯筆は此同情を傳へんには華飾に過ぎ、妖艶の中純清の韻ある一篇の風趣を失へりと雖、五

原抱一庵

長田秋濤

『椿姫』

尾崎紅葉

百頁の長篇暢達なる口語體を以て揮灑せる所、亦斯界のまごとなすに足る。『鐘樓守』に至りては、五大作の隨一、『ノートル、ダム、ド、バリ』の譯にして、文筆の烹煉に苦心する紅葉が、多年の心血を傾注して其の繡腸を絞り、中途病魔に侵されて尙筆を絶たず、稿漸く成りて忽ち永眠に就き、遺稿空しく絶世の才筆を偲はしむるに至りし貴重な長篇なり。げに量に於ても質に於ても文壇稀に見る曠世の鉅作をば、病軀衰餘の筆を驅りて完成せし者なれば、其成就の由來に就いて既に少からぬ價值あり。況や其文と其神と共に原作に渾融融合するに於てをや。此小説は、巴里城内赫耀たる文明の花と、其裏面に潜む暗澹たる魔魅の風とを背景となし、ノートル、ダム、鐘樓守を主人公とし、薄命の少美女を之に配して綴りなせる史的小説にして、中世の大遺物たるノートル、ダムの大伽藍を叙せるあたり、精微神に入り、之を中心にして百般の事象を編み出し、十五世紀文明の首都巴里の面目を躍如たらしめし不朽の名作なり。

鐘樓守

第七章 文學一轉の機

明治文學も齡漸く長けて今や三十に餘れり。顧れば二十年前後、文學革新の事ありて以來、思潮變遷文運進歩の急速なる、宛ら走馬燈の回るか如く、昨の新は今の陳、今の新は又明の舊たらんとす。所謂過渡文學といふ名稱は、獨り十年代の文學に與ふべきに非ず。大局の上より見ば三十年間の文學は畢竟過渡文學の連續たるの觀あらん。十八九年の交、文壇を聳動せし春の屋及其他の小説家の述作は、二十八年に至りては、夙く陳套に屬し、之に代りて起りし觀念小説、心理小説、社會的小説の新作家が滔天の勢を以て其の清新を誇りし述作も、三十五六年の交に至りては、是亦新時代の人心を維ぐに足らずなりぬ。獨り小説のみならんや。二十七八年に起りし和歌俳句の新彩も、茲に至りては沈滞して進まず。新體詩も亦晚翠藤村に底止して後久しく、戯曲は逍遙の試験的述作の外、又論壇を驚かす者なし。而も之を刺衝し鞭撻して新文學を起す大動力となり來れる世界の思潮は、駭々として進む事暫くも止まず。國民の之に參する事日に月に密接の度を増したれば、

文壇永く現狀に安んずべきに非ず。早晚一轉して更に新しき大文學を生せざるべからざる機運に際會せり。

當時の文學は恰も五里霧中に彷徨するか如し。舊に慊らず、新を得ず。嗜昔謳歌熱中せし文學も今日既に興趣を感せず。今日興趣を感せざる文學を後來如何に變すべきかを知らず。懊惱煩悶の容、文界に普く、二十九年より三十一年に亘れる活氣疾く去りて沈滞の空氣斯壇を覆へり。此の時に方り二十年以來の文學者にして時勢の犠牲となりて影を潜め姿を隠す者漸く多く、或は筆を燒きて他に轉じ、或は轆轤落魄世に埋もれ、或は筆を案じて病に仆る。矢田部尙今外山、山相次て没し、井上巽軒復歌はず。逍遙身を教育に抛ち、四迷復び隠れ、賤子、稻舟、一葉、薄氷續いて仆れ、思軒及硯友社の二三子同じく世を辭し、美妙嵯峨の屋遂に當年の勇なく、湖處子忍月各他方面に轉じ、岡外稀に筆を取ると雖、雜誌『萬年草』は、遂に『めざまし草』の如く盛なる能はず。露伴は江畔の悠遊に龍蛇の氣を沒了し、紅葉は硯友社の諸傑と共に俳道に耽らんとす。三十五年より六年にかけては、文星落つる者連りに、子規、牛先づ没し、紅葉萩の家之に次ぎ、綠雨抱一庵少しく遅れて三十七年亦

之を追ふ。斯くの如きは皆時勢の一大旋轉をなすべき現象にして、正に新陳代謝の樞軸に當れる者なり。今次を追うて此の時代の狀勢を覗はん。

第一節 俳句和歌及新體詩

俳句界の形勢は既に三十一年に定まり、日本派の趣味作風全國に瀰漫して、新教養あり新趣味を懐ける青年俳家皆之に赴き、競うて俳會を結び俳誌を起し、日に月に隆盛に向うて又蹉跌する事なかりき。然れども内容の進歩は到底勃興當時の如く目覺しきを得ず、其の變化も亦當時の如く根本的なるを得ず。概して單簡より複雑に赴き、瑰奇より平淡に向ひ、天然より人事に進み、叙景より抒情に移り、純客觀より主觀に及ばんとするに過ぎず。三十四年の句集『春夏秋冬』を以て『新俳句』に比する時は、容易に此の間の消息を窺ふを得べし。されば此の前後の俳句は、日本派創業時代に播種せし所の者を收穫したるにて、三十五年に於ける『類祭書屋俳句帖抄』『増補類祭書屋俳話』の出版、及び子規の病没は恰も此の事業の大成を告ぐる標章の如くなりき。

「春夏秋
冬」

風晶子

和歌壇に於ては『明星』に據れる新詩社一派『心の花』に據れる竹柏園の門流『馬酔木』を刊行せる根岸の一派、新詩社より別れて『百合』(三十六年)を發刊せる青年歌人の一團、及び萩の家の門流、金子薫園、尾上柴舟等、作家益多きを加へ、作品の數量遙に前年に超ゆ。然れども其の思想聲調の一代文運の進歩に伴ふに至りては俳句と等しく未だ容易に許すべからず。獨り『明星』に於ける女作家風晶子、放縱なる感情を歌ひ富贍なる想像を逞うして一種の詩調を出し、詰屈奇峭、措辭は大膽に句法は奇拔に、複雑斬新なる譬喩擬人を敢てして歌壇の面目を一新しぬ。假令其の極端に走る所、或は嶮怪の譏り晦澁の嫌ひなきに非ざりきと雖、詩才の縦横情熱の熾盛、斯界希に見る所なりき。詩題は概ね當時の新體詩と趣を同うし、主として戀愛を歌ひ、然らずんば小説的趣向の人事、神秘的空想を逞うせる情景を詠す。而も其の思想に當時青年の間を流れたるロマंचチック傾向を帶べるものあり、能く青年一部の感情を表出して最新の思潮に觸れたり。これを以て此の作風一時青年歌人を風靡し、『明星』一派の特色となりて斯壇に重きをなせり。晶子の歌集『亂れ髪』(三十四年)『小扇』(三十七年)は常に此作家を説明する好箇の標本たるのみならず、當代

「亂れ髪」

歌壇の新潮を窺ふべき代表的歌集なり。明治の和歌が思想形式共に舊觀を改めしは、直文鐵幹の時に非ず、信綱子規の時に非ずして、實に晶子等の當時に在るなり。爾來晶子の歌漸く圓熟を加へ、當年の純主觀的傾向を離れて著しく客觀的事象の吟詠を増し、一誦すれば自然の風物が人間に對して渾然融合するを感ずる者あり。『舞姫』(三十九年)『夢の華』(同年)二集は正に其の高調に達せる者にして、『亂れ髪』に比ぶれば跌宕博大の別趣を加へたり。然れども盛觀茲に底止して又發展の餘地なきが如く、短歌革新の事業は既に其の終を告げたるに似たり。新代の文運に對する交渉は著しく疎くなりしを覺ゆ。

轉じて新體詩界に移らんに、三十五年以後の形勢は俳歌兩界に比して遙かに活氣に富めり。藤村筆を此の方面に絶ちて小説界に移りしも、晚翠、泣菫、月郊、有明、花外、泡鳴、醉茗の徒、帝國文學『明星』、『新小説』、『太陽』、『文庫』等に奮ひ、平木、白星、前田、林外、相馬、御風、山崎、紫紅等亦次て起り、『小天地』、『白百合』等に據りて一時斯壇に光焰を擧げたり。

今次初頭の新體詩は一般に懷古的色彩の著しきものあり。二十九年以後の可

『舞姫』
『夢の華』

『藤村詩集』

『東海遊子吟』

憐なる戀愛詩に倦み、卅四年前後の所謂星望。戀愛詩に鑿きたる讀詩社會は、新なる詩材を覓めて端なく過去の生活に眼を集め、回顧憑弔の意は一たび現はれて古典的詩歌集の刊行となり、『半月集』、『半月』、『霓裳微吟』、『羽衣』、『藤村詩集』、『藤村』新に行はれ、二たび現はれて古蹟古詩人の憑弔過去藝術の讚美を試みたる晚翠の『東海遊子吟』(三十九年刊)、『月郊』の『春雪集』(三十六年刊)となり、三たび現はれて古英雄を賦したる鐵幹等『明星』の史詩叙事詩となり、四たび現はれて古語復活神話傳説の復現を試みたる泣菫の譚歌となり、五たび現はれて史實傳説等を脚色したる白星等の劇詩となり、以て四十年に至り、斯界別味の一系をなせり。

晚翠の吟詠は多く泰西羈旅の作にして、仰て過去の藝術を想ひ俯して現代の文明を觀たる詩人感傷の聲なり。正に是れ『チャイルドハロルド』の流風遺韻を汲める者、歴史の國藝術の國なる南歐の風物を歌ふに於て特に精采を見る。嘗て『晚鐘』に現れし淨樂界の翹望益々著しく、遂に此の理想實現の世を我日東帝國の未來に求め、新文明新文藝の出現を望んで國民新に歌あれと祝福するに至りぬ。泣菫の神話的譚歌は斯壇に一新生面を開きたるものにして、三十六年の『雷神の賦』、『明星』

晚翠

泣菫

「天馳使の歌」『新小説』三十九年の「葛城の神」『早稻田文學』等、陳套の傳説を復現して光彩ある一新藝術品となせる績歎賞に價す。「雷神の賦」は朔風怒濤吹雪雷鳴を觀じて一條の神話的構想をなし、「天馳使」は伊弉諾黃泉行の神話と比治山羽衣天女の傳説とを結合し、諾冊二尊長へに別れてより子孫女性の慈悲を知らざりしに、眞名井の翁天女「慈悲」を下界に抑留してより人の世に絶えたりし女性の慈悲再び現はれ、下界之より新代の歡樂に浴するに至れりといふを想髓として趣味ある一篇を成せり。而して泣菫の詩語を洗練するや嘔心を極め、特に古語を復活する運用の才遙に前年の擬古派詩人に優り、紀記萬葉の語彙を驅使して窘蹙の態なし。流風延いて當時の詩界を吹き靡け、鐵幹有明以下青年詩人等皆其の轍に倣ひ、争うて耳遠き古語を羅列するに至れり。されば其の極まる所弊も亦伴ひ、晦澁に陥り無意義に終る事少しとせず。

新詩社一派の敘事詩は純然たる史詩譚歌に非ずと雖、新體詩創始以來斯界に缺如せる一面を充せる者にして、三十六年鐵幹紫紅白星泡鳴等が「源九郎義經」日本武尊」をものして研究を試みしを始め、泡鳴は「鳴門姫」豊太閤を出し、紫紅は「日蓮上人を

出し、白星は「心中おさよ新七」及劇詩「老西郷」『耶蘇の戀』『釋迦』を出し、以て一時詩壇の單調を破りぬ。就中白星は別に「日本國歌」と題して、『曉鐘』の後半「行春』の一部に見えたる如き時事に關する感慨の詩、時事に對する主張の詩をも公にせり。

然れども此の敘事詩史詩の流行は空華一時の盛觀を残すに止まり、文壇の中心若しくは詩界の本系に對して何等著しき影響を與へしを見ず。斯壇の中心勢力として次代の新潮に直接關係を有するは、むしろ神祕派空靈派の一流に存す。されば敘事的傾向の行くへを辿る事は暫く茲に止め、纏つて當時の神祕空靈の詩品を模索せん。唯筆を改むるに方り尙一事の述べざるべからざる者あり。從來詩系の外に立てる一詩星の突如として光榮を放ちし事即是なり。

三十七年小説家露伴「出廬」の一篇を、『讀賣』に掲げ、連載十ヶ月、詩壇無前の長篇として一時人目を眩耀せり。其の引に曰く、「出廬」一部四編、第一編は世の悦ぶに足らぬを言ひ、第二編は詩の愛すべきを敘し、第三編に至つて空想に遊ぶも亦實在の累する所となるを免れざるを述べ、第四編に於て詩と世と共に悦び愛すべく、實在と空想と相即き相容るべきを詠じたり。こは予が將に世に出さんとする詩集「心の跡」

露伴
「出廬」

全卷の序として見るべしと。不幸にして『心の跡』は遂に世に出でず。作家詩想の神髓如何を知るに由なしと雖、出廬のみを見るに理義透徹して情趣亦饒く、説論明晰にして詞藻亦豊麗、言はゞ作者多年の蘊蓄を傾倒して人生哲學を歌ひ出でし者、即ち人格の詩哲理の詩なり。而も此種の詩篇は動もすれば吟詠の境を出で、説論の界に入らんとするが故に、詩としての成功如何は直に表現の技巧に關す。「出廬」の結構整正に過ぎ、修辭縱横を極めたるは、却て此の點に於ける不利となり、渾融の致に缺くる所少からず。吾人は唯時流の外に卓立せる一種雋邁なる詩想聲調を得、専門詩人以外の警拔なる修辭用語を得て、斯界の爲には有力なる刺撃となりしを喜ぶ。

纏つて思ふ。我か新體詩の本流は何所をへ行ける。曩に空想的戀愛に酔ひ、中頃官能的戀愛に耽りしもの、急速なる文明の進歩に伴ふ現代人の複雑なる心情に適合する事能はず。暫く理想の満足を過去世界に求めて敘事詩史詩を試み、或は之を現在のまゝの娑婆世界に求めて逍遙の『新曲浦島』露伴の『出廬』に見えし如き理想即現實の思想を歌ひしも、強烈なる自意識の壓迫に苦める現代青年、最近西洋文

學の新潮に知己を見出でたる現代讀詩社會にとりては、前者は美しき夢の世の如く、自己と相距る事餘りに遠く、後者は諦め過ぎ悟り了れる聖者の如く、自己と相背く事餘りに甚し。是に於てか、憧憬煩悶遂に靈を呼び神を呼び、一種の神祕的冥想的の詩風を形作るに至れり。『二十五絃』(三十八年)の作家泣菫、『獨絃哀歌』(三十六年)の作家有明、『夏花少女』(三十八年)の作家林外、『夕潮』(三十七年)、『悲戀悲歌』(三十八年)の作家泡鳴の如きは、この作風を代表せる者なり。

『二十五絃』は之を彼の藝術の悠久を歌ひし『行春』に比するに著しき詩想の變化あり。多くは自然を觀照して中に一種の靈を覺め、飄逸なる想像と曲折ある譬喩と相俟つて一脈神祕の薫りを浮動せしめたり。「虹の歌」には各種の生活と自然現象とを結合し、「公孫樹」には落葉を實在の證明と觀じ、「翡翠の賦」には小禽の生態を見て、其の胸に包める祕密を思ひ、「金剛山の歌」には自然を人格化して高山の曙色を歌ひ、其他「霜月の一日」「神無月の一夜」等皆自然を靈化して幽玄の想像を馳せたり。次に『獨絃哀歌』は靜思の姿冥想の趣全篇にはほめき、前代の熱情的戀愛詩に對してよく當代の特色を現せり。門へは「靈鳥の歌」「佐太大神」等に空靈高渾の想像を凝し、「幻影」

『二十五絃』

『獨絃哀歌』

有明
「蓮華幻境」光の歌等に神祕清遠の憧憬を披瀝し、「聖菜園」頼るは愛よ「君も過ぎぬ」等に靈氣に満ちたる信念を吐露し、特に「幻影」の一篇、かの心に求むる所ありて求め得ず、捉へんとする影ありて未だ其の形を確め得ざる無限の哀愁を幽婉の詞章に寓せ、總て宗教的神祕的色彩を帯びたり。流風正しくロセツチに出で、前代の泣菫がキーツの遺韻を汲めると相對して詩風の變遷を適切に覺知すべし。要するに有明の詩想は情緒の靈化せられたる淨樂界を翹望し、「永世の脈精氣満ちて時劫の進み老いせぬ愛のとかげ」の實現を見んと冀ふ者なり。而して此の夢幻の如き幽情を傳へて晦澁ならざらしめんか爲に修辭上多大の苦心をなし、或は譬喩を用ゐ、或は抽象を具象化し、觀念を感覺化するに努めたり。

「夏花少女」に在りては「魔怨」「妖魔の泉」「沙雲雀」「妖女」「魔障」「夏の夜の夢」等の諸篇、總て怪奇の空想を逞うして幽魔の境に入り、陸離たる麗藻を凝して技巧の堂に上る。彼は非情を人格化せんとする事泣菫に似て魔氣に富む事之に過ぐ。次に「夕潮」「戀悲歌」は同じく一味神祕的基趣を帯び、達し難き翹望の悩みを表せり。之を他作家に比ぶるに泡鳴の詩は理を以て優り、他の唯美的の詩篇に對して著しく哲理

泡鳴

的に傾けり。唯其の措辭餘りに直截、語彙餘りに貧少、理路餘りに露骨なるを失とす。然れども當代詩界に缺如せる剛健重厚の作風に至りては、遂に之を泡鳴に求めざるべからず。「戀悲歌」の中なる戀愛詩が一樣に神祕的宗教的色彩を帯べるは言ふも更なり、「夕潮」の中なる「あゝ世の歡樂」の如きは、かの心に求むる所ありて而も得られざる苦惱を詠じてよく當代の詩風を表せり。

詩想の傾向かくの如く變遷しつゝある間に、詩形に於ても幾多の新試験はなされぬ。晚翠は必ずしも七五五七によらず、時に長短句を試み、泣菫は前の八六調の外種々長短句を混用し、有明は四七六の一句八行六行の二節より成れるソネット形を試み、林外は八七調四行八行二行の三節より成れるソネットを作し、泡鳴は八七、七六、六四、七七等各種の詩律に指を染め、其他苟も詩人にして詩形に關する多少の研究をなさざるもの殆ど無かりき。

當時詩界に於ける此の新潮の由て來る所は、勿論一代人心の傾向に在りと雖、新詩人を刺撃し暗示したるものは實に泰西詩人の作品なり。三十四年以來刊行せられたる「ハイネの詩」「ゲーテの詩」「ユーゴーの詩」「キーツの詩」「ラルヅアルスの

詩『テニソンの詩』『セレーの詩』『バーンスの詩』等幾多の譯詩は、是等泰西詩人の作品が如何に當代人士に愛讀せられしかを證すると共に、孰れの詩人の作風が當代を動かしたかあるかを明にせり。曩に情熱を歌ひ古典的の作風を追ひし時は前掲の英獨詩人に影響を受くる事少からざりしが、近時ロセッチスコンバーンに私淑して茲に有明等に見わたる空靈神祕の詩趣を喜ぶに至れり。斯かる間に三十八年前後に至り、更に佛國象徵詩派を紹述して一種の象徵詩を我詩壇に導き入れしにより、詩風一轉の機新に兆して斯界頗る色めきぬ。事は次章に詳悉すべし。斯くの如くにして當時の形勢は藤村晚翠が一世を指導せし時に比して著しく變遷し、一代の詩人二家の境地より一步を進めんとするに方り、右往左往各其の好む所に從ひて上來述ぶる如き諸種の詩風を起し、其の他醉茗の如き花外の如き亦一種の詩調を出し、或は泣菫の『白玉姫』(三十八年)の俗語體となり、或は晚翠の律詩(同年)となり、或は露伴の四行詩(同年)となり、暗中摸索動搖の態所在に現れぬ。而も中に一道の本流之を貫くあり、新代の思潮に應せんには早晩一回旋を試みざるべからざるに至りぬ。

第二節 小説及戯曲

三十四五年來、小説界の氣運著しく沈滞し來り、作品の量作家の數遙かに前代に超ゆるに係らず、新代の人心に添ふべき佳篇甚乏しく、舊作家は萎微し、新作家は未だ形を成さず、斯界暫く混沌の間に在り。其の間多少注目を價する者は、露伴の『二日物語』(三十一年)、『天打つ浪』(三十六年)、『紅葉の』、『金色夜叉』(續稿)、『三十五年』、『眉山の』、『石巻庄左衛門』(三十六年)、『天外の』、『魔風戀風』(同)、『風葉の』、『涼炎』(三十五年)、『鏡花の』、『白羽箭』(三十六年)、『風流線』(同)及新進作家春葉、秋聲、徳富蘆花、菊池幽芳、中村春雨、島崎藤村、山岸荷葉、田口掬汀、永井荷風、草村北星、生田葵山、三島霜川、木下尚江等の二三の作品に過ぎずして、未だ一世を指導すべき大勢力とならん者を見ず。左に少しく這般の消息を覗はん。

『金色夜叉』未だ完結に至らずして作者宿痼に悩み、起稿以來五ヶ年を経て一臥遂に起たず、三十六年晩秋未完の大作、彫心鏤腸の迹を留めて詩魂長へに逝きぬ。文壇の先覺紅葉の文學的事業は斯くして終を告げぬ。吾人をして暫く彼を回顧せ

しめよ。彼は一身を以て詩神に献したりし天成の文學者なりき。文藝に對する趣味の廣きや、文學の所有種類を試みて倦まず。而も之が創作に従事するや、主題の研究周匝を極め文字の推敲慘憺を極む。其藝術的良心の旺盛なる文壇其の比を見ず。彼の將に死せんとするや、弟子を顧みて曰く、七回生れ更つて文章の爲に盡さんと。彼か生涯の事業は、一に此の抱負と覺悟とより來る。硯友社を結んで新文學興隆に盡し、も、之が爲なり。門下俊才を養うて文學教育家の典となりしも之が爲なり。文學者對社會の問題起る毎に、一身を以て文學者の長城となりしも之が爲なり。十千萬堂出版社三十六年を起して文學者に對する出版業者の迫害を防遏せんと勉めしも亦之が爲なりき。是等の點に於ては、彼は實に明治文學者の巨頭たり。唯其の作物の傾向に至りては、紅葉は未だ文學界全般の代表者たるに足らず。彼れの代表するは其の都市的半面に止まる。彼は純乎たる都市的詩人なり。其の小説俳句は都市の情に入るの深き、人事を穿つの犀利なる、口語對話を操るの巧妙なる、殆ど天品に出で、之に反して田園の情を描き自然の景を寫せる者は、概ね皮相にして神に入らず。冥想靜思の趣致お自ら缺けたり。故に小説

家にては馬琴よりも京傳を尙び、俳人にては芭蕉蕪村に赴かずして檀林江戸座に往き、紀行文『煙霞療養の』如きは全然失敗に歸したり。此の對比は總ての都市文學者と田園文學者との間に存し、觀察着相文體技巧等兩者各其の特長を具ふと雖、殊に紅葉都市的特長の特長を集め、宛然東京詩人の代表者たり。故に其の特長の特長の内にては彼れの才は多面無礙行く所として可ならざるなく、特に其の本領たる小説は洵に明治文界の名珠にして、其の發展推移の迹を叙しなば、直に一部の明治小説史を成すべし。『我樂多文庫』の昔より『金色夜叉』に至るまで、二十年間の作、初は江戸戯作者の面影を帯びし者、漸く移りて泰西作家の思想聲調を傳ふるに至りし始末を見るに、彼れの小説は事實に於て新舊分子の混融する所、東西文學思潮の合流する所、敲かば何れ過渡の音を發せざるなし。思ふに三十年間の文學は、大局より見れば、畢竟過渡の産にして、異日精華を開くべき新國文學の基礎を置ける者。紅葉の如きは正に此の遷轉期の偉人たるべし。

紅葉の逝去に先つ事少時、露伴は『天打つ浪』を『讀賣』に掲げ初めぬ。爾來斷續遂に完成せざりきと雖、着想詞藻作者の特長を發揮し、小説界一般の潮流に關せず、獨り

露伴

『天打つ浪』

其の本來の理想的傾向を進め、人生哲學の披瀝益、蘊奧に入り、且つ其の宗教的神祕的思想は新彩を帯びて益、幽玄の致を加へたり。其の文章に至りては雄健周匝、神來一揮の妙益、加はり、多年の蘊蓄、傾け來りて作家の面目を躍如たらしむ。思ふに露伴は紅葉と等しく文學的修養を舊時代に得、舊文學を鑑識せる眼光を以て泰西の文學を見る。故に創作の内容外形、共に純然たる新文學なる能はず、言はゞ過渡時代文學者の粹たるに過ぎず。然れども彼が述作に臨むや、深遠なる研究と該博なる涉獵とをなし、準備既に成り材料既に集らば、乃ち神興を藉りて一氣揮灑、詩想混々として盡きず、詞章陸離として輝く。而も内に養ふ所の氣魄精神は、文字以外作風以外に卓立して容易に他の追蹤を許さず。露伴の如きは實に新舊文學遷轉の軸頭に立ちて過渡時代の精粹を集めたる明治文學史上の一大記念なり。

斯くて過去小説界を支配せる二巨人相繼て辭し去り、次代を形作るべき作家は各、自家の傾く所を盡くして特種の作風を發揮しつゝ、暫く道途に迷へり。就中當時の讀者社會に比較的勢力を得て一時世に行はれしは、所謂家庭小説の一流なりとす。蓋し前代以來痛烈なる刺撃を要求せる人心に適應せんが爲めに、深刻悲惨

なる作風の行はるゝを見しが、其の弊の極まる所、茲に沈滯し、萎靡し、遂に反動を起し、人心一時新なる或者を需む。此の間の消息は夙く前章に説ける柳浪が作風の變遷に表れしが、茲に至りて明に其の體を露出せしなりき。蘆花幽芳春雨春葉柳汀柳浪等の最近の作風即是なり。

蘆花

「不如歸」

蘆花は夙に民友社の紀傳家として知られしが、三十二年「不如歸」を「國民新聞」に掲げ、小説家としての名聲俄に揚りぬ。爾來三十四年「思出之記」「翌年」「黒潮」を公にし、最時流の歡迎を受けた。著想結構特に秀てたる事なく、描寫の技巧必しも精妙ならずと雖、一篇の骨子たるべき事象は健全なる家庭的趣味に富み、至醇の戀愛を以て肉つけられ、深切なる同情を以て衣つけられて一種道念の高潔なる作品を凝成せり。獨り「黒潮」は明治の文明明治の社會の側面觀を具現せし社會的小説とも見るべけれど、中に貫流する一道の情趣は亦前二者と同一に出づ。幽芳は新聞小説家としてむしろ俗流の嗜好に投せん事を勉むるものなるのみならず、作品多く雜案に似て本邦現代の生活と相渉る者少ければ、特に文壇に重きをなすに足らずと雖、一時讀書社會の人氣を得たるは、即ち「己が罪」「乳姉妹」等の家庭的趣味に負ふ事

幽芳

柳汀
春雨
春葉

少からず。柳汀は其の地位傾向二つなから幽芳に似『人の罪』『伯爵夫人』等新聞小説として著名なりしは皆此の潮勢に乗せるによる。春雨は新進の作家にして三十四年『花果』の作を以て知らる。着想純真にして中に一貫の道念あり、最も宗教的色彩に富む。春葉は平静温藉なる家庭小説を能くし、紅葉の絢爛風葉の妖艶なき代りに清楚掬すべき旨味あり。既に『錦木』(二十四年)に其の傾向を示し、『忘水』(いさゝ川)の短篇に漸く形をなし、『母の心』(二十八年)『宿り木』(二十九年)『古驛』(同)に至りて明に家庭小説を標榜せり。柳浪は近時作風を變じて筆を家庭小説に著け、『二筋道』『繪師の戀』等皆時尚に適應せんと努めしに似たり。

斯くて家庭小説は一時新聞小説を中心として盛に行はれしが、詳に其の内容を省察すれば其の案外に空虚なるに驚くべし。時代の社會道徳に適應せんと企てたる態度は文藝其物の上より見て慶すべきか否かは俄に判すべからずと雖、之が爲に強て作爲の迹を残すか如きは遂に高級藝術の事に非ず。不幸にして當時の家庭小説は結構描寫二つながらわざとらしき作爲の迹を存し、到底進歩せる讀詩社會を満足せしむるに足らざりき。蓋し當時の家庭小説は前述の如き反動の勢

秋聲
荷風
風葉
藤村

に成りしもの、固より確たる根柢あるに非ざりしなり。

されば當時の小説界には依然として相反せる潮流あり。秋聲は『雲の行くへ』(三十四年)『春光』(三十五)『桎梏』(三十六)等に沈痛の筆を揮つて敗れたる人生の或問題を解釋せんとし、荷風は『地獄の花』(三十五)『夜の心』(三十六)に於て人間の獸性に著想し、遺傳と境遇とに伴ふ小説的事件の開展を敘し、風葉は『涼炎』(三十五)に官能の刺撃によりて人間の道念と獸性とが迭に消長する契點を描き出で、藤村小説界に入りて『舊主人』(三十五)『水彩畫家』(三十七)に愛情なき家庭の主人が外圍の事狀に引かれて自然に落ち行く情塊の果てを寫し、皆前章述へたりし自然主義的傾向を帯びて而も一層深痛なる内省の迹あり。而して此の方面を代表して當時最盛名ありし者を天外の『魔風戀風』となす。三十六年春より『讀賣』に出でし長篇にして、作者が所謂寫實小説益々現實的となり、事件人物悉く現社會に粉本を求めて敢て醇化を加へず。之を主人公の性格に見るに、感情と理性との發達に比して意志甚しく薄弱、感情の旨動は直に理性の反抗を受けて煩悶を極むるに係らず、意志の力を以て之を斷する能はず。而も主我の念盛なるが故に、強て自ら辯じ自ら欺いて以て心

天外
『魔風戀風』

裡の煩悶を壓伏せんぞす。斯かる性格は正しく現代の教育ある青年の間に存し之より惹起せらるゝ種々の事件は正しく現世相の一端を表せり。唯其の描寫、世相の形に偏して其の神に入らず。教育ある青年學生を點出せるも其の頭腦を支配せる最新思想に及はさりしが故に、未だ適切に吾人が心胸に響應する事能はざりき。

述べて茲に至り、顧みて小説壇を通覽すれば、前述二潮流の外、尙ほ蘆花の『黒潮』と略其の性質を同うせる尙江の社會小説『火の柱』、『良人の自白』あり。鏡花水蔭の如きロママンチックの作風を續くるあり。種々の試験雜多の提唱、皆是暗中の摸索ならざるはなく、混沌として大勢の何れに適歸すべきかを審にする能はざりき。

轉じて劇界に入らんか、不振の狀勢は依然たりと雖、裡に一道の暗流大變遷の前兆を爲す者あり。作劇の方面に在りては著しき活動を見すと雖、劇場觀客俳優の方面に一新現象を呈しぬ。即ち第一、競うて新小説新脚本を演ずるに至り、第二、頻りに西洋物の翻譯翻案を歓迎するに至り、第三、新俳優は第二期の發展をなし、第四、舊俳優は屢新劇を取りて新俳優と競はんとするに至りき。時正に三十六年なり。

尙江
鏡花玉匣兩
浦島
鷗外

小説の戯曲化は、心の闇、髯男、己か罪を始めとして、不如歸、金色夜叉、高野聖、畜生腹、黒潮、乳姉妹等、小説として最讀者に歡迎せられたりし者には相次で行はれ、皆舞臺に上せられたり。此現象は純粹なる文學的見地よりは、素より推獎すべきに非ずと雖、社會が舊劇に飽きて何か新しきを求めんとする過渡期の現象として必しも斥くべきに非ず。之か爲に作劇家を刺撃して好新劇を産出するを得ば、洵に文壇の慶事なり。『杏手鳥孤城落月』以來久しく消息を絶ちし脚本新作の事、三十六年復び新聲を傳へしは、多少此の間の關係に因れりといふべし。松葉が左團次の爲に書きし二三の新作は暫く措くも、鷗外、玉匣兩浦島、三十六年及『日蓮上人辻説法』(三十七年)を作り、月郊『大鹽平八郎』(三十六年)、『江戸城明渡』(同)を公にし、風葉柳浪等亦一二の新作あり。『兩浦島』は浦島傳説に新意匠を寓したる二幕の小劇詩にして、上編は浦島太郎が龍宮歡樂の夢さめて仙界平和の空想に飽き、漸く世間の事業人間の活動を懐ふに至りしを叙し、下編は人界三百年を経たりし後の世、太郎が裔なる後の浦島活動の事業に向つて努力せる者、仙界三年の歡樂を捨て、歸りし先祖の浦島に邂逅し、兩人手を執つて、思ふは祖先、行ふは子孫にこそあれと謳ふを大筋

となす。着想の存する所は批評家の見る所一ならずと雖、浦島傳説に一新生命を與へ、露伴の『新浦島』以外、一新發展を加へたるは争ふべからざる功績なり。全體、歌劇風の劇詩にして白は總て七五律を以てし、典雅平正なる雅言體にて成る。されど此の大膽なる創意は形式の單調科白の緩漫の爲に、不幸にも舞臺上の失敗を免れざりき。『辻説法』は七五調によらず、雅言に拘せざりしが故に、此點に於て少からぬ利益ありき。中幕物の小篇なれども、鎌倉武士をあしらひて日蓮の英姿を寫し、雅醇森嚴の趣饒し。『大鹽』と『江戸城明渡』とは在來脚本體の史劇にして、題材の選擇表現の技巧、共に『真田幸村』の比に非ず。唯其奇拔なる着想と雄大なる結構とに伴ふべき事件の配置、科白の練成に缺くる所あるを憾とす。

新作歡迎の氣運は延いて翻譯繙案の悦ばるゝを致し、世俗迎合を事とする梨園は競うて此の種の劇を取れり。月郊の『闇と光』、『キングリア』、水蔭の『オセロ』、春曙の『エニスの商人』、『ハムレット』、連山人の『瑞西義民傳』、『キルヘルムテル』等は即ち此の要求に應じて出でし者なり。されど、皆唯輪廓を象りしに過ぎず、素より完全なる翻譯脚本に非ず。

以上各種の新劇は皆彼の新俳優によりて演せられし者にして、曩に夢幻劇一輩に敗れて屏息したりし新俳優の一團は復び其面目を起しぬ。此の時に方り、舊劇の大立物として妙技斯道の精粹を蒐め、以て其の末路に大光明を放ちし菊五郎團十郎左團次の三者は、三十六年春以來相次で幽界に入りぬ。殘存の諸優は過去の遺物に據りて新時代の好尚を維くべき大手腕ある者に非ず。是に於てか相率ゐて新劇に入り、三十七年大阪の我當上京して芝翫高麗藏等と連合し始めて『桐一葉』を演じぬ。是れ斯界の一大旋轉機なり。蓋し垂死の舊劇が命脈を今日に維きたりしは、主として二三名優の斯壇に有せる情力と、新派俳優に名手なきに因る。今や此の情力を失ふ。舊劇の殘壘危しといふべし。新派の徒が杜撰なる脚本と未熟なる演技とを以てして、尙舊派に優る人氣を得たるは、主に舊劇の世潮に合はざるに由る。されば舊派俳優にして演技を以て世に立たんとすれば勢新劇を取らざるべからず。而も新俳優の跡を追うて小説劇繙案劇を弄ばんは、徒に彼等の後塵を拜するに止まる。茲に至りて我當等が新劇を求めて『桐一葉』を取りしは、獨り彼等の慶のみに非ざるなり。『桐一葉』は製作當時に論せられたりしが如く、

脚本として批難無きに非ずと雖、舊型に新想を盛りたる漸進的性質は、過渡期の劇として適切なる、素より翻案劇小説劇の比に非ず。况や上場の成績に徴するに、運命悲劇としての價值遺憾なく發揮せられたるをや。『桐一葉』世に出で、八星霜、今日始めて劇壇刷新の道程に上れり。爾來三十七年には『辻説法』三十八年には『牧の方』三十九年には『杳手鳥孤城落月』相次で舊派俳優に演せられ、作者の盛名と教育ある新觀客の同情とによりて、全然舊劇を壓倒するに足る好評を得たり。

三十七年秋久しく教育界に隠れたりし逍遙は、再起つて『新樂劇論』を草し國劇將來の發展に關して多年研鑽の結果を公にせり。曰く今や國劇刷新の要迫れり。而も刷新の方針は國劇固有の要素の上に立てられざるべからず。翻つて想ふ、國劇は其の能たると歌、舞、伎たる、と、振事たるを問はず悉く樂劇の要素を有す。故に刷新を計らん者は、須く樂劇たる性質を需要と好尚とに應じて發展し醇化し、以て二十世紀文明國の藝術たるに相當すべき一種の純樂劇たらしむべし。然らば從來の三種樂劇の中孰れを取りて將來國劇の基礎とすべきか。能劇は畢竟過去の美術にして將來の好尚に適せず。歌舞伎劇亦然り。唯常盤津長唄等の振事劇

逍遙

『新樂劇論』

のみ醇化發展の希望あり。其の作意脚色樂曲科介扮裝等に存する缺點を除くを得ば、庶幾くは進歩せる將來の好尚を維ぐに足らんか。斯くの如きは本論の緒論に過ぎずと雖、純劇即科白劇を起して泰西の糟粕を嘗むるを避け、過去の國民生活を尊重して其の特質の上に立てられたる新樂劇を得んとする識見は、略之を覗ふを得。之を著者か『桐一葉』を公にせし頃の意見と比するに、劇の形式に關しては多大の徑庭あり。蓋し當時は從來の劇を導いて泰西の科白劇に近き者たらしめんとせしも、國劇の精神は樂劇的方面に在りて科白劇的方面に在らざるを悟るに及んで其の態度を一變せるなり。

『新樂劇論』は洵に劇曲刷新の曉鐘にして、『小説神髓』と共に著者が文壇の先覺として常に豫言的創意を齎せる二大記念なり。而して『書生氣質』に相當すべき一新樂劇次で出でぬ。『新曲浦島』是なり。曲は浦島傳説に材を取り三幕十二段に分る。序幕は丹後澄江浦に幻影を追うて心空なる浦島、父母に別れて失望自殺せんとするを乙姫に救はれ、歡喜して龍宮に赴く筋、中幕は龍宮三年の悅樂に人間を忘れたりし浦島、明月の夜遙に船歌を聞き、又父母の幻影を見て人間慕はしく、玉匣を形見

『新曲浦島』

に乙姫と別れて立歸る筋、詰幕は三百年後の故郷の變遷を見て悔い恨む處、青年の男女來り慰るあり、匣を開けば、白氣立騰りて浦島忽ち老翁となる。時に天明け旭昇り老人青年光榮の未來を謳ふといふ筋。全部曲章と振事とにて現はし補ふに少許の白と介とを以てし、曲人は歌ひ優人は舞ひ、樂人は三絃を主として他種々の樂器西洋のをも併せ用ゐ、曲は場合によりて其曲節を異にし、從來の樂曲殆ど總てを包容す。斯くの如き型式が新樂劇として成功すべきか否かは之を當來の試験に徴し、茲には單に其の内容思想を見んに、『兩浦島』以外更に一新發展をなし、先づ現實と空想との交渉の上に存する過渡時代の煩悶を寫し、進んで現實の上に立つて理想を忘れざるは即ち新時代の新理想たるべしとの意を寓したるに似たり。

翌年逍遙は又第二の見本として『新曲赫哉姫』を作しぬ。材を竹取物語の傳説に取り、二幕十五段に分ち、莊重典麗の歌詞を以て仙女上天の一新樂劇を組立てし者にて、之を『浦島』に比すれば、傳説の取扱に於て多少の差あり、『浦島』に在りては一種の新寓意ありて傳説上の發展ありしも、此に在りては傳説其のまゝを繼承して別に新意を加へず。且つ彼には舞踊を本位とせるに此には謠唱を本位とし、彼は俗曲

「新曲赫
哉姫」

を主腦とせるに此は寧ろ謠曲を根幹となし、多少新樂劇論を修正せるを見る。然れども過去の國民劇の特性の上に立てる樂劇たる根本的性質は『浦島』と異なる事なし。

劇界の状態は斯くの如く動搖と變遷との渦中に在り。未だ其の間に系統ある活動の一定の針路を指すを見ず。而も其の裡、常に新しき或物を得んとする翹望と努力とあり、混沌の中一道の活氣の未來の光明を豫言するを認む。

以上述ぶるか如く文壇當時の形勢は混沌なり動搖なりき。二十年來の各種の文學は新世紀の大思潮に伴ふ能はずして其の勢力を失ひ、其の間に努力せし先進の諸家亦道を後進に譲りて去りぬ。而も之に代りて新代國民の新思潮に觸るゝ者未だ是あらず。左顧右眴所有試験と提供とをなして懊惱煩悶の態を極む。獨り文學の内容の上のみならず、形式即文體の上に於ても作家悉く道途に迷へり。試みに小説に見んか、内容を明治世相の寫實に取り、形式を言文一致體の文章に取りしは、疑もなく明治文學史上の一大事實なりしも、今や之に一新面目を興ふるに非

1914

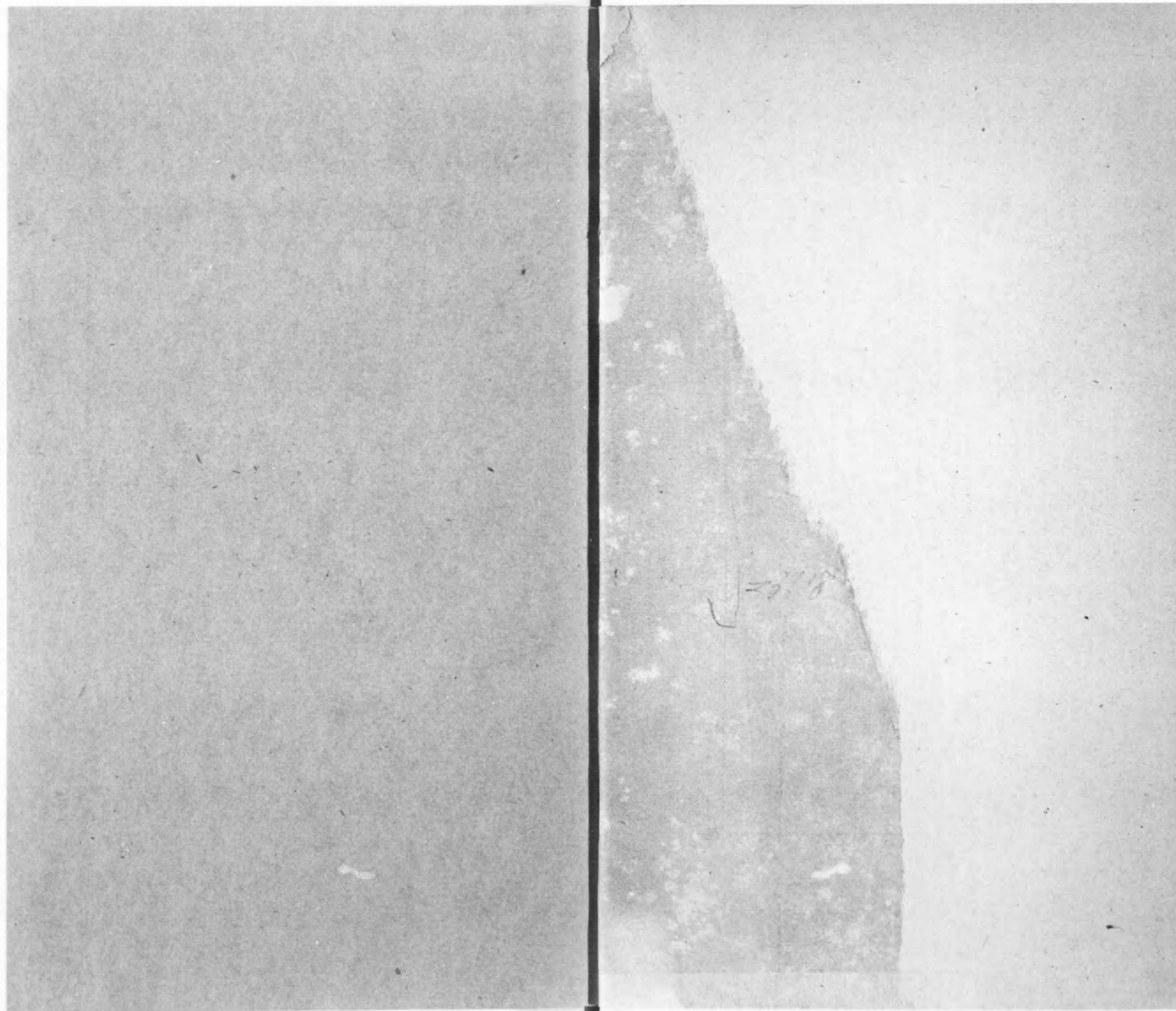
三七〇

ざれば其の發展を望むべからず。之を新體詩に見んか、七五五七の詩律のなせる
貢獻は、西詩の想形を移植せる功績と共に過去詩壇の一大記念たりと雖、之に著し
き工夫を加ふるに非ざれば將來の好尚を維ぐに足らず。更に戯曲に見んか、夢幻
劇打破の運動は目覺しき限りなりきと雖、無意義なる翻案劇小説劇の外に、發達せ
る入心に適應する新形式を得るに非ざれば劇の前途必しも祝すべからず。從來
の文人未だ茲に想到せざりしに、今や是等の大問題端なく其の意識に上り、乃ち動
搖煩悶して暗中摸索す。天か時か。過去文學の大星續々落ちて新陳代謝の機正
に迫り、一方に於て外征の大勝國民の自覺と國力の發展とを促し、我文學は早晩一
變せざるべからざる機運に際會しぬ。正に是れ山雨至らんとして風樓に滿つる
時なり。

明治四十二年六月十二日印刷
二十二年六月十五日發行

增補明治文學史

著者 岩城準太郎
東京市京橋區柳町十二番地
發行所 坂上忠之介
東京市麴町區下六番町十七番地
松澤 瓦三
麴町區下六番町十七番地 舍



910.26

I. 93a

終